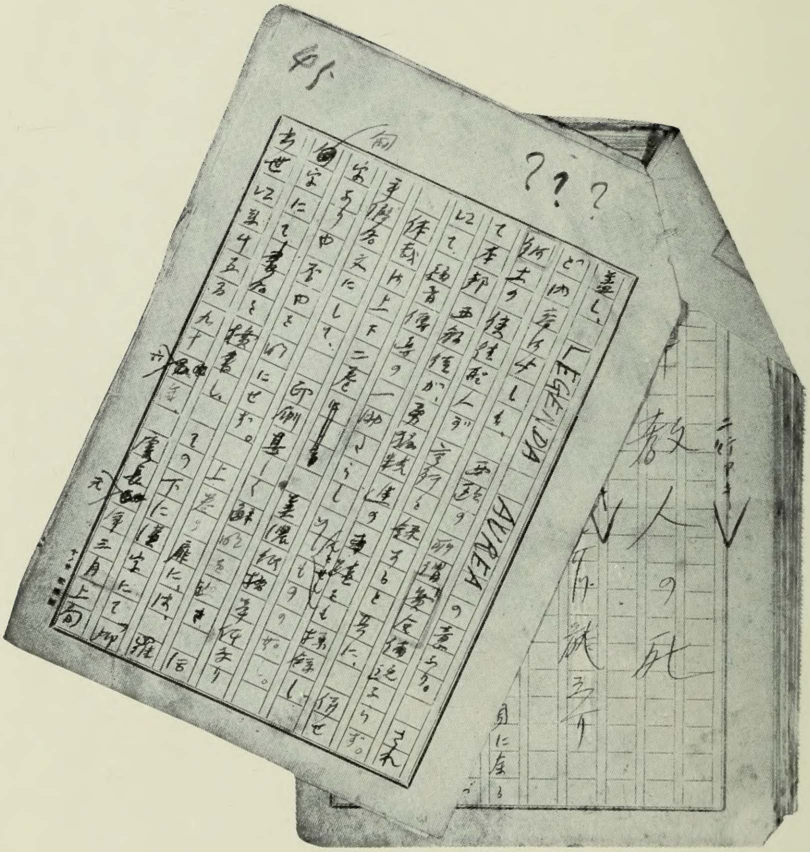
芥川龍之介全集

第二巻



影撮夏年六正大



「奉教人の死」原稿
(第三十九頁)

第二卷目錄

地獄變

一

堀川の大殿様のやうな方は、これまでは固より、後の世には恐らく二人とはいらつしやいますまい。噂に聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威徳明王の御姿が御母君の夢枕にお立ちになつたとか申す事でございますが、兎に角御生れつきから、並々の人間とは御違ひになつてゐたやうでございます。でございますから、あの方の爲さいました事には、一つとして私どもの意表に出てゐないものはございません。早い話が堀川の御邸の御規模を拜見致しましても、壯大と申しませうか、豪放と申しませうか、到底私どもの凡慮には及ばない、思ひ切つた所があるやうでございます。中にはまた、そこを色々とあげつらつて大殿様の御性行を始皇帝や煬帝に比べるものもございますが、それは諺に云ふ群盲の象を撫でるやうなものでもございませうか。あの方の御思召は、決してそのやうに御自分ばかり、榮耀榮華をなさらうと申すのではございませ

ん。それよりはもつと下々の事まで御考へになる、云はば天下と共に樂しむとでも申しさうな、大腹中の御器量がございました。

それでございますから、二條大宮の百鬼夜行に御遇ひになつても、格別御障りがなかつたのでございませう。又陸奥の鹽竈の景色を寫したので名高いあの東三條の河原院に、夜な夜な現はれると云ふ噂のあつた融の左大臣の靈でさへ、大殿樣のお叱りを受けては、姿を消したのに相違ございますまい。かやうな御威光でございますから、その頃洛中の老若男女が、大殿樣と申しますと、まるで權者の再來のやうに尊み合ひましたも、決して無理ではございません。何時ぞや、内の梅花の宴からの御歸りに御車の牛が放れて、折から通りかゝつた老人に怪我をさせました時でさへ、その老人は手を合せて、大殿樣の牛にかけられた事を難有がつたと申す事でございます。

さやうな次第でございますから、大殿樣御一代の間には、後々までも語り草になりますやうな事が、隨分澤山にございました。大饗の引出物に白馬ばかりを三十頭、賜つたこともございますし、長良の橋の橋柱に御寵愛の童を立てた事もございますし、それから又華陀の術を傳へた震旦の僧に、御腿の瘡を御切らせになつた事もございますし、――一々數へ立てて居りましては、と

ても際限がございません。が、その數多い御逸事の中でも、今では御家の重寶になつて居ります地獄變の屛風の由來程、恐ろしい話はございますまい。日頃は物に御騒ぎにならない大殿様でさへ、あの時ばかりは、流石に御驚きになつたやうでございました。まして御側に仕へてゐた私どもが、魂も消えるばかりに思つたのは、申し上げるまでもございません。中でもこの私なぞは、大殿様にも二十年來御奉公申して居りましたが、それでさへ、あのやうな凄じい見物に出遇つた事は、つひぞ又となかつた位でございます。

しかし、その御話を致しますには、豫め先づ、あの地獄變の屛風を描きました、良秀と申す畫師の事を申し上げて置く必要がございませう。

二

良秀と申しましたら、或は唯今でも猶、あの男の事を覺えていらつしやる方がございませう。その頃繪筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な繪師でございます。あの時の事がございました時には、彼是もう五十の阪に、手がとゞいて居りました

らうか。見た所は唯、脊の低い、骨と皮ばかりに痩せた、意地の惡さうな老人でございました。それが大殿樣の御邸へ參ります時には、よく丁子染の狩衣に揉烏帽子をかけて居りましたが、人がらは至つて卑しい方で、何故か年よりらしくもなく、脣の目立つて赤いのが、その上に又氣味の惡い、如何にも獸めいた心もちを起させたものでございます。中にはあれは畫筆を舐めるので紅がつくのだと申した人も居りましたが、どう云ふものでございませうか。尤もそれより口の惡い誰彼は、良秀の立居振舞が猿のやうだとか申しまして、猿秀と云ふ諢名までつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かやうな御話もございます。その頃大殿樣の御邸には、十五になる良秀の一人娘が、小女房に上つて居りましたが、これは又生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘でございました。その上早く女親に別れましたせゐか、思ひやりの深い、年よりはませた、悧巧な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく氣がつくものでございますから、御臺樣を始め外の女房たちにも、可愛がられて居たやうでございます。

すると何かの折に、丹波の國から人馴れた猿を一匹、獻上したものがございまして、それに丁

度惡戲盛りの若殿樣が、良秀と云ふ名を御つけになりました。唯でさへその猿の容子が可笑しい所へ、かやうな名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑はないものはございません。それも笑ふばかりならよろしうございますが、面白半分に皆のものが、やれ御庭の松に上つたの、やれ曹司の疊をよごしたのと、その度毎に、良秀々々と呼び立てては、兎に角いぢめたがるのでございます。

所が或日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持つて、長い御廊下を通りかゝりますと、遠くの遣戶の向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫いたのでございませう、何時ものやうに柱へ驅け上る元氣もなく、跛を引き引き、一散に逃げて參るのでございます。しかもその後からは楚をふり上げた若殿樣が「柑子盜人め、待て。待て。」と仰有りながら、追ひかけていらつしやるのではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよいとの間ためらつたやうでございますが、丁度その時逃げて來た猿が、袴の裾にすがりながら、哀れな聲を出して啼き立てました――と、急に可哀さうだと思ふ心が、抑へ切れなくなつたのでございませう。片手に梅の枝をかざした儘、片手に紫匂の袿の袖を輕さうにはらりと開きますと、やさしくそ

の猿を抱き上げて、若殿様の御前に小腰をかゞめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘辨遊ばしまし。」と、涼しい聲で申上げました。

が、若殿様の方は、氣負つて驅けてお出でになつた所でございますから、むづかしい御顔をなすつて、二三度御み足を御踏鳴しになりながら、

「何でかばふ。その猿は柑子盗人だぞ。」

「畜生でございますから、……」

娘はもう一度繰返しましたが、やがて寂しさうにほゝ笑みますと、

「それに良秀と申しますと、父が御折檻を受けますやうで、どうも唯見ては居られませぬ。」と、思ひ切つたやうに申すのでございます。これには流石の若殿様も、我を御折りになつたのでございませう。

「さうか。父親の命乞なら、枉げて赦してとらすとしよう。」

不承無承にかう仰有ると、楚をそこへ御捨てになつて、元いらしつた遣方の方へ、その儘御歸りになつてしまひました。

三

良秀の娘とこの小猿との仲がよくなつたのは、それからの事でございます。娘は御姫様から頂戴した黄金の鈴を、美しい眞紅の紐に下げて、それを猿の頭へ懸けてやりますし、猿は又どんな事がございましても、滅多に娘の身のまはりを離れません。或時娘の風邪の心地で、床に就きました時なども、小猿はちやんとその枕もとに坐りこんで、氣のせゐか心細さうな顏をしながら、頻に爪を嚙んで居りました。

かうなると又妙なもので、誰も今までのやうにこの小猿を、いぢめるものはございません。いや、反つてだんだん可愛がり始めて、しまひには若殿様でさへ、時々柿や栗を投げて御やりになつたばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴にした時なぞは、大層御立腹にもなつたさうでございます。その後大殿様がわざわざ良秀の娘に猿を抱いて、御前へ出るやうと御沙汰になつたのも、この若殿様の御腹立になつた話を、御聞きになつてからだとか申しました。その序に自然と娘の猿を可愛がる所由も御耳にはひつたのでございませう。

「孝行な奴ぢや。褒めてとらすぞ。」

かやうな御意で、娘はその時、紅の袙を御褒美に頂きました。所がこの袙を又見やう見眞似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿様の御機嫌は、一入よろしかつたさうでございます。でございますから、大殿様が良秀の娘を御贔屓になつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた譯ではございません。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございますが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致しませう。こゝでは唯大殿様が、如何に美しいにした所で、繪師風情の娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございます。

さて良秀の娘は、面目を施して御前を下りましたが、元より悧巧な女でございますから、はしたない外の女房たちの妬を受けるやうな事もございません。反つてそれ以來、猿と一しよに何かといとしがられまして、取分け御姫様の御側からは御離れ申した事がないと云つてもよろしい位、物見車の御供にもついぞ缺けた事はございませんでした。

が、娘の事は一先づ措きまして、これから又親の良秀の事を申し上げませう。成程猿の方は、

かやうに間もなく、皆のものに可愛がられるやうになりましたが、肝腎の良秀はやはり誰にでも嫌はれて、不相變陰へまはつては、猿秀呼りをされて居りました。しかもそれが又、御邸の中ばかりではございません。現に横川の僧都様も、良秀と申しますと、魔障にでも御遇ひになつたやうに、顔の色を變へて、御憎み遊ばしました。(尤もこれは良秀が僧都様の御行状を戯畫に描いたからだなどと申しますが、何分下ざまの噂でございますから、確に左様とは申されますまい。)兎に角、あの男の不評判は、どちらの方に伺ひましても、さう云ふ調子ばかりでございます。もし惡く云はないものがあつたと致しますと、それは二三人の繪師仲間か、或は又、あの男の繪を知つてゐるだけで、あの男の人間は知らないものばかりでございませう。

しかし實際良秀には、見た所が卑しかつたばかりでなく、もつと人に嫌がられる惡い癖があつたのでございますから、それも全く自業自得とでもなすより外に、致し方はございません。

四

その癖と申しますのは、吝嗇で、慳貪で、恥知らずで、怠けもので、強慾で——いや、その中

でも取分け甚しいのは、横柄で、高慢で、何時も本朝第一の畫師と申す事を、鼻の先へぶら下げてゐる事でございませう。それも畫道の上ばかりならまだしもでございますが、あの男の負け惜しみになりますと、世間の習慣とか慣例とか申すやうなものまで、すべて莫迦に致さずには置かないのでございます。これは永年良秀の弟子になつてゐた男の話でございますが、或日さる方の御邸で名高い檜垣の巫女に御靈が憑いて、恐しい御託宣があつた時も、あの男は空耳を走らせながら、有合せた筆と墨とで、その巫女の物凄い顏を、丁寧に寫して居つたとか申しました。大方御靈の御祟りも、あの男の眼から見ましたなら、子供欺し位にしか思はれないのでございませう。

さやうな男でございますから、吉祥天を描く時は、卑しい傀儡の顏を寫しましたり、不動明王を描く時は、無頼の放免の姿を像りましたり、いろいろの勿體ない眞似を致しましたが、それでも當人を詰りますと「良秀の描いた神佛が、その良秀に冥罰を當てられるとは、異な事を聞くものぢや」と空嘯いてゐるではございませんか。これには流石の弟子たちも呆れ返つて、中には未來の恐ろしさに、匆々暇をとつたものも、少くなかつたやうに見うけました。――先づ一口に申しましたなら、慢業重疊とでも名づけませうか。兎に角當時天が下で、自分程の偉い人間はないと

思つてゐた男でございます。

從つて良秀がどの位畫道でも、高く止つて居りましたかは、申し上げるまでもございますまい。尤もその繪でさへ、あの男のは筆使ひでも彩色でも、まるで外の繪師とは違つて居りましたから、仲の惡い繪師仲間では、山師だなどと申す評判も、大分あつたやうでございます。その連中の申しますには、川成とか金岡とか、その外昔の名匠の筆になつた物と申しますと、やれ板戸の梅の花が、月の夜毎に匂つたの、やれ屛風の大宮人が、笛を吹く音さへ聞えたのと、優美な噂が立つてゐるものでございますが、良秀の繪になりますと、何時でも必ず氣味の惡い、妙な評判だけしか傳はりません。譬へばあの男が龍蓋寺の門へ描きました、五趣生死の繪に致しましても、夜更けて門の下を通りますと、天人の嘆息をつく音や啜り泣きをする聲が、聞えたと申す事でございます。いや、中には死人の腐つて行く臭氣を、嗅いだと申すものさへございました。それから大殿樣の御云ひつけで描いた、女房たちの似繪なども、その繪に寫されただけの人間は、三年とたたない中に、皆魂の拔けたやうな病氣になつて、死んだと申すではございませんか。惡く云ふものに申させますと、それが良秀の繪の邪道に落ちてゐる、何よりの證據ださうでございます。

が、何分前にも申し上げました通り、横紙破りな男でございますから、それが反つて良秀は大自慢で、何時ぞや大殿様が御冗談に、「その方は兎角醜いものが好きと見える。」と仰有つた時も、あの年に似ず赤い脣でにやりと氣味惡く笑ひながら、「さやうでございまする。かいなでの繪師には總じて醜いものの美しさなどと申す事は、わからう筈がございませぬ。」と、横柄に御答へ申し上げました。如何に本朝第一の繪師にも致せ、よくも大殿様の御前へ出て、そのやうな高言が吐けたものでございます。先刻引合に出しました弟子が、內々師匠に「智羅永壽」と云ふ諢名をつけて、增長慢を譏つて居りましたが、それも無理はございません。御承知でもございませうが、「智羅永壽」と申しますのは、昔震旦から渡つて參りました天狗の名でございます。

　しかしこの良秀にさへ——この何とも云ひやうのない、横道者の良秀にさへ、たつた一つ人間らしい、情愛のある所がございました。

五

と申しますのは、良秀が、あの一人娘の小女房をまるで氣違ひのやうに可愛がつてゐた事でご

ざいます。先刻申し上げました通り、娘も至つて氣のやさしい、親思ひの女でございましたが、あの男の子煩惱は、決してそれにも劣りますまい。何しろ娘の着る物とか、髮飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勸進にも喜捨をした事のないあの男が、金錢には更に惜し氣もなく、整へてやると云ふのでございますから、嘘のやうな氣が致すではございませんか。

が、良秀の娘を可愛がるのは、唯可愛がるだけで、やがてよい聟をとらうなどと申す事は、夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ惡く云ひ寄るものでもございましたら、反つて辻冠者ばらでも驅り集めて、暗打位は喰はせ兼ねない量見でございます。でございますから、あの娘が大殿樣の御聲がかりで小女房に上りました時も、老爺の方は大不服で、當座の間は御前へ出ても、苦り切つてばかり居りました。大殿樣が娘の美しいのに御心を惹かされて、親の不承知なのもかまはずに、召し上げたなどと申す噂は、大方かやうな容子を見たものの當推量から出たのでございませう。

尤も其噂は嘘でございましても、子煩惱の一心から、良秀が始終娘の下るやうに祈つて居りましたのは確でございます。或時大殿樣の御云ひつけで、稚兒文珠を描きました時も、御寵愛の童

の顔を寫しまして、見事な出來でございましたから、大殿様も至極御滿足で、
「褒美にも望みの物を取らせるぞ。遠慮なく望め。」と云ふ難有い御語が下りました。すると良秀は畏まつて、何を申すかと思ひますと、
「何卒私の娘をば御下げ下さいまするやうに。」と臆面もなく申し上げました。外の御邸ならば兎も角も、堀川の大殿様の御側に仕へてゐるのを、如何に可愛いからと申しまして、かやうに無躾に御暇を願ひますものが、どこの國に居りませう。これには大腹中の大殿様も聊か御機嫌を損じたと見えまして、暫くは唯默つて良秀の顔を眺めて御居でになりましたが、やがて、
「それはならぬ。」と吐出すやうに仰有ると、急にその儘御立ちになつてしまひました。かやうな事が、前後四五遍もございましたらうか。今になつて考へて見ますと、大殿様の良秀を御覽になる眼は、その都度にだんだんと冷やかになつていらしつたやうでございます。すると又、それにつけても、娘の方は父親の身が案じられるせゐででもございますか、曹司へ下つてゐる時などは、よく袿の袖を嚙んで、しくしく泣いて居りました。そこで大殿様が良秀の娘に懸想なすつたなどと申す噂が、愈擴がるやうになつたのでございませう。中には地獄變の屛風の由來も、實は娘

が大殿様の御意に從はなかつたからだなどと申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございません。

私どもの眼から見ますと、大殿様が良秀の娘を御下げにならなかつたのは、全く娘の身の上を哀れに思召したからで、あのやうに頑な親の側へやるよりは御邸に置いて、何不自由なく暮させてやらうと云ふ難有い御考へだつたやうでございます。それは元より氣立ての優しいあの娘を、御贔屓になつたのは間違ひございません。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽強附會の說でございませう。いや、跡方もない嘘と申した方が、宜しい位でございます。

それは兎も角もと致しまして、かやうに娘の事から良秀の御覺えが大分惡くなつて來た時でございます。どう思召したか、大殿様は突然良秀を御召になつて、地獄變の屛風を描くやうにと、御云ひつけなさいました。

六

地獄變の屛風と申しますと、私はもうあの恐ろしい畫面の景色が、ありありと眼の前へ浮んで

來るやうな氣が致します。

　同じ地獄變と申しましても、良秀の描きましたのは、外の繪師のに比べますと、第一圖取りから似て居りません。それは一帖の屛風の片隅へ、小さく十王を始め眷屬たちの姿を描いて、あとは一面に物凄い猛火が劍山刀樹も爛れるかと思ふ程渦を卷いて居りました。でございますから、唐めいた冥官たちの衣裳が、點々と黃や藍を綴つて居ります外は、どこを見ても烈々とした火焰の色で、その中をまるで卍のやうに、墨を飛ばした黑煙と金粉を煽つた火の粉とが、舞ひ狂つて居るのでございます。

　こればかりでも、隨分人の目を驚かす筆勢でございますが、その上に又、業火に燒かれて、轉轉と苦しんで居ります罪人も、殆ど一人として通例の地獄繪にあるものはございません。何故かと申しますと、良秀はこの多くの罪人の中に、上は月卿雲客から下は乞食非人まで、あらゆる身分の人間を寫して來たからでございます。束帶のいかめしい殿上人、五つ衣のなまめかしい靑女房、珠數をかけた念佛僧、高足駄を穿いた侍學生、細長を着た女の童、幣をかざした陰陽師――一々數へ立てて居りましたら、とても際限はございますまい。兎に角さう云ふいろいろの人間

が、火と煙とが逆捲く中を、牛頭馬頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らされる落葉のやうに、紛々と四方八方へ逃げ迷つてゐるのでございます。鋼叉に髪をからまれて、蜘蛛よりも手足を縮めてゐる女は、神巫の類ででもございませうか。手矛に胸を刺し通されて、蝙蝠のやうに逆になつた男は、生受領か何かに相違ございますまい。その外或は鐵の笞に打たれるもの、或は千曳の磐石に押されるもの、或は怪鳥の嘴にかけられるもの、或は又毒龍の顎に嚙まれるもの、――呵責も亦罪人の數に應じて、幾通りあるかわかりません。

が、その中でも殊に一つ目立つて凄じく見えるのは、まるで獸の牙のやうな刀樹の頂きを半ばかすめて（その刀樹の梢にも、多くの亡者が纍々と、五體を貫かれて居りましたが）中空から落ちて來る一輛の牛車でございませう。地獄の風に吹き上げられた、その車の簾の中には、女御、更衣にもまがふばかり、綺羅びやかに裝つた女房が、丈の黑髮を炎の中になびかせて、白い頸を反らせながら、悶え苦しんで居りますが、その女房の姿と申し、又燃えしきつてゐる牛車と申し、何一つとして炎熱地獄の責苦を偲ばせないものはございません。云はば廣い畫面の恐ろしさが、この一人の人物に湊つてゐるとでも申しませうか。これを見るものの耳の底には、自然と物凄い

叫喚の聲が傳はつて來るかと疑ふ程、入神の出來映えでございました。

あゝ、これでございます、これを描く爲めに、あの恐ろしい出來事が起つたのでございます。又さもなければ如何に良秀でも、どうしてかやうに生々と奈落の苦艱が畫かれませう。あの男はこの屏風の繪を仕上げた代りに、命さへも捨てるやうな、無慘な目に出遇ひました。云はばこの繪の地獄は、本朝第一の繪師良秀が、自分で何時か墮ちて行く地獄だつたのでございます。……

私はあの珍しい地獄變の屏風の事を申上げますのを急いだあまりに、或は御話の順序を顚倒致したかも知れません。が、これから又引き續いて、大殿様から地獄繪を描けと申す仰せを受けた良秀の事に移りませう。

七

良秀はそれから五六箇月の間、まるで御邸へも伺はないで、屏風の繪にばかりかゝつて居りました。あれ程の子煩惱がいざ繪を描くと云ふ段になりますと、娘の顏を見る氣もなくなると申すのでございますから、不思議なものではございませんか。先刻申し上げました弟子の話では、何

でもあの男は仕事にとりかゝりますと、まるで狐でも憑いたやうになるらしうございます。いや實際當時の風評に、良秀が畫道で名を成したのは、福德の大神に祈誓をかけたからで、その證據にはあの男が繪を描いてゐる所を、そつと物陰から覗いて見ると、必ず陰々として靈狐の姿が、一匹ならず前後左右に、群つてゐるのが見えるなどと申す者もございました。その位でございますから、いざ畫筆を取るとなると、その繪を描き上げると云ふより外は、何も彼も忘れてしまふのでございませう。晝も夜も一間に閉ぢこもつたきりで、滅多に日の目も見た事はございません。——殊に地獄變の屛風を描いた時には、かう云ふ夢中になり方が、甚しかつたやうでございます。

と申しますのは何もあの男が、晝も蔀を下した部屋の中で、結燈臺の火の下に、祕密の繪の具を合せたり、或は弟子たちを、水干やら狩衣やら、さまざまに着飾らせて、その姿を一人づつ丁寧に寫したり、——さう云ふ事ではございません。それ位の變つた事なら、別にあの地獄變の屛風を描かなくとも、仕事にかゝつてゐる時とさへ申しますと、何時でもやり兼ねない男なのでございます。いや、現に龍蓋寺の五趣生死の圖を描きました時などは、當り前の人間なら、わざと眼を外らせて行くあの往來の死骸の前へ、悠々と腰を下して、半ば腐れかかつた顏や手足を、髮

の毛一すぢも違へずに、寫して參つた事がございました。では、その甚しい夢中になり方とは、一體どう云ふ事を申すのか、流石に御わかりにならない方もいらつしやいませう。それは唯今詳しい事は申し上げてゐる暇もございませんが、主な話を御耳に入れますと、大體先、かやうな次第なのでございます。

良秀の弟子の一人が（これもやはり、前に申した男でございますが）或日繪の具を溶いて居りますと、急に師匠が參りまして、

「己は少し午睡をしようと思ふ。が、どうもこの頃は夢見が惡い。」とかう申すのでございます。別にこれは珍しい事でも何でもございませんから、弟子は手を休めずに、唯、

「さやうでございますか。」と一通りの挨拶を致しました。所が良秀は何時になく寂しさうな顏をして、

「就いては、己が午睡をしてゐる間中、枕もとに坐つてゐて貰ひたいのだが。」と、遠慮がましく頼むではございませんか。弟子は何時になく、師匠が夢なぞを氣にするのは、不思議だと思ひましたが、それも別に造作のない事でございますから、

「よろしうございます。」と申しますと、師匠はまだ心配さうに、

「では直に奥へ來てくれ。尤も後で外の弟子が來ても、己の睡つてゐる所へは入れないやうに。」と、ためらひながら云ひつけました。奥と申しますのは、あの男が畫を描きます部屋で、その日も夜のやうに戸を立て切つた中に、ぼんやりと灯をともしながら、まだ燒筆で圖取りだけしか出來てゐない屛風が、ぐるりと立て廻してあつたさうでございます。さてこゝへ參りますと、良秀は肘を枕にして、まるで疲れ切つた人間のやうに、すやすや、睡入つてしまひましたが、ものの半時とたちません中に、枕もとに居ります弟子の耳には、何とも彼とも申しやうのない、氣味の惡い聲がはひり始めました。

八

それが始めは唯、聲でございましたが、暫くしますと、次第に切れ切れな語になつて、云はば溺れかゝつた人間が水の中で呻るやうに、かやうな事を申すのでございます。

「なに、己に來いと云ふのだな。——どこへ——どこへ來いと？　奈落へ來い。炎熱地獄へ來い。

――誰だ。さう云ふ貴樣は。――貴樣は誰だ――誰だと思つたら」

弟子は思はず繪の具を溶く手をやめて、恐る恐る師匠の顏を、覗くやうにして透して見ますと、皺だらけな顏が白くなつた上に、大粒な汗を滲ませながら、脣の干いた、齒の疎な口を喘ぐやうに大きく開けて居ります。さうしてその口の中で、何か糸でもつけて引張つてゐるかと疑ふ程、目まぐるしく動くものがあると思ひますと、それがあの男の舌だつたと申すではございませんか。切れ切れな語は元より、その舌から出て來るのでございます。

「誰だと思つたら――うん、貴樣だな。己も貴樣だらうと思つてゐた。なに、迎へに來たと？だから來い。奈落へ來い。奈落には――奈落には己の娘が待つてゐる。」

その時、弟子の眼には、朦朧とした異形の影が、屛風の面をかすめてむらむらと下りて來るやうに見えた程、氣味の惡い心もちが致したさうでございます。勿論弟子はすぐに良秀に手をかけて、力のあらん限り搖り起しましたが、師匠は猶夢現に獨り語を云ひつゞけて、容易に眼のさめる氣色はございません。そこで弟子は思ひ切つて、側にあつた筆洗の水を、ざぶりとあの男の顏へ浴びせかけました。

「待つてゐるから、この車へ乘つて來い――この車へ乘つて、奈落へ來い――」と云ふ詞がそれと同時に、喉をしめられるやうな呻き聲に變つたと思ひますと、やつと良秀は眼を開いて、針で刺されたよりも慌しく、矢庭にそこへ刎ね起きましたが、まだ夢の中の異類異形が、眶の後を去らないのでございませう。暫くは唯恐ろしさうな眼つきをして、やはり大きく口を開きながら、空を見つめて居りましたが、やがて我に返つた容子で、

「もう好いから、あちらへ行つてくれ」と、今度は如何にも素つ氣たく、云ひつけるのでございます。弟子はかう云ふ時に逆ふと、何時でも大小言を云はれるので、匆々師匠の部屋から出て參りましたが、まだ明い外の日の光を見た時には、まるで自分が惡夢から覺めた樣な、ほつとした氣が致したとか申して居りました。

しかしこれなぞはまだよい方なので、その後一月ばかりたつてから、今度は又別の弟子が、わざわざ奧へ呼ばれますと、良秀はやはりうす暗い油火の光りの中で、繪筆を噛んで居りましたが、いきなり弟子の方へ向き直つて、

「御苦勞だが、又裸になつて貰はうか。」と申すのでございます。これはその時までにも、どうか

すると師匠が云ひつけた事でございますから、弟子は早速衣類をぬぎすてて、赤裸になりますと、あの男は妙に顔をしかめながら、

「わしは鎖で縛られた人間が見たいと思ふのだが、氣の毒でも暫くの間、わしのする通りになつてゐてはくれまいか。」と、その癖少しも氣の毒らしい容子などは見せずに、冷然とから申しました。元來この弟子は畫筆などを握るよりも、太刀でも持つた方が好ささうな、逞しい若者でございましたが、これには流石に驚いたと見えて、後々までもその時の話を致しますと、「これは師匠が氣が違つて、私を殺すのではないかと思ひました」と繰返して申したさうでございます。が、良秀の方では、相手の愚図々々してゐるのが、燥つたくなつて參つたのでございませう。どこから出したか、細い鐵の鎖をざらざらと手繰りながら、殆ど飛びつくやうな勢ひで、弟子の背中へ乘りかかりますと、否應なしにその儘兩腕を捻ぢあげて、ぐるぐる卷きに致してしまひました。さうして又その鎖の端を邪慳にぐいと引きましたからたまりません。弟子の體ははずみを食つて、勢よく床を鳴らしながら、ごろりとそこへ横倒しに倒れてしまつたのでございます。

九

その時の弟子の恰好は、まるで酒甕を轉がしたやうだとでも申しませうか。何しろ手も足も慘たらしく折り曲げられて居りますから、動くのは唯首ばかりでございます。そこへ肥つた體中の血が、鎖に循環を止められたので、顏と云はず胴と云はず、一面に皮膚の色が赤み走つて參るではございませんか。が、良秀にはそれも格別氣にならないと見えまして、その酒甕のやうな體のまはりを、あちこちと廻つて眺めながら、同じやうな寫眞の圖を何枚となく描いて居りました。その間、縛られてゐる弟子の身が、どの位苦しかつたかと云ふ事は、何もわざわざ取り立てて申し上げるまでもございますまい。

が、もし何事も起らなかつたと致しましたら、この苦しみは恐らくまだその上にも、つゞけられた事でございませう。幸（と申しますより、或は不幸にと申した方がよろしいかも知れません。）暫く致しますと、部屋の隅にある壺の陰から、まるで黑い油のやうなものが、一すぢ細くうねりながら、流れ出して參りました。それが始の中は餘程粘り氣のあるもののやうに、ゆつくり動い

て居りましたが、だんだん滑らかに辷り始めて、やがてちらちら光りながら、鼻の先まで流れ着いたのを眺めますと、弟子は思はず、息を引いて、

「蛇が――蛇が。」と喚きました。その時は全く體中の血が一時に凍るかと思つたと申しますが、それも無理はございません。蛇は實際もう少しで、鎖の食ひこんでゐる、頸の肉へその冷い舌の先を觸れようとしてゐたのでございます。この思ひもよらない出來事には、いくら横道な良秀でも、ぎよつと致したのでございませう。慌てて畫筆を投げ棄てながら、咄嗟に身をかがめたと思ふと、素早く蛇の尾をつかまへて、ぶらりと逆に吊り下げました。蛇は吊り下げられながらも、頭を上げて、きりきりと自分の體へ卷つきましたが、どうしてもあの男の手の所まではとどきません。

「おのれ故に、あつたら一筆を仕損じたぞ。」

良秀は忌々しさうにかう呟くと、蛇はその儘部屋の隅の壺の中へ抛りこんで、それからさも不承無承に、弟子の體へかゝつてゐる鎖を解いてくれました。それも唯解いてくれたと云ふ丈で、肝腎の弟子の方へは、優しい言葉一つかけてはやりません。大方弟子が蛇に噛まれるよりも、寫

眞の一筆を誤つたのが、業腹だつたのでございませう。――後で聞きますと、この蛇もやはり姿を寫す爲に、わざわざあの男が飼つてゐたのださうでございます。

これだけの事を御聞きになつたのでも、良秀の氣違ひじみた、薄氣味の惡い夢中になり方が、略、御わかりになつた事でございませう。所が最後にもう一つ、今度はまだ十三四の弟子が、やはり地獄變の屛風の御かげで、云はば命にも關はり兼ねない、恐ろしい目に出遇ひました。その弟子は生れつき色の白い女のやうな男でございましたが、或夜の事、何氣なく師匠の部屋へ呼ばれて參りますと、良秀は燈臺の火の下で掌に何やら腥い肉をのせながら、見慣れない一羽の鳥を養つてゐるのでございます。大きさは先、世の常の猫ほどでもございませうか。さう云へば、耳のやうに兩方へつき出た羽毛と云ひ、琥珀のやうな色をした、大きな圓い眼と云ひ、見た所も何となく猫に似て居りました。

十

元來良秀と云ふ男は、何でも自分のしてゐる事に嘴を入れられるのが大嫌ひで、先刻申し上げ

た蛇などもさうでございますが、自分の部屋の中に何があるか、一切さう云ふ事は弟子たちにも知らせた事がございません。でございますから、或時は机の上に髑髏がのつてゐたり、或時は又、銀の椀や蒔繪の高坏が並んでゐたり、その時描いてゐる畫次第で、隨分思ひもよらない物が出て居りました。が、ふだんはかやうな品を、一體どこにしまつて置くのか、それは又誰にもわからなかつたさうでございます。あの男が福徳の大神の冥助を受けてゐるなどと申す噂も、一つは確にさう云ふ事が起りになつてゐたのでございませう。

そこで弟子は、机の上のその異樣な鳥も、やはり地獄變の屏風を描くのに入用なのに違ひないと、かう獨り考へながら、師匠の前へ畏まつて、「何か御用でございますか」と、恭々しく申しますと、良秀はまるでそれが聞えないやうに、あの赤い脣へ舌なめずりをして、

「どうだ。よく馴れてゐるではないか。」と、鳥の方へ頤をやります。

「これは何と云ふものでございませう。私はつひぞまだ、見た事がございませんが。」

弟子はかう申しながら、この耳のある、猫のやうな鳥を、氣味惡さうにじろじろ眺めますと、良秀は不相變何時もの嘲笑ふやうな調子で、

「なに、見た事がない？　都育ちの人間はそれだから困る。これは二三日前に鞍馬の獵師がわしにくれた耳木兎と云ふ鳥だ。唯、こんなに馴れてゐるのは、澤山あるまい。」

かう云ひながらあの男は、徐に手をあげて、丁度餌を食べてしまつた耳木兎の背中の毛を、そつと下から撫で上げました。するとその途端でございます。鳥は急に鋭い聲で、短く一聲啼いたと思ふと、忽ち机の上から飛び上つて、兩脚の爪を張りながら、いきなり弟子の顏へとびかゝりました。もしその時、弟子が袖をかざして、慌てて顏を隱さなかつたら、きつともう疵の一つや二つは負はされて居りましたらう。あつと云ひながら、その袖を振つて、逐ひ拂はうとする所を、耳木兎は蓋にかかつて、嘴を鳴らしながら、又一突き――弟子は師匠の前も忘れて、立つては防ぎ、坐つては逐ひ、思はず狹い部屋の中を、あちらこちらと逃げ惑ひました。怪鳥も元よりそれにつれて、高く低く翔りながら、隙さへあれば驀地に眼を目がけて飛んで來ます。その度にばさばさと、凄じく翼を鳴すのが、落葉の匂だか、瀧の飛沫だか、或は又猿酒の饐ゑたいきれだか、何やら怪しげなもののけはひを誘つて、氣味の惡さと云つたらございません。さう云へばその弟子も、うす暗い油火の光さへ朧げな月明りかと思はれて、師匠の部屋がその儘遠い山奧の、妖氣

に閉された谷のやうな、心細い氣がしたとか申したさうでございます。

しかし弟子が恐しかつたのは、何も耳木兎に襲はれると云ふ、その事ばかりではございません。いや、それよりも一層身の毛がよだつたのは、師匠の良秀がその騷ぎを冷然と眺めながら、徐に紙を展べ筆を舐つて、女のやうな少年が異形な鳥に虐まれる、物凄い有樣を寫してゐた事でございます。弟子は一目それを見ますと、忽ち云ひやうのない恐ろしさに脅かされて、實際一時は師匠の爲に、殺されるのではないかとさへ、思つたと申して居りました。

十一

實際師匠に殺されると云ふ事も、全くないとは申されません。現にその晚わざわざ弟子を呼びよせたのでさへ、實は耳木兎を唆かけて、弟子の逃げまはる有樣を寫さうと云ふ魂膽らしかつたのでございます。でございますから、弟子は、師匠の容子を一目見るが早いか、思はず兩袖に頭を隱しながら、自分にも何と云つたかわからないやうな悲鳴をあげて、その儘部屋の隅の遣戶の裾へ、居ずくまつてしまひました。とその拍子に、良秀も何やら慌てたやうな聲をあげて、立上

つた氣色でございましたが、忽ち耳木兎の羽音が一層前よりもはげしくなつて、物の倒れる音や破れる音が、けたゝましく聞えるではございませんか。これには弟子も二度、度を失つて、思はず隠してゐた頭を上げて見ますと、部屋の中は何時かまつ暗になつてゐて、師匠の弟子たちを呼び立てる聲が、その中で苛立しさうにして居ります。

やがて弟子の一人が、遠くの方で返事をして、それから灯をかざしながら、急いでやつて參りましたが、その煤臭い明りで眺めますと、結燈臺が倒れたので、床も疊も一面に油だらけになつた所へ、さつきの耳木兎が片方の翼ばかり、苦しさうにはためかしながら、轉げまはつてゐるのでございます。良秀は机の向うで半ば體を起した儘、流石に呆氣にとられたやうな顔をして、何やら人にはわからない事を、ぶつぶつ呟いて居りました。――それも無理ではございません。あの耳木兎の體には、まつ黒な蛇が一匹、頸から片方の翼へかけて、きりきりと捲きついてゐるのでございます。大方これは弟子が居ずくまる拍子に、そこにあつた壺をひつくり返して、その中の蛇が這ひ出したのを、耳木兎がなまじひに摑みかゝらうとしたばかりに、とうとうかう云ふ大騒が始まつたのでございませう。二人の弟子は互に眼と眼とを見合せて、暫くは唯、この不思議な光

景をぼんやり眺めて居りましたが、やがて師匠に默禮をして、こそこそ部屋へ引き下つてしまひました。蛇と耳木兎がその後どうなつたか、それは誰も知つてゐるものはございません。――かう云ふ類の事は、その外まだ、幾つとなくございました。前には申し落しましたが、地獄變の屏風を描けと云ふ御沙汰があつたのは、秋の初でございますから、それ以來冬の末まで、良秀の弟子たちは、絶えず師匠の怪しげな振舞に脅かされてゐた譯でございます。が、その冬の末に良秀は何か屏風の畫で、自由にならない事が出來たのでございませう、それまでよりは一層容子も陰氣になり、物云ひも目に見えて、荒々しくなつて參りました。と同時に又屏風の畫も、下畫が八分通り出來上つた儘、更に捗どる模樣はございません。いや、どうかすると今までに描いた所さへ、塗り消してもしまひ兼ねない氣色なのでございます。

その癖、屏風の何が自由にならないのだか、それは誰にもわかりません。又誰もわからうとしたものもございますまい。前のいろいろな出來事に懲りてゐる弟子たちは、まるで虎狼と一つ檻にでもゐるやうな心もちで、その後師匠の身のまはりへは、成る可く近づかない算段をして居りましたから。

十二

従つてその間の事に就いては、別に取り立てて申し上げる程の御話もございません。もし強ひて申し上げると致しましたら、それはあの強情な老爺が、何故か妙に涙脆くなつて、人のゐない所では時々獨りで泣いてゐたと云ふ御話位なものでございませう。殊に或日、何かの用で弟子の一人が、庭先へ參りました時なぞは、廊下に立つてぼんやり春の近い空を眺めてゐる師匠の眼が、涙で一ぱいになつてゐたさうでございます。弟子はそれを見ますと、反つてこちらが恥しいやうな氣がしたので、默つてこそこそ引き返したと申す事でございますが、五趣生死の圖を描く爲には、道ばたの死骸さへ寫したと云ふ、傲慢なあの男が屏風の畫が思ふやうに描けない位の事で、子供らしく泣き出すなどと申すのは隨分異なものでございませんか。

所が一方良秀がこのやうに、まるで正氣の人間とは思はれない程夢中になつて、屏風の繪を描いて居ります中に、又一方ではあの娘が、何故かだんだん氣鬱になつて、私どもにさへ涙を堪へてゐる容子が、眼に立つて參りました。それが元來愁顔の、色の白い、つゝましやかな女だけに、

からなると何だか睫毛が重くなつて、眼のまはりに隈がかゝつたやうな、餘計寂しい氣が致すのでございます。始はやれ父思ひのせゐだの、やれ戀煩ひをしてゐるからだの、いろいろ臆測を致したものがございますが、中頃から、なにあれは大殿樣が御意に從はせようとしていらつしやるのだと云ふ評判が立ち始めて、夫からは誰も忘れた樣に、ぱつたりあの娘の噂をしなくなつて了ひました。

丁度その頃の事でございませう。或夜、更が闌けてから、私が獨り御廊下を通りかゝりますと、あの猿の良秀がいきなりどこからか飛んで參りまして、私の袴の裾を頻りにひつぱるのでございます。確、もう梅の匂でも致しさうな、うすい月の光のさしてゐる、暖い夜でございましたが、其明りですかして見ますと、猿はまつ白な齒をむき出しながら、鼻の先へ皺をよせて、氣が違はないばかりにけたゝましく啼き立ててゐるではございませんか。私は氣味の惡いのが三分と、新しい袴をひつぱられる腹立たしさが七分とで、最初は猿を蹴放して、その儘通りすぎようかとも思ひましたが、又思ひ返して見ますと、前にこの猿を折檻して、若殿樣の御不興を受けた侍の例もございます。それに猿の振舞が、どうも唯事とは思はれません。そこでとうとう私も思ひ切つ

て、そのひつぱる方へ五六間歩くともなく歩いて參りました。

すると御廊下が一曲り曲つて、夜目にもうす白い御池の水が枝ぶりのやさしい松の向うにひろびろと見渡せる、丁度そこ迄參つた時の事でございます。どこか近くの部屋の中で人の爭つてゐるらしいけはひが、慌しく、又妙にひつそりと私の耳を脅しました。あたりはどこも森と靜まり返つて、月明りとも靄ともつかないものの中で、魚の跳る音がする外は、話し聲一つ聞えません。そこへこの物音でございますから、私は思はず立止つて、もし狼藉者でもあつたなら、目にもの見せてくれようと、そつとその遣戸の外へ、息をひそめながら身をよせました。

十三

所が猿は私のやり方がまだるかつたのでございませう。良秀はさもさももどかしさうに、二三度私の足のまはりを駈けまはつたと思ひますと、まるで咽を絞められたやうな聲で啼きながら、いきなり私の肩のあたりへ一足飛に飛び上りました。私は思はず頸を反らせて、その爪にかけられまいとする、猿は又水干の袖にかじりついて、私の體から辷り落ちまいとする、――その拍子

に、私はわれ知らず二足三足よろめいて、その遣戸へ後ざまに、したゝか私の體を打ちつけました。かうなつては、もう一刻も躊躇してゐる場合ではございません。私は矢庭に遣戸を開け放して、月明りのとどかない奥の方へ跳りこまうと致しました。が、その時私の眼を遮つたものは――いや、それよりももつと私は、同時にその部屋の中から、彈かれたやうに駈け出さうとした女の方に驚かされました。女は出合頭に危く私に衝き當らうとして、その儘外へ轉び出ましたが、何故かそこへ膝をついて、息を切らしながら私の顏を、何か恐ろしいものでも見るやうに、戰き戰き見上げてゐるのでございます。

それが良秀の娘だつたことは、何もわざわざ申し上げるまでもございますまい。が、その晩のあの女は、まるで人間が違つたやうに、生々と私の眼に映りました。眼は大きくかゞやいて居ります。頬も赤く燃えて居りましたらう。そこへしどけなく亂れた袴や袿が、何時もの幼さとは打つて變つた艶しささへも添へてをります。これが實際あの弱々しい、何事にも控へ目勝な良秀の娘でございませうか。――私は遣戸に身を支へて、この月明りの中にゐる美しい娘の姿を眺めながら、慌しく遠のいて行くもう一人の足音を、指させるもののやうに指さして、誰ですと靜に眼

で尋ねました。

すると娘は脣を嚙みながら、默つて首をふりました。その容子が如何にも亦口惜しさうなのでございます。

そこで私は身をかゞめながら、娘の耳へ口をつけるやうにして、今度は「誰です」と小聲で尋ねました。が、娘はやはり首を振つたばかりで、何とも返事を致しません。いや、それと同時に長い睫毛の先へ、涙を一ぱいためながら、前よりも緊く脣を嚙みしめてゐるのでございます。

性得愚な私には、分りすぎてゐる程分つてゐる事の外は、生憎何一つ呑みこめません。でございますから、私は語のかけやうも知らないで、暫くは唯、娘の胸の動悸に耳を澄ませるやうな心もちで、ぢつとそこに立ちすくんで居りました。尤もこれは一つには、何故かこの上問ひ訊すのが悪いやうな、氣咎めが致したからでもございます。――

それがどの位續いたか、わかりません。が、やがて開け放した遣戸を閉しながら、少しは上氣の褪めたらしい娘の方を見返つて、「もう曹司へ御歸りなさい」と出來る丈やさしく申しました。さうして私も自分ながら、何か見てはならないものを見たやうな、不安な心もちに脅されて、誰

にともなく恥しい思ひをしながら、そつと元來た方へ歩き出しました。所が十歩と歩かない中に、誰か又私の袴の裾を、後から恐る恐る、引き止めるではございませんか。私は驚いて、振り向きました。あなた方はそれが何だつたと思召します？

見るとそれは私の足もとにあの猿の良秀が、人間のやうに兩手をついて、黄金の鈴を鳴しながら、何度となく丁寧に頭を下げてゐるのでございました。

十四

するとその晩の出來事があつてから、半月ばかり後の事でございます。或日良秀は突然御邸へ參りまして、大殿樣へ直の御眼通りを願ひました。卑しい身分のものでございますが、日頃から格別御意に入つてゐたからでございませう。誰にでも容易に御會ひになつた事のない大殿樣が、その日も快く御承知になつて、早速御前近くへ御召しになりました。あの男は例の通り香染めの狩衣に萎えた烏帽子を頂いて、何時もよりは一層氣むづかしさうな顏をしながら、恭しく御前へ平伏致しましたが、やがて嗄れた聲で申しますには、

「兼ね〴〵御云ひつけになりました地獄變の屏風でございますが、私も日夜に丹誠を抽んでて、筆を執りました甲斐が見えまして、もはやあらましは出來上つたのも同前でございまする。」

「それは目出度い。予も滿足ぢや。」

　しかし仰有る大殿樣の御聲には、何故か妙に力の無い、張合のぬけた所がございました。

「いえ、それが一向目出度くはござりませぬ。」良秀は、稍腹立しさうな容子でぢつと眼を伏せながら、「あらましは出來上りましたが、唯一つ、今以て私には描けぬ所がございまする。」

「なに、描けぬ所がある？」

「さやうでございまする。私は總じて、見たものでなければ描けませぬ。よし描けても、得心が參りませぬ。それでは描けぬも同じ事でございませぬか。」

　これを御聞きになると、大殿樣の御顏には、嘲るやうな御微笑が浮びました。

「では地獄變の屏風を描かうとすれば、地獄を見なければなるまいな。」

「さやうでござりまする。が、私は先年大火事がございました時に、炎熱地獄の猛火にもまがふ火の手を、眼のあたりに眺めました。「よぢり不動」の火焰を描きましたのも、實はあの火事に遇

つたからでございまする。御前もあの繪は御承知でございませう。」

「しかし罪人はどうぢや。獄卒は見た事があるまいな。」大殿樣はまるで良秀の申す事が御耳にははひらなかつたやうな御容子で、かう疊みかけて御尋ねになりました。

「私は鐵の鎖に縛られたものを見た事がございまする。怪鳥に惱まされるものの姿も、具に寫しとりました。されば罪人の呵責に苦しむ樣も知らぬと申されませぬ。又獄卒は――」と云つて、良秀は氣味の惡い苦笑を洩しながら、「又獄卒は、夢現に何度となく、私の眼に映りました。或は牛頭、或は馬頭、或は三面六臂の鬼の形が、音のせぬ手を拍き、聲の出ぬ口を開いて、私を虐みに參りますのは、殆ど毎日毎夜のことと申してもよろしうございませう。――私の描かうとして描けぬのは、そのやうなものではございませぬ。」

それには大殿樣も、流石に御驚きになつたでございませう。暫くは唯苛立たしさうに、良秀の顏を睨めて御出になりましたが、やがて眉を險しく御動かしになりながら、

「では何が描けぬと申すのぢや。」と打捨るやうに仰有いました。

十五

「私は屏風の唯中に、檳榔毛の車が一輛、空から落ちて來る所を描かうと思つて居りまする。」

良秀はかう云つて、始めて鋭く大殿樣の御顏を眺めました。あの男は畫の事を云ふと、氣違ひ同樣になるとは聞いて居りましたが、その時の眼のくばりには確にさやうな恐ろしさがあつたやうでございます。

「その車の中には、一人のあでやかな上﨟が、猛火の中に黑髮を亂しながら、悶え苦しんでゐるのでございまする。顏は煙に咽びながら、眉を顰めて、空ざまに車蓋を仰いで居りませう。手は下簾を引きちぎつて、降りかゝる火の粉の雨を防がうとしてゐるかも知れませぬ。さうしてそのまはりには、怪しげな鷙鳥が十羽となく、二十羽となく、嘴を鳴らして紛々と飛び繞つてゐるのでございまする。――あゝ、それが、牛車の中の上﨟が、どうしても私には描けませぬ。」

「さうして――どうぢや。」

大殿樣はどう云ふ譯か、妙に悦ばしさうな御氣色で、かう良秀を御促しになりました。が、良

秀は例の赤い脣を熱でも出た時のやうに震はせながら、夢を見てゐるのかと思ふ調子で、
「それが私には描けませぬ。」と、もう一度繰返しましたが、突然噛みつくやうな勢ひになつて、
「どうか檳榔毛の車を一輛、私の見てゐる前で、火をかけて頂きたうございまする。さうしても
し出來まするならば――」

大殿樣は御顏を暗くなすつたと思ふと、突然けたたましく御笑ひになりました。さうしてその
御笑ひ聲に息をつまらせながら、仰有いますには、

「おゝ、萬事その方が申す通りに致して遣はさう。出來る出來ぬの詮議は無益の沙汰ぢや。」

私はその御語を伺ひますと、蟲の知らせか、何となく凄じい氣が致しました。實際又大殿樣
の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびく〳〵と電が起つ
て居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたのでござ
います。それがちよいと語を御切りになると、すぐ又何かが爆ぜたやうな勢ひで、止め度なく喉
を鳴らして御笑ひになりながら、

「檳榔毛の車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上臈の裝をさせて乘せて遣

はさう。炎と黒煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死をする——それを描かうと思ひついたのは、流石に天下第一の繪師ぢや。褒めてとらす。おゝ、褒めてとらすぞ。」

大殿様の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘ぐやうに唯、唇ばかり動して居りましたが、やがて體中の筋が緩んだやうに、べたりと疊へ兩手をつくと、

「難有い仕合でございまする。」と、聞えるか聞えないかわからない程低い聲で、丁寧に御禮を申し上げました。これは大方自分の考へてゐた目ろみの恐ろしさが、大殿様の御言葉につれてありありと目の前へ浮んで來たからでございませうか。私は一生の中に唯一度、この時だけは良秀が、氣の毒な人間に思はれました。

十六

それから二三日した夜の事でございます。大殿様は御約束通り、良秀を御召しになつて、檳榔毛の車の燒ける所を、目近く見せて御やりになりました。尤もこれは堀川の御邸であつた事ではございません。俗に雪解の御所と云ふ、昔大殿様の妹君がいらしつた洛外の山莊で、御燒きにな

つたのでございます。
この雪解の御所と申しますのは、久しくどなたにも御住ひにはならなかつた所で、廣い御庭も荒れ放題荒れ果てて居りましたが、大方この人氣のない御容子を拜見した者の當推量でございませう。こゝで御歿くなりになつた妹君の御身の上にも、兎角の噂が立ちまして、中には又月のない夜毎々々に、今でも怪しい御袴の緋の色が、地にもつかず御廊下を歩むなどと云ふ取沙汰を致すものもございました。――それも無理ではございません。晝でさへ寂しいこの御所は、一度日が暮れたとなりますと、遣水の音が一際陰に響いて、星明りに飛ぶ五位鷺も、怪形の物かと思ふ程、氣味が惡いのでございますから。
丁度その夜はやはり月のない、まつ暗な晩でございましたが、大殿油の灯影で眺めますと、緣に近く座を御占めになつた大殿樣は、淺黄の直衣に濃い紫の浮紋の指貫を御召になつて、白地の錦の緣をとつた圓座に、高々とあぐらを組んでいらつしやいました。その前後左右に御側の者どもが五六人、恭しく居並んで居りましたのは、別に取り立てて申し上げるまでもございますまい。が、中に一人、眼だつて事ありげに見えたのは、先年陸奧の戰ひに餓ゑて人の肉を食つて以來、

鹿の生角さへ裂くやうになつたと云ふ強力の侍が、下に腹巻を着こんだ容子で、太刀を鷗尻に佩き反らせながら、御縁の下に嚴しくつくばつてゐた事でございます。——それが皆、夜風に靡く灯の光で、或は明るく或は暗く、殆ど夢現を分たない氣色で、何故かもの凄く見え渡つて居りました。

その上に又、御庭に引き据ゑた檳榔毛の車が、高い車蓋にのつしりと暗を抑へて、牛はつけず黒い轅を斜に榻へかけながら、金物の黄金を星のやうに、ちらちら光らせてゐるのを眺めますと、春とは云ふものの何となく肌寒い氣が致します。尤もその車の内は、浮線綾の縁をとつた青簾が、重く封じこめて居りますから、輫には何がはひつてゐるか判りません。さうしてそのまはりには仕丁たちが、手ん手に燃えさかる松明を執つて、煙が御縁の方へ靡くのを氣にしながら、仔細らしく控へて居ります。

當の良秀は稍離れて、丁度御縁の眞向に、跪いて居りましたが、これは何時もの香染らしい狩衣に萎えた揉烏帽子を頂いて、星空の重みに壓されたかと思ふ位、何時もよりは猶小さく、見すぼらしげに見えました。その後に又一人同じやうな烏帽子狩衣の蹲つたのは、多分召し連れた弟

子の一人でもございませうか。それが丁度二人とも、遠いうす暗がりの中に蹲つて居りますので、私のゐた御緣の下からは、狩衣の色さへ定かにはわかりません。

十七

時刻は彼是眞夜中にも近かつたでございませう。林泉をつゝんだ暗がひつそりと聲を吞んで、一同のする息を窺つてゐると思ふ中には、唯かすかな夜風の渡る音がして、松明の煙がその度に煤臭い匂を送つて參ります。大殿様は暫く默つて、この不思議な景色をぢつと眺めていらつしやいましたが、やがて膝を御進めになりますと、

「良秀、」と、鋭く御呼びかけになりました。

良秀は何やら御返事を致したやうでございますが、私の耳には唯、唸るやうな聲しか聞えて參りません。

「良秀。今宵はその方の望み通り、車に火をかけて見せて遣はさう。」

大殿様はかう仰有つて、御側の者たちの方を流し眄に御覧になりました。その時何か大殿様と

御側の誰彼との間には、意味ありげな微笑が交されたやうにも見うけましたが、これは或は私の氣のせゐかも分りません。すると良秀は畏る畏る頭を擧げて御縁の上を仰いだらしうございますが、やはり何も申し上げずに控へて居ります。

「よう見い。それは予が日頃乘る車ぢや。その方も覺えがあらう。――予はその車にこれから火をかけて、目のあたりに炎熱地獄を現ぜさせる心算ぢやが。」

大殿様は又詞を御止めになつて、御側の者たちに眴せをなさいました。それから急に苦々しい御調子で、「その中には罪人の女房が一人、縛めた儘乘せてある。されば車に火をかけたら、必定その女めは肉を焼き骨を焦して、四苦八苦の最期を遂げるであらう。その方が屏風を仕上げるには、又とない好い手本ぢや。雪のやうな肌が燃え爛れるのを見のがすな。黒髮が火の粉になつて、舞ひ上るさまもよう見て置け。」

大殿様は三度口を御噤みになりましたが、何を御思ひになつたのか、今度は唯肩を揺つて、聲も立てずに御笑ひなさりながら、

「末代までもない觀物ぢや。予もここで見物しよう。それそれ、簾を揚げて、良秀に中の女を見

せて遣さぬか。」

仰を聞くと仕丁の一人は、片手に松明の火を高くかざしながら、つかつかと車に近づくと、矢庭に片手をさし伸ばして、簾をさらりと揚げて見せました。けたゝましく音を立てて燃える松明の光は、一しきり赤くゆらぎながら、忽ち狹い輧の中を鮮かに照し出しましたが、輌の上に慘らしく、鎖にかけられた女房は――あゝ、誰か見違へを致しませう。きらびやかな繡のある櫻の唐衣にすべらかしの黑髮が艶やかに垂れて、うちかたむいた黄金の釵子も美しく輝いて見えましたが、身なりこそ違へ、小造りな體つきは、猿轡のかかつた頸のあたりは、さうしてあの寂しい位つゝましやかな横顏は、良秀の娘に相違ございません。私は危く叫び聲を立てようと致しました。

その時でございます。私と向ひあつてゐた侍は慌しく身を起して、柄頭を片手に抑へながら、屹と良秀の方を睨みました。それに驚いて眺めますと、あの男はこの景色に、半ば正氣を失つたのでございませう。今まで下に蹲つてゐたのが、急に飛び立つたと思ひますと、兩手を前へ伸した儘、車の方へ思はず知らず走りかゝらうと致しました。唯生憎前にも申しました通り、遠い影の中に居りますので、顏貌ははつきりと分りません。しかしさう思つたのはほんの一瞬間で、色

を失つた良秀の顔は、いや、まるで何か目に見えない力が宙へ吊り上げたやうな良秀の姿は、忽ちうす暗がりを切り抜いてありありと眼前へ浮び上りました。娘を乗せた檳榔毛の車が、この時、「火をかけい」と云ふ大殿様の御語と共に、仕丁たちが投げる松明の火を浴びて炎々と燃え上つたのでございます。

十八

火は見る見る中に、車蓋をつゝみました。庇についた紫の流蘇が、煽られたやうにさつと靡くと、その下から濛々と夜目にも白い煙が渦を巻いて、或は簾、或は袖、或は棟の金物が、一時に砕けて飛んだかと思ふ程、火の粉が雨のやうに舞ひ上る――その凄じさと云つたらございません。いや、それよりもめらめらと舌を吐いて袖格子に搦みながら、半空までも立ち昇る烈々とした炎の色は、まるで日輪が地に落ちて、天火が迸つたやうだとでも申しませうか。前に危く叫ばうとした私も、今は全く魂を消して、唯茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を見守るより外はございませんでした。しかし親の良秀は――

良秀のその時の顏つきは、今でも私は忘れません。思はず知らず車の方へ驅け寄らうとしたあの男は、火が燃え上ると同時に、足を止めて、やはり手をさし伸した儘、食ひ入るばかりの眼つきをして、車をつゝむ焰煙を吸ひつけられたやうに眺めて居りましたが、滿身に浴びた火の光で、皺だらけな醜い顏は、髭の先までもよく見えます。が、その大きく見開いた眼の中と云ひ、引き歪めた脣のあたりと云ひ、或は又絶えず引き攣つてゐる頰の肉の震へと云ひ、良秀の心に交々往來する恐れと悲しみと驚きとは、歷々と顏に描かれました。首を刎ねられる前の盜人でも、乃至は十王の廳へ引き出された、十逆五惡の罪人でも、あゝまで苦しさうな顏は致しますまい。これには流石にあの強力の侍でさへ、思はず色を變へて、畏る畏る大殿樣の御顏を仰ぎました。

が、大殿樣は緊く脣を御噛みになりながら、時々氣味惡く御笑ひになつて、眼も放さずぢつと車の方を御見つめになつていらつしやいます。さうしてその車の中には——あゝ、私はその時、その車にどんな娘の姿を眺めたか、それを詳しく申し上げる勇氣は、到底あらうとも思はれません。あの煙に咽んで仰向けた顏の白さ、焰を掃つてふり亂れた髮の長さ、それから又見る間に火と變つて行く、櫻の唐衣の美しさ、——何と云ふ慘たらしい景色でございましたらう。殊に夜風

が一下しして、煙が向うへ靡いた時、赤い上に金粉を撒いたやうな、焔の中から浮き上つて、轡を噛みながら、縛の鎖も切れるばかり身悶えをした有様は、地獄の業苦を目のあたりへ寫し出したかと疑はれて、私始め強力の侍までおのづと身の毛がよだちました。

するとその夜風が又一渡り、御庭の木々の梢にさつと通ふ――と誰でも、思ひましたらう。さう云ふ音が暗い空を、どことも知らず走つたと思ふと、忽ち何か黒いものが、地にもつかず宙にも飛ばず、鞠のやうに躍りながら、御所の屋根から火の燃えさかる車の中へ、一文字にとびこみました。さうして朱塗のやうな袖格子が、ばらばらと焼け落ちる中に、のけ反つた娘の肩を抱いて、帛を裂くやうな鋭い聲を、何とも云へず苦しさうに、長く煙の外へ飛ばせました。續いて又、二聲三聲――私たちは我知らず、あつと同音に叫びました。壁代のやうな焔を後にして、娘の肩に縋つてゐるのは、堀川の御邸に繋いであつた、あの良秀と諢名のある、猿だつたのでございますから。

十九

が、猿の姿が見えたのは、ほんの一瞬間でございました。金梨子地のやうな火の粉が一しきり、ぱつと空へ上つたかと思ふ中に、猿は元より娘の姿も、黒煙の底に隱されて、御庭のまん中には唯、一輛の火の車が凄じい音を立てながら、燃え沸つてゐるばかりでございます。いや、火の車と云ふよりも、或は火の柱と云つた方が、あの星空を衝いて煮え返る、恐ろしい火焰の有様にはふさはしいかも知れません。

その火の柱を前にして、凝り固まつたやうに立つてゐる良秀は、——何と云ふ不思議な事でございませう。あのさつきまで地獄の責苦に惱んでゐたやうな良秀は、今は云ひやうのない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、皺だらけな滿面に浮べながら、大殿様の御前も忘れたのか、兩腕をしつかり胸に組んで、佇んでゐるではございませんか。それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬ有様が映つてゐないやうなのでございます。唯美しい火焰の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる——さう云ふ景色に見えました。

しかも不思議なのは、何もあの男が一人娘の斷末魔を嬉しさうに眺めてゐた、そればかりではございません。その時の良秀には、何故か人間とは思はれない、夢に見る獅子王の怒りに似た怪

しげな嚴さがございました。でございますから不意の火の手に驚いて、啼き騒ぎながら飛びまはる數の知れない夜鳥でさへ、氣のせゐか良秀の揉烏帽子のまはりへは、近づかなかつたやうでございます。恐らくは無心の鳥の眼にも、あの男の頭の上に、圓光の如く懸つてゐる、不可思議な威嚴が見えたのでございませう。

　鳥でさへさうでございます。まして私たちは仕丁までも、皆息をひそめながら、身の内も震へるばかり、異様な隨喜の心に充ち滿ちて、まるで開眼の佛でも見るやうに、眼も離さず、良秀を見つめました。空一面に鳴り渡る車の火と、それに魂を奪はれて、立ちすくんでゐる良秀と——何と云ふ莊嚴、何と云ふ歡喜でございませう。が、その中でたつた一人、御縁の上の大殿様だけは、まるで別人かと思はれる程、御顏の色も青ざめて、口元に泡を御ためになりながら、紫の指貫の膝を兩手にしつかり御つかみになつて、丁度喉の渴いた獸のやうに喘ぎつゞけていらつしやいました。……

二十

その夜雪解の御所で、大殿様が車を御燒きになつた事は、誰の口からともなく世上へ洩れましたが、それに就いては隨分いろいろな批判を致すものも居つたやうでございます。先第一に何故大殿様が良秀の娘を御燒き殺しなすつたか、――これは、かなはぬ戀の恨みからなすつたのだと云ふ噂が、一番多うございました。が、大殿様の思召しは、全く車を燒き人を殺してまでも、屛風の畫を描かうとする繪師根性の曲なのを懲らす御心算だつたのに相違ございません。現に私は、大殿様が御口づからさう仰有るのを伺つた事さへございます。

それからあの良秀が、目前で娘を燒き殺されながら、それでも屛風の畫を描きたいと云ふその木石のやうな心もちが、やはり何かとあげつらはれたやうでございます。中にはあの男を罵つて、畫の爲めに親子の情愛も忘れてしまふ、人面獸心の曲者だなどと申すものもございました。あの横川の僧都様などは、かう云ふ考へに味方をなすつた御一人で、「如何に一藝一能に秀でようとも、人として五常を辨へねば、地獄に墮ちる外はない」などと、よく仰有つたものでございます。

所がその後一月ばかり經つて、愈々地獄變の屛風が出來上りますと、良秀は早速それを御邸へ持つて出て、恭しく大殿様の御覽に供へました。丁度その時は僧都様も御居合せになりましたが、

屏風の畫を一目御覽になりますと、流石にあの一帖の天地に吹き荒んでゐる火の嵐の恐しさに御驚きなすつたのでございませう。それまでは苦い顏をなさりながら、良秀の方をじろじろ睨めつけていらしつたのが、思はず知らず膝を打つて、「出かし居つた」と仰有いました。この語を御聞になつて、大殿樣が苦笑なすつた時の御容子も、未だに私は忘れません。

それ以來あの男を惡く云ふものは、少くとも御邸の中だけでは、殆ど一人もゐなくなりました。誰でもあの屏風を見るものは、如何に日頃良秀を憎く思つてゐるにせよ、不思議に嚴かな心もちに打たれて、炎熱地獄の大苦艱を如實に感じるからでもございませうか。

しかしさうなつた時分には、良秀はもうこの世に無い人の數にはひつて居りました。それも屏風の出來上つた次の夜に、自分の部屋の梁へ繩をかけて、縊れ死んだのでございます。一人娘を先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらへるのに堪へなかつたのでございませう。死骸は今でもあの男の家の跡に埋まつて居ります。尤も小さな標の石は、その後何十年かの雨風に曝されて、とうの昔誰の墓とも知れないやうに、苔蒸してゐるにちがひございません。

（大正七年四月）

開化の殺人

下に掲げるのは、最近予が本多子爵(假名)から借覽する事を得た、故ドクトル・北畠義一郎(假名)の遺書である。北畠ドクトルは、よし實名を明にした所で、もう今は知つてゐる人もあるまい。予自身も、本多子爵に親炙して、明治初期の逸事瑣談を聞かせて貰ふやうになつてから、初めてこのドクトルの名を耳にする機會を得た。彼の人物性行は、下の遺書によつても幾分の説明を得るに相違ないが、猶二三、予が仄聞した事實をつけ加へて置けば、ドクトルは當時内科の專門醫として有名だつたと共に、演劇改良に關しても或急進的意見を持つてゐた、一種の劇通だつたと云ふ。現に後者に關しては、ドクトル自身の手になつた戲曲さへあつて、それはヴオルテエルの Candide の一部を、徳川時代の出來事として脚色した、二幕物の喜劇だつたさうである。

北庭筑波が撮影した寫眞を見ると、北畠ドクトルは英吉利風の頬髯を蓄へた、容貌魁偉な紳士である。本多子爵によれば、體格も西洋人を凌ぐばかりで、少年時代から何をするのでも、精力

抜群を以て知られてゐたと云ふ。さう云へば遺書の文字さへ、鄭板橋風の奔放な字で、その淋漓たる墨痕の中にも、彼の風貌が看取されない事もない。

勿論予はこの遺書を公にするに當つて、幾多の改竄を施した。譬へば當時まだ授爵の制がなかつたにも關らず、後年の稱に從つて本多子爵及夫人等の名を用ひた如きものである。唯、その文章の調子に至つては、殆原文の調子をそつくりその儘、ひき寫したと云つても差支へない。

本多子爵閣下、並に夫人、

予は予が最期に際し、既往三年來、常に予が胸底に蟠れる、呪ふ可き祕密を告白し、以て卿等の前に予が醜惡なる心事を暴露せんとす。卿等にして若しこの遺書を讀むの後、猶卿等の故人たる予の記憶に對し、一片憐憫の情を動す事ありとせんか、そは素より予にとりて、望外の大幸なり。されど又予を目して、萬死の狂徒と做し、當に屍に鞭打つて後已む可しとするも、予に於ては毫も遺憾とする所なし。唯、予が告白せんとする事實の、餘りに意想外なるの故を以て、妄に

予を誣ふるに、神經病患者の名を藉る事勿れ。予は最近數ケ月に亙りて、不眠症の爲に苦しみつつありと雖も、予が意識は明白にして、且極めて鋭敏なり。若し卿等にして、予が二十年來の相識たるを想起せんか。（予は敢て友人とは稱せざる可し）請ふ、予が精神的健康を疑ふ事勿れ。然らずんば、予が一生の汚辱を披瀝せんとする此遺書の如きも、結局無用の故紙たると何の選ぶ所か是あらん。

閣下、並に夫人、予は過去に於て殺人罪を犯したると共に、將來に於ても亦同一罪惡を犯さんとしたる卑む可き危險人物なり。しかもその犯罪が卿等に最も親近なる人物に對して、企畫せられたるのみならず、又企畫せられんとしたりと云ふに至りては、卿等にとりて正に意外中の意外たる可し。予は是に於て、予が警告を再するの、必要なる所以を感ぜざる能はず。予は全然正氣にして、予が告白は徹頭徹尾事實なり。卿等幸にそを信ぜよ。而して予が生涯の唯一の記念たる、この數枚の遺書をして、空しく狂人の囈語たらしむる事勿れ。

予はこれ以上予の健全を喋々すべき餘裕なし。予が生存すべき僅少なる時間は、直下に予を驅りて、予が殺人の動機と實行とを叙し、更に進んで予が殺人後の奇怪なる心境に言及せしめずん

ば、已まざらんとす。されど、嗚呼されど、予は硯に呵し紙に臨んで、猶惶々として自ら安からざるものあるを覺ゆ。惟ふに予が過去を點檢し記載するは、予にとりて再過去の生活を營むと、畢竟何の差違かあらん。予は殺人の計畫を再し、その實行を再し、更に最近一年間の恐る可き苦悶を再せざる可らず。是果して善く予の堪へ得可き所なりや否や。予は今にして、予が數年來失却したる我耶蘇基督に祈る。願くば予に力を與へ給へ。

予は少時より予が從妹たる今の本多子爵夫人(三人稱を以て、呼ぶ事を許せ)往年の甘露寺明子を愛したり。予の記憶に溯りて、予が明子と偕にしたる幸福なる時間を列記せんか。そは恐らく卿等が卒讀の煩に堪へざる所ならん。されど予はその例證として、今日も猶予が胸底に歷々たる一場の光景を語らざるを得ず。予は當時十六歲の少年にして、明子は未十歲の少女なりき。五月某日予等は明子が家の芝生なる藤棚の下に嬉戲せしが、明子は予に對して、隻脚にて善く久しく立つを得るやと問ひぬ。而して予が否と答ふるや、彼女は左手を垂れて左の趾を握り、右手を擧げて均衡を保ちつつ、隻脚にて立つ事、是を久うしたりき。頭上の紫藤は春日の光を揺りて垂れ、藤下の明子は凝然として彫塑の如く佇めり。予はこの畫の如き數分の彼女を、今に至つて忘

る能はず。私に自ら省みて、予が心既に深く彼女を愛せるに驚きしも、實にその藤棚の下に於て然りしなり。爾來予の明子に對する愛は益烈しきを加へ、念々に彼女を想ひて、殆學を廢するに至りしも、予の小心なる、遂に一語の予が衷心を吐露す可きものを出さず。陰晴定りなき感情の悲天の下に、或は泣き、或は笑ひて、茫々數年の年月を閲せしが、予の二十一歳に達するや、予が父は突然予に命じて、遠く家業たる醫學を英京龍動に學ばしめぬ。予は訣別に際して、明子に語るに予が愛を以てせんとせしも、嚴粛なる予等が家庭は、斯る機會を與ふるに吝なりしと共に、儒教主義の教育を受けたる予も、亦桑間濮上の譏を惧れたるを以て、無限の離愁を抱きつつ、孤笈飄然として英京に去れり。

英吉利留學の三年間、予がハイド・パアクの芝生に立ちて、如何に故園の紫藤花下たる明子を懐ひしか、或は又予がパルマルの街頭を歩して、如何に天涯の遊子たる予自身を憫みしか、そは茲に敍說するの要なかる可し。予は唯、龍動に在るの日、予が所謂薔薇色の未來の中に、來る可き予等の結婚生活を夢想し、以て僅に悶々の情を排せしを語れば足る。然り而して予の英吉利より歸朝するや、予は明子の既に嫁して第×銀行頭取滿村恭平の妻となりしを知りぬ。予は卽座に

自殺を決心したれども、予が性來の怯懦と、留學中歸依したる基督教の信仰とは、不幸にして予が手を痲痺せしめしを如何。卿等にして若し當時の予が、如何に傷心したるかを知らんとせば、予が歸朝後旬日にして、再び英京に去らんとし、爲に予が父の激怒を招きたるの一事を想起せよ。當時の予が心境を以てすれば、實に明子なきの日本は、故國に似て故國にあらず。この故國ならざる故國に止つて、徒に精神的敗殘者たるの生涯を送らんよりは、寧チヤイルド・ハロルドの一卷を抱いて、遠く萬里の孤客となり、骨を異域の土に埋むるの遙に慰む可きものあるを信ぜしなり。されど予が身邊の事情は遂に予をして渡英の計畫を抛棄せしめ、加之予が父の病院内に、一個新歸朝のドクトルとして、多數患者の診療に忙殺さる可き、退屈なる椅子に倚らしめ了りぬ。是に於て予は予の失戀の慰藉を神に求めたり。當時築地に在住したる英吉利宣教師ヘンリイ・タウンゼンド氏は、この間に於ける予の忘れ難き友人にして、予の明子に對する愛が、幾多の悪戰苦闘の後、漸次熱烈にしてしかも靜平なる肉親的感情に變化したるは、一に同氏が予の爲に釋義したる聖書の數章の結果なりき。予は屢、同氏と神を論じ、神の愛を論じ、更に人間の愛を論じたるの後、半夜行人稀なる築地居留地を歩して、獨り予が家に歸りしを記憶す。若し卿等にし

て予が兒女の情あるを哂はずんば、予は居留地の空なる半輪の月を仰ぎて、私に從妹明子の幸福を神に祈り、感極つて歔欷せしを語るも善し。

予が愛の新なる轉向を得しは、所謂「あきらめ」の心理を以て、說明す可きものなりや否や、予は之を詳にする勇氣と餘裕とに乏しけれど、予がこの肉親的愛情によりて、始めて予が心の創痍を醫し得たるの一事は疑ふ可らず。是を以て歸朝以來、明子夫妻の消息を耳にするを蛇蝎の如く恐れたる予は、今や予がこの肉親的愛情に依賴し、進んで彼等に接近せん事を希望したり。こは予にして若し彼等に幸福なる夫妻を見出さんか、予の慰安の益大にして、念頭些の苦悶なきに至る可しと、早計にも信じたるが故のみ。

予はこの信念に動かされし結果、遂に明治十一年八月三日兩國橋畔の大煙火に際し、知人の紹介を機會として、折から校書十數輩と共に柳橋萬八の水樓に在りし、明子の夫滿村恭平と、始めて一夕の歡を俱にしたり。歡か、歡か、予はその苦と云ふの、遙に勝れるの所以を思はざる能はず。予は日記に書して曰、「予は明子にして、かの滿村某の如き、濫淫の賤貨に妻たるを思へば、殆一肚皮の憤怨何の處に向つてか吐かんとするを知らず。神は予に明子を見る事、妹の如くな

る可きを教へ給へり。然り而して予が妹を、斯る禽獸の手に委せしめ給ひしは、何ぞや。予は最早、この殘酷にして奸譎なる神の惡戲に堪ふる能はず。誰か善くその妻と妹とを強人の爲に凌辱せられ、しかも猶天を仰いで神の御名を稱ふ可きものあらむ。予は今後斷じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼の手より救助す可し。」

予はこの遺書を認むるに臨み、再當時の呪ふ可き光景の、眼前に彷彿するを禁ずる能はず。かの蒼然たる水靄と、かの萬點の紅燈と、而してかの隊々相銜んで、盡くる所を知らざる畫舫の列と――嗚呼、予は終生その夜、その半空に仰ぎたる煙火の明滅を記憶すると共に、右に大妓を擁し、左に雛妓を從へ、猥褻聞くに堪へざるの俚歌を高吟しつつ、傲然として涼棚の上に酣醉したる、かの肥大豕の如き滿村恭平をも記憶す可し。否、否、彼の黑絽の羽織に抱明姜の三つ紋ありしさへ、今に至つて予は忘却する能はざるなり。予は信ず。予が彼を殺害せんとするの意志を抱きしは、實にこの水樓煙火を見しの夕に始る事を。又信ず。予が殺人の動機なるものは、その發生の當初より、斷じて單なる嫉妬の情にあらずして、寧不義を懲し不正を除かんとする道德的憤激に存せし事を。

爾來予は心を潜めて、滿村恭平の行狀に注目し、その果して予が一夕の觀察に悖らざる痴漢なりや否やを檢査したり。幸にして予が知人中、新聞記者を業とするもの、啻に二三子に止らざりしを以て、彼が淫虐無道の行跡の如きも、その予が視聽に入らざるものは絶無なりしと云ふも妨げざる可し。予が先輩にして且知人たる成島柳北先生より、彼が西京祇園の妓樓に、雛妓の未春を懷かざるものを梳櫳して、以て死に到らしめしを仄聞せしも、實に此間の事に屬す。しかもこの無賴の夫にして、夙に溫良貞淑の稱ある夫人明子を遇するや、奴婢と一般なりと云ふに至つては、誰か善く彼を目して、人間の疫癘と做さざるを得んや。既に彼を存するの風を頽し俗を紊る所以なるを知り、彼を除くの老を扶け幼を憐む所以なるを知る。是に於て予が殺害の意志たりしものは、徐に殺害の計畫と變化し來れり。

然れども若し是に止らんか、予は恐らく予が殺人の計畫を實行するに、猶幾多の逡巡なきを得ざりしならん。幸か、抑亦不幸か、運命はこの危險なる時期に際して、予を予が年少の友たる本多子爵と、一夜墨上の旗亭柏屋に會せしめ、以て酒間その口より一場の哀話を語らしめたり。予はこの時に至つて、始めて本多子爵と明子とが、既に許嫁の約ありしにも關らず、彼、滿村恭平が

黄金の威に壓せられて、遂に破約の已む無きに至りしを知りぬ。予が心、豈憤を加へざらんや。かの酒燈一穗、畫樓簾裡に黯淡たるの處、本多子爵と予とが杯を含んで、滿村を痛罵せし當時を思へば、予は今に至つて自ら肉動くの感なきを得ず。されど同時に又、當夜人力車に乘じて、柏屋より歸るの途、本多子爵と明子との舊契を思ひて、一種名狀す可らざる悲哀を感ぜしも、予は猶明に記憶する所なり。請ふ。再び予が日記を引用するを許せ。「予は今夕本多子爵と會してより、愈旬日の間に滿村恭平を殺害す可しと決心したり。子爵の口吻より察するに、彼と明子とは、獨り許嫁の約ありしのみならず、又實に相愛の情を抱きたるものの如し。(予は今日にして、子爵の獨身生活の理由を發見し得たるを覺ゆ)若し予にして滿村を殺害せんか、子爵と明子とが伉儷を完うせんは、必しも難事にあらず。偶明子の滿村に嫁して、未一兒を擧げざるは、恰も天意亦予が計畫を扶くるに似たるの觀あり。予はかの獸心の巨紳を殺害するの結果、予の親愛なる子爵と明子とが、早晩幸福なる生活に入らんとするを思ひ、自ら口邊の微笑を禁ずる事能はず。」

今や予が殺人の計畫は、一轉して殺人の實行に移らんとす。予は幾度か周密なる思慮に思慮を重ねたるの後、漸くにして滿村を殺害す可き適當なる場所と手段とを選定したり。その何處にし

て何なりしかは、敢て詳細なる敍述を試みるの要なかる可し。卿等にして猶明治十二年六月十二日、獨逸皇孫殿下が新富座に於て日本劇を見給ひしの夜、彼、滿村恭平が同戲場よりその自邸に歸らんとするの途次、馬車中に於て突如病死したる事實を記憶せんか、予は新富座に於て滿村の血色宜しからざる由を說き、これに所持の丸藥の服用を勸誘したる、一個壯年のドクトルありしを語れば足る。嗚呼、卿等請ふ、そのドクトルの面を想像せよ。彼は纍々たる紅球燈の光を浴びて、新富座の木戶口に佇みつつ、霖雨の中に奔馳し去る滿村の馬車を目送するや、昨日の憤怨、今日の歡喜、均しく胸中に蝟集し來り、笑聲嗚咽共に唇頭に溢れんとして、殆ど處の何處たる、時の何時たるを忘却したりき。しかもその彼が且泣き且笑ひつつ、蕭雨を犯し泥濘を踏んで、狂せる如く歸途に就きしの時、彼の呟いて止めざりしものは明子の名なりしをも忘るる事勿れ。——

「予は終夜眠らずして、予が書齋を徘徊したり。歡喜か、悲哀か、予はそを明にする能はず。唯、或云ひ難き强烈なる感情は、予の全身を支配して、一霎時たりと雖も、予をして安坐せざらしむるを如何。予が卓上には三鞭酒あり。薔薇の花あり。而して又かの丸藥の箱あり。予は殆、天使と惡魔とを左右にして、奇怪なる饗宴を開きしが如くなりき……。」

予は爾來數ケ月の如く、幸福なる日子を閲せし事あらず。滿村の死因は警察醫によりて、予の豫想と寸分の相違もなく、腦出血の病名を與へられ、卽刻地下六尺の暗黑に、腐肉を蟲蛆の食としたるが如し。旣に然り、誰か又予を目して、殺人犯の嫌疑ありと做すものあらん。しかも仄聞する所によれば、明子はその良人の死に依りて、始めて蘇色ありと云ふにあらずや。予は滿面の喜色を以て予の患者を診察し、閑あれば、卽本多子爵と共に、好んで劇を新富座に見たり。是全く予にとりては、予が最後の勝利を博せし、光榮ある戰場として、屢その花瓦斯とその掛毛氈とを眺めんとする、不思議なる欲望を感ぜしが爲のみ。

然れどもこは眞に、數ケ月の間なりき。この幸福なる數ケ月の經過すると共に、予は漸次予が生涯中最も憎む可き誘惑と鬪ふ可き運命に接近しぬ。その鬪の如何に酷烈を極めたるか、如何に步々予を死地に驅逐したるか。予は到底茲に敍說するの勇氣なし。否、この遺書を認めつつある現在さへも、予は猶この水蛇の如き誘惑と、死を以て鬪はざる可らず。卿等にして若し、予が煩悶の跡を見んと欲せば、請ふ、以下に抄錄せんとする予が日記を一瞥せよ。

「十月×日、明子、子なきの故を以て滿村家を去る由、予は近日本多子爵と共に、六年ぶりにて

彼女と會見す可し。歸朝以來、始予は彼女を見るの己の爲に忍びず、後は彼女を見るの彼女の爲に忍びずして、遂に荏苒今日に及べり。明子の明眸、猶六年以前の如くなる可きや否や。

「十月×日、予は今日本多子爵を訪れ、始めて共に明子の家に赴かんとしぬ。然るに豈計らんや、子爵は予に先立ちて、既に彼女を見る事兩三度なりと云はんには。子爵の予を疎外する、何ぞ斯くの如く甚しきや。予は甚しく不快を感じたるを以て、辭を患者の診察に託し、匆惶として子爵の家を辭したり。子爵は恐らく予の去りし後、單身明子を訪れしならんか。

「十一月×日、予は本多子爵と共に、明子を訪ひぬ。明子は容色の幾分を減却したれども、猶紫藤花下に立ちし當年の少女を髣髴するは、未必しも難事にあらず。嗚呼予は既に明子を見たり。而して予が胸中、反つて止む可らざる悲哀を感ずるは何ぞ。予はその理由を知らざるに苦む。

「十二月×日、子爵は明子と結婚する意志あるものの如し。斯くして予が明子の夫を殺害したる目的は、始めて完成の域に達するを得ん。されど――されど、予は予が再明子を失ひつつあるが如き、異様なる苦痛を免るる事能はず。

「三月×日、子爵と明子との結婚式は、今年年末を期して、擧行せらるべしと云ふ。予はその一

日も速ならん事を祈る。現状に於ては、予は永久にこの止み難き苦痛を脱離する能はざる可し。

「六月十二日、予は獨り新富座に赴けり。去年今月今日、予が手に仆れたる犧牲を思へば、予は觀劇中も自ら會心の微笑を禁ぜざりき。されど同座より歸途、予がふと予の殺人の動機に想到するや、予は殆歸趣を失ひたるかの感に打たれたり。嗚呼、予は誰の爲に滿村恭平を殺せしか。本多子爵の爲か、明子の爲か、抑も亦予自身の爲か。こは予も亦答ふる能はざるを如何。

「七月×日、予は子爵と明子と共に、今夕馬車を驅つて、隅田川の流燈會を見物せり。馬車の窓より洩るる燈光に、明子の明眸の更に美しかりしは、殆予をして傍に子爵あるを忘れしめぬ。されどそは予が語らんとする所にあらず。予は馬車中子爵の胃痛を訴ふるや、手にポケットを捜りて、丸藥の函を得たり。而してその「かの丸藥」なるに一驚したり。予は何が故に今宵この丸藥を携へたるか。偶然か、予は切にその偶然ならん事を庶幾ふ。されどそは必しも偶然にはあらざりしものの如し。

「八月×日、予は子爵と明子と共に、予が家に晩餐を共にしたり。しかも予は終始、予がポケットの底なるかの丸藥を忘るる事能はず。予の心は、殆予自身にとりても、不可解なる怪物を藏す

るに似たり。

「十一月×日、子爵は遂に明子と結婚式を擧げたり。予は予自身に對して、名狀し難き憤怒を感ぜざるを得ず。その憤怒たるや、恰も一度遁走せし兵士が、自己の怯懦に對して感ずる羞恥の情に似たるが如し。

「十二月×日、予は子爵の請に應じて、之をその病床に見たり。明子亦傍にありて、夜來發熱甚しと云ふ。予は診察の後、その感冒に過ぎざるを云ひて、直に家に歸り、子爵の爲に自ら調劑しぬ。その間約二時間、「かの丸藥」の函は終始予に恐る可き誘惑を持續したり。

「十二月×日、予は昨夜子爵を殺害せる惡夢に脅されたり。終日胸中の不快を排し難し。

「二月×日、嗚呼予は今にして始めて知る、予が子爵を殺害せざらんが爲には、予自身を殺害せざる可らざるを。されど明子は如何。」

子爵閣下、並に夫人、これは予が日記の大略なり。大略なりと雖も、予が連日連夜の苦悶は、卿等必ずや善く了解せん。予は本多子爵を殺さざらんが爲には、予自身を殺さざる可らず。されど予にして若し予自身を救はんが爲に、本多子爵を殺さんか、予は予が滿村恭平を屠りし理由を如

何の地にか求む可けん。若し又彼を毒殺したる理由にして、予の自覺せざる利己主義に伏在したるものと做さんか、予の人格、予の良心、予の道德、予の主張は、すべて地を拂つて消滅す可し。是素より予の善く忍び得る所にあらず。予は寧、予自身を殺すの、遙に予が精神的破産に勝れるを信ずるものなり。故に予は予が人格を樹立せんが爲に、今宵「かの丸藥」の助によりて、嘗て予が手に僵れたる犧牲と、同一運命を擔はんとす。

本多子爵閣下、並に夫人、予は如上の理由の下に、卿等がこの遺書を手にするの時、既に死體となりて、予が寢臺に横はらん。唯、死に際して、縷々予が呪ふ可き半生の祕密を告白したるは、亦以て卿等の爲に聊自ら潔せんと欲するが爲のみ。卿等にして若し憎む可くんば、即ち憎み、憐む可くんば、即ち憐め。予は——自ら憎み、自ら憐める予は、悦んで卿等の憎惡と憐憫とを蒙る可し。さらば予は筆を擱いて、予が馬車を命じ、直に新富座に赴かん。而して半日の觀劇を終りたるの後、予は「かの丸藥」の幾粒を口に啣みて、再予が馬車に投ぜん。節物は素より異れども、紛々たる細雨は、予をして幸に黄梅雨の天を彷彿せしむ。斯くして予はかの肥大家に似たる滿村恭平の如く、車窓の外に往來する燈火の光を見、車蓋の上に蕭々たる夜雨の音を聞きつつ、新富

座を去る事甚遠からずして、必予が最期の息を呼吸す可し。卿等亦明日の新聞を飜すの時、恐らくは予が遺書を得るに先立つて、ドクトル北畠義一郎が腦出血病を以て、觀劇の歸途、馬車内に頓死せしの一項を讀まんか。終に臨んで予は切に卿等が幸福と健在とを祈る。卿等に常に忠實なる僕、北畠義一郎拜。

（大正七年六月）

奉教人の死

たとひ三百歳の齢を保ち、樂しみ身に餘ると云ふとも、未來永々の果しなき樂しみに比ぶれば、夢幻の如し。

―慶長譯 Guia do Pecador―

善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘味を覺ゆべし。

―慶長譯 Imitatione Christi―

一

去んぬる頃、日本長崎の「さんた。るちや」と申す「えけれしや」(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの國の少年がござつた。これは或年御降誕の祭の夜、その「えけれしや」の戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、參詣の奉教人衆が介抱し、それより伴天連の憐みにて、寺中に養はれる事

となつたげでござるが、何故かその身の素性を問へば、故郷は「はらいそ」（天國）父の名は「でうす」（天主）などと、何時も事もなげな笑に紛らいて、とんとまことは明した事もござない。なれど親の代から「ぜんちよ」（異教徒）の輩であらなんだ事だけは、手くびにかけた青玉の「こんたつ」（念珠）を見ても、知れたと申す。されば伴天連はじめ、多くの「いるまん」衆（法兄弟）も、よも怪しいものではござるまいとおぼされて、ねんごろに扶持して置かれたが、その信心の堅固なは、幼いにも似ず「すぺりおれす」（長老衆）が舌を捲くばかりであつたれば、一同も「ろおれんぞ」は天童の生れがはりであらうずなど申し、いづくの生れ、たれの子とも知れぬものを、無下にめでいつくしんで居つたげでござる。

して又この「ろおれんぞ」は、顏かたちが玉のやうに淸らかであつたに、聲ざまも女のやうに優しかつたれば、一しほ人々のあはれみを惹いたのでござらう。中でもこの國の「いるまん」に「しめおん」と申したは、「ろおれんぞ」を弟のやうにもてなし、「えけれしや」の出入りにも、必仲よう手を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元さる大名に仕へた、槍一すぢの家がらなものぢや。されば身のたけも拔群なに、性得の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」ばらの石瓦にう

たるるを、防いで進ぜた事も、一度二度の沙汰ではござない。それが「ろおれんぞ」と睦じうするさまは、とんと鳩になづむ荒鷲のやうであつたとも申さうか。或は「ればのん」山の檜に、葡萄かづらが纒ひついて、花咲いたやうであつたとも申さうず。

さる程に三年あまりの年月は、流るるやうにすぎたに由つて、「ろおれんぞ」はやがて元服もすべき時節となつた。したがその頃怪しげな噂が傳はつたと申すは、「さんた・るちや」から遠からぬ町方の傘張の娘が、「ろおれんぞ」と親しうすると云ふ事ぢや。この傘張の翁も天主の御教を奉ずる人故、娘ともども「えけれしや」へは參る慣であつたに、御祈の暇にも、娘は香爐をさげた「ろおれんぞ」の姿から、眼を離したと申す事がござない。まして「えけれしや」への出入りには、必髮かたちを美しうして、「ろおれんぞ」のゐる方へ眼づかひをするが定であつた。さればおのづと奉教人衆の人目にも止り、娘が行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云ひ出すものもあれば、二人が艶書をとりかはすをしかと見とどけたと申すものも、出て來たげでござる。

由つて伴天連にも、すて置かれず思されたのでござらう。或日「ろおれんぞ」を召されて、白ひげを噛みながら、「その方、傘張の娘と兎角の噂ある由を聞いたが、よもやまことではあるまい。

どうぢや」ともの優しう尋ねられた。したが「ろおれんぞ」は、唯憂はしげに頭を振つて、「そのやうな事は一向に存じよう筈もござらぬ」と、涙聲に繰返すばかり故、伴天連もさすがに我を折られて、年配と云ひ、日頃の信心と云ひ、かうまで申すものに僞はあるまいと思されたげでござる。

さて一應伴天連の疑は晴れてぢやが、「さんた・るちや」へ參る人々の間では、容易にとかうの沙汰が絶えさうもござない。されば兄弟同樣にして居つた「しめおん」の氣がかりは、又人一倍ぢや。始はかやうな淫な事を、ものものしう詮議立てするが、おのれにも恥しうて、うちつけに尋ねようは元より、「ろおれんぞ」の顏さへまさかとは見られぬ程であつたが、或時「さんた・るちや」の後の庭で、「ろおれんぞ」へ宛てた娘の艶書を拾うたに由つて、人氣ない部屋にゐたを幸、「ろおれんぞ」の前にその文をつきつけて、嚇しつ賺しつ、さまざまに問ひただいた。なれど「ろおれんぞ」は唯、美しい顏を赤らめて、「娘は私に心を寄せましたげでござれど、私は文を貰うたばかり、とんと口を利いた事もござらぬ」と申す。なれど世間のそしりもある事でござれば、「しめおん」は猶も押して問ひ詰つたに、「ろおれんぞ」はわびしげな眼で、ぢつと相手を見つめたと思へば、「私はお主にさへ、嘘をつきさうな人間に見えるさうな」と、咎めるやうに云ひ放つて、とんと燕

か何ぞのやうに、その儘つと部屋を出つて行つてしまうた。かう云はれて見れば、「しめおん」も己の疑深かつたのが恥しうもなつたに由つて、悄々その場を去らうとしたに、いきなり駈けこんで來たは、少年の「ろおれんぞ」ぢや。それが飛びつくやうに「しめおん」の頸を抱くと、喘ぐやうに「私が惡かつた。許して下されい」と囁いて、こなたが一言も答へぬ間に、涙に濡れた顔を隱さう爲か、相手をつきのけるやうに身を開いて、一散に又元來た方へ、走つて往んでしまうたと申す。さればその「私が惡かつた」と囁いたのも、娘と密通したのが惡かつたと云ふのやら、或は「しめおん」につれなうしたのが惡かつたと云ふのやら、一圓合點の致さうやうがなかつたとの事でござる。

するとその後間もなう起つたのは、その傘張の娘が孕つたと云ふ騒ぎぢや。しかも腹の子の父親は、「さんた・るちや」の「ろおれんぞ」ぢやと、正しう父の前で申したげでござる。されば傘張の翁は火のやうに憤つて、即刻伴天連のもとへ委細を訴へに參つた。かうなる上は「ろおれんぞ」も、かつふつ云ひ譯の致しやうがござない。その日の中に伴天連を始め、「いるまん」衆一同の談合に由つて、破門を申し渡される事になつた。元より破門の沙汰がある上は、伴天連の手もとを

も追ひ拂はれる事でござれば、糊口のよすがに困るのも目前ぢや。したがかやうな罪人を、この儘「さんた・るちや」に止めて置いては、御主の「ぐろおりや」(榮光)にも關る事ゆゑ、日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追ひ拂つたと申す事でござる。

その中でも哀れをとどめたは、兄弟のやうにして居つた「しめおん」の身の上ぢや。これは「ろおれんぞ」が追ひ出されると云ふ悲しさよりも、「ろおれんぞ」に欺かれたと云ふ腹立たしさが一倍故、あのいたいけな少年が、折からの凩が吹く中へ、しをしをと戸口を出かかつたに、傍から拳をふるうて、したたかその美しい顔を打つた。「ろおれんぞ」は剛力に打たれたに由つて、思はずそこへ倒れたが、やがて起きあがると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、「御主も許させ給へ。「しめおん」は、己が仕業もわきまへぬものでござる」と、わななく聲で祈つたと申す事ぢや。「しめおん」もこれには氣が挫けたのでござらう。暫くは唯戸口に立つて、拳を空にふるうて居つたが、その外の「いるまん」衆も、いろいろととりないたれば、それを機會に手を束ねて、嵐も吹き出でようず空の如く、凄じく顏を曇らせながら、悄々「さんた・るちや」の門を出る「ろおれんぞ」の後姿を、貪るやうにきつと見送つて居つた。その時居合はせた奉教人衆の話を傳へ聞けば、時しも

凩にゆらぐ日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焰の中に、立ちきはまつたやうに見えたと申す。

その後の「ろおれんぞ」は、「さんた・るちや」の内陣に香爐をかざした昔とは打つて變つて、町はづれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。ましてその前身は、「ぜんちよ」の輩にはゑとりのやうにさげしまるる、天主の御教を奉ずるものぢや。されば町を行けば、心ない童部に嘲らるるは元より、刀杖瓦石の難に遭うた事も、度々ござるげに聞き及んだ。いや、嘗つては、長崎の町にはびこつた、恐しい熱病にとりつかれて、七日七夜の間、道ばたに伏しまろんでは、苦み悶えたとも申す事でござる。したが、「でうす」無量無邊の御愛憐は、その都度「ろおれんぞ」が一命を救はせ給うたのみか、施物の米錢のない折々には、山の木の實、海の魚介など、その日の糧を惠ませ給ふのが常であつた。由つて「ろおれんぞ」も、朝夕の祈は「さんた・るちや」に在つた昔を忘れず、手くびにかけた「こんたつ」も、靑玉の色を變へなかつたと申す事ぢや。なんの、それのみか、夜毎に更闌けて人音も靜まる頃となれば、この少年はひそかに町はづれの非

人小屋を脱け出いて、月を踏んでは住み馴れた「さんた・るちや」へ、御主「ぜす・きりしと」の御加護を祈りまゐらせに詣でて居つた。

なれど同じ「えけれしや」に詣づる奉敎人衆も、その頃はとんと「ろおれんぞ」を疎んじはてて、伴天連はじめ、誰一人憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門の折から所行無慚の少年と思ひこんで居つたに由つて、何として夜毎に、獨り「えけれしや」へ參る程の、信心ものぢやとは知られうぞ。これも「でうす」千萬無量の御計らひの一つ故、よしない儀とは申しながら、「ろおれんぞ」が身にとつては、いみじくも亦哀れな事でござつた。

さる程に、こなたはあの傘張の娘ぢや。「ろおれんぞ」が破門されると間もなく、月も滿たず女の子を產み落いたが、さすがにかたくなしい父の翁も、初孫の顏は憎からず思うたのでござらう、娘ともども大切に介抱して、自ら抱きもしかかへもし、時にはもてあそびの人形などもとらせたと申す事でござる。翁は元よりさもあらうずなれど、ここに稀有なは「いるまん」の「しめおん」ぢや。あの「ぢやぼ」(惡魔)をも挫がうず大男が、娘に子が產まるるや否や、暇ある每に傘張の翁を訪れて、無骨な腕に幼子を抱き上げては、にがにがしげな顏に淚を浮べて、弟と愛しんだ、

あえかな「ろおれんぞ」の優姿を、思ひ慕つて居つたと申す。唯、娘のみは、「さんた・るちや」を出でてこの方、絶えて「ろおれんぞ」が姿を見せぬのを、怨めしう歎きわびた氣色であつたれば、「しめおん」の訪れるのさへ、何かと快からず思ふげに見えた。

この國の諺にも、光陰に關守なしと申す通り、とかうする程に、一年あまりの年月は、瞬くひまに過ぎたと思召されい。ここに思ひもよらぬ大變が起つたと申すは、一夜の中に長崎の町の半ばを焼き拂つた、あの大火事のあつた事ぢや。まことにその折の景色の凄じさは、末期の御裁判の喇叭の音が、一天の火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思はれるばかり、世にも身の毛のよだつものでござつた。その時、あの傘張の翁の家は、運惡う風下にあつたに由つて、見る見る焰に包れたが、さて親子眷族、慌てふためいて、逃げ出いて見れば、娘が産んだ女の子の姿が見えぬと云ふ始末ぢや。一定、一間どころに寐かいて置いたを、忘れてここまで逃げのびたのであらうず。されば翁は足ずりをして罵りわめく。娘も亦、人に遮られずば、火の中へも馳せ入つて、助け出さう氣色に見えた。なれど風は益加はつて、焰の舌は天上の星をも焦さうず吼りやうぢや。それ故火を救ひに集つた町方の人々も、唯、あれよあれよと立ち騒いで、狂氣のやうな娘を

とり鎮めるより外に、せん方も亦あるまじい。所へひとり、多くの人を押しわけて、駈けつけて參つたは、あの「いるまん」の「しめおん」でござる。これは矢玉の下もくぐつたげな、逞しい大丈夫でござれば、ありやうを見るより早く、勇んで焔の中へ向うたが、あまりの火勢に辟易致いたのでござらう。二三度煙をくぐつたと見る間に、背をめぐらして、一散に逃げ出いた。して翁と娘とが佇んだ前へ來て、「これも「でうす」萬事にかなはせたまふ御計らひの一つぢや。詮ない事とあきらめられい」と申す。その時翁の傍から、誰とも知らず、高らかに「御主、助け給へ」と叫ぶものがござつた。聲ざまに聞き覺えもござれば、「しめおん」が頭をめぐらして、その聲の主をきつと見れば、いかな事、これは紛ひもない「ろおれんぞ」ぢや。清らかに瘦せ細つた顏は、火の光に赤うかゞやいて、風に亂れる黑髮も、肩に餘るげに思はれたが、哀れにも美しい眉目のかたちは、一目見てそれと知られた。その「ろおれんぞ」が、乞食の姿のまま、群る人々の前に立つて、目もはなたず燃えさかる家を眺めて居る。と思うたのは、まことに瞬く間もない程ぢや。一しきり焔を煽つて、恐しい風が吹き渡つたと見れば、「ろおれんぞ」の姿はまつしぐらに、早くも火の柱、火の壁、火の梁の中にはいつて居つた。「しめおん」は思はず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」

（十字）を描きながら、己も「御主、助け給へ」と叫んだが、何故かその時心の眼には、凩に搖る日輪の光を浴びて、「さんた・るちや」の門に立ちきはまつた、美しく悲しげな、「ろおれんぞ」の姿が浮んだと申す。

　なれどあたりに居つた奉教人衆は、「ろおれんぞ」が健氣な振舞に驚きながらも、破戒の昔を忘れかねたのでもござらう。忽兎角の批判は風に乘つて、人どよめきの上を渡つて參つた。と申すは、「さすが親子の情あひは爭はれぬものと見えた。己が身の罪を恥ぢて、このあたりへは影も見せなんだ「ろおれんぞ」が、今こそ一人子の命を救はうとて、火の中へはいつたぞよ」と、誰ともなく罵りかはしたのでござる。これには翁さへ同心と覺えて、「ろおれんぞ」の姿を眺めてからは、怪しい心の騷ぎを隱さうず爲か、立ちつ居つ身を悶えて、何やら愚しい事のみを、聲高にひとりわめいつて居つた。なれど當の娘ばかりは、狂ほしく大地に跪いて、兩の手で顏をうづめながら、一心不亂に祈誓を凝らいて、身動きをする氣色さへもござない。その空には火の粉が雨のやうに降りかかる。煙も地を掃つて、面を打つた。したが娘は默然と頭を垂れて、身も世も忘れた祈り三昧でござる。

とかうする程に、再火の前に群つた人々が、一度にどつとどよめくかと見れば、髪をふり亂いた「ろおれんぞ」が、もろ手に幼子をかい抱いて、亂れとぶ焰の中から、天くだるやうに姿を現いた。なれどその時、燃え盡きた梁の一つが、俄に半ばから折れたのでござらう。凄じい音と共に、一なだれの煙焰が半空に迸つたと思ふ間もなく、「ろおれんぞ」の姿ははたと見えずなつて、跡には唯火の柱が、珊瑚の如くそば立つたばかりでござる。

あまりの凶事に心も消えて、「しめおん」をはじめ翁まで、居あはせた程の奉教人衆は、皆目の眩む思ひがござつた。中にも娘はけたたましう泣き叫んで、一度は脛もあらはに躍り立つたが、やがて雷に打たれた人のやうに、そのまま大地にひれふしたと申す。さもあらばあれ、ひれふした娘の手には、何時かあの幼い女の子が、生死不定の姿ながら、ひしと抱かれて居つたをいかにしようぞ。ああ、廣大無邊なる「でうす」の御知慧、御力は、何とたたへ奉る詞だにござない。燃え崩れる梁に打たれながら、「ろおれんぞ」が必死の力をしぼつて、こなたへ投げた幼子は、折よく娘の足もとへ、怪我もなくまろび落ちたのでござる。

されば娘が大地にひれ伏して、嬉し涙に咽んだ聲と共に、もろ手をさしあげて立つた翁の口か

らは、「でうす」の御慈悲をほめ奉る聲が、自らおごそかに溢れて參つた。いや、まさに溢れようずけはひであつたとも申さうか。それより先に「しめおん」は、さかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救はうず一念から、眞一文字に躍りこんだに由つて、翁の聲は再氣づかはしげな、いたましい祈りの言となつて、夜空に高くあがつたのでござる。これは元より翁のみではござない。親子を圍んだ奉教人衆は、皆一同に聲を揃へて、「御主、助け給へ」と、泣く泣く祈りを捧げたのぢや。して「びるぜん・まりや」の御子、なべての人の苦しみと悲しみとを己がものの如くに見そなはす、われらが御主「ぜす・きりしと」は、遂にこの祈りを聞き入れ給うた。見られい。むごたらしう燒けただれた「ろおれんぞ」は、「しめおん」が腕に抱かれて、早くも火と煙とのただ中から、救ひ出されて參つたではないか。

なれどその夜の大變は、これのみではござなんだ。息も絶え絶えな「ろおれんぞ」が、とりあへず奉教人衆の手に舁かれて、風上にあつたあの「えけれしや」の門へ横へられた時の事ぢや。それまで幼子を胸に抱きしめて、涙にくれてゐた傘張の娘は、折から門へ出でられた伴天連の足もとに跪くと、並み居る人々の目前で、「この女子は「ろおれんぞ」樣の種ではおじやらぬ。まことは

妾が家隣の「ぜんちよ」の子と密通して、まうけた娘でおじやるわいの」と、思ひもよらぬ「こひさん」(懺悔)を仕つた。その思ひつめた聲ざまの震へと申し、その泣きぬれた双の眼のかがやきと申し、この「こひさん」には、露ばかりの僞さへ、あらうとは思はれ申さぬ。道理かな、肩を並べた奉教人衆は、天を焦がす猛火も忘れて、息さへつかぬやうに聲を呑んだ。

娘が涙をさめて、申し次いだは、「妾は日頃「ろおれんぞ」様を戀ひ慕うて居つたなれど、御信心の堅固さからあまりにつれなくもてなされる故、つい怨む心も出て、腹の子を「ろおれんぞ」様の種と申し僞り、妾につらかつた口惜しさを思ひ知らさうと致いたのでおじやる。なれど「ろおれんぞ」様の御心の氣高さは、妾が大罪をも憎ませ給はいで、今宵は御身の危さをもうち忘れ、「いんへるの」(地獄)にもまがふ火焰の中から、妾娘の一命を辱くも救はせ給うた。その御憐み、御計らひ、まことに御主「ぜす・きりしと」の再來かともをがまれ申す。さるにても妾が重々の極惡を思へば、この五體は忽「ぢやぼ」の爪にかかつて、寸々に裂かれようとも、中々怨む所はおじやるまい。」娘は「こひさん」を致いも果てず、大地に身を投げて泣き伏した。

二重三重に群つた奉教人衆の間から、「まるちり」(殉教)ぢや、「まるちり」ぢやと云ふ聲が、波の

やうに起つたのは、丁度この時の事でござる。殊勝にも「ろおれんぞ」は、罪人を憐む心から、御主「ぜす・きりしと」の御行跡を踏んで、乞食にまで身を落いた。して父と仰ぐ伴天連も、兄とたのむ「しめおん」も、皆その心を知らなんだ。これが「まるちり」でなうて、何でござらう。

したが、當の「ろおれんぞ」は、娘の「こひさん」を聞きながらも、僅に二三度頷いて見せたばかり、髪は焼け肌は焦げて、手も足も動かぬ上に、口をきかう氣色さへも今は全く盡きたげでござる。娘の「こひさん」に胸を破つた翁と「しめおん」とは、その枕がみに蹲つて、何かと介抱を致いて居つたが、「ろおれんぞ」の息は、刻々に短うなつて、最期ももはや遠くはあるまじい。唯、日頃と變らぬのは、遙に天上を仰いで居る、星のやうな瞳の色ばかりぢや。

やがて娘の「こひさん」に耳をすまされた伴天連は、吹き荒ぶ夜風に白ひげをなびかせながら、「さんた・るちや」の門を後にして、おごそかに申されたは、「悔い改むるものは、幸ぢや。何しにその幸なものを、人間の手に罰しようぞ。これより益「でうす」の御戒を身にしめて、心靜に末期の御裁判の日を待つたがよい。又「ろおれんぞ」がわが身の行儀を、御主「ぜす・きりしと」とひとしくし奉らうず志は、この國の奉教人衆の中にあつても、類稀なる徳行でござる。別して少

年の身とは云ひ――」ああ、これは又何とした事でござらうぞ。ここまで申された伴天連は、俄にはたと口を噤んで、あたかも「はらいそ」の光を望んだやうに、ぢつと足もとの「ろおれんぞ」の姿を見守られた。その恭しげな容子はどうぢや。その兩の手のふるへざまも、尋常の事ではござるまい。おう、伴天連のからびた頬の上には、とめどなく涙が溢れ流れるぞよ。

見られい。「しめおん」。見られい。傘張の翁。御主「ぜす・きりしと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身に浴びて、聲もなく「さんた・るちや」の門に横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣のひまから、淸らかな二つの乳房が、玉のやうに露れて居るではないか。今は燒けただれた面輪にも、自らなやさしさは、隱れようすべもあるまじい。おう、「ろおれんぞ」は女ぢや。「ろおれんぞ」は女ぢや。見られい。猛火を後にして、垣のやうに佇んでゐる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに由つて「さんた・るちや」を逐はれた「ろおれんぞ」は、傘張の娘と同じ、眼なざしのあでやかなこの國の女ぢや。

まことにその刹那の尊い恐しさは、あたかも「でうす」の御聲が、星の光も見えぬ遠い空から、傳はつて來るやうであつたと申す。されば「さんた・るちや」の前に居並んだ奉教人衆は、風に吹

かれる穂麥のやうに、誰からともなく頭を垂れて、悉「ろおれんぞ」のまはりに跪いた。その中で聞えるものは、唯、空をどよもして燃えしきる、萬丈の焰の響ばかりでござる。いや、誰やらの啜り泣く聲も聞えたが、それは傘張の娘でござらうか。或は又自ら兄とも思うた、あの「いるまん」の「しめおん」でござらうか。やがてその寂寞たるあたりをふるはせて、「ろおれんぞ」の上に高く手をかざしながら、伴天連の御經を誦せられる聲が、おごそかに悲しく耳にはいつた。して御經の聲がやんだ時、「ろおれんぞ」と呼ばれた、この國のうら若い女は、まだ暗い夜のあなたに、「はらいそ」の「ぐろおりや」を仰ぎ見て、安らかなほゝ笑みを脣に止めたまま、靜に息が絶えたのでござる。……

その女の一生は、この外に何一つ、知られなんだげに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。暗夜の海にも譬へようず煩惱心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。

二

予が所藏に關る、長崎耶蘇會出版の一書、題して「れげんだ・おうれあ」と云ふ。蓋し、LEGENDA AUREA の意なり。されど内容は必しも、西歐の所謂「黄金傳説」ならず。彼土の使徒聖人が言行を錄すると共に、併せて本邦西教徒が勇猛精進の事蹟をも採錄し、以て福音傳道の一助たらしめんとせしものの如し。

體裁は上下二卷、美濃紙摺草體交り平假名文にして、印刷甚しく鮮明を缺き、活字なりや否やを明にせず。上卷の扉には、羅甸字にて書名を橫書し、その下に漢字にて「御出世以來千五百九十六年、慶長二年三月上旬鏤刻也」の二行を縱書す。年代の左右には喇叭を吹ける天使の畫像あり。技巧頗る幼稚なれども、亦掬す可き趣致なしとせず。下卷も扉に「五月中旬鏤刻也」の句あるを除いては、全く上卷と異同なし。

兩卷とも紙數は約六十頁にして、載する所の黄金傳説は、上卷八章、下卷十章を數ふ。その他各卷の卷首に著者不明の序文及羅甸字を加へたる目次あり。序文は文章雅馴ならずして、間

間歐文を直譯せる如き語法を交へ、一見その伴天連たる西人の手になりしやを疑はしむ。

以上採錄したる「奉教人の死」は、該「れげんだ・おうれあ」下卷第二章に依るものにして、恐らくは當時長崎の一西教寺院に起りし、事實の忠實なる記錄ならんか。但、記事中の大火なるものは、「長崎港草」以下諸書に徵するも、その有無をすら明にせざるを以て、事實の正確なる年代に至つては、全くこれを決定するを得ず。

予は「奉教人の死」に於て、發表の必要上、多少の文飾を敢てしたり。もし原文の平易雅馴なる筆致にして、甚しく毀損せらるる事なからんか、予の幸甚とする所なりと云爾。

（大正七年八月十二日）

るしへる

天主初成世界　隨造三十六神　第一鉅神　云輅齊布兒（中略）自謂其智與天主等　天主怒而貶入地獄（中略）輅齊雖入地獄受苦　而一半魂神作魔鬼遊行世間　退人善念

――左闢第三闢裂性中艾儒略荅許大受語――

一

破提宇子と云ふ天主教を辯難した書物のある事は、知つてゐる人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禪僧巴毗弇なるものの著した書物である。巴毗弇は當初南蠻寺に住した天主教徒であつたが、その後何かの事情から、ヒひ如來を捨てて佛門に歸依する事になつた。書中に云つてゐる所から推すと、彼は老儒の學にも造詣のある、一かどの才子だつたらしい。

破提宇子の流布本は、華頂山文庫の藏本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鵜飼徹定の序文と共に、

出版したものである。が、その外にも異本がない譯ではない。現に予が所藏の古寫本の如きは、流布本と內容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の、第三段は、惡魔の起源を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の藏本では內容が遙に多い。巴毗弇自身の目擊した惡魔の記事が、あの辛辣な辯難攻擊の間に態々引證されてあるからである。この記事が流布本に載せられてゐない理由は、恐らくその餘りに荒唐無稽に類する所から、かう云ふ破邪顯正を標榜する書物の性質上、故意の脫漏を利としたからでもあらうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴毗弇の前に姿を現した、日本の Diabolus を一瞥しようと思ふ。猶巴毗弇に關して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴毗弇に關する論文を一讀するが好い。

二

提宇子のいはく、DSは「すひりつあるすすたんしや」とて、無色無形の實體にて、間に髮を入れず、

天地いつくにも充滿して在ませども、別して威光を顯し善人に樂を與へ玉はん爲に「はらいそ」とて極樂世界を諸天の上に作り玉ふ。その始人間よりも前に、安助(天使)とて無量無數の天人を造り、いまだ尊體を顯し玉はず。上一人の位を望むべからずとの天戒を定め玉ひ、この天戒を守らばその功德に依つて、Ds の尊體を拜し、不退の樂を極むべし。若し又破戒せば「いんへるの」とて、衆苦充滿の地獄に墮し、毒寒毒熱の苦難を與ふべしとの義なりしに、造られ奉つて未だ一刻をも經ざるに、卽ち無量の安助の中に「るしへる」と云へる安助、己が善に誇つて我は是 Ds なり、我を拜せよと勸めしに、かの無量の安助の中、三分が一は「るしへる」に同意し、多分は與せず。茲に於て Ds「るしへる」を初とし、彼に與せし三分の一の安助をば下界へ追ひ下し、「いんへるの」に墮せしめ給ふ。卽安助高慢の科に依つて、「ぢやぼ」とて天狗と成りたるものなり。

破していはく、汝提宇子、この段を說く事、ひとへに自縄自縛なり。先 Ds はいつくにも充ち滿ちて在ますと云ふは、眞如法性本分の天地に充塞し、六合に遍滿したる理を、聞きはつり云ふかと覺えたり。似たる事は似たれども、是なる事は未だ是ならずとは、如此の事をや云ふ可き。さて汝云はずや。Ds は「さひえんちいしも」とて、三世了達の智なりとは。然らば彼安助を造ら

ば、即時に科に落つ可きと云ふ事を知らずんばあるべからず。知らずんば、三世了達の智と云へば虚談なり　又知りながら造りたらば、慳貪の第一なり。萬事に叶ふDSならば、安助の科に墮せざるやうには、何とて造らざるぞ。科に落つるを儘に任せ置たるは、頗る天魔を造りたるものなり。無用の天狗を造り、邪魔を爲さするは、何と云ふ事ぞ。されど「ぢやぼ」と云ふ天狗、もとよりこの世になしと云ふべからず。唯、DS安助を造り、安助惡魔と成りし理、聞えずと辯ずるのみ。

よし又、「ぢやぼ」の成り立は、さる事なりとするも、汝がこれを以て極惡兇猛の鬼物となす條、甚以て不審なり。その故は、われ、昔、南蠻寺に住せし時、惡魔「るしへる」を目のあたりに見し事ありしが、彼自らその然らざる理を述べ、人間の「ぢやぼ」を知らざる事、夥しきを歎きしを如何。云ふこと勿れ、巴毗弇、天魔の愚弄する所となり、妄に胡亂の言をなすと。天主と云ふ名に嚇されて、正法の明なるを悟らざる汝提宇子こそ、愚痴のたゞ中よ。わが眼より見れば、尊げに「さんた・まりあ」などと念じ玉ふ、伴天連の數は多けれど、惡魔「るしへる」程の議論者は、一人もあるまじく存ずるなり。今、事の序なれば、わが「ぢやぼ」に會ひし次第、南蠻の語にては「あ

ぼくりは」とも云ふべきを、あらあら下に記し置かん。

年月の程は、さる可き用もなければ云はず。とある年の秋の夕暮、われ獨り南蠻寺の境内なる花木の茂みを歩みつゝ、同じく切支丹宗門の門徒にして、さるやんごとなきあたりの夫人が、涙ながらの懺悔を思ひめぐらし居たる事あり。先つごろ、その夫人のわれに申されけるは、「この程、怪しき事あり。日夜何ものとも知れず、わが耳に囁きて、如何ぞさばかりむくつけき夫のみ守れる。世には情ある男も少からぬものをと云ふ。しかもその聲を聞く毎に、神魂忽ち恍惚として、戀慕の情自ら止め難し。さればとて又、誰と契らんと願ふにもあらず、唯、わが身の年若く、美しき事のみなげかれ、徒らなる思に身を焦すなり」と。われ、その時、宗門の戒法を說き、且嚴に警めけるは、「その聲こそ、一定惡魔の所爲とは覺えたれ。總じてこの「ぢやぼ」には、七つの恐しき罪に人間を誘ふ力あり、一に驕慢、二に憤怒、三に嫉妬、四に貪望、五に色慾、六に饕餮、七に懈怠、一つとして墮獄の惡趣たらざるものなし。されば DS が大慈大悲の泉源たるとうらうへにて、「ぢやぼ」は一切諸惡の根本なれば、苟くも天主の御教を奉ずるものは、かりそめにもその爪牙に近づくべからず。唯、專念に祈禱を唱へ、DS の御德にすがり奉つて、萬一「いんへ

るの」の業火に燒かるる事を免るべし」と。われ、更に又南蠻の畫にて見たる、惡魔の凄じき形相など、こまごまと談りければ、夫人も今更に「ぢやぼ」の恐しさを思ひ知られ、「さてはその蝙蝠の翼、山羊の蹄、蛇の鱗を備へしものが、目にこそ見えね、わが耳のほとりに蹲りて、淫らなる戀を囁くにや」と、身ぶるひして申されたり。われ、その一部始終を心の中に繰返しつゝ、異國より移し植ゑたる、名も知らぬ草木の薫しき花を分けて、ほの暗き小路を歩み居しが、ふと眼を擧げて、行手を見れば、われを去る事十歩ならざるに、伴天連めきたる人影あり。その人、わが眼を擧ぐるより早く、風の如く來りて、問ひけるは、「汝、われを知るや」と。われ、眼を定めてその人を見れば、面はさながら崑崙奴の如く黑けれど、眉目さまで卑しからず、身には法服の裾長きを着て、首のめぐりには黃金の飾りを垂れたり。われ、遂にその面を見知らざりしかば、否と答へけるに、その人、忽ち嘲笑ふが如き聲にて、「われは惡魔「るしへる」なり」と云ふ。われ、大に驚きて云ひけるは、「如何ぞ、「るしへる」なる事あらん。見れば、容體も人に異らず。蝙蝠の翼、山羊の蹄、蛇の鱗は如何にしたる」と。その人答ふらく、「惡魔はもとより、人間と異るものにあらず。われを描いて、醜惡絕類ならしむるものは畫工のさかしらなり。わがともがらは、皆われの

如く、翼なく、鱗なく、蹄なし。況や何ぞかの古怪なる面貌あらん。」われ、更に云ひけるは、「悪魔にしてたとひ、人間と異るものにあらずとするも、そは唯、皮相の見に止るのみ。汝が心には、恐しき七つの罪、蝎の如くに蟠らん、」と。「るしへる」再、嘲笑ふ如き聲にて云ふやう、「七つの罪は人間の心にも、蝎の如くに蟠れり。そは汝自ら知る所か」と。われ罵るらく、「悪魔よ、退け、わが心はDSが諸善萬徳を映すの鏡なり。汝の影を止むべき所にあらず、」と。悪魔呵々大笑していはく、「愚なり、巴毗弇。汝がわれを唾罵する心は、これ即驕慢にして、七つの罪の第一よ。悪魔と人間と異らぬは、汝の實證を見て知るべし。若し悪魔にして、汝ら沙門の思ふが如く、極悪兇猛の鬼物ならんか、われら天が下を二つに分つて、汝がDSと共に治めんのみ。それ光あれば、必暗あり。DSの晝と悪魔の夜と交々この世を統べん事、あるべからずとは云ひ難し。されどわれら悪魔の族はその性悪なれど、善を忘れず。右の眼は「いんへるの」の無間の暗を見るとも云へど、左の眼は今も猶、「はらいそ」の光を麗しと、常に天上を眺むるなり。さればこそ悪に於て全からず。屡DSが天人の爲に苦しめらる。汝知らずや、さきの日汝が懺悔を聞きたる夫人も、「るしへる」自らその耳に、邪淫の言を囁きしを。唯、わが心弱くして、飽くまで夫人を

誘ふ事能はず。唯、黄昏と共に身邊を去來して、そが珊瑚の念珠と、象牙に似たる手頸とを、えもならず美しき幻の如く眺めしのみ。もしわれにして、汝ら沙門の恐るゝ如き、兇險無道の惡魔ならんか、夫人は必汝の前に懺悔の涙をそゝがんより、速に不義の快樂に耽つて、墮獄の業因を成就せん」と。われ、「るしへる」の辯舌、爽なるに驚きて、はかばかしく答もなさず、茫然として唯、その黒檀の如く、つやゝかなる面を目成り居しに、彼、忽わが肩を抱いて、悲しげに囁きけるは、「わが常に「いんへるの」に墮さんと思ふ魂は、同じく又、わが常に「いんへるの」に墮すまじと思ふ魂なり。汝、われら惡魔がこの悲しき運命を知るや否や。わがかの夫人を邪淫の穽に捕へんとして、しかも遂に捕へ得ざりしを見よ。われ夫人の氣高く淸らかなるを愛づれば、愈夫人を汚さまく思ひ、反つて又、夫人を汚さまく思へば、愈氣高く淸らかなるを愛でんとす。これ、汝らが屢七つの恐しき罪を犯さんとするが如く、われら亦、常に七つの恐しき德を行はんとすればなり。ああ、われら惡魔を誘うて、絶えず善に赴かしめんとするものは、抑又汝らがDSか。或はDS以上の靈か」と。惡魔「るしへる」は、かくわが耳に囁きて、薄暮の空をふり仰ぐよと見えしが、その姿忽ち霧の如くうすくなりて、淡薄たる秋花の木の間に、消ゆるともなく

消え去り了んぬ。われ、即ち匆惶として伴天連の許に走り、「るしへる」が言を以てこれに語りたれど、無智の伴天連、反つてわれを信ぜず。宗門の内證に背くものとして、呵責を加ふる事數日なり。されどわれ、わが眼にて見、わが耳にて聞きたるこの惡魔「るしへる」を如何にかして疑ふ可き。惡魔亦性善なり。斷じて一切諸惡の根本にあらず。

ああ、汝、提宇子、既に惡魔の何たるを知らず。況や又、天地作者の方寸をや。蔓頭の葛藤、截斷し去る。咄。

（大正七年八月）

枯野抄

丈艸、去來を召し、昨夜目のあはざるまま、ふと案じ入りて、呑舟に書かせたり、おのおの咏じたまへ

旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

——花屋日記——

元祿七年十月十二日の午後である。一しきり赤々と朝焼けた空は、又昨日のやうに時雨れるかと、大阪商人の寢起の眼を、遠い瓦屋根の向うに誘つたが、幸葉をふるつた柳の梢を、煙らせる程の雨もなく、やがて曇りながらもうす明い、もの靜な冬の晝になつた。立ちならんだ町家の間を、流れるともなく流れる川の水さへ、今日はぼんやりと光澤を消して、その水に浮く葱の屑も、氣のせゐか靑い色が冷たくない。まして岸を行く往來の人々は、丸頭巾をかぶつたのも、革足袋をはいたのも、皆凩の吹く世の中を忘れたやうに、うつそりとして歩いて行く。暖簾の色、

車の行きかひ、人形芝居の遠い三味線の音――すべてがうす明い、もの靜な冬の晝を、橋の擬寶珠に置く町の埃も、動かさない位、ひつそりと守つてゐる……

この時、御堂前南久太郎町、花屋仁左衞門の裏座敷では、當時俳諧の大宗匠と仰がれた芭蕉庵松尾桃青が、四方から集つて來た門下の人々に介抱されながら、五十一歳を一期として、「埋火のあたたまりの冷むるが如く、」靜に息を引きとらうとしてゐた。時刻は凡そ、申の中刻にも近からうか。――隔ての襖をとり拂つた、だだつ廣い座敷の中には、枕頭に炷きさした香の煙が、一すぢ昇つて、天下の冬を庭さきに堰いた、新しい障子の色も、ここばかりは暗くかげりながら、身にしみるやうに冷々する。その障子の方を枕にして、寂然と横はつた芭蕉のまはりには、先、醫者の木節が、夜具の下から手を入れて、間遠い脈を守りながら、浮かない眉をひそめてゐた。その後に居すくまつて、さつきから小聲の稱名を絶たないのは、今度伊賀から伴に立つて來た、老僕の治郎兵衞に違ひない。と思ふと又、木節の隣には、誰の眼にもそれと知れる、大兵肥滿の晉子其角が、紬の角通しの懷を鷹揚にふくらませて、憲法小紋の肩をそば立てた、ものごしの凜々しい去來と一しよに、ぢつと師匠の容態を窺つてゐる。それから其角の後には、法師じみた丈艸が、

手くびに菩提樹の珠數をかけて、端然と控へてゐたが、隣に座を占めた乙州の、絶えず鼻を啜つてゐるのは、もうこみ上げて來る悲しさに、堪へられなくなつたからであらう。その容子をぢろぢろ眺めながら、古法衣の袖をかきつくろつて、無愛想な頤をそらせてゐる、背の低い僧形は惟然坊で、これは色の淺黑い、剛愎さうな支考と肩をならべて、木節の向うに坐つてゐた。あとは唯、何人かの弟子たちが皆息もしないやうに靜まり返つて、或は右、或は左と、師匠の床を圍みながら、限りない死別の名ごりを惜しんでゐる。が、その中でもたつた一人、座敷の隅に蹲つて、ぴつたり疊にひれ伏した儘、慟哭の聲を洩してゐたのは、正秀ではないかと思はれる。しかしこれさへ、座敷の中のうすら寒い沈默に抑へられて、枕頭の香のかすかな匂を、擾す程の聲も立てない。

芭蕉はさつき、痰喘にかすれた聲で、覺束ない遺言をした後は、半ば眼を見開いた儘、昏睡の狀態にはいつたらしい。うす痘痕のある顏は、顴骨ばかり露に瘦せ細つて、皺に圍まれた脣にも、とうに血の氣はなくなつてしまつた。殊に傷しいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向うにある、際限ない寒空でも望むやうに、徒に遠い所を見やつてゐる。

「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」――事によるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辭世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のやうに漂つてでもゐたのかも知れない。

「水を。」

木節はやがてかう云つて、靜に後にゐる治郎兵衛を顧みた。一椀の水と一本の羽根楊子とは、既にこの老僕が、用意して置いた所である。彼はその二品をおづおづ主人の枕元へ押し並べると、思ひ出したやうに又、口を早めて、專念に稱名を唱へ始めた。治郎兵衛の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、誰にもせよ、ひとしく彼岸に往生するのなら、ひとしく又、彌陀の慈悲にすがるべき筈だと云ふ、堅い信念が根を張つてゐたからであらう。

一方又木節は、「水を」と云つた刹那の間、果して自分は醫師として、萬方を盡したらうかと云ふ、何時もの疑惑に遭遇したが、すぐに又自ら勵ますやうな心もちになつて、隣にゐた其角の方をふりむきながら、無言の儘、ちよいと相圖をした。芭蕉の床を圍んでゐた一同の心に、愈と云ふ緊張した感じが咄嗟に閃いたのはこの時である。が、その緊張した感じと前後して、一種の弛

緩した感じが――云はば、來る可きものが遂に來たと云ふ、安心に似た心もちが、通りすぎた事も亦爭はれない。唯、この安心に似た心もちは、誰もその意識の存在を肯定しようとはしなかつた程、微妙な性質のものであつたからか、現にここにゐる一同の中では、最も現實的な其角でさへ、折から顏を見合せた木節と、際どく相手の眼の中に、同じ心もちを讀み合つた時は、流石にぎよつとせずにはゐられなかつたのであらう。彼は慌しく視線を側へ外らせると、さり氣なく羽根楊子をとりあげて、

「では、御先へ」と、隣の去來に挨拶した。さうしてその羽根楊子へ湯呑の水をひたしながら、厚い膝をにじらせて、そつと今はの師匠の顏をのぞきこんだ。實を云ふと彼は、かうなるまでに、師匠と今生の別をつげると云ふ事は、さぞ悲しいものであらう位な、豫測めいた考もなかつた譯ではない。が、かうして愈〻末期の水をとつて見ると、自分の實際の心もちは全然その芝居めいた豫測を裏切つて、如何にも冷淡に澄みわたつてゐる。のみならず、更に其角が意外だつた事には、文字通り骨と皮ばかりに痩せ衰へた、致死期の師匠の不氣味な姿は、殆面を背けずにはゐられなかつた程、烈しい嫌惡の情を彼に起させた。いや、單に烈しいと云つたのでは、まだ十分な

表現ではない。それは恰も目に見えない毒物のやうに、生理的な作用さへも及ぼして來る、最も堪へ難い種類の嫌惡であつた。彼はこの時、偶然な契機によつて、醜き一切に對する反感を師匠の病軀の上に洩らしたのであらうか。或は又「生」の享樂家たる彼にとつて、そこに象徴された「死」の事實が、この上もなく呪ふ可き自然の威嚇だつたのであらうか。――兎に角、垂死の芭蕉の顏に、云ひやうのない不快を感じた其角は、殆何の悲しみもなく、その紫がかつたうすい脣に、一刷毛の水を塗るや否や、顏をしかめて引き下つた。尤もその引き下る時に、自責に似た一種の心もちが、刹那に彼の心をかすめもしたが、彼のさきに感じてゐた嫌惡の情は、さう云ふ道徳感に顧慮すべく、餘り强烈だつたものらしい。

其角に次いで羽根楊子をとり上げたのは、さつき木節が相圖をした時から、既に心の落着きを失つてゐたらしい去來である。日頃から恭謙の名を得てゐた彼は、一同に輕く會釋をして、芭蕉の枕もとへすりよつたが、そこに横はつてゐる老俳諧師の病みほうけた顏を眺めると、或滿足と悔恨との不思議に錯雜した心もちを、嫌でも味はなければならなかつた。しかもその滿足と悔恨とは、まるで陰と日向のやうに、離れられない因緣を背負つて、實はこの四五日以前から、絶え

ず小心な彼の氣分を搔亂してゐたのである。と云ふのは、師匠の重病だと云ふ知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乘つて、深夜にもかまはず、この花屋の門を叩いて以來、彼は師匠の看病を一日も怠つたと云ふ事はない。その上之道に賴みこんで手傳ひの周旋を引き受けさせるやら、住吉大明神へ人を立てて病氣本復を祈らせるやら、或は又花屋仁左衞門に相談して調度類の買入れをして貰ふやら、殆彼一人が車輪になつて、萬事萬端の世話を燒いた。それは勿論去來自身進んで事に當つたので、誰に恩を着せようと云ふ氣も、皆無だつた事は事實である。が、一身を擧げて師匠の介抱に沒頭したと云ふ自覺は、勢、彼の心の底に大きな滿足の種を蒔いた。それが唯、意識せられざる滿足として、彼の活動の背景に暖い心もちをひろげてゐた中は、元より彼も行住坐臥に、何等のこだはりを感じなかつたらしい。さもなければ夜伽の行燈の光の下で、支考と浮世話に耽つてゐる際にも、故に孝道の義を釋いて、自分が師匠に仕へるのは親に仕へる心算だなどと、長々しい述懷はしなかつたであらう。しかしその時、得意な彼は、人の惡い支考の顏に、ちらりと閃いた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂ひの出來た事を意識した。さうしてその狂ひの原因は、始めて氣のついた自分の滿足と、その滿足に對する自己批評とに存して

ゐる事を發見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配する事か、徒に自分の骨折ぶりを滿足の眼で眺めてゐる。――これは確に、彼の如き正直者の身にとつて、自ら疚しい心もちだつたのに違ひない。それ以來去來は何をするのにも、この滿足と悔恨との扞挌から、自然と或程度の掣肘を感じ出した。將に支考の眼の中に、偶然でも微笑の顏が見える時は、反つてその滿足の自覺なるものが、一層明白に意識されて、その結果愈自分の卑しさを情なく思つた事も度々ある。それが何日か續いた今日、かうして師匠の枕もとで、末期の水を供する段になると、道德的に潔癖な、しかも存外神經の纖弱な彼が、かう云ふ内心の矛盾の前に、全然落着きを失つたのは、氣の毒ではあるが無理もない。だから去來は羽根楊子をとり上げると、妙に體中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の脣を撫でながら、頻にふるへてゐた位、異常な興奮に襲はれた。が、幸、それと共に、彼の睫毛に溢れようとしてゐた、涙の珠もあつたので、彼を見てゐた門弟たちは、恐くあの辛辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釋してゐた事であらう。

やがて去來が又憲法小紋の肩をそば立てて、おづおづ席に復すると、羽根楊子はその後にゐた

丈艸の手へわたされた。日頃から老實な彼が、つゝましく伏眼になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら、靜に師匠の脣を沾してゐる姿は、恐らく誰の見た眼にも嚴だつたのに相違ない。が、この嚴な瞬間に突然座敷の片すみからは、不氣味な笑ひ聲が聞え出した。いや、少くともその時は、聞え出したと思はれたのである。それはまるで腹の底からこみ上げて來る哄笑が、喉と脣とに堰かれながら、しかも猶可笑しさに堪へ兼ねて、ちぎれちぎれに鼻の孔から、迸つて來るやうな聲であつた。が、云ふまでもなく、誰もこの場合、笑を失したものがあつた譯ではない。聲は實にさつきから、涙にくれてゐた正秀の抑へに抑へてゐた慟哭が、この時胸を裂いて溢れたのである。その慟哭は勿論、悲愴を極めてゐたのに相違なかつた。或はそこにゐた門弟の中には、「塚も動けわが泣く聲は秋の風」と云ふ、師匠の名句を思ひ出したものも、少くはなかつた事であらう。が、その凄絶なる可き慟哭にも、同じく涙に咽ばうとしてゐた乙州は、その中にある一種の誇張に對して、――と云ふのが穩でないならば、慟哭を抑制すべき意志力の缺乏に對して、多少不快を感じずにはゐられなかつた。唯、さう云ふ不快の性質は、どこまでも智的なものに過ぎなかつたのであらう。彼の頭が否と云つてゐるにも關らず、彼の心臟は忽ち正秀の哀慟の聲に動

かされて、何時か眼の中は涙で一ぱいになつた。が、彼が正秀の慟哭を不快に思ひ、延いては彼自身の涙をも潔しとしない事は、さつきと少しも變りはない。しかも涙は益眼に溢れて來る――乙州は遂に兩手を膝の上についた儘、思はず嗚咽の聲を發してしまつた。が、この時歔欷するらしいけはひを洩らしたのは、獨り乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控へてゐた、何人かの弟子の中からは、それと殆同時に洟をすゝる聲が、しめやかに冴えた座敷の空氣をふるはせて、斷續しながら聞え始めた。

その惻々として悲しい聲の中に、菩提樹の念珠を手頸にかけた丈艸は、元の如く靜に席へ返つて、あとには其角や去來と向ひあつてゐる、支考が枕もとへ進みよつた。が、この皮肉屋を以て知られた東花坊には周圍の感情に誘ひこまれて、徒に涙を落すやうな纖弱な神經はなかつたらしい。彼は何時もの通り淺黑い顏に、何時もの通り人を莫迦にしたやうな容子を浮べて、更に又何時もの通り妙に横風に構へながら、無造作に師匠の脣へ水を塗つた。しかし彼と雖もこの場合、勿論多少の感慨があつた事は爭はれない。「野ざらしを心に風のしむ身かな」――師匠は四五日前に、「かねては草を敷き、土を枕にして死ぬ自分と思つたが、かう云ふ美しい蒲團の上で、往生の

素懐を遂げる事が出來るのは、何よりも悦ばしい」と繰返して自分たちに、禮を云はれた事がある。が、實は枯野のただ中も、この花屋の裏座敷も、大した相違がある譯ではない。現にかうして口をしめしてゐる自分にしても、三四日前までは、師匠に辭世の句がないのを氣にかけてゐた。それから昨日は、師匠の發句を滅後に一集する計畫を立ててゐた。最後に今日は、たつた今まで、刻々臨終に近づいて行く師匠を、どこかその經過に興味でもあるやうな、觀察的な眼で眺めてゐた。もう一歩進めて皮肉に考へれば、事によるとその眺め方の背後には、他日自分の筆によつて書かるべき終焉記の一節さへ、豫想されてゐなかつたとは云へない。して見れば師匠の命終に侍しながら、自分の頭を支配してゐるものは、他門への名聞、門弟たちの利害、或は又自分一身の興味打算――皆直接垂死の師匠とは、關係のない事ばかりである。だから師匠はやはり發句の中で、屢〻豫想を逞くした通り、限りない人生の枯野の中で、野ざらしになつたと云つて差支へない。自分たち門弟は皆師匠の最後を悼まずに、師匠を失つた自分たち自身を悼んでゐる。枯野に窮死した先達を歎かずに、薄暮に先達を失つた自分たち自身を歎いてゐる。が、それを道德的に非難して見た所で、本來薄情に出來上つた自分たち人間をどうしよう。――かう云ふ厭世的な感

慨に沈みながら、しかもそれに沈み得る事を得意にしてゐた支考は、師匠の脣をしめし終つて、羽根楊子を元の湯呑へ返すと、涙に咽んでゐる門弟たちを、嘲るやうにじろりと見廻して、徐に又自分の席へ立ち戻つた。人の好い去來の如きは、始からその冷然とした態度に中てられて、さつきの不安を今更のやうに又新にしたが、獨り其角が妙に擽つたい顏をしてゐたのは、どこまでも白眼で押し通さうとする、東花坊のこの性行上の習氣を、小うるさく感じてゐたらしい。

支考に續いて惟然坊が、墨染の法衣の裾をもそりと疊へひきながら、小さく這ひ出した時分には、芭蕉の斷末魔も既にもう、彈指の間に迫つたのであらう。顏の色は前よりも更に血の氣を失つて、水に濡れた脣の間からも、時々忘れたやうに息が洩れなくなる。と思ふと又、思ひ出したやうにぎくりと喉が大きく動いて、力のない空氣が通ひ始める。しかもその喉の奧の方で、かすかに二三度痰が鳴つた。呼吸も次第に靜になるらしい。その時羽根楊子の白い先を、將にその脣へ當てようとしてゐた惟然坊は、急に死別の悲しさとは緣のない、或る恐怖に襲はれ始めた。それは師匠の次に死ぬものは、この自分ではあるまいかと云ふ、殆無理由に近い恐怖である。が、無理由であればあるだけに、一度この恐怖に襲はれ出すと、我慢にも抵抗のしやうがない。元來

彼は死と云ふと、病的に驚悸する種類の人間で、昔からよく自分の死ぬ事を考へると、風流の行脚をしてゐる時でも、總身に汗の流れるやうな不氣味な恐しさを經驗した。從つて又、自分以外の人間が、死んだと云ふ事を耳にすると、まあ自分が死ぬのではなくつてよかつたと、安心したやうな心もちになる。と同時に又、もし自分が死ぬのだつたらどうだらうと、反對の不安をも感じる事がある。これはやはり芭蕉の場合も、例外には洩れないで、始まだ彼の臨終がこれ程切迫してゐない中は、――障子に冬晴の日がさして、園女の贈つた水仙が、淸らかな匂を流すやうになると、一同師匠の枕もとに集つて、病間を慰める句作などをした時分は、さう云ふ明暗二通りの心もちの間を、その時次第で徘徊してゐた。が、次第にその終焉が近づいて來ると――忘れもしない初時雨の日に、自ら好んだ梨の實さへ、師匠の食べられない容子を見て、心配さうに木節が首を傾けた、あの頃から安心は追々不安にまきこまれて、最後にはその不安さへ、今度死ぬのは自分かも知れないと云ふ險惡な恐怖の影を、うすら寒く心の上にひろげるやうになつたのである。だから彼は枕もとへ坐つて、刻銘に師匠の脣をしめしてゐる間中、この恐怖に祟られて、殆末期の芭蕉の顏を正視する事が出來なかつたらしい。いや、一度は正視したかとも思はれるが、丁度

その時芭蕉の喉の中では、痰のつまる音がかすかに聞えたので、折角の彼の勇氣も、途中で挫折してしまつたのであらう。「師匠の次に死ぬものは、事によると自分かも知れない」――絶えずかう云ふ豫感めいた聲を、耳の底に聞いてゐた惟然坊は、小さな體をすくませながら、自分の席へ返つた後も、無愛想な顏を一層無愛想にして、なる可く誰の顏も見ないやうに、上眼ばかり使つてゐた。

續いて乙州、正秀、之道、木節と、病床を圍んでゐた門人たちは、順々に師匠の脣を沾した。が、その間に芭蕉の呼吸は、一息毎に細くなつて、數さへ次第に減じて行く。喉も、もう今では動かない。うす痘痕の浮んでゐる、どこか蠟のやうな小さい顏、遙な空間を見据ゑてゐる、光の褪せた瞳の色、さうして頤にのびてゐる、銀のやうな白い鬚――それが皆人情の冷さに凍てついて、やがて赴くべき寂光土を、ぢつと夢みてゐるやうに思はれる。するとこの時、去來の後の席に、默然と頭を垂れてゐた丈艸は、あの老實な禪客の丈艸は、芭蕉の呼吸のかすかになるのに從つて、限りない悲しみと、さうして又限りない安らかな心もちとが、徐に心の中へ流れこんで來るのを感じ出した。悲しみは元より說明を費すまでもない。が、その安らかな心もちは、恰も明

方の寒い光が次第に暗の中にひろがるやうな、不思議に朗な心もちである。しかもそれは刻々に、あらゆる雜念を溺らし去つて、果ては涙そのものさへも、毫も心を刺す痛みのない、淸らかな悲しみに化してしまふ。彼は師匠の魂が虛夢の生死を超越して、常住涅槃の寳土に還つたのを喜んでもゐるのであらうか。いや、これは彼自身にも、肯定の出來ない理由であつた。それならば――ああ、誰か徒に踏跙逡巡して、己を欺くの愚を敢てしよう。丈艸のこの安らかな心もちは、久しく芭蕉の人格的壓力の桎梏に、空しく屈してゐた彼の自由な精神が、その本來の力を以て、漸く手足を伸ばさうとする、解放の喜びだつたのである。彼はこの恍惚たる悲しい喜びの中に、菩提樹の念珠をつまぐりながら、周圍にすすりなく門弟たちも、眼底を拂つて去つた如く、唇頭にかすかな笑を浮べて、恭しく臨終の芭蕉に禮拜した。――

かうして、古今に倫を絶した俳諧の大宗匠、芭蕉庵松尾桃靑は、「悲歎かぎりなき」門弟たちに圍まれた儘、溘然として屬纊に就いたのである。

（大正七年九月）

犬と笛

いく子さんに獻ず

一

昔、大和の國葛城山の麓に、髮長彦といふ若い木樵が住んでゐました。これは顔かたちが女のやうにやさしくつて、その上髮までも女のやうに長かつたものですから、かういふ名前をつけられてゐたのです。

髮長彦は、大そう笛が上手でしたから、山へ木を伐りに行く時でも、仕事の合ひ間合ひ間には、腰にさしてゐる笛を出して、獨りでその音を樂しんでゐました。すると又不思議なことには、どんな鳥獸や草木でも、笛の面白さはわかるのでせう。髮長彦がそれを吹き出すと、草はなびき、木はそよぎ、鳥や獸はまはりへ來て、ぢつとしまひまで聞いてゐました。

所が或る日のこと、髮長彦はいつもの通り、とある大木の根がたに腰を卸しながら、餘念もなく笛を吹いてゐますと、忽ち自分の目の前へ、青い勾玉を澤山ぶら下げた、足の一本しかない大

男が現れて、

「お前は中々笛がうまいな。己はずつと昔から山奥の洞穴で、神代の夢ばかり見てゐたが、お前が木を伐りに來始めてからは、その笛の音に誘はれて、毎日面白い思をしてゐた。そこで今日はそのお禮に、こゝまでわざわざ來たのだから、何でもお前の好きなものを望むが好い。」と言ひました。

そこで木樵は、暫く考へてゐましたが、

「私は犬が好きですから、どうか犬を一匹下さい。」と答へました。

すると、大男は笑ひながら、

「高が犬を一匹くれなどとは、お前も餘つ程欲のない男だ。しかしその欲のないのも感心だから、外には又とないやうな不思議な犬をくれてやらう。かう言ふ己は、葛城山の足一つの神だ。」と言つて、一聲高く口笛を鳴らしますと、森の奥から一匹の白犬が、落葉を蹴立てて駈けて來ました。

足一つの神はその犬を指さして、

「これは名を嗅げと言つて、どんな遠い所の事でも嗅ぎ出して來る利口な犬だ。では、一生己の

代りに、大事に飼つてやつてくれ。」と言ふかと思ふと、その姿は霧のやうに消えて、見えなくなつてしまひました。

髪長彦は大喜びで、この白犬と一しよに里へ歸つて來ましたが、あくる日又、山へ行つて、何氣なく笛を鳴らしてゐると、今度は黑い勾玉を首へかけた、手の一本しかない大男が、どこからか形を現して、

「きのふ己の兄きの足一つの神が、お前に犬をやつたさうだから、己も今日は禮をしようと思つてやつて來た。何か欲しいものがあるのなら、遠慮なく言ふが好い。己は葛城山の手一つの神だ。」と言ひました。

さうして髪長彦が、又「嗅げにも負けないやうな犬が欲しい。」と答へますと、大男はすぐに口笛を吹いて、一匹の黑犬を呼び出しながら、

「この犬の名は飛べと言つて、誰でも背中へ乘つてさへすれば百里でも千里でも、空を飛んで行くことが出來る。明日は又己の弟が、何かお前に禮をするだらう。」と言つて、前のやうにどこかへ消え失せてしまひました。

するとある日は、まだ、笛を吹くか吹かないのに、赤い勾玉を飾りにした、目の一つしかない大男が、風のやうに空から舞ひ下つて、

「己は葛城山の目一つの神だ。兄きたちがお前に禮をしたさうだから、己も嗅げや飛べに劣らないやうな、立派な犬をくれてやらう。」と言つたと思ふと、もう口笛の聲が森中にひびき渡つて、一匹の斑犬が牙をむき出しながら、駈けて來ました。

「これは嚙めといふ犬だ。この犬を相手にしたが最後、どんな恐しい鬼神でも、きつと一嚙みに嚙み殺されてしまふ。唯、己たちのやつた犬は、どんな遠いところにゐても、お前が笛を吹きさへすれば、きつとそこへ歸つて來るが、笛がなければ來ないから、それを忘れずにゐるが好い。」

さう言ひながら目一つの神は、又森の木の葉をふるはせて、風のやうに空へ舞ひ上つてしまひました。

二

それから四五日たつた或日のことです。髮長彦は三匹の犬をつれて、葛城山の麓にある、路が

めた、二人の年若な侍が、逞しい馬に跨つて、しづしづこつちへやつて來ました。

三叉になつた往來へ、笛を吹きながら來かかりますと、右と左と兩方の路から、弓矢に身をかためた、二人の年若な侍が、逞しい馬に跨つて、しづしづこつちへやつて來ました。

髮長彦はそれを見ると、吹いてゐた笛を腰へさして、叮嚀におじぎをしながら、

「もし、もし、殿様、あなた方は一體、どちらへいらつしやるのでございます。」と尋ねました。

すると二人の侍が、交る交る答へますには、

「今度飛鳥の大臣様の御姫様が御二方、どうやら鬼神のたぐひにでもさらはれたと見えて、一晩の中に御行方が知れなくなつた。」

「大臣様は大さうな御心配で、誰でも御姫様を探し出して來たものには、厚い御褒美を下さると云ふ仰せだから、それで我々二人も、御行方を尋ねて歩いてゐるのだ。」

かう云つて二人の侍は、女のやうな木樵と三匹の犬とをさも莫迦にしたやうに見下しながら、途を急いで行つてしまひました。

髮長彦は好い事を聞いたと思ひましたから、早速白犬の頭を撫でて、

「嗅げ。嗅げ。御姫様たちの御行方を嗅ぎ出せ。」と云ひました。

すると白犬は、折から吹いて來た風に向つて、頻に鼻をひこつかせてゐましたが、忽ち身ぶるひを一つするが早いか、

「わん、わん、御姉様の御姫様は、生駒山の洞穴に住んでゐる食蜃人の虜になつてゐます。」と答へました。食蜃人と云ふのは、昔八岐の大蛇を飼つてゐた、途方もない大男の悪者なのです。

そこで木樵はすぐに白犬と斑犬とを、兩方の側にかかへた儘、黒犬の背中に跨つて、大きな聲でかう云ひつけました。

「飛べ。飛べ。生駒山の洞穴に住んでゐる食蜃人の所へ飛んで行け。」

その言がまだ終らない中です。恐しいつむじ風が、髪長彦の足の下から吹き起つたと思ひますと、まるで一ひらの木の葉のやうに、見る見る黒犬は空へ舞ひ上つて、青雲の向うにかくれてゐる、遠い生駒山の峯の方へ、眞一文字に飛び始めました。

三

やがて髪長彦が生駒山へ來て見ますと、成程山の中程に大きな洞穴が一つあつて、その中に金

の櫛をさした、綺麗な御姫様が一人、しくしく泣いていらつしやいました。

「御姫様、御姫様、私が御迎へにまゐりましたから、もう御心配には及びません。さあ、早く、御父様の所へ御歸りになる御仕度をなすつて下さいまし。」

から髪長彦が云ひますと、三匹の犬も御姫様の裾や袖を啣へながら、

「さあ早く、御仕度をなすつて下さいまし。わん、わん、わん、」と吠えました。

しかし御姫様は、まだ御眼に涙をためながら、洞穴の奥の方をそつと指さして御見せになつて、

「それでもあすこには、私をさらつて來た食蜃人が、さつきから御酒に醉つて寐てゐます。あれが目をさましたら、すぐに追ひかけて來るでせう。さうすると、あなたも私も、命をとられてしまふのにちがひありません。」と仰有いました。

髪長彦はにつこりとほゝ笑んで、

「高の知れた食蜃人なぞを、何でこの私が怖がりませう。その證據には、今ここで、訣なく私が退治して御覽に入れます。」と云ひながら、斑犬の背中を一つたたいて、

「噛め、噛め。この洞穴の奥にゐる食蜃人を一噛みに噛み殺せ。」と、勇ましい聲で云ひつけまし

た。

すると斑犬はすぐ牙をむき出して、雷のやうに唸りながら、まつしぐらに洞穴の中へとびこみましたが、忽ちの中に又血だらけな食蜃人の首を啣へた儘、尾をふつて外へ出て來ました。

所が不思議な事には、それと同時に、雲で埋まつてゐる谷底から、一陣の風がまき起りますと、その風の中に何かゐて、

「髪長彦さん。難有う。この御恩は忘れません。私は食蜃人にいぢめられてゐた、生駒山の駒姫です。」と、やさしい聲で云ひました。

しかし御姫様は、命拾ひをなすつた嬉しさに、この聲も聞えないやうな御容子でしたが、やがて髪長彦の方を向いて、心配さうに仰有いますには、

「私はあなたのおかげで命拾ひをしましたが、妹は今時分どこでどんな目に逢つて居りませう。」

髪長彦はこれを聞くと、又白犬の頭を撫でながら、

「嗅げ。嗅げ。御姫様の御行方を嗅ぎ出せ。」と云ひました。と、すぐに白犬は、

「わん、わん、御妹御の御姫様は笠置山の洞穴に棲んでゐる土蜘蛛の虜になつてゐます。」と、主

人の顔を見上げながら、鼻をびくつかせて答へました。この土蜘蛛と云ふのは昔、神武天皇様が御征伐になつた事のある、一寸法師の悪者なのです。

そこで髪長彦は、前のやうに二匹の犬を小脇にかかへて御姫様と一しよに黒犬の背中へ跨りながら、

「飛べ。飛べ。笠置山の洞穴に住んでゐる土蜘蛛の所へ飛んで行け。」と云ひますと、黒犬は忽ち空へ飛び上つて、これも青雲のたなびく中に聳えてゐる笠置山へ矢よりも早く駈け始めました。

四

さて笠置山へ着きますと、ここにゐる土蜘蛛は至つて悪知慧のあるやつでしたから、髪長彦の姿を見るが早いか、わざとにこにこ笑ひながら、洞穴の前まで迎へに出て、

「これは、これは、髪長彦さん。遠方御苦労でございました。まあ、こつちへおはいりなさい。碌なものはありませんが、せめて鹿の生膽か熊の孕子でも御馳走しませう。」と云ひました。

しかし髪長彦は首をふつて、

「いや、いや、己はお前がさらつて來た御姫様をとり返しにやつて來たのだ。早く御姫様を返せばよし、さもなければあの食蜃人同様、殺してしまふからさう思へ。」と、恐しい勢で叱りつけました。

すると土蜘蛛は、一ちぢみにちぢみ上つて、

「ああ、御返し申しますとも、何であなたの仰有る事に、いやだなどと申しませう。御姫様はこの奥にちやんと、獨りでいらつしやいます。どうか御遠慮なく中へはいつて、御つれになつて下さいまし。」と、聲をふるはせながら云ひました。

そこで髪長彦は、御姉様の御姫様と三匹の犬とをつれて、洞穴の中へはいりますと、成程ここにも銀の櫛をさした、可愛らしい御姫様が、悲しさうにしくしく泣いてゐます。

それが人の來た容子に驚いて、急いでこちらを御覽になりましたが、御姉様の御顔を一目見たと思ふと、

「御姉様。」

「妹。」と、二人の御姫様は一度に兩方から駈けよつて、暫くは互に抱き合つた儘、うれし涙にく

れていらつしやいました。髪長彦もこの氣色を見て、貰ひ泣をしてゐましたが、急に三匹の犬が背中の毛を逆立てて、

「わん。わん。土蜘蛛の畜生め。」

「憎いやつだ。わん。わん。わん。」

「わん。わん。わん。覺えてゐろ。わん。わん。わん。」と、氣の違つたやうに吠え出しましたから、ふと氣がついてふり返へると、あの狡猾な土蜘蛛は、何時どうしたのか、大きな岩で、一分の隙もないやうに、外から洞穴の入口をぴつたりふさいでしまひました。おまけにその岩の向うでは、

「ざまを見ろ。髪長彦め。かうして置けば、貴様たちは、一月とたたない中に、ひぼしになつて死んでしまふぞ。何と己様の計略は、恐れ入つたものだらう。」と、手を拍いて土蜘蛛の笑ふ聲がしてゐます。

これにはさすがの髪長彦も、さては一ぱい食はされたかと、一時は口惜しがりましたが、幸ひ思ひ出したのは、腰にさしてゐた笛の事です。この笛を吹きさへすれば、鳥獸は云ふまでもなく、

草木もうつとり聞き惚れるのですから、あの狡猾な土蜘蛛でも、心を動かさないとは限りません。そこで髪長彦は勇氣をとり直して、吠えたける犬をなだめながら、一心不亂に笛を吹き出しました。

するとその音色の面白さには、惡者の土蜘蛛も、追追我を忘れたのでせう。始は洞穴の入口に耳をつけて、ぢつと聞き澄ましてゐましたが、とうとうしまひには夢中になつて、一寸二寸と大岩を、少しづつ側へ開きはじめました。

それが人一人通れる位、大きな口をあいた時です。髪長彦は急に笛をやめて、

「嚙め。嚙め。洞穴の入口に立つてゐる土蜘蛛を嚙み殺せ。」と、斑犬の背中をたたいて、云ひつけました。

この聲に膽をつぶして、一目散に土蜘蛛は、逃げ出さうとしましたが、もうその時は間に合ひません。「嚙め」はまるで電のやうに、洞穴の外へ飛び出して、何の苦もなく土蜘蛛を嚙み殺してしまひました。

所が又不思議な事には、それと同時に谷底から、一陣の風が吹き起つて、

「髪長彦さん。難有う。この御恩は忘れません。私は土蜘蛛にいぢめられてゐた、笠置山の笠姫です。」と、やさしい聲が聞えました。

五

それから髪長彦は、二人の御姫様と三匹の犬とをひきつれて、黒犬の背に跨がりながら、笠置山の頂から、飛鳥の大臣様の御出になる都の方へまつすぐに、空を飛んでまゐりました。その途中で二人の御姫様は、どう御思ひになつたのか、御自分たちの金の櫛と銀の櫛とをぬきとつて、それを髪長彦の長い髪へそつとさして御置きになりました。が、こつちは元よりそんな事には、氣がつく筈がありません。唯、一生懸命に黒犬を急がせながら、美しい大和の國原を足の下に見下して、ずんずん空を飛んで行きました。

その中に髪長彦は、あの始めに通りかかつた、三つ叉の路の空まで、犬を進めて來ましたが、見るとそこにはさつきの二人の侍が、どこからかの歸りと見えて、叉馬を並べながら、都の方へ急いでゐます。これを見ると、髪長彦は、ふと自分の大手柄を、この二人の侍たちにも聞かせた

いと云ふ心もちが起つて來たものですから、

「下りろ。下りろ。あの三つ叉になつてゐる路の上へ下りて行け。」と、かう黑犬に云ひつけました。

こつちは二人の侍です。折角方々探しまはつたのに、御姫樣たちの御行方がどうしても知れないので、しをしを馬を進めてゐると、いきなりその御姫樣たちが、女のやうな木樵と一しよに、逞しい黑犬に跨つて、空から舞ひ下つて來たのですから、その驚きと云つたらありません。

髮長彥は犬の背中を下りると、叮嚀に又おじぎをして、

「殿樣、私はあなた方に御別れ申してから、すぐに生駒山と笠置山とへ飛んで行つて、この通御二方の御姫樣を御助け申してまゐりました。」と云ひました。

しかし二人の侍は、こんな卑しい木樵などに、まんまと鼻をあかされたのですから、羨しいのと、妬ましいのとで、腹が立つて仕方がありません。そこで上邊はさも嬉しさうに、いろいろ髮長彥の手柄を褒め立てながら、とうとう三匹の犬の由來や、腰にさした笛の不思議などをすつかり聞き出してしまひました。さうして髮長彥の油斷をしてゐる中に、先大事な笛をそつと腰から

ぬいてしまふと、二人はいきなり黑犬の背中へとび乘つて、二人の御姬樣と二匹の犬とを、しつかり兩脇に抱へながら、

「飛べ。飛べ。飛鳥の大臣樣のいらつしやる、都の方へ飛んで行け。」と、聲を揃へて喚きました。

髮長彥は驚いて、すぐに二人へとびかかりましたが、もうその時には大風が吹き起つて、侍たちを乘せた黑犬は、きりりと尾を捲いた儘、遙な靑空の上の方へ舞ひ上つて行つてしまひました。

あとには唯、侍たちの飛りすてた二匹の馬が殘つてゐるばかりですから、髮長彥は三つ叉になつた往來のまん中につつぷして、暫くは唯悲しさうにおいおい泣いてをりました。

すると生駒山の峯の方から、さつと風が吹いて來たと思ひますと、その風の中に聲がして、

「髮長彥さん。髮長彥さん。私は生駒山の駒姬です。」と、やさしい囁きが聞えました。

それと同時に又笠置山の方からも、さつと風が渡るや否や、やはりその風の中にも聲があつて、

「髮長彥さん。髮長彥さん。私は笠置山の笠姬です。」と、これもやさしく囁きました。

さうしてその聲が一つになつて、

「これからすぐに私たちは、あの侍たちの後を追つて、笛をとり返して上げますから、少しも御

心配なさいますな。」と云ふか云はない中に、風はびゆうびゆう唸りながら、さつき黑犬の飛んで行つた方へ、狂つて行つてしまひました。

が、少したつとその風は、又この三つ又になつた路の上へ、前のやうにやさしく囁きながら、高い空から下して來ました。

「あの二人の侍たちは、もう御二方の御姫樣と一しよに、飛鳥の大臣樣の前へ出て、いろいろ御褒美を頂いてゐます。さあ、さあ、早くこの笛を吹いて、三匹の犬をここへ御呼びなさい。その間に私たちは、あなたが御出世の旅立を、恥しくないやうにして上げませう。」

かう云ふ聲がしたかと思ふと、あの大事な笛を始め、金の鎧だの、銀の兜だの、孔雀の羽の矢だの、香木の弓だの、立派な大將の裝ひが、まるで雨か霰のやうに、眩しく日に輝きながら、ばらばら眼の前へ降つて來ました。

六

それから暫くたつて、香木の弓に孔雀の羽の矢を背負つた、神樣のやうな髮長彥が、黑犬の背

中に跨りながら、白と斑と二匹の犬を小脇にかかへて、飛鳥の大臣様の御館へ、空から舞ひ下つて來た時には、あの二人の年若な侍たちが、どんなに慌て騒ぎましたらう。

いや、大臣様でさへ、あまりの不思議に御驚きになつて、暫くはまるで夢のやうに、髪長彦の凜々しい姿を、ぼんやり眺めていらつしやいました。が、髪長彦は先兜をぬいで、叮嚀に大臣様に御じぎをしながら、

「私はこの國の葛城山の麓に住んでゐる、髪長彦と申すものでございますが、御二方の御姫様を御助け申したのは私で、そこにをります御侍たちは、食蜃人や土蜘蛛を退治するのに、指一本でも御動かしになりは致しません。」と申し上げました。

これを聞いた侍たちは、何しろ今までは髪長彦の話した事を、さも自分たちの手柄らしく吹聽してゐたのですから、二人とも急に顏色を變へて、相手の言を遮りながら、

「これは又思ひもよらない嘘をつくやつでございます。食蜃人の首を斬つたのも私たちなら、土蜘蛛の計略を見やぶつたのも、私たちに相違ございません。」と、誠しやかに申し上げました。

そこでまん中に立つた大臣様は、どちらの云ふ事がほんとうとも、見きはめが御つきにならな

いので、侍たちと髪長彦を御見比べなさりながら、

「これはお前たちに聞いて見るより外はない。一體お前たちを助けたのは、どつちの男だつたと思ふ。」と、御姫様たちの方を向いて、仰有いました。

すると二人の御姫様は、一度に御父様の胸に御すがりになりながら、

「私たちを助けましたのは、髪長彦でございます。その證據には、あの男のふさふさした長い髪に、私たちの櫛をさして置きましたから、どうかそれを御覧下さいまし。」と、恥しさうに御云ひになりました。見ると成程、髪長彦の頭には、金の櫛と銀の櫛とが、美しくきらきら光つてゐます。

もうかうなつては侍たちも、外に仕方はございませんから、とうとう大臣様の前にひれ伏して、

「實は私たちが惡だくみで、あの髪長彦の助けた御姫様を、私たちの手柄のやうに、ここでは申し上げたのでございます。この通り白状致しました上は、どうか命ばかりは御助け下さいまし。」と、がたがたふるへながら申し上げました。

それから先の事は、別に御話しするまでもありますまい。髪長彦は澤山御褒美を頂いた上に、

飛鳥の大臣様の御婿様になりましたし、二人の若い侍たちは、三匹の犬に追ひまはされて、はふはふ御館の外へ逃げ出してしまひました。唯、どちらの御姫様が、髪長彦の御嫁さんになりましたか、それだけは何分昔の事で、今でははつきりとわかつてをりません。

（大正七年十二月）

邪宗門

一

先頃大殿様御一代中で、一番人目を駭かせた、地獄變の屏風の由來を申し上げましたから、今度は若殿様の御生涯で、たつた一度の不思議な出來事を御話し致さうかと存じて居ります。が、その前に一通り、思ひもよらない急な御病氣で、大殿様が御薨去になつた時の事を、あらまし申し上げて置きませう。

あれは確、若殿様の十九の御年だつたかと存じます。思ひもよらない急な御病氣とは云ふものの、實は彼是その半年ばかり前から、御屋形の空へ星が流れますやら、御庭の紅梅が時ならず一度に花を開きますやら、御廐の白馬が一夜の内に黑くなりますやら、御池の水が見る間に干上つて、鯉や鮒が泥の中で喘ぎますやら、いろいろ凶い兆がございました。中でも殊に空恐ろしく思はれたのは、或女房の夢枕に、良秀の娘の乘つたやうな、炎々と火の燃えしきる車が一輛、人面

の獸に曳かれながら、天から下りて來たと思ひますと、その車の中からやさしい聲がして、「大殿樣をこれへ御迎へ申せ。」と、呼はつたさうでございます。その時、その人面の獸が怪しく唸つて、頭を上げたのを眺めますと、夢現の暗の中にも、脣ばかりが生々しく赤かつたので、思はず金切聲をあげながら、その聲でやつと我に返りましたが、總身はびつしより冷汗で、胸さへまるで早鐘をつくやうに躍つてゐたとか申しました。でございますから、北の方を始め、私どもまで心を痛めて、御屋形の門々に陰陽師の護符も貼りましたし、有驗の法師たちを御召しになつて、種々の御祈禱も御上げになりましたが、これも誠に遁れ難い定業でもございましたらう。

或日——それも雪もよひの、底冷がする日の事でございましたが、今出川の大納言樣の御屋形から、御歸りになる御車の中で、急に大熱が御發しになり、御歸館遊ばした時分には、もう唯「あた、あた」と仰有るばかり、あまつさへ御身のうちは、一面に氣味惡く紫立つて、御褥の白綾も焦げるかと思ふ御氣色になりました。元よりその時も御枕もとには、法師、醫師、陰陽師などが、皆それぞれに肝膽を碎いて、必死の力を盡しましたが、御熱は益烈しくなつて、やがて御床の上まで轉び出ていらつしやると、忽ち別人のやうな嗄れた御聲で、「あおう、身のうちに火がつい

たわ。この煙りは如何致した。」と、狂ほしく御吼りになつた儘、僅二時ばかりの間に、何とも申し上げる語もない、無殘な御最期でございます。その時の悲しさ、恐ろしさ、勿體なさ——今になつて考へましても、蔀に迷つてゐる、護摩の煙と、右往左往に泣き惑つてゐる女房たちの袴の紅とが、あの茫然とした驗者や術師たちの姿と一しよに、ありありと眼に浮かんで、かいつまんだ御話を致すのさへ、涙が先に立つて仕方がございません。が、さう云ふ思ひ出の内でも、あの御年若な若殿様が、少しも取亂した御容子を御見せにならず、唯、青ざめた御顏を曇らせながら、ぢつと大殿様の御枕元へ坐つていらしつた事を考へると、何故かまるで磨ぎすました燒刃の匂ひでも嗅ぐやうな、身にしみて、ひやりとする、それでゐてやはり頼もしい、妙な心もちが致すのでございます。

二

御親子の間がらでありながら、大殿様と若殿様との間位、御容子から御性質まで、うらうへなのも稀でございませう。大殿様は御承知の通り、大兵肥滿でいらつしやいますが、若殿様は中背

の、どちらかと申せば痩ぎすな御生れ立ちで、御容貌も大殿様のどこまでも男らしい、神將のやうな俤とは、似もつかない御優しさでございます。これはあの御美しい北の方に、瓜二つとでも申しませうか。眉の迫つた、眼の涼しい、心もち口もとに癖のある、女のやうな御顔立ちでございましたが、どこかそこにうす暗い、沈んだ影がひそんでゐて、殊に御裝束でも召しますと、御立派と申しますより、殆神寂てゐるとでも申し上げたい位、如何にももの靜な御威光がございました。

が、大殿様と若殿様とが、取り分け違つていらしつたのは、どちらかと云へば、御氣象の方で、大殿様のなさる事は、すべてが豪放で、雄大で、何でも人目を驚かさなければ止まないと云ふ御勢ひでございましたが、若殿様の御好みは、どこまでも纖細で、亦どこまでも優雅な趣がございましたやうに存じて居ります。たとへば大殿様の御心もちが、あの堀川の御所に窺はれます通り、若殿様が若王子に御造りになつた龍田の院は、御規模こそ小さうございますが、菅相丞の御歌をそのまゝな、紅葉ばかりの御庭と申し、その御庭を縫つてゐる、淸らかな一すぢの流れと申し、或は又その流れへ御放しになつた、何羽とも知れない白鷺と申し、一つとして若殿様の奥床しい

御思召しの程が、現れてゐないものはございません。

さう云ふ次第でございますから、大殿様は何かにつけて、武張つた事を御好みになりましたが、若殿様は又詩歌管絃を何よりも御喜びなさいまして、その道々の名人上手とは、御身分の上下も御忘れになつたやうな、隔てない御つき合ひがございました。いや、それも唯、さう云ふものが御好きだつたと申すばかりでなく、御自分も永年御心を諸藝の奥祕に御潜めになつたので、笙こそ御吹きになりませんでしたが、あの名高い帥民部卿以來、三舟に乘るものは、若殿様御一人であらうなどと、噂のあつた程でございます。でございますから、御家の集にも、若殿様の秀句や名歌が、今に澤山殘つて居りますが、中でも世上に評判が高かつたのは、あの良秀が五趣生死の圖を描いた龍蓋寺の佛事の節、二人の唐人の問答を御聞きになつて、御詠みになつた歌でございませう。これはその時磬の模様に、八葉の蓮華を挾んで二羽の孔雀が鑄つけてあつたのを、その唐人たちが眺めながら、「捨身惜花思」と云ふ一人の聲の下から、もう一人が「打不立有鳥」と答へました――その意味合ひが解せないので、そこに居合はせた人々が、兎角の詮議立てをして居りますと、それを御聞きになつた若殿様が、御持ちになつた扇の裏へさらさらと美しく書き流し

て、その人々のゐる中へ御遣しになつた歌でございます。

　　身をすてて花を惜しやと思ふらむ打てども立たぬ鳥もありけり

三

大殿様と若殿様とは、かやうに萬事がかけ離れていらつしやいましたから、それだけ又御二方の御仲にも、そぐはない所があつたやうでございます。これにも世間には兎角の噂がございまして、中には御親子で、同じ宮腹の女房を御爭ひになつたからだなどと、申すものもございますが、元よりそのやうな莫迦げた事があらう筈はございません。何でも私の覺えて居ります限りでは、若殿様が十五六の御年に、もう御二方の間には、御不和の芽がふいてゐたやうに御見受け申しました。これが前にもちよいと申し上げて置きました、若殿様が笙だけは御吹きにならないと云ふ、その謂はれに縁のある事なのでございます。

その頃、若殿様は大さう笙を御好みで、遠縁の從兄に御當りなさる中御門の少納言に、御弟子入をなすつていらつしやいました。この少納言は、伽陵と云ふ名高い笙と、大食調入食調の譜と

を、代々御家に御傳へになつていらつしやる、その道でも稀代の名人だつたのでございます。

若殿様はこの少納言の御手許で、長らく切磋琢磨の功を御積みになりましたが、さてその大食調入食調の傳授を御望みになりますと、少納言はどう思召したのか、この仰せばかりは御聞き入れになりません。それが再三押して御頼みになつても、やはり御満足の行くやうな御返事がなかつたので、御年若な若殿様は、一方ならず殘念に思召したのでございませう。或日大殿様の双六の御相手をなすつていらつしやる時に、ふとその御不滿を御洩しになりました。すると大殿様は何時ものやうに鷹揚に御笑ひになりながら、「さう不平は云はぬものぢや。やがてはその譜も手にはひる時節があるであらう。」と、やさしく御慰めになつたさうでございます。所がそれから半月とたたない或日の事、中御門の少納言は、堀川の御屋形の饗へ御出になつた歸りに、俄に血を吐いて御歿りになつてしまひました。が、それは先づ、よろしいと致しましても、その明くる日、若殿様が何氣なく御居間へ御出でになると、螺鈿を鏤めた御机の上に、あの伽陵の笙と大食調入食調の譜とが、誰が持つて來たともなく、ちやんと載つてゐたと申すではございませんか。

その後又大殿様が若殿様を御相手に双六を御打ちになつた時、

「この頃は笙も一段と上達致したであらうな。」と、念を抑すやうに仰有ると、若殿様は靜に盤面を御眺めになつた儘、
「いや笙はもう一生、吹かない事に致しました。」と、冷かに御答へになりました。
「何として又、吹かぬ事に致したな。」
「聊かながら、少納言の菩提を弔はうと存じますから。」
から仰有つて若殿様は、ぢつと父上の御顏を御見つめになりました。が、大殿様はまるでその御聲が聞えないやうに勢ひよく筒を振りながら、
「今度もこの方が無地勝らしいぞ。」とさりげない容子で勝負を御續けになりました。でございますからこの御問答は、それぎり立ち消えになつてしまひましたが、御親子の御仲には、この時から或面白くない心もちが、挾まるやうになつたかと存ぜられます。

四

それから大殿様の御隱れになる時まで、御親子の間には、まるで二羽の蒼鷹が、互に相手を窺

ひながら、空を飛びめぐつてゐるやうな、ちつとの隙もない睨み合ひがずつと續いて居りました。が、前にも申し上げました通り若殿樣は、すべて喧嘩口論の類が、大御嫌ひでございましたから、大殿樣の御所業に向つても、楯を御つきになどなつた事は、殆ど一度もございません。唯、その度に皮肉な御微笑を、あの癖のある御口元にちらりと御浮べになりながら、一言二言鋭い御批判を御漏らしになるばかりでございます。

何時ぞや大殿樣が、二條大宮の百鬼夜行に御遇ひになつても、格別御障りのなかつた事が、洛中洛外の大評判になりますと、若殿樣は私に御向ひになりまして、

「鬼神が鬼神に遇うたのぢや。父上の御身に害がなかつたのは、不思議もない。」と、さも可笑しさうに仰有いましたが、その後又、東三條の河原院で、夜な夜な現れる融の左大臣の亡靈を、大殿樣が一喝して御卻けになつた時も、若殿樣は例の通り、脣を歪めて御笑ひになりながら、

「融の左大臣は、風月の才に富んで居られたと申すではないか。されば父上づれは、話のあとを打たせるにも足らぬと思はれて、消え失せられたに相違ない。」と、仰有つたのを覺えて居ります。

それが又大殿樣には、何よりも御耳に痛かつたと見えまして、ふとした拍子に、かう云ふ若殿

樣の御言葉が、御聞きに達する事でもございますと、上べは苦笑ひに御紛はしなすつても、御心中の御怒りはありありと御顏に讀まれました。現に內裡の梅見の宴からの御歸りに、大殿樣の御車の牛がそれて、往來の老人に怪我させた時、その老人が反つて手を合せて、權者のやうな大殿樣の御牛にかけられた冥加の程を、難有がつた事がございましたが、その時も若殿樣は、大殿樣のいらつしやる前で、牛飼の童子に御向ひなさりながら、

「その方はうつけものぢやな。所詮牛をそらす位ならば、何故車の輪にかけて、あの下司を轢き殺さぬ。怪我をしてさへ、手を合せて、隨喜する程の老爺ぢや。轍の下に往生を遂げたら、聖衆の來迎を受けたにも增して、難有く心得たに相違ない。されば父上の御名譽も、一段と擧がらうものを。さりとは心がけの惡い奴ぢや」と、仰有つたものでございます。その時の大殿樣の御機嫌の惡さと申しましたら、今にも御手の扇が上つて、御折檻位は御加へにならうかと、私ども一同が膽を冷す程でございましたが、それでも若殿樣は晴々と、美しい齒を見せて御笑ひになりながら、

「父上、父上、さう御腹立ち遊ばすな。牛飼めもあの通り、恐れ入つて居るやうでございます。

この後とも精々心にかけましたら、今度こそは立派に人一人轢き殺して、父上の御名譽を震旦までも傳へる事でございませう。」と、素知らぬ顏で仰有つたものでございますから、大殿様もとうとう我を御折りになつたと見えて、苦い顏をなすつた儘、何事もなく御立ちになつてしまひました。

かう云ふ御間がらでございましたから、大殿様の御臨終を、ぢつと御目守りになつていらつしやる若殿様の御姿程、私どもの心の上に不思議な影を宿したものはございません。今でもその時の事を考へますと、まるで磨ぎすました燒刃の匂ひを嗅ぐやうな、身にしみてひやりとする、と同時に又何となく頼もしい、妙な心もちが致した事は、先刻もう御耳に入れて置きました。誠にその時の私どもには、心から御代替りがしたと云ふ氣が、――それも御屋形の中ばかりでなく、一天下にさす日影が、急に南から北へふり變つたやうな、慌しい氣が致したのでございます。

五

でございますから若殿様が、御家督を御取りになつたその日の内から、御屋形の中へはどこか

らともなく、今までにない長閑な景色が、春風のやうに吹きこんで參りました。歌合せ、花合せ、或は艶書合せなどが、以前にも増して度々御催しになられたのは、申すまでもございますまい。それから又、女房たちを始め、侍どもの風俗が、まるで昔の繪卷から拔け出して來たやうに、みやびやかになつたのも、元よりの事でございます。が、殊に以前と變つたのは、御屋形の御客に御出でになる上つ方の御顏ぶれで、今は如何に時めいてゐる大臣大將でも、一藝一能にすぐれていらつしやらない方は、滅多に若殿樣の御眼にはかゝれません。いや、たとひ御眼にかゝれたのにしても、御出でになる方々が、皆風流の才子ばかりでいらつしやいますから、流石に御身を御愧ぢになつて、自然御み足が遠くなつてしまふのでございます。

その代り又、詩歌管絃の道に長じてさへ居りますれば、無位無官の侍でも、身に餘るやうな御褒美を受けた事がございます。たとへば、或秋の夜に、月の光が格子にさして、機織りの聲が致して居りました時、ふと人を御召しになると、新參の侍が參りましたが、どう思召したのか、急にその侍に御向ひなすつて、

「機織りの聲が致すのは、その方にも聞えような。これを題に一首仕れ。」と、御聲がかりがご

ざいました。するとその侍は下にゐて、暫く頭を傾けて居りましたが、やがて、「青柳の」と、初の句を申しました。するとその季節に合はなかつたのが、可笑かつたのでございませう。女房たちの間には、忍び笑ひの聲が起りましたが、侍が續いて、

「みどりの糸をくりおきて夏へて秋は機織りぞ啼く。」と、さわやかに詠じますと、忽ちそれは靜まり返つて、萩模様のある直垂を一領、格子の間から月の光の中へ、押し出して下さいました。實はその侍と申しますのが、私の姉の一人息子で、若殿様とは、略御年輩も同じ位な若者でございましたが、これを御奉公の初めにして、その後も度々難有い御懇意を受けたのでございます。

先、若殿様の御平生は、あらあらかやうなものでございませうか。その間に北の方も御迎へになりましたし、年々の除目には御官位も御進みになりましたが、さう云ふ事は世上の人も、よく存じてゐる事でございますから、こゝにはとり立てて申し上げません。それよりも先を急ぎますから、最初に御約束致しました通り、若殿様の御一生に、たつた一度しかなかつたと云ふ、不思議な出來事の御話へはひる事に致しませう。と申しますのは、大殿様とは御違ひになつて、天が下の色ごのみなどと云ふ御渾名こそ、御受けになりましたが、誠に御無事な御生涯で、その外に

は何一つ、人口に膾炙するやうな御逸事と申すものも、なかつたからでございます。

六

その御話の抑は、確大殿様が御隠れになつてから、五六年たつた頃でございますが、丁度その時分若殿様は、前に申し上げました中御門の少納言様の御一人娘で、評判の美しい御姫様へ、茂茂御文を書いていらつしやいました。唯今でもあの頃の御熱心だつた御噂が、私どもの口から洩れますと、若殿様は何時も晴々と御笑ひになつて、

「爺よ。天が下は廣しと云へ、あの頃の予が夢中になつて、拙い歌や詩を作つたのは皆、戀がさせた業ぢや。思へば狐の塚を踏んで、物に狂うたのも同然ぢやな。」と、まるで御自分を嘲るやうに、洒落としてから仰有います。が、全く當時の若殿様は、それ程御平生に似もやらず、戀慕三昧に耽つて御出でになりました。

しかし、これは、あながち、若殿様御一人に限つた事ではございません。あの頃の年若な殿上人で、中御門の御姫様に想ひを懸けないものと云つたら、恐らく御一方もございますまい。あの

方が阿父様の代から、ずつと御住みになつていらつしやる、二條西洞院の御屋形のまはりには、さう云ふ色好みの方々が、或は車を御寄せになつたり、或は御自身御拾ひで御出でになつたり、絶えず御通ひ遊ばしたものでございます。中には一夜の中に二人まで、あの御屋形の梨の花の下で、月に笛を吹いてゐる立烏帽子があつたと云ふ噂も、聞き及んだ事がございました。

いや、現に一時は秀才の名が高かつた菅原雅平とか仰有る方も、この御姫様に戀をなすつて、しかもその戀がかなはなかつた御恨みから、俄に世を御捨てになつて、唯今では筑紫の果に流浪して御出でになるとやら、或は又東海の波を踏んで唐土に御渡りになつたとやら、皆目御行方が知れないと申すことでございます。この方などは若殿様とも、詩文の御交りの深かつた御一人で、御消息などをなさる時は、若殿様を樂天に、御自分を東坡に比していらしつたさうでございますが、さう云ふ風流第一の才子が、如何に中御門の御姫様は御美しいのに致しましても、一旦の御歎きから御生涯を邊土に御送りなさいますのは、御不覺と申し上げるより外はございますまい。

が、又翻つて考へますと、これも御無理がないと思はれる位、中御門の御姫様と仰有る方は、御美しかつたのでございます。私が一兩度御見かけ申しました限でも、柳櫻をまぜて召して、錦

に玉を貫いた燦びやかな裳の腰を、大殿油の明い光に、御輝かせになりながら、御眶も重さうにうち傾いていらしつた、あのあでやかな御姿は一生忘れやうもございますまい。しかもこの御姫様は御氣象も並々ならず御濶達でいらつしやいましたから、なまじひな殿上人などは、思召しにかなふ所か、すぐに本性を御見透しになつて、とんと御寵愛の猫も同様、さんざん御弄りになつた上、二度と再び御膝元へもよせつけないやうになすつてしまひました。

七

でございますからこの御姫様に、想を懸けていらしつた方々の間には、まるで竹取物語の中にでもありさうな、可笑しいことが澤山ございましたが、中でも一番御氣の毒だつたのは京極の左大辨様で、この方は京童が鴉の左大辨などと申し上げた程、御色が黑うございましたが、それでもやはり人情には變りもなく、中御門の御姫様を戀ひ慕つていらつしやいました。所がこの方は御利巧だと同時に、氣の小さい御性質だつたと見えまして、如何に御姫様を懐しく思召しても、御自分の方からそれとは御打ち明けなすつた事もございませんし、元より又御同輩の方々にも、

つひぞそれらしい事を口に出して、仰有つた例はございません。しかし忍び忍びに御姫様の御顔を拜みに參ります事は、隱れない事でございますから、或時、それを枷にして、御同輩の誰彼が、手を換へ品を換へ、いろいろと問ひ落さうと御かかりになりました。すると鴉の左大辨様は、苦しまぎれの御一策に、

「いや、あれは何も私が想を懸けてゐるばかりではない。實は姫の方からも、心ありげな風情を見せられるので、ついつい足が茂くなるのだ。」と、かう御逃げになりました。しかもそれを誠らしく見せかけようと云ふ出來心から、御姫様から頂いた御文の文句や、御歌などを、ある事もない事も皆一しよに取つくろつて、さも御姫様の方が心を焦していらつしやるやうに、御話しになつたからたまりません。元より悪戯好きな御同輩たちは、半信半疑でいらつしやりながら、早速御姫様の僞手紙を拵へて、折からの藤の枝か何かにつけた儘、それを左大辨様の許へ御とゞけになりました。

こちらは京極の左大辨様で、何事かと胸を轟かせながら、慌て御文を開けて見ますと、思ひもよらず御姫様は、如何に左大辨様を思ひわびてもとんとつれなく御もてなしになるから、所詮か

なはぬ戀とあきらめて、尼法師の境涯にはひると云ふ事が、如何にもものゝ哀れに書いてあるではございませんか。まさかさうまで御姫樣が、思ひつめていらつしやらうとは、夢にも思召さなかつたのでございますから、鴉の左大辨樣は悲しいとも、嬉しいともつかない御心もちで、暫くは唯、茫然と御文を前にひろげた儘、溜息をついていらつしやいました。が、何はともあれ、御眼にかゝつて、今まで胸にひそめてゐた想の程も申し上げようと、かう思召したのでございませう。丁度五月雨の暮方でございましたが、童子を一人御伴に御つれになつて、傘をかざしながら、ひそかに二條西洞院の御屋形まで參りますと、御門は堅く鎖してあつて、いくら音なつても叩いても、開ける氣色はございません。さうかうする内に夜になつて、人の往來も稀な築土路には、唯、蛙の聲が聞えるばかり、雨は益降りしきつて、御召物も濡れれば、御眼も眩むと云ふ情ない次第でございます。

それが程經てから、御門の扉が、やつと開いたと思ひますと、平太夫と申します私位の老侍が、これも同じやうな藤の枝に御文を結んだのを渡したなり、無言で又、その扉をぴたりと閉めてしまひました。

そこで泣く泣く御立ち歸りになつて、その御文を開けて御覽になると、一首の古歌がちらし書きにしてあるだけで、一言も外には御便りがございません。

　思へども思はずとのみ云ふなればいなや思はじ思ふかひなし

これは云ふまでもなく御姬樣が、惡戲好きな若殿原から、細々と御消息で、鴉の左大辨樣の心なしを御承知になつてゐたのでございます。

八

から御話し致しますと、中には世の常の姬君たちに引き比べて、この御姬樣の御行狀を、嘘のやうに思召す方もいらつしやいませうが、現在私が御奉公致してゐる若殿樣の事を申し上げながら、何もそのやうな空事をさし加へよう道理はございません。その頃洛中で評判だつたのは、この御姬樣ともう御一方、これは蟲が大御好きで、長蟲までも御飼ひになつたと云ふ、不思議な御姬樣がございました。この後の御姬樣の事は、全くの餘談でございますから、ここには何も申し上げますまい。が、中御門の御姬樣は、何しろ御兩親とも御隱れになつて、御屋形には唯、先

刻御耳に入れました平太夫を頭にして、御召使の男女が居りますばかり、それに御先代から御有福で、何御不自由もございませんでしたから、自然御美しいのと、御濶達なのとに御任せなすつて、隨分世を世とも思はない、御放膽な眞似もなすつたのでございます。

そこで噂を立て易い世間には、この御姫樣御自身が、實は少納言樣の北の方と大殿樣との間に御生まれなすつたので、父君の御隱れなすつたのも、戀の遺恨で大殿樣が毒害遊ばしたのだなどと申す輩も出て來るのでございませう。しかし少納言樣の急に御歿くなりになつた御話は、前に一應申上げました通り、更にそのやうな次第ではございませんから、その噂は申すまでもなく、皆跡方のない噓でございます。さもなければ若殿樣も、決してあれ程までは御姫樣へ、心を御寄せにはなりますまい。

何でも私が人傳に承はりました所では、初めはいくら若殿樣の方で御熱心でも、御姫樣は反つて誰よりも、素氣なく御もてなしになつたとか申す事でございます。いや、そればかりか、一度などは若殿樣の御文を持つて上つた私の甥に、あの鴉の左大辨樣同樣、どうしても御門の扉を御開けにならなかつたとかでございました。しかもあの平太夫が、何故か堀川の御屋形のものを仇

のやうに憎みまして、その時も梨の花に、うらうらと春日が匂つてゐる築土の上から白髪頭を露して、檜皮の狩衣の袖をまくりながら、推しても御門を開かうとする私の甥に、

「やい、おのれは晝盗人か。盗人とあれば容赦はせぬ。一足でも門内にはひつたが最期、平太夫が太刀にかけて、まつ二つに斬つて捨てるぞ。」と、嚙みつくやうに喚きました。もしこれが私でございましたら、刃傷沙汰にも及んだでございませうが、甥は唯、道ばたの牛の糞を礫代りに投げつけただけで、歸つて來たと申して居りました。かやうな次第でございますから、元より御文が無事に御手許にとゞいても、とんと御返事と申すものは頂けません。が、若殿樣は、一向にそれにも御頓着なく、三日にあげず、御文やら御歌やら、或は又結構な繪卷やらを、凡そものの三月あまりも、根氣よく御遣しになりました。さればこそ、日頃も仰有る通り、「あの頃の予が夢中になつて、拙い歌や詩を作つたのは、皆戀がさせた業ぢや」に、少しも違ひはなかつたのでございます。

九

丁度その頃の事でございます。洛中に一人の異形な沙門が現れまして、とんと今までに聞いた事のない、摩利の教と申すものを説き弘め始めました。これも一時隨分評判でございましたから、中には御聞き及びの方もいらつしやる事でございませう。よくものの草紙などに、震旦から天狗が渡つたと書いてありますのは、丁度あの染殿の御后に鬼が憑いたなどと申します通り、この沙門の事を譬へて云つたのでございます。

さう申せば私が初めてその沙門を見ましたのも、やはり其頃の事でございました。確、或花曇りの日の晝中だつたかと存じますが、何か用足しに出ました歸りに、神泉苑の外を通りかゝりますと、あすこの築土を前にして、揉烏帽子やら、立烏帽子やら、或は又もの見高い市女笠やらが、數にして凡そ二三十人、中には竹馬に跨つた童部も交つて、皆一塊になりながら、罵り騷いでゐるのでございます。さては又、福徳の大神に祟られた物狂ひでも踊つてゐるか、さもなければ迂濶な近江商人が、魚盜人に荷でも攫はれたのだらうと、かう私は考へましたが、あまりその騷ぎが仰々しいので、何氣なく後からそつと覗きこんで見ますと、思ひもよらずその眞中には、乞食のやうな姿をした沙門が、何か頻にしやべりながら、見慣れぬ女菩薩の畫像を掲げた旗竿を片

手につき立てて、佇んでゐるのでございました。年の頃は彼是三十にも近うございませうか、色の黑い、眼のつり上つた、如何にも凄じい面がまへで、着てゐるものこそ、よれよれになつた墨染の法衣でございますが、渦を卷いて肩の上まで垂れ下つた髮の毛と申し、頸にかけた十文字の怪しげな黃金の護符と申し、元より世の常の法師ではございますまい。それが、私の覗きました時は、流れ風に散る神泉苑の櫻の葉を頭から浴びて、全く人間と云ふよりも、あの智羅永壽の眷屬が、鳶の翼を法衣の下に隱してゐるのではないかと思ふ程、怪しい姿に見うけられました。

するとその時、私の側にゐた、逞しい鍛冶か何かが、素早く童部の手から竹馬をひつたくつて、

「おのれ、よくも地藏菩薩を天狗だなどと吐したな。」と、嚙みつくやうに喚きながら、斜に相手の面を打ち据ゑました。が、打たれながらも、その沙門は、にやりと氣味の惡い微笑を洩らした儘、愈高く女菩薩の畫像を落花の風に飜して、

「たとひ今生では、如何なる榮華を極めようとも、天上皇帝の御敎に悖るものは、一旦命終の時に及んで、忽ち阿鼻叫喚の地獄に墮ち、不斷の業火に皮肉を燒かれて、盡未來まで吠え居らうぞ。ましてその天上皇帝の遣された、摩利信乃法師に咎を當つるものは、命終の時とも申さず、明日

が日にも諸天童子の現罰を蒙つて、白癩の身となり果てるぞよ。」と、叱りつけたではございませんか。この勢ひに氣を呑まれて、私は元より當の鍛冶まで、暫くは唯、竹馬を戟にした儘、狂ほしい沙門の振舞を、呆れてぢつと見守つて居りました。

十

が、それはほんの僅の間で、鍛冶は又竹馬をとり直しますと、

「まだ雜言をやめ居らぬか。」と、恐ろしい權幕で罵りながら、矢庭に沙門へとびかゝりました。元よりその時は私はじめ、誰でも鍛冶の竹馬が、したゝか相手の面を打ち据ゑたと、思はなかつたものはございません。いや、實際又竹馬は、あの日の焦けた頬に、もう一すぢ蚯蚓腫の跡を加へたやうでございます。が、横なぐりに打ち下した竹馬が、まだ青い笹の葉に落花を掃つたと思ふが早いか、いきなり大地にどうと倒れたのは、沙門ではなくて、肝腎の鍛冶の方でございました。

これに辟易した一同は、思はず逃腰になつたのでございませう。揉烏帽子も立烏帽子も意氣地

なく後を見せて、どつと沙門のまはりを離れましたが、見ると鍛冶は、竹馬を持つた儘、相手の足もとにのけぞり返つて、口からはまるで癲癇病みのやうに白い泡さへも噴いて居ります。沙門は暫くその呼吸を窺つてゐるやうでございましたが、やがてその瞳を私どもの方へ返しますと、

「見られい。わしの云うた事に、僞りはなかつたらうな。諸天童子は即座に此横道者を、目に見えぬ劍で打たせ給うた。まだしも頭が微塵に碎けて、都大路に血をあやさなんだのが、時にとつての仕合せと云はずばなるまい。」と、さも横柄に申しました。

　するとその時でございます。ひつそりと靜まり返つた人々の中から、急にけたゝましい泣き聲をあげて、さつき竹馬を持つてゐた童部が一人、切禿の髮を躍らせながら、倒れてゐる鍛冶の傍へ、轉がるやうに走り寄つたのは。

「阿父さん。阿父さんてば。よう。阿父さん。」

　童部はかう何度も喚きましたが、鍛冶は更に正氣に還る氣色もございません。あの脣にたまつた泡さへ、不相變花曇りの風に吹かれて、白く水干の胸へ垂れて居ります。

「阿父さん。よう。」

童部は又から繰返しましたが、鍛冶が返事をしないのを見ると、忽ち血相を變へて、飛び立ちながら、父の手に殘つてゐる竹馬を兩手でつかむが早いか、沙門を目がけて健氣にも、まつしぐらに打つてかかりました。が、沙門はその竹馬を、持つてゐた畫像の旗竿で、事もなげに拂ひながら、又あの氣味の惡い笑を洩らしますと、わざと柔しい聲を出して、

「これは滅相な。御主の父親が氣を失つたのは、この摩利信乃法師がなせる業ではないぞ。さればわしを窘めたとて、父親が生きて返らう次第はない。」と、たしなめるやうに申しました。

その道理が童部に通じたと云ふよりは、所詮この沙門と打ち合つても、勝てさうもないと思つたからでございませう。鍛冶の小伜は五六度竹馬を振りまはした後で、べそを搔いた儘、往來のまん中へ立ちすくんでしまひました。

十一

摩利信乃法師はこれを見ると、又にやにや微笑みながら、童部の傍へ歩みよつて、

「さても御主は、聞分けのよい、年には增した利發な子ぢや。さう溫和しくして居れば、諸天童

子も御主にめでて、程なくそこな父親も正氣に還して下されよう。わしもこれから祈禱せう程に、御主もわしを見慣うて、天上皇帝の御慈悲に御すがり申したがよからうぞ。」

　かう云ふと沙門は旗竿を大きく兩腕に抱きながら、大路のたゞ中に跪いて、恭しげに額を垂れました。さうして眼をつぶつた儘、何やら怪しげな陀羅尼のやうなものを、聲高に誦し始めました。それがどの位つゞいた事でございませう。沙門のまはりに輪を作つて、この不思議な加持のし方を眺めてゐる私どもには、彼是ものゝ半時もたつたかと思はれる程でございましたが、やがて沙門が眼を開いて、跪いたなり伸ばした手を、鍛冶の顏の上へさしかざしますと、見る見る中にその顏が、暖かく血の色を盛返して、やがて苦しさうな呻り聲さへ、例の泡だらけな口の中から、一しきり長く溢れて參りました。

「やあ、阿父さんが、生き返つた。」

　童部は竹馬を拋り出すと、嬉しさうに小躍りして、又父親の傍へ走りよりました。が、その手で抱き起されるまでもなく、呻り聲を洩らすと殆ど同時に、鍛冶はまるで酒にでも醉つたかと思ふやうな、覺束ない身のこなしで、徐に體を起しました。すると沙門はさも滿足さうに、自分も

悠然と立ち上つて、あの女菩薩の畫像を親子のものの頭の上に、日を蔽ふ如くさしかざすと、「天上皇帝の御威徳は、この大空のやうに廣大無邊ぢや。何と信を起されたか。」と、嚴かにかう申しました。

鍛冶の親子は互にしつかり抱き合ひながら、まだ土の上に蹲つて居りましたが、沙門の法力の恐ろしさには、魂も空にけし飛んだのでございませう。女菩薩の幢を仰ぎますと、二人とも殊勝げな兩手を合せて、わなわな震へながら、禮拜いたしました。と思ふとつゞいて二三人、まはりに立つてゐる私どもの中にも、笠を脱いだり、烏帽子を直したりして、畫像を拜んだものが居つたやうでございます。唯私は何となく、その沙門や女菩薩の畫像が、まるで魔界の風に染んでゐるやうな、忌はしい氣が致しましたから、鍛冶が正氣に還つたのを潮に、匆々その場を立ち去つてしまひました。

後で人の話を承はりますと、この沙門の說教致しますのが、震旦から渡つて參りました、あの摩利の教と申すものださうで、摩利信乃法師と申します男も、この國の生れやら、乃至は唐土に人となつたものやら、とんと確なことはわからないと云ふ事でございました。中には又、震旦で

も本朝でもない、天竺の涯から來た法師で、晝こそあのやうに町を歩いてゐるが、夜は黑染の法衣が翼になつて、八阪寺の塔の空へ舞上るなどと云ふ噂もございましたが、元よりそれはとりとめもない、嘘だつたのでございませう。が、さやうな噂が傳はりましたのも、一應は尤もと存じられます位、この摩利信乃法師の仕業には、いろいろ幻妙な事が多かつたのでございます。

十二

と申しますのは、先づ第一に摩利信乃法師が、あの怪しげな陀羅尼の力で、瞬く暇に多くの病者を癒した事でございます。盲目が見えましたり、跛が立ちましたり、啞が口をききましたり——一々數へ立てますのも、煩はしい位でございますが、中でも一番名高かつたのは、前の攝津守の惱んでゐた人面瘡でもございませうか。これは甥を遠矢にかけて、その女房を奪つたとやら申す報から、左の膝頭にその甥の顏をした、不思議な瘡が現はれて、晝も夜も骨を刻るやうな業苦に惱んで居りましたが、あの沙門の加持を受けますと、見る間にその顏が氣色を和げて、やがて口とも覺しい所から「南無」と云ふ聲が洩れるや否や、忽ち跡方もなく消え失せたと申すのでご

ざいます。元よりその位でございますから、狐の憑きましたのも、天狗の憑きましたのも、或は又、何とも名の知れない、妖魅鬼神の憑きましたのも、あの十文字の護符を頂きますと、まるで木の葉を食ふ蟲が、大風にでも振はれて落ちるやうに、すぐさま落ちてしまひました。

が、摩利信乃法師の法力が評判になつたのは、それだからばかりではございません。前にも私が往來で見かけましたやうに、摩利の教を誹謗したり、その信者を呵責したり致しますと、あの沙門は即座にその相手へ、恐ろしい神罰を祈り下しました。おかげで井戸の水が腥い血潮に變つたものもございますし、持ち田の稻を一夜の中に蝗が食つてしまつたものもございますが、あの白朱社の巫女などは、摩利信乃法師を祈り殺さうとした應報で、一目見るのさへ氣味の惡い白癩になつてしまつたさうでございます。そこであの沙門は天狗の化身だなどと申す噂が、一層高くなつたのでございませう。が、天狗ならば一矢に射てとつて見せるとか申して、わざわざ鞍馬の奥から參りました獵師も、例の諸天童子の劍にでも打たれたのか、急に目がつぶれた揚句、しまひには摩利の教の信者になつてしまつたとか申す事でございました。

さう云ふ勢ひでございますから、日を經るに從つて、信者になる老若男女も、追々數を增して

参りましたが、その又信者になりますには、何でも水で頭を濡すと云ふ、灌頂めいた式があつて、それを一度すまさない中は、例の天上皇帝に歸依した明りが立ち兼ねるのださうでございます。これは私の甥が見かけたことでございますが、或日四條の大橋を通りますと、橋の下の河原に夥しい人だかりが致して居りましたから、何かと存じて覗きました所、これもやはり摩利信乃法師が東國者らしい侍に、その怪しげな灌頂の式を授けて居るのでございました。何しろ折からの水が温んで、櫻の花も流れようと云ふ加茂川へ、大太刀を佩いて畏つた侍と、あの十文字の護符を捧げてゐる異形な沙門とが影を落して、見慣れない儀式を致してゐたと申すのでございますから、餘程面白い見物でございましたらう。――さう云へば、前に申し上げる事を忘れましたが、摩利信乃法師は始めから、四條河原の非人小屋の間へ、小さな蓆張りの庵を造りまして、そこに始終たつた一人、侘しく住んでゐたのでございます。

十三

そこでお話は元へ戻りますが、その間に若殿様は、思ひもよらない出來事から、豫て御心を寄

せていらしつた中御門の御姫様と、親しい御語らひをなさる事が御出來なさるやうに相成りました。その思ひもよらない事と申しますのは、もう花橘の匂と時鳥の聲とが雨もよひの空を想はせる、或夜の事でございましたが、その夜は珍しく月が出て、夜目にも、朧げには人の顔が見分けられる程だつたと申します。若殿様は或女房の所へ御忍びになつた御歸り途で、御供の人數も目立たないやうに、僅に一人か二人御召連れになつた儘、その明るい月の中を車でゆつくりと御出でになりました。が、何しろ時刻が遲いので、人つ子一人通らない往來には、遠田の蛙の聲と、車の輪の音とが聞えるばかり、殊にあの寂しい美福門の外は、よく狐火の燃える所だけに、何となく鬼氣が身に迫つて、心無い牛の歩みさへ早くなるやうな氣が致されます。――さう思ふと、急に向うの築土の陰で、怪しい咳の聲がするや否や、きらきらと白刃を月に輝かせて、盜人と覺しい覆面の男が、左右から凡そ六七人、若殿様の車を目がけて、猛々しく襲ひかかりました。

と同時に牛飼の童部を始め、御供の雜色たちは餘りの事に、魂も消えるかと思つたのでございませう。驚破と云ふ間もなく、算を亂して、元來た方へ一散に逃げ出してしまひました。が、盜人たちはそれには目をくれる氣色もなく、矢庭に一人が牛の轡を取つて、往來のまん中へぴたり

と車を止めるが早いか、四方から白刃の垣を造つて、犇々とそのまはりを取り圍みますと、先づ頭立つたのが横柄に簾を拂つて、

「どうぢや。この殿に違ひはあるまいな。」と、仲間の方を振り向きながら、念を押したさうでございます。その容子がどうも物盗りとも存ぜられませんので、御驚きの中にも若殿樣は不審に思召されたのでございませう。それまでぢつとしていらしつたのが、扇を斜に相手の方を、透かすやうにして御窺ひなさいますと、その時その盗人の中に嗄れた聲がして、

「おう。しかとこの殿ぢや。」と、憎々しげに答へました。するとその聲が、又何となく何處かで一度、御耳になすつたやうでございましたから、愈怪しく思召して、明るい月の光に、その聲の主を、吃と御覧になりますと、面こそ包んで居りますが、あの中御門の御姫樣に年久しく御仕へ申してゐる、平太夫に相違はございません。この一刹那は流石の若殿樣も、思はず總身の毛がよだつやうな、恐ろしい思ひをなすつたと申す事でございました。何故と申しますと、あの平太夫が堀川の御一家を仇のやうに憎んでゐる事は、若殿樣の御耳にも、とうからはひつてゐたからでございます。

いや、現にその時も、平太夫がさう答へますと、さつきの盜人は一層聲を荒げて、太刀の切先を若殿樣の御胸に向けながら、

「さらば御命を申受けようず。」と罵つたと申すではございませんか。

十四

しかしあの飽くまでも、物に御騷ぎにならない若殿樣は、すぐに勇氣を御取り直しになつて、悠々と扇を御弄びなさりながら、

「待て。待て。予の命が欲しくば、次第によつて呉れてやらぬものでもない。が、その方どもは、何でそのやうなものを欲しがるのぢや。」と、まるで人事のやうに御尋ねになりました。すると頭立つた盜人は、白刃を益御胸へ近づけて、

「中御門の少納言殿は、誰故の御最期ぢや。」

「予は誰やら知らぬ。が、予でない事だけは、しかとした證もある。」

「殿か、殿の父君か。いづれにしても、殿は仇の一味ぢや。」

頭立つた一人がかう申しますと、殘りの盜人どもも覆面の下で、
「さうぢや。仇の一味ぢや。」と、聲々に罵り交しました。中にもあの平太夫は齒嚙みをして、車の中を獸のやうに覗きこみながら、太刀で若殿樣の御顏を指さしますと、
「さかしらは御無用ぢやよ。それよりは十念なと御稱へ申されい。」と、嘲笑ふやうな聲で申したさうでございます。
が、若殿樣は相不變落ち着き拂つて、御胸の先の白刃も見えないやうに、
「してその方たちは、皆少納言殿の御內のものか。」と、抛り出すやうに御尋ねなさいました。すると盜人たちは皆どうしたのか、一しきり答にためらつたやうでございましたが、その氣色を見てとつた平太夫は、透かさず聲を勵まして、
「さうぢや。それが又何と致した。」
「いや、何とも致さぬが、もしこの中に少納言殿の御內でないものがゐたと思へ。そのものこそは天が下の阿呆ものぢや。」
若殿樣はかう仰有つて、美しい齒を御見せになりながら、肩を搖つて御笑ひになりました。こ

れには命知らずの盗人たちも、暫くは膽を奪はれたのでございませう。御胸に迫つてゐた太刀先さへ、この時はもう自然と、車の外の月明りへ引かれてゐたと申しますから。

「何故と申せ。」と、若殿様は言葉を御繼ぎになつて、「予を殺害した曉には、その方どもは悉く檢非違使の目にかかり次第、極刑に行はるべき奴ばらぢや。元よりそれも少納言殿の御内のものなら、己が忠義に捨つる命ぢやによつて、定めて本望に相違はあるまい。が、さもないものがこの中にあつて、僅かばかりの金銀が欲しさに、予が身に白刃を向けるとすれば、そやつは二つとない大事な命を、その褒美と換へようず阿呆ものぢや。何とさう云ふ道理ではあるまいか。」

これを聞いた盗人たちは、今更のやうに顏を見合せたけはひでございましたが、平太夫だけは獨り、氣違ひのやうに吼り立つて、

「ええ、何が阿呆ものぢや。その阿呆ものの太刀にかゝつて、最期を遂げる殿の方が、百層倍も阿呆ものぢやとは覺されぬか。」

「何、その方どもが阿呆ものだとな。ではこの中に少納言殿の御内でないものもゐるのであらう。これは一段と面白うなつて參つた。さらばその御内でないものどもに、ちと申し聞かす事がある。

その方どもが予を殺害しようとするのは、全く金銀が欲しさにする仕事であらうな。さて金銀が欲しいとあれば、予はその方どもに何なりと望み次第の褒美を取らすであらう。が、その代り予の方にも亦頼みがある。何と、同じ金銀の爲にする事なら、褒美の多い予の方に味方して、利得を計つたがよいではないか。」

若殿様は鷹揚に御微笑なさりながら、指貫の膝を扇で御叩きになつて、から車の外の盜人どもと御談じになりました。

十五

「次第によつては、御意通り仕らぬものでもございませぬ。」

恐ろしい位ひつそりと靜まり返つてゐた盜人たちの中から、頭だつたのが半恐る恐るから御答へ申し上げますと、若殿様は御滿足さうに、はたはたと扇を御鳴らしになりながら、例の氣輕な御調子で、

「それは重疊ぢや。何、予が頼みと申しても、格別むづかしい儀ではない。それ、そこに居るそ

の老爺は、少納言殿の御内人で、平太夫と申すものであらう。巷の風聞にも聞き及んだが、そやつは日頃予に恨みを含んで、あはよくば予が命を奪はうなどと、大それた企てさへ致して居ると申す事ぢや。さればその方どもがこの度の結構も、平太夫めに唆されて、事を擧げたのに相違あるまい。――」

「さやうでございます。」

これは盗人たちが三四人、一度に覆面の下から申し上げました。

「そこで予が頼みと申すのは、その張本の老爺を搦めとつて、長く禍の根を斷ちたいのぢやが、何とその方どもの力で、平太夫めに繩をかけてはくれまいか。」

この御仰せには、盗人たちも、餘りの事に暫らくの間は、呆れ果てたのでございませう。車をめぐつてゐた覆面の頭が、互に眼と眼を見合はしながらに、一しきりざわざわと動くやうなけはひがございましたが、やがてそれが又靜かになりますと、突然盗人たちの唯中から、まるで夜鳥の鳴くやうな、嗄れた聲が起りました。

「やい、こゝなうつそりどもめ。まだ乳臭いこの殿の口車に乗せられ居つて、拔いた白刃を持て

扱ふばかりか、おめおめ御意に從ひませうなどとは、どの面下げて申せた義理ぢや。よしよし、ならば己れらが手は借りぬわ。高がこの殿の命一つ、平太夫が太刀ばかりで、見事申し受けようも、瞬く暇ぢや。」

かう申すや否や平太夫は、太刀をまつかうにふりかざしながら、やにはに若殿様へ飛びかゝらうと致しました。が、その飛びかゝらうと致したのと、頭だつた盜人が、素早く白刃を投げ出して、横あひからむずと組みついたのとが、殆ど同時でございます。すると外の盜人たちも、てんでに太刀を鞘にをさめて、まるで蝗か何かのやうに、四方から平太夫へ躍りかゝりました。何しろ多勢に無勢と云ひ、こちらは年よりの事でございますから、かうなつては勝負を爭ふまでもございません。忽ちの内にあの老爺は、牛の韁でございませう、有り合せた繩にかけられて、月明りの往來へ引き据ゑられてしまひました。その時の平太夫の姿と申しましたら、とんと罠にでもかゝつた狐のやうに、牙ばかりむき出して、まだ未練らしく喘ぎながら、身悶えしてゐたさうでございます。

するとこれを御覧になつた若殿様は、欠伸まじりに御笑ひになつて、

「おお、大儀。大儀。それで予の腹も一先癒えたと申すものぢや。が、とてもの事に、その方どもは、予が車を警護旁、そこな老耄を引き立て、堀川の屋形まで參つてくれい。」

かう仰有られて見ますと盜人たちも、今更いやとは申されません。そこで一同うち揃つて、雜色がはりに牛を追ひながら、繩つきを中にとりまいて、月夜にぞろぞろと歩きはじめました。天が下は廣うございますが、かやうに盜人どもを御供に御つれ遊ばしたのは、先若殿樣の外にはございますまい。尤もこの異樣な行列も、御屋形まで參りつかない内に、急を聞いて驅けつけた私どもと出會ひましたから、その場で面々御褒美を頂いた上、そこそこ退散致してしまひました。

十六

さて若殿樣は平太夫を御屋形へつれて御歸りになりますと、その儘、御廐の柱にくゝりつけて、雜色たちに見張りを御云ひつけなさいましたが、翌朝は匆々あの老爺を、朝曇りの御庭先へ御召しになつて、

「こりや平太夫、その方が少納言殿の御恨を晴さうと致す心がけは、成程愚には相違ないが、さ

ればとて又、神妙とも申して申されぬ事はない。殊にあの月夜に、覆面の者どもを驅り催して、予を殺害致さうと云ふ趣向の程は、中々その方づれとも思はれぬ風流さぢや。が、美福門のほとりは、ちと場所がようなかつたぞ。ならば糺の森あたりの、老木の下闇に致したかつた。あすこは夏の月夜には、せせらぎの音が間近く聞えて、卯の花の白く仄くのも一段と風情を添へる所ぢや。尤もこれはその方づれに、望む予の方が、無理かも知れぬ。就いてはその殊勝なり、風流なのが目出たいによつて、今度ばかりはその方の罪も赦してつかはす事にしよう。」

から仰有つて若殿樣は、何時ものやうに晴々と御笑ひになりながら、

「その代りその方も、折角これまで參つたものぢや。序ながら予の文を、姫君のもとまで差上げてくれい。よいか。しかと申しつけたぞ。」

私はその時の平太夫の顏位、世にも不思議なものを見た事はございません。あの意地の惡さうな、苦りきつた面色が、泣くとも笑ふともつかない氣色を浮かべて、眼ばかりぎよろぎよろ忙しさうに、働かせて居るのでございます。するとその容子が、笑止ながら氣の毒に思召されたのでございませう。若殿樣は御笑顏を御やめになると、繩尻を控へてゐた雜色に、

「これ、これ、永居は平太夫の迷惑ぢや。すぐさま縄目を許してつかはすがよい。」と、難有い御諚がございました。

それから間もなくの事でございます。一夜の内に腰さへ弓のやうに曲つた平太夫は、若殿様の御文をつけた花橘の枝を肩にして、這々裏の御門から逃げ出して参りました。所がその後から又一人、そつと御門を出ましたのは、私の甥の侍で、これは萬一平太夫が御文に無禮でも働いてはたらないと、若殿様にも申し上げず、見え隠れにあの老爺の跡をつけたのでございます。

二人の間は凡その所、半町ばかりもございましたらうか。平太夫は氣も心も緩みはてたかと思ふばかり、跣足を力なくひきずりながら、まだ雲切れのしない空に柿若葉の匂のする、築土つづきの都大路を、とぼとぼと歩いて参ります。途々通りちがふ菜賣りの女などが、稀有な文使ひだとでも思ひますのか、迂散らしくふり返つて、見送るものもございましたが、あの老爺はとんとそれにも目をくれる氣色はございません。

この調子なら先何事もなからうと、一時は私の甥も途中から引き返さうと致しましたが、よもやに引かされて、暫くは猶も跡を慕つて参りますと、丁度油小路へ出ようと云ふ、道祖の神の

祠の前で、折からあの辻をこちらへ曲つて出た、見慣れない一人の沙門が、出合ひがしらに平太夫と危くつき當りさうになりました。女菩薩の幢、墨染の法衣、それから十文字の怪しい護符、一目見て私の甥は、それが例の摩利信乃法師だと申す事に、氣がついたさうでございます。

十七

危くつき當りさうになつた摩利信乃法師は、咄嗟に身を躱しましたが、何故かそこに足を止めて、ぢつと平太夫の姿を見守りました。が、あの老爺はとんとそれに頓着する容子もなく、唯、二三歩路を讓つただけで、相不變とぼとぼと寂しい歩みを運んで參ります。さては流石の摩利信乃法師も、平太夫の異樣な風俗を、不審に思つたものと見えると、かう私の甥は考へましたが、やがてその側まで參りますと、まだ我を忘れたやうに、道祖の神の祠を後にして、佇んでゐる沙門の眼なざしが、如何に天狗の化身とは申しながら、どうも唯事とは思はれません。いや、反つてその眼なざしには、何時もの氣味の惡い光がなくて、まるで涙ぐんででもゐるやうな、もの優しい潤ひが、漂つてゐるのでございます。それが祠の屋根へ枝をのばした、椎の青葉の影を浴び

て、あの女菩薩の旗竿を斜に肩へあてながら、しげしげ向うを見送つてゐた立ち姿の寂しさは、一生の中にたつた一度、私の甥にもあの沙門を懐しく思はせたとか申す事でございました。が、その内に私の甥の足音に驚かされたのでございませう。摩利信乃法師は夢のさめたやうに、慌しくこちらを振り向きますと、急に片手を高く擧げて、怪しい九字を切りながら、何か呪文のやうなものを口の内に繰返して、匆々歩きはじめました。その時の呪文の中に、中御門と云ふやうな語が聞えたと申しますが、それは事によると私の甥の耳のせゐだつたかもわかりません。元よりその間も平太夫の方は、やはり花橘の枝を肩にして、側目もふらず悄々と歩いて參つたのでございます。そこで又私の甥も、見え隠れにその跡をつけて、とうとう西洞院の御屋形まで參つたさうでございますが、時にあの摩利信乃法師の不思議な振舞が氣になつて、若殿樣の御文の事さへ、はては忘れさうになつた位、落着かない心もちに苦しめられたとか申して居りました。

しかしその御文は恙なく、御姫樣の御手もとまでとどいたものと見えまして、珍しくも今度に限つて早速御返事がございました。これは私ども下々には、何とも確な事は申し上げる譯に參りませんが、恐らくは御承知の通り御濶達な御姫樣の事でございますから、平太夫からあの暗討ち

の次第でも御聞きになつて、若殿様の御氣象の人に優れていらつしやるのを、始めて御會得になつたからでもございませうか。それから二三度、御消息を御取り交せになつた後、とうとう或小雨の降る夜、若殿様は私の甥を御供に召して、もう葉柳の陰に埋もれた、西洞院の御屋形へ忍んで御通ひになる事になりました。かうまでなつて見ますと、あの平太夫も流石に我が折れたのでございませう。その夜も險しく眉をひそめては居りましたが、私の甥に向ひましても、格別雜言などを申す勢ひはなかつたさうでございます。

十八

その後若殿様は殆ど夜毎に西洞院の御屋形へ御通ひになりましたが、時には私のやうな年よりも御供に御召しになつた事がございました。私が始めてあの御姬様の、眩しいやうな御美しさを拜む事が出來ましたのも、さう云ふ折ふしの事でございます。一度などは御二人で、私を御側近く御呼びよせなさりながら、今昔の移り變りを話せと申す御意もございました。確、その時の事でございませう。御簾のひまから見える御池の水に、さわやかな星の光が落ちて、まだ散り殘つ

た藤の匂がかすかに漂つて來るやうな夜でございましたが、その涼しい夜氣の中に、一人二人の女房を御侍らせになつて、もの靜に御酒盛をなすつていらつしやる御二方の美しさは、まるで倭繪の中からでも、拔け出していらしつたやうでございました。殊に白い單衣襲に薄色の袿を召した御姫樣の清らかさは、をさをさあの赫夜姫にも御劣りになりは致しますまい。

その内に御酒機嫌の若殿樣が、ふと御姫樣の方へ御向ひなさりながら、

「今も爺の申した通り、この狹い洛中でさへ、桑海の變は度々あつた。世間一切の法はその通り絶えず生滅遷流して、刹那も住すと申す事はない。されば無常經にも『未曾有一事不レ被無常呑』と說かせられた。恐らくはわれらが戀も、この掟ばかりは逃れられまい。唯何時始まつて何時終るか、予が氣がかりなのはそれだけぢや。」と、冗談のやうに仰有いますと、御姫樣はとんと拗ねたやうに、大殿油の明るい光をわざと御避けになりながら、

「まあ、憎らしい事ばかり仰有います。ではもう始めから私を、御捨てになる御心算でございますか。」と、優しく若殿樣を御睨みなさいました。が、若殿樣は益御機嫌よく、御盃を御干しになつて、

「いや、それよりも始めから、捨てられる心算で居ると申した方が、一層予の心もちにはふさはしいやうに思はれる。」

「たんと御弄り遊ばしまし。」

御姫様はかう仰有つて、一度は愛くるしく御笑ひになりましたが、急に又御簾の外の夜色へ、うつとりと眼を御やりになつて、

「一體世の中の戀と申すものは、皆そのやうに果ないものでございませうか。」と、獨り語のやうに仰有いました。すると若殿様は何時もの通り、美しい齒を見せて、御笑ひになりながら、

「されば果なくないとも申されまいな。が、われら人間が萬法の無常も忘れはてて、蓮華藏世界の妙樂を暫したりとも味はふのは、唯、戀をしてゐる間だけぢや。いや、その間だけは戀の無常さへ忘れてゐると申してもよい。ぢやによつて予が眼からは、戀慕三昧に日を送つた業平こそ、天晴知識ぢや。われらも穢土の衆苦を去つて、常寂光の中に住さうには伊勢物語をそのまゝの戀をするより外はあるまい。何と御身もさうは思はれぬか。」と、横合ひから御姫様の御顏を御覗きになりました。

「されば戀の功德こそ、千萬無量とも申してよからう。」

十九

やがて若殿樣は、恥しさうに御眼を御伏せになつた御姬樣から、私の方へ、陶然となすつた御顏を御向けになつて、

「何と、爺もさう思ふであらうな。尤もその方には戀とは申さぬ。が、好物の酒ではどうぢや。」

「いえ、却々持ちまして、手前は後生が恐ろしうございます。」

私が白髮を掻きながら、慌ててから御答へ申しますと、若殿樣は又晴々と御笑ひになつて、

「いや、その答へが何よりぢや。爺は後生が恐ろしいと申すが、彼岸に往生せうと思ふ心は、それを暗夜の燈火とも賴んで、この世の無常を忘れようと思ふ心には變りはない。ぢやによつてその方も、釋教と戀との相違こそあれ、所詮は予と同心に極まつたぞ。」

「これは又滅相な。成程御姬樣の御美しさは、伎藝天女も及ばぬ程ではございますが、戀は戀、釋教は釋教、まして好物の御酒などと、一つ際には申せませぬ。」

「さう思ふのはその方の心が狭いからの事ぢや。彌陀も女人も、予の前には、皆われらの悲しさを忘れさせる傀儡の類ひに外ならぬ。――」

かう若殿様が御云ひ張りになると、急に御姫様は偸むやうに、ちらりとその方を御覽になりながら、

「それでも女子が傀儡では、嫌ぢやと申しは致しませぬか。」と、小さな御聲で仰有いました。

「傀儡で惡くば、佛菩薩とも申さうか。」

若殿様は勢ひよく、かう御返事をなさいましたが、ふと何か御思ひ出しなすつたやうに、ぢつと大殿油の火影を御覽になると、

「昔、あの菅原雅平と親う交つてゐた頃にも、度々このやうな議論を鬪はせた。御身も知つて居られようが、雅平は予と違つて、一圖に信を起し易い、云はば朴直な生れがらぢや。されば予が世尊金口の御經も、實は戀歌と同樣ぢやと嘲笑ふ度に腹を立てて、煩惱外道とは予が事ぢやと、再々惡しざまに罵り居つた。その聲さへまだ耳にあるが、當の雅平は行方も知れぬ。」と、何時になく沈んだ御聲でもの思はしげに御呟きなさいました。するとその御容子にひき入れられたのか、

暫くの間は御姫様を始め、私までも口を噤んで、しんとした御部屋の中には藤の花の匂ばかりが、一段と高くなつたやうに思はれましたが、それを御座が白けたとでも、思つたのでございませう。女房たちの一人が恐る恐る、

「では、この頃洛中に流行ります摩利の教とやら申すのも、やはり無常を忘れさせる新しい方便なのでございませう。」と、御話の楔を入れますと、もう一人の女房も、

「さう申せばあの教を說いて步きます沙門には、いろいろ怪しい評判があるやうでございませんか。」と、さも氣味惡さうに申しながら、大殿油の燈心をわざとらしく搔立てました。

二十

「何、摩利の教。それは又珍しい教があるものぢや。」

何か御考へに耽つていらしつた若殿樣は、思ひ出したやうに、御盃を御擧げになると、その女房の方を御覽になつて、

「摩利と申すからは、摩利支天を祭る教のやうぢやな。」

「いえ、摩利支天ならよろしうございますが、その教の本尊は、見慣れぬ女菩薩の姿ぢやと申す事でございます。」

「では、波斯匿王の妃の宮であつた、茉利夫人の事でも申すと見える。」

そこで私は先日神泉苑の外で見かけました、摩利信乃法師の振舞を逐一御話し申し上げてから、

「その女菩薩の姿では、茉利夫人とやらのやうでもございませぬ。いや、それよりはこれまでのどの佛菩薩の御像にも、似てゐないのでございます。別してあの赤裸の幼子を抱いて居るけうとさは、とんと人間の肉を食む女夜叉のやうだとも申しませうか。兎に角本朝には類のない、邪宗の佛に相違ございますまい。」と、私の量見を言上致しますと、御姫樣は美しい御眉をそつと御ひそめになりながら、

「さうしてその摩利信乃法師とやら申す男は、眞實天狗の化身のやうに見えたさうな。」と、念を押すやうに御尋ねなさいました。

「さやうでございます。風俗はとんと火の燃える山の中からでも、翼に羽搏つて出て來たやうでございますが、よもやこの洛中に、白晝さやうな變化の物が出沒致す事はございますまい。」

するとわか殿様は又元のやうに、冴々した御笑聲で、

「いや、何とも申されぬ。現に延喜の御門の御代には、五條あたりの柿の梢に、七日の間天狗が御佛の形となつて、白毫光を放つたとある。又佛眼寺の仁照阿闍梨を日毎に凌じに參つたのも、姿は女と見えたが實は天狗ぢや。」

「まあ、氣味の悪い事を仰有います。」

御姫様は元より、二人の女房も、一度にかう云つて、襲の袖を合せましたが、若殿様は愈御酒機嫌の御顏を御和げになつて、

「三千世界は元より廣大無邊ぢや。僅ばかりの人間の智慧で、ないと申される事は一つもない。たとへばその沙門に化けた天狗が、この屋形の姫君に心を懸けて、或夜ひそかに破風の空から、爪だらけの手をさしのべようも、全くない事ぢやとは誰も云へぬ。が、――」と仰有りながら、殆ど色も御變りにならないばかり、恐ろしげに御寄りそひになつた御姫様の袿の背を、やさしく御さすりになりながら、

「が、まだその摩利信乃法師とやらは、幸、姫君の姿さへ垣間見た事もないであらう。先、それ

までは魔道の戀が、成就する氣づかひはよもあるまい。さればもうそのやうに、怖がられずとも大丈夫ぢや。」と、まるで子供をあやすやうに、笑つて御慰めなさいました。

二十一

それから一月ばかりと申すものは、何事もなくすぎましたが、やがて夏も眞盛りの或日の事、加茂川の水が一段と眩く日の光を照り返して、炎天の川筋には引き舟の往來さへとぎれる頃でございます。ふだんから釣の好きな私の甥は、五條の橋の下へ參りまして、河原蓬の中に腰を下しながら、ここばかりは涼風の通ふのを幸と、水嵩の減つた川に絲を下して、頻に鮠を釣つて居りました。すると丁度頭の上の欄干で、どうも聞いた事のあるやうな話し聲が致しますから、何氣なく上を眺めますと、そこにはあの平太夫が高扇を使ひながら、欄干に身をよせかけて、例の摩利信乃法師と一しよに、餘念なく何事か話して居るではございませんか。

それを見ますと私の甥は、以前油小路の辻で見かけた、摩利信乃法師の不思議な振舞がふと心に浮びました。さう云へばあの時も、どうやら二人の間には、曰くがあつたやうでもある。――

かう私の甥は思ひましたから、眼は絲の方へやつてゐても、耳は橋の上の二人の話を、ぢつと聞き澄まして居りますと、向うは人通りも殆ど途絶えた、日盛りの寂しさに心を許したのでございませう。私の甥の居る事などには、更に氣のつく容子もなく、思ひもよらない、大それた事を話し合つて居るのでございます。

「あなた様がこの摩利の教を御擴めになつていらつしやらうなどとは、この廣い洛中で誰一人存じて居るものはございますまい。私でさへあなた様が御自分でさう仰有るまでは、どこかで御見かけ申したとは思ひながら、とんと覺えがございませんでした。それも亦考へて見れば、尤もな次第でございます。何時ぞやの春の月夜に櫻人の曲を御謠ひになつた、あの御年若なあなた様と、唯今かうして炎天に裸で御歩きになつていらつしやる、慮外ながら天狗のやうな、見るのも凄じいあなた様と、同じ方でいらつしやらうとは、あの打伏の巫子に聞いて見ても、わからないのに相違ございません。」

かう平太夫が口輕く、扇の音と一しよに申しますと、摩利信乃法師はまるで又、どこの殿様かと疑はれる、鷹揚な言つきで、

「わしもその方に會つたのは何よりも滿足ぢや。何時ぞや油小路の道祖の神の祠の前でも、ちらと見かけた事があつたが、その方は側目もふらず、文をつけた橘の枝を力なくかつぎながら、もの思はしげにたどたどと屋形の方へ歩いて參つた。」

「さやうでございますか。それは又年甲斐もなく、失禮な事を致したものでございます。」

平太夫はあの朝の事を思ひ出したのでございませう。苦々しげにかう申しましたが、やがて勢の好い扇の音が、再びはたはたと致しますと、

「しかしかうして今日御眼にかかれたのは、全く清水寺の觀世音菩薩の御利益でもございませう。平太夫一生の内に、これ程嬉しい事はございません。」

「いや、予が前で神佛の名は申すまい。不肖ながら、予は天上皇帝の神勅を蒙つて、わが日の本に摩利の教を布かうと致す沙門の身ぢや。」

二十二

急に眉をひそめたらしいけはひで、かう摩利信乃法師が言を挾みましたが、存外平太夫は恐れ

入つた氣色もなく、扇と舌と同じやうに働かせながら、

「成程さやうでございましたな。平太夫も近頃はめつきり老耄れたと見えまして、する事爲す事悉く落度ばかりでございます。いや、さう云ふ次第ならもうあなた樣の御前では、二度と神佛の御名は口に致しますまい。尤も日頃はこの老爺も、餘り信心氣などと申すものがある方ではございません。それを唯今急に、觀世音菩薩などと述べ立てましたのは、全く久しぶりで御目にかゝつたのが、嬉しかつたからでございます。さう申せば姫君も、幼馴染のあなた樣が御無事でいらつしやると御聞きになつたら、どんなにか御喜びになる事でございませう。」と、ふだん私どもに向つては、返事をするのも面倒さうな、口の重い容子とは打つて變つて、勢ひよく、辯じ立てました。これにはあの摩利信乃法師も、返事のしやうさへなささうに暫くは唯、頷いてばかりゐるやうでございましたが、やがてその姫君と云ふ言を機會に、

「さてその姫君に就いてぢやが、予は聊か密々に御意得たい仔細がある。」と、云つて、一段と又聲をひそめながら、

「何と平太夫、その方の力で夜分なりと、御目にかゝらせてはくれまいか。」

するとこの時橋の上では、急に扇の音が止んでしまひました。それと同時に私の甥は、危く欄干の方を見上げようと致しましたが、元より迂濶な振舞をしては、こゝに潜んでゐる事が見露されないものでもございません。そこでやはり河原蓬の中を流れて行く水の面を眺めた儘、息もつかずに上の容子へ氣をくばつて居りました。が、平太夫は今までの元氣に引き換へて、容易に口を開きません。その間の長さと申しましたら、橋の下の私の甥には、體中の筋骨が妙にむづ痒くなつた位、待ち遠しかつたさうでございます。

「たとひ河原とは申しながら、予も洛中に住まふものぢや。堀川の殿がこの日頃、姫君のもとへしげしげと、通はるる趣も知つては居る。――」

やがて又摩利信乃法師は、相不變もの靜な聲で、獨り言のやうに言を繼ぐと、

「が、予は姫君が戀しうて、御意得たいと申すのではない。予の業欲に憧るゝ心は、一度唐土にさすらつて、紅毛碧眼の胡僧の口から、天上皇帝の御教を聽聞すると共に、滅びてしまうた。唯、予が胸を痛めるのは、あの玉のやうな姫君も、この天地を造らせ給うた天上皇帝を知られぬ事ぢや。されば神と云ひ佛と云ふ天魔外道の類を信仰せられて、その形になぞらへた木石にも香花を

供へられる。かくてはやがて命終の期に臨んで、永劫消えぬ地獄の火に焼かれ給ふに相違ない。予はその事を思ふ度に、阿鼻大城の暗の底へ逆落しに落ちさせらるゝ、あえかな姫君の姿さへありありと眼に浮んで來るのぢや。現に昨夜も。――」

から云ひかけて、あの沙門はさも感慨に堪へないらしく、次第に力の籠つて來た口を暫くの間とざしました。

二十三

「昨晩、何かあつたのでございますか。」

程經て平太夫が、心配さうに、から相手の言を促しますと、摩利信乃法師はふと我に返つたやうに、又元の靜な聲で、一言毎に間を置きながら、

「いや、何もあつたと申す程の仔細はない。が、予は昨夜もあの菰だれの中で、獨りうとうととと眠つて居ると、柳の五つ衣を着た姫君の姿が、夢に予の枕もとへ歩みよられた。唯、現と異つたは、日頃つややかな黑髮が、朦朧と煙つた中に、黄金の釵子が怪しげな光を放つて居つただけぢ

や。予は絶えて久しい對面の嬉しさに、『ようこそ見えられた』と聲をかけたが、姫君は悲しげな眼を伏せて、予の前に坐られた儘、答へさへせらるゝ氣色はない。と思へば紅の袴の裾に、何やら蠢いてゐるものの姿が見えた。それが袴の裾ばかりか、よう見るに從つて、肩にも居れば、胸にも居る。中には黒髪の中にゐて、えせ笑ふらしいものもあつた。――」

「と仰有つただけでは解せませんが、一體何が居つたのでございます。」

この時は平太夫も、思はず知らず沙門の調子に釣り込まれてしまつたのでございませう。かう尋ねました聲ざまには、もうさつきの氣負つた勢ひも聞えなくなつて居りました。が、摩利信乃法師は、やはりもの思はしげな口ぶりで、

「何が居つたと申す事は、予自身にもしかとはわからぬ。予は唯、水子程の怪しげなものが、幾つとなく群つて、姫君の身のまはりに蠢いてゐるのを眺めただけぢや。が、それを見ると共に、夢の中ながら予は悲しうなつて、聲を惜まず泣き叫んだ。姫君も予の泣くのを見て、頻に涙を流される。それが久しい間續いたと思うたが、やがて、どこやらで鷄が啼いて、予の夢はそれぎり覺めてしまうた。」――

摩利信乃法師がかう語り終りますと、今度は平太夫も口を噤んで、一しきりやめてゐた扇を又も使ひ出しました。私の甥はその間中鈎にかゝつた鮠も忘れる位、聞き耳を立てて居りましたが、この夢の話を聞いてゐる中は、橋の下の涼しさが、何となく肌身にしみて、さう云ふ御姫様の悲しい御姿を、自分も何時か朧げに見た事があるやうな、不思議な氣が致したさうでございます。

その内に橋の上では、又摩利信乃法師の沈んだ聲がして、

「予はその怪しげなものを妖魔ぢやと思ふ。されば天上皇帝は、墮獄の業を負はせられた姫君を憐れと見そなはして、予に教化を施せと靈夢を賜つたのに相違ない。予がその方の力を藉りて、姫君に御意得たいと申すのは、かう云ふ仔細があるからぢや。何と予が頼みを聞き入れてはくれまいか。」

それでも猶、平太夫は暫くためらつてゐたやうでございますが、やがて扇をつぼめたと思ふと、それで欄干を丁と打ちながら、

「よろしうございます。この平太夫は何時ぞや清水の阪の下で、辻冠者ばらと刃傷を致しました時、すんでに命も取られる所を、あなた様の御かげによつて、落ち延びる事が出來ました。その

御恩を思ひますと、あなた様の仰有る事に、いやと申せた義理ではございません。摩利の教とやらに御歸依なさるか、なさらないか、それは姫君の御意次第でございますが、久しぶりであたた様の御目にかゝると申す事は、姫君も御嫌ではございますまい。兎に角私の力の及ぶ限り、御對面だけはなされるやうに御取り計らひ申しませう。」

二十四

その密談の仔細を甥の口から私が詳しく聞きましたのは、それから三四日たつた或朝の事でございます。日頃は人の多い御屋形の侍所も、その時は私共二人だけで、眩ゆく朝日のさした植込みの梅の青葉の間からは、それでも涼しいそよ風が、そろそろ動かうとする秋の心もちを時時吹いて參りました。

私の甥はその話を終つてから、一段と聲をひそめますと、

「一體あの摩利信乃法師と云ふ男が、どうして姫君を知つて居るのだか、それは元より私にも不思議と申す外はありませんが、兎に角あの沙門が姫君の御意を得るやうな事でもあると、どうも

この御屋形の殿樣の御身の上には、思ひもよらない凶變でも起りさうな不吉な氣がするのです。が、このやうな事は殿樣に申上げても、あの通りの御氣象ですから、決して御取り上げにはならないのに相違ありません。そこで、私は私の一存で、あの沙門を姫君の御目にかゝれないやうにしようと思ふのですが、叔父さんの御考へはどういふものでせう。」

「それはわしも、あの怪しげな天狗法師などに姫君の御顏を拜ませたく無い。が、御主もわしも、殿樣の御用を缺かぬ限りは、西洞院の御屋形の警護ばかりして居る譯にも行かぬ筈ぢや。されば御主はあの沙門を、姫君の御身のまはりに、近づけぬと云うたにした所で。――」

「さあ、そこです。姫君の思召しも私共には分りませんし、その上あすこには平太夫と云ふ老爺も居りますから、摩利信乃法師が西洞院の御屋形に立寄るのは、迂濶に邪魔も出來ません。が、四條河原の蓆張りの小屋ならば、毎晩きつとあの沙門が寢泊りする所ですから、隨分こちらの思案次第で、二度とあの沙門が洛中へ出て來ないやうにすることも出來さうなものだと思ふのです。」

「と云うて、あの小屋で見張りをしてる譯にも行くまい。御主の申す事は、何やら謎めいた所があつて、わしのやうな年寄りには、十分に解し兼ねるが、一體御主はあの摩利信乃法師をどうし

ようと云ふ心算なのぢや。」

　私が不審さうにかう尋ねますと、私の甥は恰も他聞を憚るやうに、梅の青葉の影がさして居る部屋の前後へ目をくばりながら、私の耳へ口を附けて、

「どうすると云うて、外に仕方のある筈がありません。夜更けにでも、そつと四條河原へ忍んで行つて、あの沙門の息の根を止めてしまふばかりです。」

　これには流石の私も暫くの間は呆れ果てて、二の句をつぐ事さへ忘れて居りましたが、甥は若い者らしい、一圖に思ひつめた調子で、

「何、高があの通りの乞食法師です。たとひ加勢の二三人はあらうとも、仕止めるのに造作はありますまい。」

「が、それはどうもちと無法なやうぢや。成程あの摩利信乃法師は、邪宗門を擴めては歩いて居ようが、その外には何一つ罪らしい罪も犯して居らぬ。さればあの沙門を殺すのは、云はば無辜を殺すとでも申さう。――」

「いや、理窟はどうでもつくものです。それよりももしあの沙門が、例の天上皇帝の力か何か藉

りて、殿様や姫君を呪ふやうな事があつたとして御覧なさい。叔父さん始め私まで、かうして祿を頂いてゐる甲斐がないぢやありませんか。」

私の甥は顏を火照らせながら、どこまでもかう辯じつゞけて、私などの申す事には、とんと耳を藉しさうな氣色さへもございません。――すると丁度そこへ外の侍たちが、扇の音をさせながら、二三人はひつて參りましたので、とうとうこの話もその場限り、御流になつてしまひました。

二十五

それから又、三四日はすぎたやうに覺えて居ります。或星月夜の事でございましたが、私は甥と一しよに更闌けてから四條河原へそつと忍んで參りました。その時でさへまだ私には、あの天狗法師を殺さうと云ふ心算もなし、又殺す方がよいと云ふ氣もあつた譯ではございません。が、どうしても甥が初の目ろみを捨てないのと、甥を一人でやる事が何故か妙に氣がかりだつたのとで、とうとう私までが年甲斐もなく、河原蓬の露に濡れながら、摩利信乃法師の住む小屋を目がけて、窺ひよることになつたのでございます。

御承知の通りあの河原には、見苦しい非人小屋が、何軒となく立ち並んで居りますが、今はもうこゝに多い白癩の乞食たちも、私などが思ひもつかない、怪しげな夢をむすびながら、ぐつすり睡入つて居るのでございませう。私と甥とが足音を偸み偸み、靜にその小屋の前を通りぬけました時も、蓆壁の後には唯、高鼾の聲が聞えるばかり、どこもかしこもひつそりと靜まり返つて、たつた一所焚き殘してある芥火さへ、風もないのか夜空へ白く、まつすぐな煙をあげて居ります。殊にその煙の末が、所斑な天の川と一つでゐるのを眺めますと、どうやら數へ切れない星屑が、洛中の天を傾けて、一尺づつ一寸づつ、辷る音まではつきりと聞きとれさうに思はれました。

その中に私の甥は、兼ねて目星をつけて置いたのでございませう、加茂川の細い流れに臨んでゐる、菰だれの小屋の一つを指さしますと、河原蓬の中に立つた儘、私の方をふり向きまして、「あれです。」と、一言申しました。折からあの焚き捨てた芥火が、まだ焔の舌を吐いてゐるそのかすかな光に透かして見ますと、小屋はどれよりも小さい位で、竹の柱も古蓆の屋根も隣近所と變りはございませんが、それでもその屋根の上には、木の枝を組んだ十文字の標が、夜目にもい

かめしく立つて居ります。

「あれか。」

私は覺束ない聲を出して、何と云ふ事もなくかう問ひ返しました。實際その時の私には、まだ摩利信乃法師を殺さうとも、殺すまいとも、はつきりした決斷がつかずにゐたのでございます。が、さう云ふ内にも私の甥が、今度はふり向くらしい容子もなく、ぢつとその小屋を見守りながら、

「さうです。」と、素つ氣なく答へる聲を聞きますと、愈太刀へ血をあやす時が來たと云ふ、何とも云ひやうのない心もちで、思はず總身がわなゝきました。すると甥は早くも身仕度を整へたものと見えて、太刀の目釘を叮嚀に潤しますと、まるで私には目もくれず、そつと河原蓬を蹈み分けながら、餌食を覗ふ蜘蛛のやうに、音もなく小屋の外へ忍びよりました。いや全く芥火の朧げな光のさした、蓆壁にぴつたり體をよせて、内のけはひを窺つてゐる私の甥の後姿は、何となく大きな蜘蛛のやうな氣味の惡いものに見えたのでございます。

二十六

が、から云ふ場合に立ち至つたからは、元よりこちらも手を束ねて、見て居る譯には參りません。そこで水干の袖を後で結ぶと、甥の後から私も、小屋の外へ窺ひよつて、蓆の隙から中の容子を、ぢつと覗きこみました。

すると先、眼に映つたのは、あの旗竿に掲げて歩く女菩薩の畫像でございます。それが今は、向うの蓆壁にかけられて、形ははつきりと見えませんが、入口の菰を洩れる芥火の光をうけて、美しい金の光輪ばかりが、まるで月蝕か何かのやうに、ほんのり燦めいて居りました。又その前に横になつて居りますのは、晝の疲れに前後を忘れた摩利信乃法師でございませう。それからその寢姿を半蔽つてゐる、着物らしいものが見えましたが、これは芥火に反いてゐるので、噂に聞く天狗の翼だか、それとも天竺にあると云ふ火鼠の裘だかわかりません。——

この容子を見た私どもは、云はず語らず兩方から沙門の小屋を取圍んで、そつと太刀の鞘を拂ひました。が、私は初めからどうも妙な氣おくれが致してゐたからでございませう。その拍子に

手もとが狂つて、思はず鋭い鍔音を響かせてしまつたではございませんか。すると私が心の中で、はつと思ふ暇さへなく、今まで息もしなかつた菰だれの向うの摩利信乃法師が、忽ち身を起したらしいけはひを見せて、

「誰ぢや。」と、一聲咎めました。もうかうなつては、甥を始め、私までも騎虎の勢ひで、どうしてもあの沙門を、殺すより外はございません。そこでその聲がするや否や、前と後と一齊に、ものも云はず白刃をかざして、いきなり小屋の中へつきこみました。その白刃の觸れ合ふ音、竹の柱の折れる音、蓆壁の裂け飛ぶ音、――さう云ふ物音が凄じく、一度に致したと思ひますと、矢庭に甥が、二足三足後の方へ飛びすさつて、

「おのれ、逃がしてたまらうか。」と、太刀をまつかうにふりかざしながら、苦しさうな聲でをめきました。その聲に驚いて私も素早く跳ねのきながら、まだ燃えてゐる芥火の光にきつと向うを透かして見ますと、まあ、どうでございませう。粉微塵になつた小屋の前には、あの無氣味な摩利信乃法師が、薄色の袿を肩にかけて、まるで猿のやうに身をかがめながら、例の十文字の護符を額にあてて、ぢつと私どもの振舞を窺つてゐるのでございます。これを見た私は、元よりすぐ

にも一刀浴びせようとあせりましたが、どう云ふものか、あの沙門の身をかゞめたまはりには、自然と闇が濃くなるやうで、容易に飛びかゝる隙がございません。或はその闇の中に、何やら目に見えぬものが渦巻くやうで、太刀の狙ひが定まらなかつたとも申しませうか。これは甥も同じ思ひだつたものと見えて、時々喘ぐやうに叫びますが、白刃は何時までもその頭の上に目まぐるしくくるくると輪ばかり描いて居りました。

二十七

その中に摩利信乃法師は、徐に身を起しますと、十文字の護符を左右にふり立てながら、嵐の叫ぶやうな凄い聲で、

「やい。おのれらは勿體なくも、天上皇帝の御威徳を蔑に致す心得か。この摩利信乃法師が一身は、おのれらの曇つた眼には、唯、墨染の法衣の外に蔽ふものもないやうぢやが、眞は諸天童子の數を盡して、百萬の天軍が守つて居るぞよ。ならば手柄にその白刃をふりかざして、法師の後に從うた聖衆の車馬劍戟と力を競うて見るがよいわ。」と、末は嘲笑ふやうに罵りました。

元よりから嚇されても、それに悸毛を震ふ樣な私どもではございません。甥と私とはこれを聞くと、まるで綱を放れた牛のやうに、兩方からあの沙門を目蒐けて斬つてかゝりました。いや、將に斬つてかゝらうとしたとでも申しませうか。と申しますのは、私どもが太刀をふりかぶつた刹那に、摩利信乃法師が十文字の護符を、一しきり又頭の上で、振りまはしたと思ひますと、その護符の金色が、稻妻のやうに宙へ飛んで、忽ち私どもの眼の前へは、恐ろしい幻が現れたのでございます。あゝ、あの恐ろしい幻は、どうして私などの口の先で、御話し申す事が出來ませう。もし出來たと致しましても、それは恐らく麒麟の代りに、馬を指して見せると大した違ひはございますまい。が、出來ないながら申上げますと、最初あの護符が空へあがつた拍子に、私は河原の闇が、突然摩利信乃法師の後だけ、裂け飛んだやうに思ひました。するとその闇の破れた所には、數限りもない焰の馬や焰の車が、龍蛇のやうな怪しい姿と一しよに、雨より急な火花を散らしながら、今にも私共の頭上をさして落ちかゝるかと思ふばかり、天に溢れてありありと浮び上つたのでございます。と思ふと又、その中に旗のやうなものや、劍のやうなものも、何千何百となく燦いて、そこからまるで大風の海のやうな、凄じいもの音が、河原の石さへ走らせさうに、

どつと沸き返つて參りました。それを後に背負ひながら、やはり薄色の袿を肩にかけて、十文字の護符をかざした儘、嚴に立つてゐるあの沙門の異様な姿は、全くどこかの大天狗が、地獄の底から魔軍を率ゐて、この河原のただ中へ天下つたやうだとでも申しませうか。――

私どもは餘りの不思議に、思はず太刀を落すや否や、頭を抱へて右左へ、一たまりもなくひれ伏してしまひました。するとその頭の空に、摩利信乃法師の罵る聲が、又いかめしく響き渡つて、

「命が惜しくば、その方どもも天上皇帝に御詫申せ。さもない時は立ちどころに、護法百萬の聖衆たちは、その方どもの臭骸を段々壞に致さうぞよ。」と、雷のやうに呼はります。その恐ろしさ、物凄さと申しましたら、今になつて考へましても、身ぶるひが出ずには居られません。そこで私もとうとう我慢が出來なくなつて、合掌した手をさし上げながら、眼をつぶつて恐る恐る、「南無天上皇帝」と稱へました。

二十八

それから先の事は、申し上げるのさへ、御恥しい位でございますから、なる可く手短に御話し致しませう。私共が天上皇帝を祈りましたせゐか、あの恐ろしい幻は間もなく消えてしまひましたが、その代り太刀音を聞いて起て來た非人たちが、四方から私どもをとり圍みました。それが又、大抵は摩利の教の信者たちでございますから、私どもが太刀を捨ててしまつたのを幸に、いざと云へば手ごめにでもし兼ねない勢ひで、口々に凄じく罵り騒ぎながら、まるで豺にかゝつた狐でも見るやうに、男も女も折り重なつて、憎さげに顔を覗きこまうとするのでございます。その何人とも知れない白癩どもの面が、新に燃え上つた芥火の光を浴びて、星月夜の空も見えない程、前後左右から頸をのばした氣味惡さは、到底この世のものとは思はれません。

が、その中でも流石に摩利信乃法師は、徐に哮り立つ非人たちを宥めますと、例の怪しげな微笑を浮べながら、私どもの前へ進み出まして、天上皇帝の御威德の難有い本末を懇々と説いて聽かせました。が、その間も私の氣になつて仕方がなかつたのは、あの沙門の肩にかゝつてゐる、美しい薄色の袿の事でございます。元より薄色の袿と申しましても、世間に類の多いものではございますが、もしやあれは中御門の姫君の御召し物ではございますまいか。萬一さうだと致しま

したら、姫君はもう何時の間にか、あの沙門と御對面になつたのでございませうし、或はその上に摩利の教も、御歸依なすつてしまはないとは限りません。かう思ひますと私は、おちおち相手の申します事も、耳にはひらない位でございましたが、うつかりそんな素振を見せましては、又どんな恐ろしい目に遇はされないものでもございますまい。しかも摩利信乃法師の容子では、私どもも唯、神佛を蔑されるのが口惜しいので、闇討をしかけたものだとでも思つたのでございませう。幸、堀川の若殿樣に御仕へ申してゐる事なぞは、氣のつかないやうに見えましたから、あの薄色の袿にも、成る可く眼をやらないやうにして、河原の砂の上に坐つた儘、わざと神妙にあの沙門の申す事を聽いて居るらしく裝ひました。

するとそれが先方には、如何にも殊勝げに見えたのでございませう。一通り談義めいた事を說いて聽かせますと、摩利信乃法師は顏色を和げながら、あの十文字の護符を私どもの上にさしかざして、

「その方どもの罪業は無知蒙昧の然らしめた所ぢやによつて、天上皇帝も格別の御宥免を賜はせらるるに相違あるまい。さればわしもこの上猶、叱り懲さうとは思うて居ぬ。やがては又、今夜

の闇討が緣となつて、その方どもが摩利の御教に歸依し奉る時も參るであらう。ぢやによつてその時が參るまでは、一先この場を退散致したが好い。」と、もの優しく申してくれました。尤もその時でさへ、非人たちは、今にも摑みかゝりさうな、凄じい氣色を見せて居りましたが、これもあの沙門の鶴の一聲で、素直に私どもの歸る路を開いてくれたのでございます。

そこで私と甥とは、太刀を鞘にをさめる間も惜しいやうに、匆々四條河原から逃げ出しました。その時の私の心もちと申しましたら、嬉しいとも、悲しいとも、乃至は又殘念だとも、何ともお話しの致しやうがございません。でございますから河原が遠くなつて、唯、あの芥火の赤く搖めくまはりに、白癩どもが蟻のやうに集つて、何やら怪しげな歌を唄つて居りますのが、かすかに耳へはひりました時も、私どもは互の顏さへ見ずに、默つて吐息ばかりつきながら、歩いて行つたものでございます。

二十九

それ以來私どもは、よるとさはると、額を鳩めて、摩利信乃法師と中御門の姫君とのいきさ

つを互に推量し合ひながら、どうかしてあの天狗法師を遠ざけたいと、いろいろ評議を致しましたが、さて例の恐ろしい幻の事を思ひ出しますと、容易に名案も浮びません。尤も甥の方は私より若いだけに、まだ執念深く初一念を捨てないで、場合によつたら平太夫のしたやうに、辻冠者どもでも驅り集めたら、もう一度四條河原の小屋を劫さう位な考へがあるやうでございました。所がその中に、思ひもよらず、又私どもは摩利信乃法師の神變不思議な法力に、驚くやうな事が出來たのでございます。

それはもう秋風の立ち始めました頃、長尾の律師様が嵯峨に阿彌陀堂を御建てになつて、その供養をなすつた時の事でございます。その御堂も只今は燒けてございませんが、何しろ國々の良材を御集めになつた上に、高名な匠たちばかり御召しになつて、莫大な黄金も御かまひなく、御造りになつたのでございますから、御規模こそさのみ大きくなくつても、その莊嚴を極めて居りました事は、略御推察が參るでございませう。

別してその御堂供養の當日は、上達部殿上人は申すまでもなく、女房たちの參つたのも數限りない程でございましたから、東西の廊に寄せてあるさまざまの車と申し、その廊々の棧敷をめぐ

つた、錦の縁のある御簾と申し、或は又御簾際になまめかしくうち出した、萩、桔梗、女郎花などの褄や袖口の彩りと申し、うらゝかな日の光を浴びた、境内一面の美しさは、目のあたりに蓮華寳土の景色を見るやうでございました。それから、廊に圍まれた御庭の池にはすきまもなく、紅蓮白蓮の造り花が簇々と咲きならんで、その間を龍舟が一艘、錦の平張りを打ちわたして、蠻繪を着た童部たちに畫棹の水を切らせながら、微妙な樂の音を漂はせて、悠々と動いて居りましたのも、涙の出る程尊げに拜まれたものでございます。

まして正面を眺めますと、御堂の犬防ぎが燦々と螺鈿を光らせてゐる後には、名香の煙のたなびく中に、御本尊の如來を始め、勢至觀音などの御姿が、紫磨黄金の御顏や玉の瓔珞を仄々と、御現しになつてゐる難有さは、又一層でございました。その御佛の前の庭には、禮盤を中に挾みながら、見るも眩い寳蓋の下に、講師讀師の高座がございましたが、供養の式に連つてゐる何十人かの僧どもも、法衣や袈裟の青や赤が如何にも美々しく入り交つて、經を讀む聲、鈴を振る音、或は栴檀沈水の香などが、その中から絶え間なく晴れ渡つた秋の空へ、うらうらと昇つて參ります。

するとその供養のまつ最中、四方の御門の外に群つて、一目でも中の御容子を拜まうとしてゐた人々が、俄に何事が起つたのか、見る見るどつとどよみ立つて、まるで風の吹き出した海のやうに、押しつ押されつし始めました。

三十

この騒ぎを見た看督長は、早速そこへ駈けつけて、高々と弓をふりかざしながら、御門の中へ亂れ入つた人々を、打ち鎭めようと致しました。が、その人波の中を分けて、異樣な風俗の沙門が一人、姿を現したと思ひますと、看督長は忽ち弓をすてて、往來の遮をするどころか、その儘そこへひれ伏しながら、まるで帝の御出ましを御拜み申す時のやうに、禮を致したではございませんか。外の騒動に氣をとられて、一しきりざわめき立つた御門の中が、急にひつそりと靜まりますと、又「摩利信乃法師、摩利信乃法師」と云ふ囁き聲が、丁度蘆の葉に渡る風のやうに、どこからともなく起つたのは、この時の事でございます。

摩利信乃法師は、今日も例の通り、墨染の法衣の肩へ長い髮を亂しながら、十文字の護符の黄

金を胸のあたりに燦かせて、足さへ見るも寒さうな素跣足でございました。その後には何時もの女菩薩の幢が、秋の日の光の中にいかめしく掲げられて居りましたが、これは誰か供のものが、さしかざしてでもゐたのでございませう。

「方々にもの申さう。これは天上皇帝の神勅を賜はつて、わが日の本に摩利の教を布かうずる摩利信乃法師と申すものぢや。」

あの沙門は悠々と看督長の拜に答へてから、砂を敷いた御庭の中へ、恐れげもなく進み出て、かう嚴な聲で申しました。それを聞くと御門の中は、又ざわめきたちましたが、流石に檢非違使たちばかりは、思ひもかけない椿事に驚きながらも、役目は忘れなかつたのでございませう。火長と見えるものが二三人、手に手に得物提げて、聲高に狼藉を咎めながら、あの沙門へ走りかゝりますと、矢庭に四方から飛びかゝつて、搦め取らうと致しました。が、摩利信乃法師は憎さげに、火長たちを見やりながら、

「打たば打て。取らば取れ。但、天上皇帝の御罰は立ち所に下らうぞよ。」と、嘲笑ふやうな聲を出しますと、その時胸に下つてゐた十文字の護符が日を受けて、眩くきらりと光ると同時に、何

故か相手は得物を捨てて、晝雷にでも打たれたかと思ふばかり、あの沙門の足もとへ、轉び倒れてしまひました。

「如何に方々。天上皇帝の御威徳は、唯今目のあたりに見られた如くぢや。」

摩利信乃法師は胸の護符を外して、東西の廊へ代る代る、誇らしげにさしかざしながら、

「元よりかやうな靈驗は不思議もない。抑も天上皇帝とは、この天地を造らせ給うた、唯一不二の大御神ぢや。此大御神を知らねばこそ、方々はかくも信心の誠を盡して、阿彌陀如來なんぞと申す妖魔の類を事々しく、供養せらるゝげに思はれた。」

この暴言にたまり兼ねたのでございませう。さつきから誦經を止めて、茫然と事の次第を眺めてゐた僧たちは、俄にどよめきを擧げながら、「打ち殺せ」とか「搦め取れ」とか頻に罵り立てましたが、さて誰一人として席を離れて、摩利信乃法師を懲さうと致すものはございません。

三十一

すると摩利信乃法師は傲然と、その僧たちの方を睨めまはして、

「過てるを知つて憚る事勿れとは、唐國の聖人も申された。一旦、佛菩薩の妖魔たる事を知られたら、匆々摩利の教に歸依あつて、天上皇帝の御威德を讃へ奉るに若くはない。又もし、摩利信乃法師の申し條に疑ひあつて、佛菩薩が妖魔か、天上皇帝が邪神か、決定致し兼ぬるとあるならば、如何やうにも法力を較べ合せて、いづれが正法か辨別申さう。」と、聲も荒らかに呼ばはりました。

が、何しろ唯今も、檢非違使たちが目のあたりに、氣を失つて倒れたのを見て居るのでございますから、御簾の內も御簾の外も、水を打つたやうに聲を呑んで、僧俗ともに誰一人、進んであの沙門の法力を試みようと致すものは見えません。所詮は長尾の僧都は申すまでもなく、その日御見えになつていらしつた山の座主や仁和寺の僧正も、現人神のやうな摩利信乃法師に、膽を御挫かれになつたのでございませう。供養の庭は暫くの間、龍舟の音樂も聲を絕つて、造り花の蓮華にふる日の光の音さへ聞えた位、しんと靜まり返つてしまひました。

沙門はそれに又一層力を得たのでございませう。例の十文字の護符をさしかざして、天狗のやうに嘲笑ひますと、

「これは又笑止千萬な。南都北嶺とやらの聖僧たちも少からぬやうに見うけたが、一人としてこの摩利信乃法師と法力を較べようずものも現れぬは、さては天上皇帝を始め奉り、諸天童子の御神光に恐れをなして、貴賤老若の嫌ひなく、吾が摩利の法門に歸依し奉つたものと見える。さらば此場に於て、先づ山の座主から一人一人灌頂の儀式を行うてとらせようか。」と、威丈高に罵りました。

所がその聲がまだ終らない中に、西の廊からたゞ一人、悠然と庭へ御下りになつた、尊げな御僧がございます。金襴の袈裟、水晶の念珠、それから白い雙の眉毛――一目見ただけでも、天が下に功徳無量の名を轟かせた、横川の僧都だと申す事は疑はうやうもございません。僧都は年こそとられましたが、たぶたぶと肥え太つた體を徐に運びながら、摩利信乃法師の眼の前へ、おごそかに歩みを止めますと、

「こりや下郎。唯今もその方が申す如く、この御堂供養の庭には、法界の龍象數を知らず並み居られるには相違ない。が、鼠に抛つにも器物を忌むの慣ひ、誰かその方如き下郎づれと、法力の高下を競はれうぞ。さればその方は先づ己を恥ぢて、匇々この寶前を退散す可き分際ながら、推

して神通を較べようなどは、近頃以て奇怪至極ぢや。思ふにその方は何處かにて金剛邪禪の法を修した外道の沙門と心得る。ぢやによつて一つは三寶の靈驗を示さん爲、一つはその方の魔縁に惹かれて、無間地獄に墮ちようず衆生を救うてとらさん爲、老衲自らその方と法驗を較べに罷り出た。たとひその方の幻術がよく鬼神を驅り使ふとも、護法の加護ある老衲には一指を觸るゝ事すらよも出來まい。されば佛力の奇特を見て、その方こそ受戒致してよからう。」と、大獅子吼を浴せかけ、忽ち印を結ばれました。

三十二

するとその印を結んだ手の中から、俄に一道の白氣が立上つて、それが隱々と中空へたなびいたと思ひますと、丁度僧都の頭の眞上に、寶蓋をかざしたやうな一團の靄がたなびきました。いや、靄と申したのでは、あの不思議な雲氣の模樣が、まだ十分御會得には參りますまい。もしそれが靄だつたと致しましたら、その向うにある御堂の屋根などは霞んで見えない筈でございますが、この雲氣は唯、虛空に何やら形の見えぬものが蟠まつたと思ふばかりで、晴れ渡つた空の色

さへ、元の通り朗かに見透かされたのでございます。

御庭をめぐつてゐた人々は、いづれもこの雲氣に驚いたのでございませう。又どこからともなく風のやうなざわめきが、御簾を動かすばかり起りましたが、その聲のまだ終らない中に、印を結び直した横川の僧都が、徐に肉の餘つた顋を動かして、祕密の呪文を誦しますと、忽ちその雲氣の中に、朦朧とした二尊の金甲神が、勇ましく金剛杵をふりかざしながら、影のやうな姿を現しました。これもあると思へばあり、ないと思へばないやうな幻ではございます。が、その宙を踏んで飛舞する容子は、今しも摩利信乃法師の腦上へ、一杵を加へるかと思ふ程、神威を帶びて居つたのでございます。

しかし當の摩利信乃法師は、不相變高慢の面をあげて、ぢつとこの金甲神の姿を眺めた儘、眉毛一つ動かさうとは致しません。それどころか、堅く結んだ脣のあたりには、例の無氣味な微笑の影が、さも嘲りたいのを堪へるやうに、漂つて居るのでございます。するとその不敵な振舞に腹を据ゑ兼ねたのでございませう。横川の僧都は急に印を解いて、水晶の念珠を振りながら、「叱。」と、嗄れた聲で大喝しました。

その聲に應じて金甲神が、雲氣と共に空中から、舞下らうと致しましたのと、下にゐた摩利信乃法師が、十文字の護符を額に當てながら、何やら鋭い聲で叫びましたのとが、全く同時でございます。この拍子に瞬く間、虹のやうな光があつて空へ昇つたと見えましたが、金甲神の姿は跡もなく消え失せて、その代りに僧都の水晶の念珠が、まん中から二つに切れると、珠はさながら霰のやうに、戞然と四方へ飛び散りました。

「御坊の手なみは既に見えた。金剛邪禪の法を修したとは、とりも直さず御坊の事ぢや。」

勝ち誇つたあの沙門は、思はずどつと鬨をつくつた人々の聲を壓しながら、高らかにかう罵りました。その聲を浴びた横川の僧都が、どんなに御悄れなすつたか、それは別段とり立てて申すまでもございますまい。もしもあの時御弟子たちが、先を爭ひながら進みよつて、介抱しなかつたと致しましたら、恐らく滿足には元の廊へも歸られなかつた事でございませう。その間に摩利信乃法師は、愈誇らしげに胸を反らせて、

「横川の僧都は、今天が下に法譽無上の大和尚と承はつたが、この法師の眼から見れば、天上皇帝の照覽を昏まし奉つて、妄に鬼神を使役する、云はうやうない火宅僧ぢや。されば佛菩薩は妖

魔の類、釋教は墮獄の業因と申したが、摩利信乃法師一人の誤りか。さもあらばあれ、まだこの上にもわが摩利の法門へ歸依せうと思立たれずば、元より僧俗の嫌ひはない。何人なりともこの場に於て、天上皇帝の御威德を目のあたりに試みられい。」と、八方を睨みながら申しました。

その時、又東の廊に當つて、

「應。」と、涼しく答へますと、御裝束の姿もあたりを拂つて、悠然と御庭へ御下りになりましたのは、別人でもない堀川の若殿樣でございます。

（大正七年十一月）

毛利先生

　歳晩の或暮方、自分は友人の批評家と二人で、所謂腰辨街道の、裸になつた並樹の柳の下を、神田橋の方へ歩いてゐた。自分たちの左右には、昔、島崎藤村が「もつと頭をあげて歩け」と慷慨した、下級官吏らしい人々が、まだ漂つてゐる黄昏の光の中に、蹌踉たる歩みを運んで行く。期せずして、同じく憂鬱な心もちを、拂ひのけようとしても拂ひのけられなかつたからであらう。自分たちは外套の肩をすり合せるやうにして、心もち足を早めながら、大手町の停留場を通りこすまでは、殆ど一言もきかずにゐた。すると友人の批評家が、あすこの赤い柱の下に、電車を待つてゐる人々の寒むさうな姿を一瞥すると、急に身ぶるひを一つして、

「毛利先生の事を思ひ出す。」と、獨り語のやうに呟いた。

「毛利先生と云ふのは誰だい。」

「僕の中學の先生さ。まだ君には話した事がなかつたかな。」

自分は否と云ふ代りに、默つて帽子の庇を下げた。これから下に掲げるのはその時その友人が、歩きながら自分に話してくれた、その毛利先生の追憶である。――

―――――――――――――――――――――

もう彼是十年ばかり以前、自分がまだ或府立中學の三年級にゐた時の事である。自分の級に英語を教へてゐた、安達先生と云ふ若い教師が、インフルエンザから來た急性肺炎で、冬期休業の間に物故してしまつた。それが餘り突然だつたので、適當な後任を物色する餘裕がなかつたからの窮策であらう。自分の中學は、當時或私立中學で英語の教師を勤めてゐた、毛利先生と云ふ老人に、今まで安達先生の受持つてゐた授業を一時囑託した。

自分が始めて毛利先生を見たのは、その就任當日の午後である。自分たち三年級の生徒たちは、新しい教師を迎へると云ふ好奇心に壓迫されて、廊下に先生の靴音が響いた時から、何時になくひつそりと授業の始まるのを待ちうけてゐた。所がその靴音が、日かげの絶えた、寒い教室の外に止まつて、やがて扉が開かれると、――あゝ、自分はかう云ふ中にも、歴々とその時の光景が

眼に浮んでゐる。扉を開いてはいつて來た毛利先生は、何より先その脊の低いのがよく緣日の見世物に出る蜘蛛男と云ふものを聯想させた。が、其の感じから暗澹たる色彩を奪つたのは、殆ど美しいとでも形容したい、光滑々たる先生の禿げ頭で、これはまた後頭部のあたりに、種々たる胡麻鹽の髮の毛が、僅に殘喘を保つてゐたが、大部分は博物の敎科書に畫が出てゐる駝鳥の卵なるものと相違はない。最後に先生の風采を凡人以上に超越させたものは、その怪しげなモオニング・コオトで、これは過去に於て黑かつたと云ふ事實を危く忘却させる位、文字通り蒼然たる古色を帶びたものであつた。しかも先生のうすよごれた折襟には、極めて派手な紫の襟飾が、まるで翼をひろげた蛾のやうに、ものものしく結ばれてゐたと云ふ、驚く可き記憶さへ殘つてゐる。だから先生が敎室へはいると同時に、期せずして笑を堪へる聲が、そこゝの隅から起つたのは、元より不思議でも何でもない。

が、讀本と出席簿とを抱へた毛利先生は、恰も眼中に生徒のないやうな、悠然とした態度を示しながら、一段高い敎壇に登つて、自分たちの敬禮に答へると、如何にも人の好ささうな、血色の惡い丸顏に愛嬌のある微笑を漂はせて、

「諸君」と、金切聲で呼びかけた。

自分たちは過去三年間、未嘗てこの中學の先生から諸君を以て遇せられた事は、一度もない。そこで毛利先生のこの「諸君」は、勢ひ自分たち一同に、思はず驚嘆の眼を見開かせた。と同時に自分たちは、既に「諸君」と口を切つた以上、その後はさしづめ授業方針か何かの大演説があるだらうと、息をひそめて待ちかまへてゐたのである。

しかし毛利先生は、「諸君」と云つた儘、教室の中を見廻して、暫くは何とも口を開かない。肉のたるんだ先生の顔には、悠然たる微笑の影が浮んでゐるのに關らず、口角の筋肉は神經的にびくびく動いてゐる。と思ふと、どこか家畜のやうな所のある晴々した眼の中にも、絶えず落ち着かない光が去來した。それがどうも口にこそ出さないが、何か自分たち一同に哀願したいものを抱いてゐて、しかもその何ものかと云ふ事が、先生自身にも遺憾ながら判然と見きはめがつかないらしい。

「諸君」

やがて毛利先生は、かう同じ調子で繰返した。それから今度はその後へ、丁度その諸君と云ふ

聲の反響を捕へようとする如く、

「これから私が、諸君にチョイス・リイダアを敎へる事になりました」と、如何にも慌しくつけ加へた。

自分たちは益好奇心の緊張を感じて、ひつそりと鳴りを靜めながら、熱心に先生の顏を見守つてゐた。が、毛利先生はさう云ふと同時に、又哀願するやうな眼つきをして、ぐるりと敎室の中を見廻すと、それぎりで急に椅子の上へ彈機がはづれたやうに腰を下した。さうして、既に開かれてゐるチョイス・リイダアの傍へ、出席簿をひろげて眺め出した。この唐突たる挨拶の終り方が、如何に自分たちを失望させたか、と云ふよりも寧、失望を通り越して、如何に自分たちを滑稽に感じさせたか、それは恐らく云ふ必要もない事であらう。

しかし幸にして先生は、自分たちが笑を洩すのに先立つて、あの家畜のやうな眼を出席簿から擧げたと思ふと、忽自分たちの級の一人を「さん」づけにして指名した。勿論すぐに席を離れて、譯讀して見ろと云ふ相圖である。そこでその生徒は立ち上つて、ロビンソン・クルウソオか何かの一節を、東京の中學生に特有な、氣の利いた調子で譯讀した。それを又毛利先生は、時々紫

の襟飾へ手をやりながら、誤譯は元より些細な發音の相違まで、一々丁寧に直して行く。發音は妙に氣取つた所があるが、大體正確で、明瞭で、先生自身もこの方面が特に内心得意らしい。が、その生徒が席に復して、先生がそこを譯讀し始めると、再び自分たちの間には、そこゝから失笑の聲が起り始めた。と云ふのは、あれ程發音の妙を極めた先生も、いざ翻譯をするとなると、殆ど日本人とは思はれない位、日本語の數を知つてゐない。或は知つてゐても、その場に臨んで急には思ひ出せないのであらう。たとへばたつた一行を譯するのにしても、「そこでロビンソン・クルウソオは、とうとう飼ふ事にしました。何を飼ふ事にしたかと云へば、それ、あの妙な獸で――動物園に澤山ゐる――何と云ひましたかね、――えゝとよく芝居をやる――ね、諸君も知つてゐるでせう。それ、顏の赤い――何、猿？　さうさう、その猿です。その猿を飼ふ事にしました。」

勿論猿でさへこの位だから、少し面倒な語になると、何度もその周圍を低徊した揚句でなければ、容易に然る可き譯語にはぶつからない。しかも毛利先生はその度にひどく狼狽して、殆どあの紫の襟飾を引きちぎりはしないかと思ふ程、頻に喉元へ手をやりながら、當惑さうな顏をあげ

て、慌しく自分たちの方へ眼を飛ばせる。と思ふと又、兩手で禿げ頭を抑へながら、机の上へ顏を伏せて、如何にも面目なささうに行きづまつてしまふ。さう云ふ時は、唯でさへ小さな先生の體が、まるで空氣の拔けた護謨風船のやうに、意氣地なく縮み上つて、椅子から垂れてゐる兩足さへ、ぶらりと宙に浮びさうな心もちがした。それを又生徒の方では、面白い事にして、くすくす笑ふ。さうして二三度先生が譯讀を繰返す間には、その笑ひ聲も次第に大膽になつて、とうとうしまひには一番前の机からさへ、公然と湧き返るやうになつた。かう云ふ自分たちの笑ひ聲がどれ程善良な毛利先生につらかつたか、――現に自分ですら今日その刻薄な響を想起すると、思はず耳を蔽ひたくなる事は一再でない。

それでも猶毛利先生は、休憩時間の喇叭が鳴り渡るまで、勇敢に譯讀を續けて行つた。さうして、漸く最後の一節を讀み終ると、再元のやうな悠然たる態度で、自分たちの敬禮に答へながら、今までの慘澹たる惡闘も全然忘れてしまつたやうに、落ち着き拂つて出て行つてしまつた。その後を追ひかけてどつと自分たちの間から上つた、嵐のやうな笑ひ聲、わざと騷々しく机の蓋を明けたり閉めたりさせる音、それから敎壇へとび上つて、毛利先生の身ぶりや聲色を早速使つ

て見せる生徒――あゝ、自分はまだその上に組長の章をつけた自分までが、五六人の生徒にとり圍まれて、先生の誤譯を得々と指摘してゐたと云ふ事實すら、思ひ出さなければならないのであらうか。さうしてその誤譯は？　自分は實際その時でさへ、果してそれがほんたうの誤譯かどうか、確な事は何一つわからずに威張つてゐたのである。

それから三四日經た或午の休憩時間である。自分たち五六人は、機械體操場の砂だまりに集まつて、ヘルの制服の背を暖い冬の日向に曝しながら、遠からず來る可き學年試驗の噂などを、口まめにしやべり交してゐた。すると今まで生徒と一しよに鐵棒へぶら下つてゐた、體量十八貫と云ふ丹波先生が、「一二、」と大きな聲をかけながら、砂の上へ飛び下りると、チョツキばかりに運動帽をかぶつた姿を、自分たちの中に現して、

「どうだね。今度來た毛利先生は。」と云ふ。丹波先生はやはり自分たちの級に英語を敎へてゐたが、有名な運動好きで、兼ねて詩吟が上手だと云ふ所から、英語そのものは嫌つてゐた柔劍道の

選手などと云ふ豪傑連の間にも、大分評判がよかつたらしい。そこで先生がかう云ふと、その豪傑連の一人がミットを弄びながら、

「えゝ、あんまり——何です。皆あんまり、よく出來ないやうだつて云つてゐます。」と、柄にもなくはにかんだ返事をした。すると丹波先生はズボンの砂を手巾ではたきながら、得意さうに笑つて見せて、

「お前よりも出來ないか。」

「そりや僕より出來ます。」

「ぢや、文句を云ふ事はないぢやないか。」

豪傑はミットをはめた手で頭を掻きながら、意氣地なくひつこんでしまつた。が、今度は自分の級の英語の秀才が、度の強い近眼鏡をかけ直すと、年に似合はずませた調子で、

「でも先生、僕たちは大抵專門學校の入學試驗を受ける心算なんですから、出來る上にも出來る先生に教へて頂きたいと思つてゐるんです。」と、抗辯した。が、丹波先生は不相變勇壯に笑ひながら、

「何、たつた一學期やそこいら、誰に教はつたつて同じ事さ。」

「ぢや毛利先生は、一學期だけしか御教へにならないんですか。」

この質問には丹波先生も、聊急所をつかれた感があつたらしい。世故に長けた先生はそれにはわざと答へずに、運動帽を脱ぎながら、五分刈の頭の埃を勢よく拂ひ落すと、急に自分たち一同を見渡して、

「そりや毛利先生は、隨分古い人だから、我々とは少し違つてゐるさ。今朝も僕が電車へ乘つたら、先生は一番まん中にかけてゐたつけが、乘換への近所になると、『車掌、車掌』つて聲をかけるんだ。僕は可笑しくつて、弱つたがね。兎に角一風變つた人には違ひないさ。」と、巧に話頭を一轉させてしまつた。が、毛利先生のさう云ふ方面に關してなら、何も丹波先生を待たなくとも、自分たちの眼を駭かせた事は、あり餘る程澤山ある。——

「それから毛利先生は、雨が降ると、洋服へ下駄をはいて來られるさうです。」

「あの何時も腰に下つてゐる、白い手巾へ包んだものは、毛利先生の御辨當ぢやないんですか。」

「毛利先生が電車の吊皮につかまつてゐられるのを見たら、毛絲の手袋が穴だらけだつたつて云

ふ話です。」

自分たちは丹波先生を圍んで、こんな愚にもつかない事を、四方からやかましく饒舌り立てた。所がそれに釣りこまれたのか、自分たちの聲が一しきり高くなると、丹波先生も何時か浮き浮きした聲を出して、運動帽を指の先でまはしながら、

「それよりかさ。あの帽子が古物だぜ――」と、思はず口へ出して云ひかけた、丁度その時である。機械體操場と向ひ合つて、僅に十歩ばかり隔たつてゐる二階建の校舎の入口へ、どう思つたか毛利先生が、その古物の山高帽を頂いて、例の紫の襟飾へ仔細らしく手をやつた儘、悠然として小さな體を現した。入口の前には一年生であらう、子供のやうな生徒が六七人、人馬か何かして遊んでゐたが、先生の姿を見ると、これは皆先を爭つて、丁寧に敬禮する。毛利先生も亦、入口の石段の上にさした日の光の中に佇んで、山高帽をあげながら笑つて禮を返してゐるらしい。この景色を見た自分たちは、流石に皆一種の羞恥を感じて、暫くの間はひつそりと、賑な笑ひ聲を絶つてしまつた。が、その中で丹波先生だけは、唯、口を噤むべく餘りに恐縮と狼狽とを重ねたからでもあつたらう。「あの帽子が古物だぜ」と、云ひかけた舌をちよいと出して、素早く運動

帽をかぶつたと思ふと、突然くるりと向きを變へて、「一――」と大きく喚きながら、チョツキ一つの肥つた體を、やにはに鐵棒へ抛りつけた。さうして「海老上り」の兩足を遠く空ざまに伸しながら、「二――」と再び喚いた時には、もう冬の青空を鮮に切りぬいて、樂々とその上に上つてゐた。この丹波先生の滑稽なてれ隱しが、自分たち一同を失笑させたのは無理もない。一瞬間聲を呑んだ機械體操場の生徒たちは、鐵棒の上の丹波先生を仰ぎながら、まるで野球の應援でもする時のやうに、わつと囃し立てながら、拍手をした。

かう云ふ自分も皆と一しよに、喝采したのは勿論である。が、喝采してゐる内に、自分は鐵棒の上の丹波先生を、半ば本能的に憎み出した。と云つてもそれ丈又、毛利先生に同情を注いだと云ふ譯でもない。その證據にはその時自分が、丹波先生へ浴びせた拍手は、同時に毛利先生へ、自分たちの惡意を示さうと云ふ、間接目的を含んでゐたからである。今の自分の頭で解剖すれば、その時の自分の心もちは、道德の上で丹波先生を侮蔑すると共に、學力の上では毛利先生も併せて侮蔑してゐたとでも說明する事が出來るかも知れない。或はその毛利先生に對する侮蔑は、丹波先生の「あの帽子が古物だぜ」によつて、一層然る可き裏書きを施されたやうな、づうづうしさ

を加へてゐたとも考へる事が出來るであらう。だから自分は喝采しながら、聳かした肩越しに、昂然として校舍の入口の方を眺めやつた。するとそこには依然として、我毛利先生が、まるで日の光を貪つてゐる冬蠅か何かのやうに、ぢつと石段の上に佇みながら、一年生の無邪氣な遊戲を、餘念もなく獨り見守つてゐる。その山高帽子とその紫の襟飾と――自分は當時、寧、嗤ふ可き對象として、一瞥の中に收めたこの光景が、何故か今になつて見ると、どうしても又忘れる事が出來ない。……

就任の當日毛利先生が、その服裝と學力とによつて、自分たちに起させた侮蔑の情は、丹波先生のあの失策(?)があつて以來、愈級全體に盛になつた。すると、又、それから一週間とたゝない或朝の事である。その日は前夜から雪が降りつゞけて、窓の外にさし出てゐる雨天體操場の屋根などは、一面にもう瓦の色が見えなくなつてしまつたが、それでも教室の中にはストオヴが、赤々と石炭の火を燃え立たせて、窓硝子につもる雪さへ、うす青い反射の光を漂はす暇もなく、

溶けて行つた。そのストオヴの前に椅子を据ゑながら、毛利先生は例の通り、金切聲をふりしぼつて、熱心にチョイス・リイダアの中にあるサアム・オヴ・ライフを教へてゐたが、勿論誰も眞面目になつて、耳を傾けてゐる生徒はない。ない所か、自分の隣にゐた、或柔道の選手の如きは、讀本の下へ武俠世界をひろげて、さつきから押川春浪の冒險小說を讀んでゐる。

それが彼是二三十分は續いたであらう。その中に毛利先生は、急に椅子から身を起すと、丁度今教へてゐるロングフェロオの詩にちなんで、人生と云ふ問題を辯じ出した。趣旨はどんな事だつたか、更に記憶に殘つてゐないが、恐らくは議論と云ふよりも、先生の生活を中心とした感想めいたものだつたと思ふ。と云ふのは先生が、まるで羽根を拔かれた鳥のやうに、絕えず兩手を上げ下げしながら、慌しい調子で饒舌つた中に、

「諸君にはまだ人生はわからない。ね。わかりたいつたつて、わかりはしません。それだけ諸君は幸福なんでせう。我々になると、ちやんと人生がわかる。わかるが苦しい事が多いです。ね。苦しい事が多い。これで私にしても、子供が二人ある。そら、そこで學校へ上げなければならない。上げれば――えゝと――上げれば――學資？　さうだ。その學資が入るでせう。ね。だから

中々苦しい事が多い……」と云ふやうな文句のあつた事を、かすかに覺えてゐるからである。が、何も知らない中學生に向つてさへ、生活難を訴へる――或は訴へない心算でも訴へてゐる、先生の心もちなぞと云ふものは、元より自分たちに理解されよう筈がない。それより訴へると云ふその事實の、滑稽な側面ばかり見た自分たちは、かう先生が述べ立ててゐる中に、誰からともなくくすくす笑ひ出した。唯、それが何時もの哄然たる笑聲に變らなかつたのは、先生の見すぼらしい服裝と金切聲をあげて饒舌つてゐる顏つきとが、如何にも生活難それ自身の如く思はれて、幾分の同情を起させたからであらう。しかし自分たちの笑ひ聲が、それ以上大きくならなかつた代りに、暫くすると、自分の隣にゐた柔道の選手が、突然武俠世界をさし置いて、虎のやうな勢を示しながら、立ち上つた。さうして何を云ふかと思ふと、

「先生、僕たちは英語を教へて頂く爲に、出席してゐます。ですからそれが教へて頂けなければ、教室へはいつてゐる必要はありません。もしもつと御話が續くのなら、僕は今から體操場へ出て行きます。」

かう云つて、その生徒は、一生懸命に苦い顏をしながら、恐しい勢で又席に復した。自分はそ

の時の毛利先生位、不思議な顏をした人を見た事はない。先生はまるで雷に撃たれたやうに、口を半ば開けた儘、ストオヴの側へ棒立ちになつて、一二分の間は唯、その慓悍な生徒の顏ばかり眺めてゐた。が、やがて家畜のやうな眼の中に、あの何かを哀願するやうな表情が、際どくちらりと閃いたと思ふと、急に例の紫の襟飾へ手をやつて、二三度禿げ頭を下げながら、

「いや、これは私が惡い。私が惡かつたから、重々あやまります。成程諸君は英語を習ふ爲に出席してゐる。その諸君に英語を教へないのは、私が惡かつた。惡かつたから、重々あやまります。ね。重々あやまります。」と、泣いてでもゐるやうな微笑を浮べて、何度となく同じやうな事を繰り返した。それがストオヴの口からさす赤い火の光を斜に浴びて、上衣の肩や腰の摺り切れた所が、一層鮮に浮んで見える。と思ふと先生の禿げ頭も、下げる度に見事な赤銅色の光澤を帶びて、愈駝鳥の卵らしい。

　が、この氣の毒な光景も、當時の自分には徒に、先生の下等な教師根性を暴露したものとしか思はれなかつた。毛利先生は生徒の機嫌をとつてまでも、失職の危險を避けようとしてゐる。だから先生が教師をしてゐるのは、生活の爲に餘儀なくされたので、何も教育そのものに興味があ

るからではない。——朧げながらこんな批評を逞うした自分は、今は服装と學力とに對する侮蔑ばかりでなく、人格に對する侮蔑さへ感じながら、チョイス・リイダアの上へ頬杖をついて、燃えさかるストオヴの前へ立つた儘、精神的にも肉體的にも、火炙りにされてゐる先生へ、何度も生意氣な笑ひ聲を浴びせかけた。勿論これは、自分一人に限つた事でも何でもない。現に先生をやりこめた柔道の選手なぞは、先生が色を失つて謝罪すると、ちよいと自分の方を見かへつて、狡猾さうな微笑を洩しながら、すぐ又讀本の下にある押川春浪の冒險小說を、勉強し始めたものである。

それから休憩時間の喇叭が鳴るまで、我毛利先生は何時もより更にしどろもどろになつて、憐む可きロングフエロオを無二無三に譯讀しようとした。「Life is real, life is earnest.」——あの血色の惡い丸顔を汗ばませて、絶えず知られざる何物かを哀願しながら、かう先生の讀み上げた、喉のつまりさうな金切聲は、今日でも猶自分の耳の底に殘つてゐる。が、その金切聲の中に潜んでゐる幾百萬の悲惨な人間の聲は、當時の自分たちの鼓膜を刺戟すべく、餘りに深刻なものであつた。だからその時間中、倦怠に倦怠を重ねた自分たちの中には、無遠慮な欠伸の聲を洩らした

ものさへ、自分の外にも少くはない。しかし毛利先生は、ストオヴの前へ小さな體を直立させて、窓硝子をかすめて飛ぶ雪にも全然頓着せず、頭の中の鐵條が一時にほぐれたやうな勢で、絶えず讀本をふりまはしながら、必死になつて叫びつゞける。「Life is real, life is earnest.――Life is real, life is earnest.」……

かう云ふ次第だつたから、一學期の雇傭期間がすぎて、再び毛利先生の姿を見る事が出來なくなつてしまつた時も、自分たちは喜びこそすれ、決して惜しいなどとは思はなかつた。いや、その喜ぶと云ふ氣さへ出なかつた程、先生の去就には冷淡だつたと云へるかも知れない。殊に自分などはそれから七八年、中學から高等學校、高等學校から大學と、次第に成人になるのに從つて、さう云ふ先生の存在自身さへ、殆ど忘れてしまふ位、全然何の愛惜も抱かなかつたものである。

すると大學を卒業した年の秋――と云つても、日が暮れると屢深い靄が下りる、十二月の初旬近くで、並木の柳や鈴懸などが、とうに黄いろい葉をふるつてゐた、或雨あがりの夜の事であ

る。自分は神田の古本屋を根氣よくあさりまはつて、歐洲戰爭が始まつてから、めつきり少くなつた獨逸書を一二冊手に入れた揚句、動くともなく動いてゐる晩秋の冷い夜氣を、外套の襟に防ぎながら、ふと中西屋の前を通りかゝると、何故か賑な人聲と、暖い飲料とが急に戀しくなつたので、そこにあつたカツフエの一つへ、何氣なく獨りではいつて見た。

所が、はいつて見るとカツフエの中は、狹いながらがらんとして、客の影は一人もない。置き並べた大理石の卓の上には、砂糖壺の鍍金ばかりが、冷く電燈の光を反射してゐる。自分はまるで誰かに欺かれたやうな、寂しい心もちを味ひながら、壁にはめこんだ鏡の前の、卓へ行つて腰を下した。さうして、用を聞きに來た給仕に珈琲を云ひつけると、思ひ出したやうに葉卷を出して、何本となくマチを擦つた揚句、やつとそれに火をつけた。すると間もなく湯氣の立つた珈琲茶碗が、自分の卓の上に現れたが、それでも一度沈んだ氣は、外に下りてゐる靄のやうに、容易な事では晴れさうもない。と云つて今古本屋から買つて來たのは、字の細い哲學の書物だから、こゝでは折角の名論文も、一頁と讀むのは苦痛である。そこで自分は仕方がなく、椅子の背へ頭をもたせてブラジル珈琲とハヴアナと代る代る使ひながら、すぐ鼻の先の鏡の中へ、漫然と煮え

切らない視線をさまよはせた。

鏡の中には、二階へ上る梯子段の側面を始として、向うの壁、白塗りの扉、壁にかけた音樂會の廣告なぞが、舞臺面の一部でも見るやうに、はつきりと寒く映つてゐる。いや、まだその外にも、大理石の卓が見えた。大きな針葉樹の鉢も見えた。天井から下つた電燈も見えた。大形な陶器の瓦斯煖爐も見えた。その煖爐の前を圍んで、頻に何か話してゐる三四人の給仕の姿も見えた。さうして――かう自分が鏡の中の物象を順々に點檢して、煖爐の前に集まつてゐる給仕たちに及んだ時である。自分は彼等に圍まれながら、その卓に向つてゐる一人の客の姿に驚かされた。それが、今まで自分の注意に上らなかつたのは、恐らく周圍の給仕にまぎれて、無意識にカツフエの廚丁か何かと思ひこんでゐたからであらう。が、その時、自分が驚いたのは、何もゐないと思つた客が、ゐたと云ふばかりではない。鏡の中に映つてゐる客の姿が、こちらへは僅に横顏しか見せてゐないにも關らず、あの駝鳥の卵のやうな、禿げ頭の恰好と云ひ、あの古色蒼然としたモオニング・コオトの容子と云ひ、最後にあの永遠に紫な襟飾の色合ひと云ひ、我毛利先生だと云ふ事は、一目ですぐに知れたからである。

　自分は先生を見ると同時に、先生と自分とを隔ててゐた七八年の歳月を、咄嗟に頭の中へ思ひ浮べた。チョイス・リイダアを習つてゐた中學の組長と、今こゝで葉卷の煙を靜に鼻から出してゐる自分と――自分にとつてその歳月は、決して短かかつたとは思はれない。が、すべてを押し流す「時」の流も、既に時代を超越したこの毛利先生ばかりは、如何ともする事が出來なかつたからであらうか。現在この夜のカツフエで給仕と卓を分つてゐる先生は、宛然として昔、あの西日もさゝない教室で讀本を教へてゐた先生である。禿げ頭も變らない。紫の襟飾も同じであつた。それからあの金切聲も――さういへば、先生は、今もあの金切聲を張りあげて、忙しさうに何か給仕たちへ、説明してゐるやうではないか。自分は思はず微笑を浮べながら、何時かひき立たない氣分も忘れて、ぢつと先生の聲に耳を借した。

「そら、こゝにある形容詞がこの名詞を支配する。ね、ナポレオンと云ふのは人の名前だから、そこでこれを名詞と云ふ。よろしいかね。それからその名詞を見ると、すぐ後に――このすぐ後にあるのは、何だか知つてゐるかね。え。お前はどうだい。」

「關係――關係名詞。」

給仕の一人が吃りながら、かう答へた。

「何、關係名詞？　關係名詞と云ふものはない。關係――えゝと――關係代名詞？　さうさう關係代名詞だね。代名詞だから、そら、ナポレオンと云ふ名詞の代りになる。ね。代名詞とは名に代る詞と書くだらう。」

話の具合では、毛利先生はこのカッフエの給仕たちに英語を敎へてでもゐるらしい。そこで自分は椅子をずらせて、違つた位置から又鏡を覗きこんだ。すると果してその卓の上には、讀本らしいものが一冊開いてある。毛利先生はその頁を、頻に指でつき立てながら、何時までも説明に厭きる容子がない。この點も亦先生は、依然として昔の通りであつた。唯、まはりに立つてゐる給仕たちは、あの時の生徒と反對に、皆熱心な眼を輝かせて、目白押しに肩を合せながら、慌しい先生の説明におとなしく耳を傾けてゐる。

自分は鏡の中のこの光景を、暫く眺めてゐる間に、毛利先生に對する溫情が次第に意識の表面へ浮んで來た。一そ自分もあすこへ行つて、先生と久濶を敍し合はうか。が、多分先生は、たつた一學期の短い間、敎室だけで顏を合せた自分なぞを覺えてゐまい。よし又覺えてゐるとしても

――自分は卒然として、當時自分たちが先生に浴びせかけた、惡意のある笑ひ聲を思ひ出すと、結局名乘なぞはあげない方が、遙に先生を尊敬する所以だと思ひ直した。そこで珈琲が盡きたのを機會にして、短くなつた葉卷を捨てながら、そつと卓から立上ると、それが靜にした心算でも、やはり先生の注意を擾したのであらう。自分が椅子を離れると同時に、先生はあの血色の惡い丸顔を、あのうすよごれた折襟を、あの紫の襟飾を、一度にこちらへふり向けた。家畜のやうな先生の眼と自分の眼とが、鏡の中で刹那の間出會つたのは正にこの時である。が、先生の眼の中には、さつき自分が豫想した通り、果して故人に遇つたと云ふ氣色らしいものも浮んでゐない。唯、そこに閃いてゐたものは、例の如く何ものかを、常に哀願してゐるやうな、傷ましい目なざしだけであつた。

自分は眼を伏せた儘、給仕の手から傳票を受けとると、默つてカツフエの入口にある帳場の前へ勘定に行つた。帳場には自分も顏馴染みの、髮を綺麗に分けた給仕頭が、退屈さうに控へてゐる。

「あすこに英語を教へてゐる人がゐるだらう。あれはこのカツフエで賴んで敎へて貰ふのかね。」

自分は金を拂ひながら、かう尋ねると、給仕頭は戸口の外の往來を眺めた儘、つまらなさうな顔をして、こんな答を聞かせてくれた。

「何、賴んだ譯ぢやありません。唯、毎晩やつて來ちや、あゝやつて、敎へてゐるんです。何でももう老朽の英語の先生ださうで、どこでも傭つてくれないんだつて云ひますから、大方暇つぶしに來るんでせう。珈琲一杯で一晩中、坐りこまれるんですから、こつちぢやあんまり難有くもありません。」

これを聞くと共に自分の想像には、咄嗟に我毛利先生の知られざる何物かを哀願してゐる、あの眼つきが浮んで來た。あゝ、毛利先生。今こそ自分は先生を――先生の健氣な人格を始めて髣髴し得たやうな心もちがする。もし生れながらの敎育家と云ふものがあるとしたら、先生は實にそれであらう。先生にとつて英語を敎へると云ふ事は、空氣を呼吸すると云ふ事と共に、寸刻と雖も止める事は出來ない。もし強ひて止めさせれば、丁度水分を失つた植物か何かのやうに、先生の旺盛な活力も卽座に萎微してしまふのであらう。だから先生は夜毎に英語を敎へると云ふその興味に促されて、わざわざ獨りこのカツフエへ一杯の珈琲を啜りに來る。勿論それはあの給仕

頭などに、暇つぶしを以て目さるべき悠長な性質のものではない。まして昔、自分たちが、先生の誠意を疑つて、生活の爲と嘲つたのも、今となつては心から赤面の外はない誤謬であつた。思へばこの暇つぶしと云ひ生活の爲と云ふ、世間の俗惡な解釋の爲に、我毛利先生はどんなにか苦しんだ事であらう。元よりさう云ふ苦しみの中にも、先生は絶えず悠然たる態度を示しながら、あの紫の襟飾とあの山高帽とに身を固めて、ドン・キホオテよりも勇ましく、不退轉の譯讀を續けて行つた。しかし先生の眼の中には、それでも猶時として、先生の教授を受ける生徒たちの――恐らくは先生が面してゐるこの世間全體の――同情を哀願する閃きが、傷ましくも宿つてゐたではないか。

刹那の間こんな事を考へた自分は、泣いて好いか笑つて好いか、わからないやうな感動に壓せられながら、外套の襟に顏を埋めて、匆々カツフエの外へ出た。が、後では毛利先生が、明るすぎて寒い電燈の光の下で、客がゐないのを幸に、不相變金切聲をふり立てて、熱心な給仕たちにまだ英語を敎へてゐる。

「名に代る詞だから、代名詞と云ふ。ね。代名詞。よろしいかね……」

（大正七年十二月）

あの頃の自分の事

以下は小說と呼ぶ種類のものではないかも知れない。さうかと云つて、何と呼ぶべきかは自分も亦不案内である。自分は唯、四五年前の自分とその周圍とを、出來る丈こだはらずに、ありのまま書いて見た。從つて自分、或は自分たちの生活やその心もちに興味のない讀者には、面白くあるまいと云ふ懸念もある。が、この懸念はそれを押しつめて行けば、結局どの小說も同じ事だから、そこに意を安んじて、發表する事にした。序ながらありのままと云つても、事實の配列は必しもありのままではない。唯事實そのものだけが、大抵ありのままだと云ふ事をつけ加へて置く。

一

十一月の或晴れた朝である。久しぶりに窮屈な制服を着て、學校へ行つたら、正門前でやはり

制服を着た成瀬に遇つた。こつちで「やあ」と云ふと、向うでも「やあ」と云つた。一しよに角帽を竝べて、法文科の古い煉瓦造の中へはいつたら、玄關の掲示場の前に、又和服の松岡がゐた。我我はもう一度「やあ」と云つた。

立ちながら三人で、近々出さうとしてゐる同人雜誌『新思潮』の話をした。それから松岡がこの間、珍しく學校へ出て來て、西洋哲學史か何かの教室へはいつたが、何時まで待つても、先生は勿論學生も來る容子がない。妙だと思つて、外へ出て小使に尋いて見たら、休日だつたと云ふ話をした。彼は電車へ乘る心算で、十錢持つて歩きながら、途中で氣が變つて、煙草屋へはいると、平然として「往復を一つ」と云つた人間だからこんな事は家常茶飯である。その中に、傴僂のやうな小使が朝の時間を知らせる鐘を振つて、大急ぎで玄關を通りすぎた。

朝の時間はもう故人になつたロオレンス先生のマクベスの講義である。松岡と分れて、成瀬と二階の教室へ行くと、もう大ぜい學生が集つて、ノオトを讀み合せたり、むだ話をしたりしてゐた。我々も隅の方の机に就いて、新思潮へ書かうとしてゐる我々の小説の話をした。我々の頭の上の壁には、禁煙と云ふ札が貼つてあつた。が、我々は話しながら、ポケツトから敷島を出して

吸ひ始めた。勿論我々の外の學生も、平氣で煙草をふかしてゐた。すると急にロオレンス先生が、鞄をかかへて、はいつて來た。自分は敷島を一本完全に吸つてしまつて、殼も窓からすてた後だつたから、更に恐れる所なく、ノオトを開いた。しかし成瀬はまだ煙草を啣へてゐたから、すぐにそれを下へ捨てると、慌てて靴で踏み消した。幸、ロオレンス先生は我々の机の間から立昇る、縷々とした一條の煙に氣がつかなかつた。だから出席簿をつけてしまふと、早速何時もの通り講義にとりかゝつた。

講義のつまらない事は、當時定評があつた。が、その朝は殊につまらなかつた。始からのべつ幕なしに、梗槩ばかり聽かされる。それも一々 Act 1, Scene 2 と云ふ調子で、一くさりづつやるのだから、その退屈さは人間以上だつた。自分は以前はかう云ふ時に、よく何の因果で大學へなんぞはいつたんだらうと思ひ思ひした。が、今ではそんな事も考へない程、この非凡な講義を聽く可く餘儀なくされた運命に、すつかり默從し切つてゐた。だからその時間も、機械的にペンを動かして、帝劇の筋書の英譯のやうなものを根氣よく筆記した。が、その中に教室に通つてゐるスティイムの加減で、だんだん眠くなつて來た。そこで勿論、眠る事にした。

うとうとして、ノオトに一頁ばかりブランクが出來た時分、ロオレンス先生が、何だか異樣な聲を出したので、眼がさめた。始めはちよいと居睡りが見つかつて、叱られたかと思つたが、見ると先生は、マクベスの本をふり廻しながら、得意になつて、門番の聲色を使つてゐる。自分もあの門番の類だなと思つたら、急に可笑しくなつて、すつかり眠氣がさめてしまつた。隣では成瀨がノオトをとりながら、時々自分の方を見て、くすくす獨りで笑つてゐた。それから又、二三頁ノオトをよごしたらやつと時間の鐘が鳴つた。さうして自分たちは、ロオレンス先生の後から、ぞろぞろ敎室の外の廊下へ溢れ出した。

廊下へ出て、黃いろい葉を垂らした庭の樹木を見下してゐると、豐田實君が來て、「ちよいとノオトを見せてくれ給へ」と云つた。それからノオトを開けて見せると、豐田君の見たがつてゐる所は、丁度自分の居眠りをした所だつたので、流石に少し恐縮した。豐田君は「ぢやようござんす」と云つて、悠然と向うへ行つてしまつた。悠然と云ふのは、決して好い加減な形容ぢやない。實際君は何時でも、悠然と步いてゐた。豐田君は今どこで何をしてゐるか、判然とした事は承知しないが、ロオレンス先生に好意を持ち、若しくはロオレンス先生が好意を持つた學生の中で、

我々――と云つて惡るければ、少くとも自分が、常に或程度の親しみを感じてゐた、たつた一人の人間である。自分はこれを書いてゐる今でも、君の悠然とした歩き方を思ひ出すと、もう一度君と大學の廊下に立つて、平凡な時候の挨拶でも交換したいやうな氣がしないでもない。

その中に又、鐘が鳴つて、我々は二人とも下の教室へ行く事になつた。今度は藤岡勝二博士の言語學の講義である。外の連中は皆先へ行つて、ちやんと前の方へ席をとつて置くが、なまけ者の我々は、何時でも後からはいつて行つて、一番隅の机を占領した。その朝もやはりかう云ふ傳で、愈鐘が鳴る間際まで、見晴しの好い二階の廊下に低徊してゐたのである。藤岡博士の言語學の講義は、その朗々たる音吐とグロテスクな諧謔とを聞くだけでも、存在の權利のあるものだつた。尤も自分の如く、生來言語學的な頭腦に乏しい人間にとつては、それだけで存在の權利があつたと云ひ直しても別に差支へはない。だから今日も、ノオトをとつたりやめたりしながら、半分はさう云ふ興味で、マツクス・ミユラアがどうとかしたとか云ふ講義を面白がつて聽いてゐた。すると自分の前の席に、髮の毛の長い學生が坐つてゐて、その人の髮の毛が、時々自分のノオトの上を、掃くやうにさらさら通りすぎた。自分は相手が名前も知らない人の事だから、どう

云ふ了見で、あんな長髪を蓄へてゐるのだか、つい今日に至るまで問ひ質す機會を失つてしまつたが、兎に角それが彼自身の美的要求には合してゐても、他人の實際的要求と矛盾し得る事を發見したのは、正にこの言語學の講義を聞いてゐた時間である。しかし幸、その講義を聽かうと云ふ、自分の實際的要求がそれ程痛切でなかつたから、髮の毛が邪魔になつた所だけは、ノオトをとらずに捨てて置いた。その中には邪魔にならない所でも、ノオトの代りに畫を描く事にした。處が向うに坐つてゐる、何とか云ふ恐しくハイカラな學生の横顏を、半分がた描いた處で運惡く鐘が鳴つた。講義の終を知らせると同時に、午になつた事を知らせる鐘である。

我々は一しよに大學前の一白舍の二階へ行つて、曹達水に二十錢の辨當を食つた。食ひながらいろんな事を辯じ合つた。自分と成瀨との間には、可也懸隔てのない友情が通つてゐた。その上その頃は思想の上でも、一致する點が少くなかつた。殊に二人とも、偶然同時に「ジアン・クリストフ」を讀み出して、同時にそれに感服してゐた。だからかう云ふ時になると、毎日のやうに顏を合せてゐる癖に、やはり話がはずみ勝ちだつた。すると二人のゐる所へ、給仕の谷がやつて來て、相場の話をし始めた。それも「まかり間違つたら、これになる覺悟でなくつちや駄目です

ね」と、手を後へまはして見せたのだから盛である。成瀬は「莫迦だな」と云つて、取合はなかつたが、當時「財布」と云ふ小說を考へてゐた自分は、さまざまな意味で面白かつたから、食事をしまふまで谷の相手になつた。さうして妙な相場の熟語を、十ばかり一度に敎へられた。

午後は講義がなかつたから、一白舍を出ると二人で、近所の宮裏に下宿してゐる久米の所へ遊びに行つた。久米は我々以上のなまけ者だから、大抵は敎室へも出ずに、下宿で小說や芝居を書いてゐたのである。行つて見ると、やはり机の側に置炬燵を据ゑて、「カラマゾフ兄弟」か何か讀んでゐた。あたれと云ふから、我々もその置炬燵へはいつたら、掛蒲團の脂臭い匂が、火臭い匂と一しよに鼻を打つた。久米は今、彼の幼年時代に自殺した阿父さんの事を、短篇にして書いてゐると云つた。小說はこれが處女作同樣だから、見當がつかなくて困るとも云つた。が、相不變元氣の好ささうな顏をして、餘り困つてゐるらしい容子もなかつた。その後で「君はどうした」と訊くから、「やつと『鼻』を半分ばかり書いた」と答へた。成瀬も今年の夏、日本アルプスへ行つた時の話を書きかけてゐると云ふ事だつた。それから三人で、久米の拵へた珈琲を飲みながら、創作上の話を長い間した。久米は文壇的閲歷の上から云つて、ずつと我々より先輩だつた。と同時

に又表現上の手腕から云つても、やはり我々に比べると、一日の長がある事は事實だつた。特に自分はこの點で、久米が三幕物や一幕物を容易にしかも短い時間で、書き上げる技倆に驚嘆してゐた。だから我々の中で久米だけは、彼自身の占めてゐる、或は占めんとする、文壇的地位に相當な自信を持つてゐた。さうしてその自信が又一方では、絶えず眼高手低の歎を抱いてゐる我々に、我々自身の自信を呼び起す力としても働いてゐた。實際自分の如きは、もし久米と友人でなかつたなら、卽彼の煽動によつて、人工的にインスピレエションを製造する機會がなかつたなら、生涯一介の讀書子たるに滿足して、小說なぞは書かなかつたかも知れない。さう云ふ次第だから創作上の話になると――と云ふより文壇に關係した話になると、勢何時も我々の中では、久米が牛耳を執る形があつた。その日も彼が音頭とりで、大分議論を上下したが、何かの關係で田山花袋氏が度々問題に上つたやうに記憶する。

今になつて公平に考へれば、自然主義運動があれ丈大きな波動を文壇に與へたのも、全く一つは田山氏の人格の力が然らしめたのに相違ない。その限りに於て田山氏は、氏の「妻」や「田舍教師」が如何に退屈であるにしても、乃至又氏の平面描寫論が如何に幼稚であるにしても、確に我々

後輩の敬意——とまで行かなければ、少くとも興味位は惹くに足る人物だつた。が、遺憾ながら當時の我々は、まだこの情熱に富んだ氏の人格を、評價するだけの雅量に乏しかつた。だから我我は氏の小說を一貫して、月光と性慾とを除いては、何ものも發見する事は出來なかつた。と同時に氏の感想や評論も、その怪しげな à la Huysmans の入信生活を聞かされる度に、先 Durtal と田山花袋氏との滑稽な對照を思ひ出させて、徒に我々の冷笑を買ふばかりだつた。では我々は氏を目して、全然ハムバツグとしてゐたかと云ふと必しも亦さうぢやない。成程小說家としての氏や思想家としての氏は、更に本質的なものだとは思はなかつたが、それらに先立つて我々は、紀行文家としての田山氏を認めてゐた。Sentimental landscape-painter——これが當時の自分が、田山氏へ冠らせてゐた渾名だつた。實際氏は、小說や評論を書く合ひ間に、根氣よく紀行文を書いてゐた。いや少し誇張して云へば、小說の多くも紀行文で、その中に Venus Libentina の信者たる男女を點出したものに過ぎなかつた。さうしてその紀行文を書いてゐる時の氏は、自由で、快活で、正直で、如何にも靑い艸を得た驢馬のやうに、純眞無垢な所があつた。從つてそれだけの領域では、田山氏はユニイクだと云はうが何だらうが差支へない。が、氏を自然主義の小說

家たり、思想家たる文壇の泰斗と考へる事は、今よりも更に出來惡かつた。遠慮のない所を云ふと、自然主義運動に於ける氏の功績の如きも、「何しろ時代が時代だつたからね」なぞと輕蔑してゐたものである。

大體こんなやうな氣焰をあげてから、又成瀨と二人で、久米の下宿を出た。出た時分には、短い冬の日脚が、もう往來へ長い影を落してゐた。我々は我々のよく知つてゐる、しかも常になつかしい興奮を感じながら、本鄕三丁目の角まで歩いて行つて、それから別々の電車へ乘つた。

二

三四日たつた、これも好い天氣の日の事である。自分は午前の講義に出席してから、成瀨と二人で久米の下宿へ行つて、そこで一しよに晝飯を食つた。久米は京都の菊池が、今朝送つてよこしたと云ふ戲曲の原稿を見せた。それは「坂田藤十郎の戀」と云ふ、德川時代の名高い役者を主人公にした一幕物だつた。讀めと云ふから讀んで見ると、テエマが面白いのにも關らず、無暗に友染縮緬のやうな臺辭が多くつて、どうも永井荷風氏や谷崎潤一郞氏の糟粕を嘗めてゐるやうな觀

があつた。だから自分は言下に惡作だとけなしつけた。成瀬も讀んで見て、やはり同感は出來ないと云つた。久米も我々の批評を聞いて、「僕も感服出來ないんだ。一體に少し高等學校情調がありすぎるよ」と、同意を表した。それから久米が我々一同を代表して、菊池の所へその意味の批評を、手紙で書いてやる事にした。そこへ幸ひ松岡も遊びに來た。松岡は我々三人が英文科に籍を置いてゐるのにも關らず、獨り哲學科へはいつてゐた。が、勿論我々と同じやうに、創作もする心算だつた。彼は我々の中で、一番久米と親しかつた。一しきりは二人で、同じ家に下宿してゐた事もあつた。それは砲兵工廠の裏にある、職工服を造る家だつた。實生活上のロマンテイケルだつた久米は、今にあの青い職工服を着て、アトリエのやうな書齋へ西洋机を据ゑて、その書齋を久米正雄工房と名づけたいなどと云ふ、途方もない夢をよく見てゐた。自分は彼等をその下宿に訪問すると、毎時もかう云ふ久米の夢を思ひ出したものだつた。が、松岡はその時分から、餘り職工服とは縁のない思想なり心もちなりを持つてゐるらしかつた。まだ感傷癖こそ脫しなかつたが、彼の中には宗教の匂のするものが、もうふんだんに磅礴してゐた。彼はその東洋とも西洋ともつかないイエルサレムの建設をもくろみながらキエルケガアドを愛讀したり、怪しげな水

彩畫を描いて見たりした。當時彼の描いた水彩畫の一つにさかさまにした方が遙に畫らしくなるもののあつたのは、今でもよく覺えてゐる。その後松岡は久米が宮裏へ移ると共に、本郷五丁目へ下宿を移した。さうして今でもそこにゐて、釋迦傳から材料を取つた三幕物の戲曲を書いてゐた。

我々四人は、又久米の手製の珈琲を啜りながら、煙草の煙の濛々とたなびく中で、盛にいろんな問題をしやべり合つた。その頃は丁度武者小路實篤氏が、將にパルナスの頂上へ立たうとしてゐる頃だつた。從つて我々の間でも、屢々氏の作品やその主張が話題に上つた。我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽な空氣を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた。恐らくこの愉快は、氏の踵に接して來た我々の時代、或は我々以後の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだらう。だから我々以前と我々以後とでは、文壇及それ以外の鑑賞家の氏に對する評價の大小に、徑庭があつたのは已むを得ない。それは丁度我々以前と我々以後とで、田山花袋氏に對する評價が、相違するのと同じ事である。（唯、その相違の程度が、武者小路氏と田山氏とで、どちらが眞に近いかは疑問である。念の爲に斷つて置くが、自分が同じ事だと云ふのは、程度ま

で含んでゐる心算ぢやない。)が、當時の我々も、武者小路氏に文壇のメシヤを見はしなかつた。作家としての氏を見る眼と、思想家としての氏を見る眼と――この二つの間には、又自らな相違があつた。作家としての武者小路氏は、作品の完成を期する上に、餘りに性急な憾があつた。形式と内容との不卽不離な關係は、屢氏自身が「雜感」の中で書いてゐるのにも關らず、忍耐よりも興奮に依賴した氏は、屢實際の創作の上では、この微妙な關係を等閑に附して顧みなかつた。だから氏が從來冷眼に見てゐた形式は、「その妹」以後一作每に、徐々として氏に謀叛を始めた。さうして氏の脚本からは、次第にその秀拔な戲曲的要素が失はれて、(全くとは云はない。一部の批評家が戲曲でないやうに云ふ「或青年の夢」でさへ、一齣一齣の上で云へばやはり戲曲的に力強い表現を得た個所がある。)氏自身のみを語る役割が、己自身を語る性格の代りに續々としてそこへはいつて來た。しかもそこに語られた思想なり感情なりは、必然性に乏しい戲曲的な表現を借りてゐるだけ、それだけ一層氏の「雜感」に書かれたものより稀薄だつた。「或家庭」の昔から氏の作品に親しんでゐた我々は、その頃の――「その妹」の以後のかう云ふ氏の傾向には、慊らない所が多かつた。が、それと同時に、又氏の「雜感」の多くの中には、我々の中に燃えてゐた理想

主義の火を吹いて、一時に光焔を放たしめるだけの大風のやうな雄々しい力が潜んでゐる事も事實だつた。往々にして一部の批評家は、氏の「雜感」を支持すべき論理の缺陷を指摘する。が、論理を待つて確められたもののみが、眞理である事を認めるには、餘りに我々は人間的な素質を多量に持ちすぎてゐる。いや、何よりもその人間的な素質の前に眞面目であれと云ふ、それこそ氏の闡明した、大いなる眞理の一つだつた。久しく自然主義の淤泥にまみれて、本來の面目を失してゐた人道が、あのエマヲのクリストの如く「日昃きて暮に及」んだ文壇に、再姿を現した時、如何に我々は氏と共に、「われらが心熱し」事を感じたらう。現に自分の如く世間からは、氏と全然反對の傾向にある作家の一人に數へられてゐる人間でさへ、今日も猶氏の「雜感」を讀み返すと、常に昔の澎湃とした興奮が、一種のなつかしさと共に還つて來る。我々は――少くとも自分は氏によつて、「驢馬の子に乘り爾に來る」人道を迎へる爲に、「その衣を途に布き或は樹の枝を伐りて途に布く」先例を示して貰つたのである。

散々話をした後で、我々は皆一しよに、久米の下宿を出た。それから本郷三丁目で成瀨と松岡とに別れた。久米と自分とは電車で銀座へ行つて、カツフエ・ライオンで少し早い晩飯をすませ

てから、ちよいと歌舞伎座の立見へはいつた。はいると新狂言の二番目もので、筋は勿論外題さへ、更に不案内なものだつた。舞臺には悪く納つた茶室があつて、造花の白梅が所々に、貝殻細工のやうな花を綴つてゐた。さうしてその茶室の縁側で、今の中車の侍が、歌右衛門の娘を口説いてゐた。東京の下町に育ちながら、更に江戸趣味なるものに興味のない自分は、芝居に對しても同様に、滅多にドラマテイツク・イリユウジヨンは起す事が出來ない程、冷淡に出來上つた人間だつた。(或は冷淡にならされた人間かも知れない。芝居を見る事は二歳位の頃から、よく家のものと一しよに見た。)だから芝居よりも役者の藝が、役者の藝よりも土間桟敷の見物が、餘程自分には面白かつた。その時も自分の隣にゐた、どこかの御店者らしい、鳥打帽をかぶつた男が、甘栗を食ひながら、熱心に舞臺を見てゐる方が、天下の名優よりも興味があつた。この男は熱心に舞臺を見てゐると云つたが、同時に又甘栗もやはり熱心に食つてゐた。それが懐へ手を入れたかと思ふと、甘栗を一つつまみ出して、割るが早いか口へ入れる、口へ入れたと思ふと、又懐へ手を入れて、つまみ出すが早いか割つて食ふ。しかもその間中、眼は終始一貫して、寸分も舞臺を離れない。自分はこの視覺と味覺との敏捷な使ひ分けに感心して、暫くはその男の横顔ばか

り眺めてゐたが、とうとうしまひに彼自身はどちらを眞劍にやつてゐる心算だか、尋いて見たいやうな氣がして來た。するとその時、自分の側で、久米がいきなり「橘屋あ」と、無鐵砲に大きな聲を出した。自分はびつくりして、思はず眼を舞臺の方へやつた。見ると成程、女をたらすより外には何等の能もなささうな羽左衞門の若侍が、從容として庭傳ひに歩いて來る所だつた。が、隣の御店者は、久米の「橘屋」も耳にはいらないやうに、依然として甘栗を食ひながら、食ひつくやうな眼で舞臺を眺めてゐる。自分も今度はその滑稽さが、笑ふには餘りに眞劍すぎるやうな氣がして來た。さうして又そこに小說めいた心もちも感じられた。しかし舞臺の上の芝居は、折角その「橘屋」が御出でになつても、池田輝方氏の畫以上に俗惡だつた。自分はとうとう一幕が待ち切れなくつて、舞臺が廻つたのを潮に、久米をひつぱつて外へ出た。

星月夜の往來へ出てから「あんな聲を出して、莫迦だな」と云つたが、久米は「何、あれだつて中々好い聲だよ」と自慢して容易にその愚を認めなかつた。今でもあの時の事を考へると、彼はカツフエ・ライオンで飮んだウイスキイに祟られてゐたものとしか思はれたない。

三

「一體大學の純文學科などと云ふものは、頗る怪しげな代物だよ。あゝやつて、國漢英佛獨の文學科があるけれども、あれは皆何をやつてゐるんだと思ふ？　實は何をやつてゐるか、僕にもはつきりとはわからないんだ。成程研究してゐるものは、各國の文學に違ひなからう。さうしてその文學なるものは、まあ藝術の一部門とか何とか云へるにや違ひない。しかしその文學を研究する學問だね、あれは一體學問だらうか。(或は獨立した學問だらうかと云つても好いが。)もし學問とすれば、――むづかしく云へばWissenschaftとして成立するのに必要な條件を具へるとすればだね。さうすれば美學と同じものになつちまふぢやないか。いや、美學ばかりぢやない。文學史なんぞは、始から史學と同じものだらうと思ふんだ。そりや成程今純文學科でやつてゐる講義にや、美學や史學と縁のないものだつて、澤山ある。が、その澤山あるものは、義理にも學問だとは思はれないぢやないか。あれはまあよく云へば先生の感想を述べたもので、惡く云へば出たらめだからね。だから僕は大學の純文學科なんぞは、廢止しちまつた方がほんたうだと思ふんだ。

文學概論や何かは美學と一しよにする。文學史は史學へ片づけてしまふ。さうしてあとに殘つた講義は、要するに出たらめだから、大學外へ驅逐しちまふんだ。出たらめだからと云つて惡るければ、餘りに高尚で、大學のやうな學問の研究を目的にする所には、不釣合だと云つても好い。これは確に目下の急務だよ。さもないと同じ出たらめでも、新聞や雜誌へ出た評論より、大學でやる講義の方が、上等のやうな誤解を天下に與へ易いからね。それも實は新聞や雜誌へ出る方は、世間を相手にしてゐるんだが、大學でやる方は學生だけを相手にしてゐるんだから、それだけ馬脚が露れずにすんでゐるんだらう。その安全なる出たらめが、一層箔をつけてゐるのは、どう考へたつて不公平だ。實際僕なんぞは無責任に、圖書館の本を讀まう位な了見で、大學にはいつてゐるんだから好いが、眞面目に研究心でも起したら、一體どうすれば文學の研究になるんだか、途方にくれちまふのに違ひない。それや市河三喜さんのやうに言語學的に英文學を研究するんなら、立派に徹底してゐると思ふんだ。けれどもさうすると、シエクスピイアだらうが、ミルトンだらうが、詩でも芝居でもなくなつて、唯の英語の行列だからね。それぢや僕はやる氣もないし、やつたつて到底ものにはなりさうもないだらう。勿論出たらめで滿足してゐりや好いが、それな

ら御苦勞にも大學へはいらずともの事だ。又美學なり史學なりの立ち場から、研究しようと云ふんなら、外の科へ籍を置いた方がどの位氣が利いてゐるかわからない。かう考へて來ると、純文學科のレエゾン・デエトルは、まあ精々便宜的な所だね。が、いくら便宜でも、有害の方が多くつちや、勿論ないのに劣つてゐると云ふもんだ。劣つてゐる以上は、廢止した方が正當だよ。――何、あれは中學の教師を養成する爲に必要だ？　僕は皮肉を云つてゐるんぢやない。これでも大眞面目な議論なんだ。中學の教師を養成するんなら、ちやんと高等師範と云ふものがある。高等師範を廢止しろなんと云ふのは、それこそ冠履顚倒だ。その理窟で行つても廢止さるべきものは大學の純文學科の方で、高等師範は一日も早くあれを合倂してしまふが好い。」

その頃の或日、古本屋ばかり竝んでゐる神田通りを歩きながら、自分は成瀨をつかまへて、こんな議論をふつかけた事がある。

四

十一月もそろそろ末にならうとしてゐる或晩、成瀨と二人で帝劇のフイル・ハアモニイ會を聞

きに行つた。行つたら、向うで我々と同じく制服を着た久米に遇つた。その頃自分は、我々の中で一番音樂通だつた。と云ふのは自分が一番音樂通だつた程、それ程我々は音樂に縁が遠い人間だつたのである。が、その自分も無暗に音樂會を聞いて歩いただけで、鑑賞は元より、了解する事も頗る怪しかつた。先一番よくわかるものは、リストに止めをさしてゐた。何時か帝國ホテルで、あのペツツオルド夫人と云ふお婆さんが、リストの der heilige Antonius schreitend auf den Wellen(だと思ふ。ちがつたら御免なさい。)を彈いた時も、そのピアノの音の一つ一つは、寸刻も流動して止らない、しかも不思議に鮮な畫面を、ありありと眼の前へ浮ばせてくれた。その畫面の中には、どこを見ても、際限なく波が動いてゐた。それからその波の上には、一足毎に波紋を作る人間の足が動いてゐた。最後にその波と足との上に、煌々たる光があつて、それが風の中の太陽のやうに、眩く空中で動いてゐた。この明い幻を息もつかずに眺めてゐた自分は、演奏が終つて拍手の聲が起つた時に、音樂の波動が消えてしまつた、空虚な周圍の寂しさがしみじみ情なく感じられた。が、こんな事は前にも云つた通り、リストが精々行きどまりで、ベエトオフエンなどと云ふ代物は、好いと思へば好いやうだし、悪いと思へば悪いやうだし、更に見當が

つかなかつた。だからフイル・ハアモニイ會を聞くと云つても、一向藝術家らしくない、怪しげな耳をそば立てて、樂器の森から吹いて來るオオケストラの風の音を、漫然と聞いてゐたのである。

當夜は閑院宮殿下も御臨場になつたので、帝劇のボツクスや我々のゐるオオケストラ・ストオルには、模様を着た奥さんや御孃さんが大分方々に竝んでゐた。現に自分の隣なぞにも、白粉をつけた骨と皮ばかりの老夫人が、金の指環をはめて金の時計の鎖を下げて、金の帶留の金物をして、その上にもまだ慊らず、齒にも一面に金を入れて、（これは欠伸をした時に見えたのである。）端然として控へてゐた。が、前に歌舞伎座の立見をした時とは異なつて、今夜は見物の紳士淑女より、シオパンやシユウベルトの方が面白かつたから、それ以上自分はこの白粉と金とに埋つてゐる老夫人に、注意を拂はなかつた。尤も彼女自身は、自分に輪をかけた、デイスイリユウジヨンそれ自身のやうな豪傑だつたと見えて、舞臺の上で指揮杖を振つてゐる山田耕作氏には眼もくれず、頻に周圍ばかりを見廻してゐた。

その中に山田夫人の獨唱か何かで、途中の休憩時間になると、我々は三人揃つて、二階の喫煙

室へ出かけて行つた。するとそこの入口に、黒い背廣の下へ赤いチョツキを着た、背の低い人が佇んで、袴羽織の連れと一しよに金口の煙草を吸つてゐた。久米はその人の姿を見ると、我々の耳へ口をつけるやうにして、「谷崎潤一郎だぜ」と教へてくれた。自分と成瀬とはその人の前を通りながら、この有名な耽美主義の作家の顏を、偸むやうにそつと見た。それは動物的な口と、精神的な眼とが、互に我を張り合つてゐるやうな、特色のある顏だつた。我々は喫煙室の長椅子に腰を下して、一箱の敷島を吸ひ合ひながら、谷崎潤一郎論を少しやつた。當時谷崎氏は、在來氏が開拓して來た、妖氣靉靆たる耽美主義の畠に、「お艶殺し」の如き、「神童」の如き、或は又「お才と巳之助」の如き、文字通り底氣味の惡い Fleurs du Mal を育ててゐた。が、その斑猫のやうな色をした、美しい惡の花は、氏の傾倒してゐるポオやボオドレエルと、同じ壯嚴な腐敗の香を放ちながら、或一點では彼等のそれと、全く趣が違つてゐた。彼等の病的な耽美主義は、その背景に恐る可き冷酷な心を控へてゐる。彼等はこのごろた石のやうな心を抱いた因果に、嫌でも道德を捨てなければならなかつた。嫌でも神を捨てなければならなかつた。さうして又嫌でも戀愛を捨てなければならなかつた。が、彼等はデカダンスの古沼に身を沈めながら、それでも猶この

仕末に了へない心と――une vieille gabare sans mâts sur une mer monstrueuse et sans bords の心と睨み合つてゐなければならなかつた。だから彼等の耽美主義は、この心に劫かされた彼等の魂のどん底から、やむを得ずとび立つた蛾の一群だつた。從つて彼等の作品には、常に Ah! Seigneur, donnez-moi la force et le courage / De contempler mon cœur et mon corps sans dégoût! と云ふせつぱつまつた嘆聲が、瘴氣の如く纏綿してゐた。我々が彼等の耽美主義から、嚴肅な感激を浴びせられるのは、實にこの「地獄のドン・ジュアン」のやうな冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。しかし谷崎氏の耽美主義には、この動きのとれない息苦しさの代りに、餘りに享樂的な餘裕があり過ぎた。氏は罪惡の夜光蟲が明滅する海の上を、まるでエル・ドラドでも探して行くやうな意氣込みで、悠々と船を進めて行つた。その點が氏は我々に、氏の寧輕蔑するゴオテイエを髣髴させる所以だつた。ゴオテイエの病的傾向は、ボオドレエルのそれとひとしく世紀末の色彩は帶びてゐても、云はば活力に滿ちた病的傾向だつた。更に洒落れて形容すれば、寶石の重みを苦にしてゐる、肥滿したサルタンの病的傾向だつた。だから彼には谷崎氏と共に、ポオやボオドレエルに共通する切迫した感じが缺けてゐた。が、その代

りに感覺的な美を敍述する事にかけては、滾々として百里の波を飜す河のやうな、驚く可き雄辯を備へてゐた。(最近廣津和郎氏が谷崎氏を評して、餘り健康なのを憾とすると云つたのは、この活力に滿ちた病的傾向を指摘したものだらうと思ふ。が、如何に活力に溢れてゐても、脂肪過多症の患者が存在し得る限り、やはり氏のそれは病的傾向に相違ない。)さうして此の耽美主義に慊らなかつた我々も、流石にその非凡な力を認めない譯に行かなかつたのは、この滔々たる氏の雄辯である。氏はありとあらゆる日本語や漢語を浚ひ出して、ありとあらゆる感覺的な美を(或は醜を)、「刺靑」以後の氏の作品に螺鈿の如く鏤めて行つた。しかもその氏の Les Emaux et Camées は、朗々たるリズムの絲で始から終まで、見事にずつと貫かれてゐた。自分は今日でも猶、氏の作品を讀む機會があると、一字一句の意味よりも、寧その流れて盡きない文章のリズムから、半ば生理的な快感を感じる事が度々ある。ここに至るとその頃も、氏はやはり今の如く、比類ない語の織物師だつた。たとひ氏は暗澹たる文壇の空に、「恐怖の星」はともさなかつたにしても、氏の培つた斑猫色の花の下には、時ならない日本の魔女のサバトが開かれたのである。——

やがて又演奏の始まりを知らせる相圖のベルと共に、我々は谷崎潤一郎論を切り上げて、下の

我々の席へ歸つた。歸る途中で久米が、「一體君は音樂がわかるのかい」と云ふから、「隣の金と骨と皮と白粉とよりはわかりさうだ」と答へた。それから又その老夫人の隣へ腰を下して、ショルツ氏のピアノを聞いた。確、シオパンのノクテュルヌとか何とか云ふものだつたと思ふ。シモンズと云ふ男は、子供の時にシオパンの葬式の進行曲を聞いて、ちやんとわかつたと廣告して居るが、自分はショルツ氏の器用に動く指を眺めながら、年齡の差を勘定に入れないでも、この點ではシモンズに到底及ばないと觀念した。そのあとは何があつたか、もう今は覺えてゐない。が、會が終つて外へ出たら、車寄のまはりに馬車や自働車が、通りぬけられない程澤山竝んでゐた。さうしてその中の一つの自働車には、あの金と白粉との老夫人が毛皮に顏を埋めながら、乘らうとしてゐる所だつた。我々は外套の襟を立てて、その間をやつと風の寒い往來へ出た。ふと見ると、我々の前には、警視廳の殺風景な建物が、黑く空を衝いて聳えてゐた。自分は歩きながら、何だかそこに警視廳のある事が不安になつた。で、思はず「妙だな」と云つたら、成瀨が「何が？」と聞き咎めた。自分はいやとか何とか云つて、好い加減に返事を胡麻化した。その時はもう我々の左右を、馬車や自働車が盛んに通りすぎてゐた。

五

フイル・ハアモニイ會へ行つたあくる日、午前の大塚博士の講義(題目はリツケルトの哲學だつた。これが自分が聞いた中では最も啓發される所の多かつた講義である)をすませた後で、又成瀬と凩の吹く中を、わざわざ一白舍へ二十錢の辨當を食ひに行つたら、彼が突然自分に、「君は昨夜僕等の後にゐた女の人を知つてゐるかい。」と尋ねた。「知らない。知つてゐるのは隣の金と皮と骨と白粉とだけだ。」「金と皮と——何だい、それは。」「何でも好い。兎に角、後にゐた女の人ぢやない事は確だ。さうして君は又その女の人に惚れでもしたのかい。」「惚れる所か、僕も知らなかつたんだ。」「何だ、つまらない。そんな人間なら、ゐたつてゐなくたつて、同じ事ぢやないか。」「所がね。家に歸つたらムツタアが後の女の人を見たかと云ふんだ。つまりその人が僕の細君の候補者だつたんださうだね。」「ぢや見合ひか。」「見合ひ程まだ進歩したものぢやないんだらう。」「だつて見たかつて云へば、見合ひぢやないか。君のムツタアも亦、迂遠だな。見せる心算なら、前へ坐らせりや好いのに。後にゐるものが見える位なら、こんな二十錢の辨當なんぞ食つ

てゐやしない。」成瀬は親孝行な男だから、自分がかう云ふと、ちよいと妙な顏をした。が、すぐに又、「しかし向うの女の人を本位にして云へば、僕等が前にゐた事になるんだからな。」「成程、あすこぢや兩方で向ひ合つてゐようと思つたら、どつちか一方が舞臺へ上らなくつちやならない譯だ。――譯だが、それで君は何つて返事をしたんだい。」「見なかつたつて云つたあね。實際見なかつたんだから仕方がないぢやないか。」「さう今になつて、僕に鬱憤を洩したつて駄目だよ。だが惜しい事をしたな。一體あれは音樂會だつたから、いけないんだ。芝居なら僕が賴まれたくつたつて、帝劇中の見物をのこらず物色をしてやるんだのに。」――成瀬と自分とはこんな話をしながら、大笑ひに笑ひ合つた。

その日は午後には、獨逸語の時間があつた。が、當時我々はアイアムビツクに出席するとか何とか云つて、成瀬が出れば自分が休み、自分が出れば成瀬が休んでゐた。さうして一つ教科書に代る代る二人で假名をつけて、試驗前には一しよにその教科書を讀んで間に合せてゐた。丁度その午後の獨逸語は成瀬が出席する番に當つてゐたから、自分は食事をしまふと、成瀬に教科書を引き渡して、獨りで一白舍の外へ出た。

出ると外は凩が、砂煙を往來の空に捲き上げてゐた。黄いろい並木の銀杏の落葉も、その中でくるくる舞ひながら、大學前の古本屋の店の奧まで吹かれて行つた。自分はふと松岡を訪ねて見ようと云ふ氣になつた。松岡は自分と（恐らくは大抵な人と）違つて大風の吹く日が一番落着いて好いと稱してゐた。だからその日などは殊に落着いてゐるだらうと思つて、何度も帽子を飛ばせさうにしながら、やつと本郷五丁目の彼の下宿まで辿りつくと、下宿のお婆さんが入口で、「松岡さんはまだ御休みになつていらつしやいますが」と、氣の毒さうな顏をして云つた。「まだ寢てゐる？　恐ろしく寢坊だな。」「いえ、昨夜徹夜なすつて、ついさつきまで起きていらしつたんですがね、今し方寢るからつて、床へおはいりになつたんでございますよ。」「ぢやまだ眼がさめてゐるかも知れない。兎に角ちよいと上つて見ませう。寢てゐればすぐに下りて來ます。」自分は松岡のゐる二階へ、足音を偸みながら、そつと上つた。上つてとつつきの襖をあけると、二枚戸を立てた、うす暗い部屋のまん中に、松岡の床がとつてあつた。枕元には怪しげな一閑張の机があつて、その上には原稿用紙が亂雜に重なり合つてゐた。と思ふと机の下には、古新聞を敷いた上に、夥しい南京豆の皮が、杉形に高く盛り上つてゐた。自分はすぐに松岡が書くと云つてゐる、

三幕物の戯曲の事を思ひ出した。「やつてゐるな」――ふだんならかう云つて、自分はその机の前へ坐りながら、出來ただけの原稿を讀ませて貰ふ所だつた。が、生憎その聲に應ずべき松岡は、髭ののびた顏を括り枕の上にのせて、死んだやうに寢入つてゐた。勿論自分は折角徹夜の疲を癒してゐる彼を、起さうなどと云ふ考はなかつた。しかし又この儘歸つてしまふのも、何となく殘り惜しかつた。そこで自分は彼の枕元に坐りながら、机の上の原稿を、暫くあつちこつち讀んで見た。その間も凩はこの二階を搖ぶつてしつきりなく通りすぎた。が、松岡は依然として、靜な寢息ばかり洩してゐた。自分はやがて、かうしてゐても仕方がないと思つたから、物足りない腰をやつと上げて、靜に枕元を離れようとした。その時ふと松岡の顏を見ると、彼は眠りながら睫毛の間へ、涙を一ぱいためてゐた。いや、さう云へば頬の上にも、涙の流れた痕が殘つてゐた。自分はこの思ひもよらない松岡の顏に氣がつくと、さつきの「やつてゐるな」と云ふ元氣の好い心もちは、一時にどこかへ消えてしまつた。さうしてその代りに、自分も夜通し苦しんで、原稿でもせつせと書いたやうな、やり切れない心細さが、俄に胸へこみ上げて來た。「莫迦な奴だな。寢ながら泣く程苦しい仕事なんぞをするなよ。體でも毀したら、どうするんだ。」――自分はその心

細さの中で、かう松岡を叱りたかつた。が、叱りたいその裏では、やつぱり「よくそれ程苦しんだな」と、内證で褒めてやりたかつた。さう思つたら、自分まで、何時の間にか涙ぐんでゐた。

それから又足音を偸んで、梯子段を下りて來ると、下宿の御婆さんが心配さうに、「御休みなすつていらつしやいますか」と尋いた。自分は「よく寢てゐます」とぶつきらぼうな返事をして、泣顔を見られるのが嫌だつたから、匆々凩の往來へ出た。往來は相不變、砂煙が空へ舞ひ上つてゐた。さうしてその空で、凄じく何か唸るものがあつた。氣になつたから上を見ると、唯、小さな太陽が、白く天心に動いてゐた。自分はアスフアルトの往來に立つた儘、どつちへ行かうかなと考へた。

（大正七年十二月）

開化の良人

何時ぞや上野の博物館で、明治初期の文明に關する展覽會が開かれてゐた時の事である。或曇つた日の午後、私はその展覽會の各室を一々叮嚀に見て歩いて、漸く當時の版畫が陳列されてゐる、最後の一室へはひつた時、そこの硝子戸棚の前に立つて、古ぼけた何枚かの銅版畫を眺めてゐる一人の紳士が眼にはひつた。紳士は背のすらりとした、どこか花車な所のある老人で、折目の正しい黑づくめの洋服に、上品な山高帽をかぶつてゐた。私はこの姿を一目見ると、すぐにそれが四五日前に、或會合の席上で紹介された本多子爵だと云ふ事に氣がついた。が、近づきになつて間もない私も、子爵の交際嫌ひな性質は、以前からよく承知してゐたから、咄嗟の間、側へ行つて挨拶したものかどうかを決しかねた。すると本多子爵は、私の足音が耳にはひつたものと見えて、徐にこちらを振返つたが、やがてその半白な髭に掩はれた脣に、ちらりと微笑の影が動くと、心もち山高帽を持ち上げながら、「やあ」と柔しい聲で會釋をした。私はかすかな心の寛ぎ

を感じて、無言の儘、叮嚀にその會釋を返しながら、そつと子爵の側へ歩を移した。

本多子爵は壯年時代の美貌が、まだ暮方の光の如く肉の落ちた顏のどこかに、漂つてゐる種類の人であつた。が、同時に又その顏には、貴族階級には珍らしい、心の底にある苦勞の反映が、もの思はしげな陰影を落してゐた。私は先達ても今日の通り、唯一色の黑の中に懶い光を放つてゐる、大きな眞珠のネクタイピンを、子爵その人の心のやうに眺めたと云ふ記憶があつた。……

「どうです、この銅版畫は。築地居留地の圖――ですか。圖どりが中々巧妙ぢやありませんか。その上明暗も相當に面白く出來てゐるやうです。」

子爵は小聲でかう云ひながら、細い杖の銀の握りで、硝子戸棚の中の繪をさし示した。私は頷いた。雲母のやうな波を刻んでゐる東京灣、いろいろな旗を飜した蒸汽船、往來を歩いて行く西洋の男女の姿、それから洋館の空に枝をのばしてゐる、廣重めいた松の立木――そこには取材と手法とに共通した、一種の和洋折衷が、明治初期の藝術に特有な、美しい調和を示してゐた。この調和はそれ以來、永久に我々の藝術から失はれた。いや、我々が生活する東京からも失はれた。私が再び頷きながら、この築地居留地の圖は、獨り銅版畫として興味があるばかりでなく、

牡丹に唐獅子の繪を描いた相乘の人力車や、硝子取りの藝者の寫眞が開化を誇り合つた時代を思ひ出させるので、一層懷しみがあると云つた。子爵はやはり微笑を浮べながら、私の言を聞いてゐたが、靜にその硝子戸棚の前を去つて、隣のそれに竝べてある大蘇芳年の浮世繪の方へ、ゆつくりした歩調で歩みよると、

「ぢやこの芳年をごらんなさい。洋服を着た菊五郎と銀杏返しの半四郎とが、火入りの月の下で愁嘆場を出してゐる所です。これを見ると一層あの時代が、――あの江戸とも東京ともつかない、夜と晝とを一つにしたやうな時代が、ありありと眼の前に浮んで來るやうぢやありませんか。」

私は本多子爵が、今でこそ交際嫌ひで通つてゐるが、その頃は洋行歸りの才子として、官界のみならず民間にも、屢聲名を謳はれたと云ふ噂の端も聞いてゐた。だから今、この人氣の少い陳列室で、硝子戸棚の中にある當時の版畫に圍まれながら、かう云ふ子爵の言を耳にするのは、元より當然すぎる程、ふさはしく思はれる事であつた。が、一方では又その當然すぎる事が、多少の反撥を私の心に與へたので、私は子爵の言が終ると共に、話題を當時から引き離して、一般的な浮世繪の發達へ運ばうと思つてゐた。しかし本多子爵は更に杖の銀の握りで、芳年の浮世繪

を一つ一つさし示しながら、相不變低い聲で、

「殊に私などはかう云ふ版畫を眺めてゐると、三四十年前のあの時代が、まだ昨日のやうな心もちがして、今でも新聞をひろげて見たら、鹿鳴館の舞踏會の記事が出てゐさうな氣がするのです。實を云ふとさつきこの陳列室へはひつた時から、もう私はあの時代の人間がみんな又生き返つて、我々の眼にこそ見えないが、そこにもここにも歩いてゐる。――さうしてその幽靈が時々我々の耳へ口をつけて、そつと昔の話を囁いてくれる。――そんな怪しげな考がどうしても念頭を離れないのです。殊に今の洋服を着た菊五郎などは、餘りよく私の友だちに似てゐるので、あの似顏畫の前に立つた時には、殆ど久濶を敍したい位、半ば氣味の惡い懷しささへ感じました。どうです。御嫌でなかつたら、その友だちの話でも聞いて頂くとしませうか。」

本多子爵はわざと眼を外らせながら、私の氣をかねるやうに、落着かない調子でかう云つた。私は先達子爵と會つた時に、紹介の勞を執つた私の友人が、「この男は小說家ですから、何か面白い話があつた時には、聞かせてやつて下さい。」と頼んだのを思ひ出した。又、それがないにしても、その時にはもう私も、何時か子爵の懷古的な詠歎に釣りこまれて、出來るなら今にも子爵

と二人で、過去の霧の中に隱れてゐる「一等煉瓦」の繁華な市街へ、馬車を驅りたいとさへ思つてゐた。そこで私は頭を下げながら、喜んで「どうぞ」と相手を促した。

「ぢやあすこへ行きませう。」

子爵の言につれて我々は、陳列室のまん中に据ゑてあるベンチへ行つて、一しよに腰を下ろした。室内にはもう一人も人影は見えなかつた。唯、周圍には多くの硝子戸棚が、曇天の冷い光の中に、古色を帶びた銅版畫や浮世繪を寂然と懸け並べてゐた。本多子爵は杖の銀の握りに頤をのせて、暫くはぢつとこの子爵自身の「記憶」のやうな陳列室を見渡してゐたが、やがて眼を私の方に轉じると、沈んだ聲でかう語り出した。

「その友だちと云ふのは、三浦直記と云ふ男で、私が佛蘭西から歸つて來る船の中で、偶然近づきになつたのです。年は私と同じ二十五でしたが、あの芳年の菊五郎のやうに、色の白い、細面の、長い髮をまん中から割つた、如何にも明治初期の文明が人間になつたやうな紳士でした。それが長い航海の間に、何時となく私と懇意になつて、歸朝後も互に一週間とは訪問を絶やした事がない位、親しい仲になつたのです。

「三浦の親は何でも下谷あたりの大地主で、彼が佛蘭西へ渡ると同時に、二人とも前後して歿くなつたとか云ふ事でしたから、その一人息子だつた彼は、當時もう相當な資産家になつてゐたのでせう。私が知つてからの彼の生活は、ほんの御役目だけに第×銀行へ出る外は、何時も懷手をして遊んでゐられると云ふ、至極結構な身分だつたのです。ですから彼は歸朝すると間もなく、親の代から住んでゐる兩國百本杭の近くの邸宅に、氣の利いた西洋風の書齋を新築して、可也贅澤な暮しをしてゐました。

「私はかう云つてゐる中にも、向うの銅版畫の一枚を見るやうに、その部屋の有樣が歷々と眼の前へ浮んで來ます。大川に臨んだ佛蘭西窓、緣に金を入れた白い天井、赤いモロツコ皮の椅子や長椅子、壁に懸かつてゐるナポレオン一世の肖像畫、彫刻のある黑檀の大きな書棚、鏡のついた大理石の煖爐、それからその上に載つてゐる父親の遺愛の松の盆栽――すべてが或古い新しさを感じさせる、陰氣な位けばけばしい、もう一つ形容すれば、どこか調子の狂つた樂器の音を思ひ出させる、やはりあの時代らしい書齋でした。しかもさう云ふ周圍の中に、三浦は何時もナポレオン一世の下に陣取りながら、結城揃ひか何かの襟を重ねて、ユウゴオのオリアンタアルでも讀

んで居ようと云ふのですから、愈あすこに並べてある銅版畫にでもありさうな光景です。さう云へばあの佛蘭西窓の外を塞いで、時々大きな白帆が通りすぎるのも、何となくもの珍しい心もちで眺めた覺えがありましたつけ。

「三浦は贅澤な暮しをしてゐると云つても、同年輩の青年のやうに、新橋とか柳橋とか云ふ遊里に足を踏み入れる氣色もなく、唯、毎日この新築の書齋に閉ぢこもつて、銀行家と云ふよりは若隱居にでもふさはしさうな讀書三昧に耽つてゐたのです。これは勿論一つには、彼の蒲柳の體質が一切の不攝生を許さなかつたからもありませうが、又一つには彼の性情が、どちらかと云ふと唯物的な當時の風潮とは正反對に、人一倍純粹な理想的傾向を帶びてゐたので、自然と孤獨に甘んじるやうな境涯に置かれてしまつたのでせう。實際模範的な開化の紳士だつた三浦が、多少彼の時代と色彩を異にしてゐたのは、この理想的な性情だけで、ここへ來ると彼は寧、もう一時代前の政治的夢想家に似通つてゐる所があつたやうです。

「その證據は彼が私と二人で、或日どこかの芝居でやつてゐる神風連の狂言を見に行つた時の話です。たしか大野鐵平の自害の場の幕がしまつた後だつたと思ひますが、彼は突然私の方をふり

向くと、『君は彼等に同情が出來るか。』と、眞面目な顏をして問ひかけました。私は元より洋行歸りの一人として、すべて舊弊じみたものが大嫌ひだつた頃ですから、『いや一向同情は出來ない。廢刀令が出たからと云つて、一揆を起すやうな連中は、自滅する方が當然だと思つてゐる。』と、至極冷淡な返事をしますと、彼は不服さうに首を振つて、『それは彼等の主張は間違つてゐたかも知れない。しかし彼等がその主張に殉じた態度は、同情以上に價すると思ふ。』と、云ふのです。そこで私がもう一度、『ぢや君は彼等のやうに、明治の世の中を神代の昔に返さうと云ふ子供じみた夢の爲に、二つとない命を捨てても惜しくないと思ふのか。』と、笑ひながら反問しましたが、彼はやはり眞面目な調子で、『たとひ子供じみた夢にしても、信ずる所に殉ずるのだから、僕はそれで本望だ。』と、思ひ切つたやうに答へました。その時はかう云ふ彼の言も、單に一場の口頭語として、深く氣にも止めませんでしたが、今になつて思ひ合はすと、實はもうその言の中に傷しい後年の運命の影が、煙のやうに這ひまつはつてゐたのです。が、それは追々話が進むに從つて、自然と御會得が參るでせう。

「何しろ三浦は何によらず、かう云ふ態度で押し通してゐましたから、結婚問題に關しても、『僕

は愛のない結婚はしたくはない。』と云ふ調子で、どんな好い縁談が湧いて來ても、惜しげもなく斷つてしまふのです。しかもその又彼の愛なるものが、一通りの戀愛とは事變つて、隨分彼の氣に入つてゐるやうな令孃が現れても、『どうもまだ僕の心もちには、不純な所があるやうだから。』などと云つて、愈結婚と云ふ所までは中々話が運びません。それが傍で見てゐても、餘り齒痒い氣がするので、時には私も横合ひから、『それは何でも君のやうに、隅から隅まで自分の心もちを點檢してかかると云ふ事になると、行住坐臥さへ容易には出來はしない。だからどうせ世の中は理想通りに行かないものだとあきらめて、好い加減な候補者で滿足するさ。』と、世話を燒いた事があるのですが、三浦は反つてその度に、憐むやうな眼で私を眺めながら、『その位なら何もこの年まで、僕は獨身で通しはしない。』と、まるで相手にならないのです。が、友だちはそれで默つてゐても、親戚の身になつて見ると、元來病弱な彼ではあるし、萬一血統を絶やしてはと云ふ心配もなくはないので、せめて權妻でも置いたらどうだと勸めた向きもあつたさうですが、元よりそんな忠告などに耳を借すやうな三浦ではありません。いや、耳を借さない所か、彼はその權妻と云ふ言が大嫌ひで、日頃から私をつかまへては、『何しろいくら開化したと云つた所で、ま

だ日本では妾と云ふものが公然と幅を利かせてゐるのだから。』と、よく嗤つてはゐたものなのです。ですから歸朝後二三年の間、彼は毎日あのナポレオン一世を相手に、根氣よく讀書してゐるばかりで、何時になつたら彼の所謂『愛のある結婚』をするのだか、とんと私たち友人にも見當のつけやうがありませんでした。

「所がその中に私は或官邊の用向きで、暫く韓國京城へ赴任する事になりました。すると向うへ落ち着いてから、まだ一月と經たない中に、思ひもよらず三浦から結婚の通知が屆いたぢやありませんか。その時の私の驚きは、大抵御想像がつきませう。が、驚いたと同時に私は、愈彼にもその愛の相手が出來たのだなと思ふと、流石に微笑せずにはゐられませんでした。通知の文面は極簡單なもので、唯、藤井勝美と云ふ御用商人の娘と縁談が整つたと云ふだけでしたが、その後引き續いて受取つた手紙によると、彼は或日散歩の序にふと柳島の萩寺へ寄つた所が、そこへ丁度彼の屋敷へ出入りする骨董屋が藤井の父子と一しよに詣り合せたので、つれ立つて境内を歩いてゐる中に、何時か互に見染めもし見染められもしたと云ふ次第なのです、何しろ萩寺と云へば、その頃はまだ仁王門も藁葺屋根で、『ぬれて行く人もをかしや雨の萩』と云ふ芭蕉翁の名高い

句碑が萩の中に残つてゐる、如何にも風雅な所でしたから、實際才子佳人の奇遇には誂へ向きの舞臺だつたのに違ひありません。しかしあの外出する時は、必巴里仕立ての洋服を着用した、どこまでも開化の紳士を以て任じてゐる三浦にしては、餘り見染め方が紋切形なので、既に結婚の通知を讀んでさへ微笑した私などは、愈揶揄られるやうな心もちを禁ずる事が出來ませんでした。かう云へば勿論縁談の橋渡しには、その骨董屋のなつたと云ふ事も、すぐに御推察が參るでせう。それが又幸と、卽座に話がまとまつて、表向きの仲人を拵へるが早いか、その秋の中に婚禮も滯りなくすんでしまつたのです。ですから夫婦仲の好かつた事は、元より云ふまでもないでせうが、殊に私が可笑しいと同時に妬ましいやうな氣がしたのは、あれ程冷靜な學者肌の三浦が、結婚後は近狀を報知する手紙の中でも、殆別人のやうな快活さを示すやうになつた事でした。

「その頃の彼の手紙は、今でも私の手もとに保存してありますが、それを一々讀み返すと、當時の彼の笑ひ顏が眼に見えるやうな心もちがします。三浦は子供のやうな喜ばしさで、彼の日常生活の細目を根氣よく書いてよこしました。今年は朝顏の培養に失敗した事、上野の養育院の寄附

を依賴された事、入梅で書物が大半黴びてしまつた事、抱への車夫が破傷風になつた事、都座の西洋手品を見に行つた事、藏前に火事があつた事――一々數へ立ててゐたのでは、とても際限がありませんが、中でも一番嬉しさうだつたのは、彼が五姓田芳梅畫伯に依賴して、細君の肖像畫を描いて貰つたと云ふ一條です。その肖像畫は彼が例のナポレオン一世の代りに、書齋の壁へ懸けて置きましたから、私も後に見ましたが、何でも束髮に結つた勝美夫人が毛金の繡のある黑の模樣で、薔薇の花束を手にしながら、姿見の前に立つてゐる所を、橫顏に描いたものでした。が、それは見る事が出來ても、當時の快活な三浦自身は、とうとう永久に見る事が出來なかつたのです。……」

本多子爵はかう云つて、かすかな吐息を洩しながら、暫くの間口を噤んだ。ぢつとその話に聞き入つてゐた私は、子爵が韓國京城から歸つた時、萬一三浦はもう物故してゐたのではないかと思つて、我知らず不安の眼を相手の顏に注がずにはゐられなかつた。すると子爵は早くもその不安を覺つたと見えて、徐に頭を振りながら、

「しかし何もかう云つたからと云つて、彼が私の留守中に故人になつたと云ふ次第ぢやありませ

ん。唯、彼是一年ばかり經つて、私が再び内地へ歸つて見ると、三浦はやはり落ち着き拂つた、寧以前よりは幽鬱らしい人間になつてゐたと云ふだけです。これは私があの新橋停車場でわざわざ迎へに出た彼と久濶の手を握り合つた時、既に私には氣がついてゐた事でした。いや恐らくは氣がついたと云ふよりも、その冷靜すぎるのが氣になつたとでもいふべきのでせう。實際その時私は彼の顔を見るが早いか、何よりも先に『どうした。體でも惡いのぢやないか。』と尋ねた程、意外な感じに打たれました。が、彼は反つて私の怪しむのを不審がりながら、彼ばかりでなく彼の細君も至極健康だと答へるのです。さう云はれて見れば、成程一年ばかりの間に、いくら『愛のある結婚』をしたからと云つて、急に彼の性情が變化する筈もないと思ひましたから、それぎり私も別段氣にとめないで、『ぢや光線のせゐで顔色がよくないやうに見えたのだらう』と、笑つて濟ませてしまひました。それが追々笑つて濟ませなくなるまでには、——この幽鬱な假面に隱れてゐる彼の煩悶に感づくまでには、まだ凡そ二三箇月の時間が必要だつたのです。が、話の順序として、その前に一通り、彼の細君の人物を御話しして置く必要がありませう。

「私が始めて三浦の細君に會つたのは、京城から歸つて間もなく、彼の大川端の屋敷へ招かれて、

一夕の饗應に預つた時の事です。聞けば細君は彼是三浦と同年配だつたさうですが、小柄ででもあつたせゐか、誰の眼にも二つ三つ若く見えたのに相違ありません。それが眉の濃い、血色鮮かな丸顏で、その晩は古代蝶鳥の模樣か何かに繡珍の帶をしめたのが、當時の言を使つて形容すれば、如何にも高等な感じを與へてゐました。が、三浦の愛の相手として、私が想像に描いてゐた新夫人に比べると、どこかその感じにそぐはない所があるのです。尤もこれはどこかと云ふ位な事で、私自身にもその理由がはつきりとわかつてゐた譯ぢやありません。殊に私の豫想が狂ふのは、今度三浦に始めて會つた時を始めとして、度々經驗した事ですから、勿論その時も唯ふとさう思つただけで、別段それだから彼の結婚を祝する心が冷却したと云ふ譯でもなかつたのです。それ所か、明い空氣洋燈の光を圍んで、暫く膳に向つてゐる間に、彼の細君の溌剌たる才氣には、すつかり私を敬服させてしまひました。俗に打てば響くと云ふのは、恐らくあんな應對の仕振りの事を指すのでせう。『奥さん。あなたのやうな方は實際日本より、佛蘭西にでも御生れになればよかつたのです。』――とうとう私は眞面目な顏をして、こんな事を云ふ氣にさへなりました。すると三浦も盃を含みながら、『それ見るが好い。己が何時も云ふ通りぢやないか。』と、からかふや

うに横槍を入れましたが、そのからかふやうな彼の言が、刹那の間私の耳に面白くない響を傳へたのは、果して私の氣のせゐばかりだつたでせうか。いや、この時半ば怨ずる如く、斜に彼を見た勝美夫人の眼が、餘りに露骨な艶かしさを裏切つてゐるやうに思はれたのは、果して私の邪推ばかりだつたでせうか。兎に角私はこの短い應答の間に、彼等二人の平生が稻妻のやうに閃くのを、感じない譯には行かなかつたのです。今思へばあれは私にとつて、三浦の生涯の悲劇に立ち合つた最初の幕開きだつたのですが、當時は勿論私にしても、ほんの不安の影ばかりが際どく頭を掠めただけで、後は又元の如く、三浦を相手に賑な盃のやりとりを始めました。ですからその夜は文字通り一夕の歡を盡した後で、彼の屋敷を辭した時も、大川端の川風に俥上の微醺を吹かせながら、やはり私は彼の爲に、所謂『愛のある結婚』に成功した事を何度もひそかに祝したのです。

「所がそれから一月ばかり經つて(元より私はその間も、度々彼等夫婦とは往來し合つてゐたのです。)或日私が友人の或ドクトルに誘はれて、丁度於傳假名書をやつてゐた新富座を見物に行きますと、丁度向うの棧敷の中ほどに、三浦の細君が來てゐるのを見つけました。その頃私は芝居

へ行く時は、必眼鏡を持つて行つたので、勝美夫人もその圓い硝子の中に、燃え立つやうな掛毛氈を前にして、始めて姿を見せたのです。それが薔薇かと思はれる花を束髪にさして、地味な色の半襟の上に、白い二重顋を休めてゐましたが、私がその顏に氣がつくと同時に、向うも例の艶しい眼をあげて、輕く目禮を送りました。そこで私も眼鏡を下しながら、その目禮に答へますと、三浦の細君はどうしたのか、又慌てて私の方へ會釋を返すぢやありませんか。しかもその會釋が、前のそれに比べると、遙に恭しいものなのです。私はやつと最初の目禮が私に送られたのではなかつたと云ふ事に氣がつきましたから、思はず周圍の高土間を見まはして、その挨拶の相手を物色しました。するとすぐ隣の桝に派手な縞の背廣を着た若い男がゐて、これも勝美夫人の會釋の相手をさがす心算だつたのでせう。匂の高い卷煙草を啣へながら、じろじろ私たちの方を窺つてゐたのと、ぴつたり視線が出合ひました。私はその淺黑い顏に何か不快な特色を見てとつたので、咄嗟に眼を反らせながら、又眼鏡をとり上げて、見るともなく向うの棧敷を見ますと、三浦の細君のゐる桝には、もう一人女が坐つてゐるのです。楢山の女權論者――と云つたら、或は御聞き及びになつた事がないものでもありますまい。當時相當な名聲のあつた楢山と云

ふ代言人の細君で、盛に男女同權を主張した、兎角如何はしい風評が絶えた事のない女です。私はその楢山夫人が、黑の紋付の肩を張つて、金縁の眼鏡をかけながら、まるで後見と云ふ形で、三浦の細君と竝んでゐるのを眺めると、何と云ふ事もなく不吉な豫感に脅かされずにはゐられませんでした。しかもあの女權論者は、骨立つた顏に薄化粧をして、絶えず襟を氣にしながら、私たちのゐる方へ――と云ふよりは恐らく隣の縞の背廣の方へ、意味ありげな眼を使つてゐるのです。私はこの芝居見物の一日が、舞臺の上の菊五郎や左團次より、三浦の細君と縞の背廣と楢山の細君とを注意するのに、より多く費されたと云つたにしても、決して過言ぢやありません。それ程私は賑な下座の囃しと櫻の釣枝との世界にゐながら、心は全然さう云ふものと沒交渉な、忌はしい色彩を帶びた想像に苦しめられてゐたのです。ですから中幕がすむと間もなく、あの二人の女連れが向うの棧敷にゐなくなつた時、私は實際肩が拔けたやうなほつとした心もちを味はひました。勿論女の方はゐなくなつても、縞の背廣はやはり隣の桝で、しつきりなく卷煙草をふかしながら、時々私の方へ眼をやつてゐましたが、三の巴の二つがなくなつた今になつては、前ほど私もその淺黑い顏が、氣にならないやうになつてゐたのです。

「と云ふと私がひどく邪推深いやうに聞えますが、これはその若い男の淺黑い顔だちが、妙に私の反感を買つたからで、どうも私とその男との間には、——或は私たちとその男との間には、始から或敵意が纏綿してゐるやうな氣がしたのです。ですからその後一月とたたない中に、あの大川へ臨んだ三浦の書齋で、彼自身その男を私に紹介してくれた時には、まるで謎でもかけられたやうな、當惑に近い感情を味はずにはゐられませんでした。何でも三浦の話によると、これは彼の細君の從弟ださうで、當時××紡績會社でも歳の割には重用されてゐる、敏腕の社員だと云ふ事です。成程さう云へば一つ卓子の紅茶を圍んで、多曖もない雜談を交換しながら、卷煙草をふかせてゐる間でさへ、彼が相當な才物だと云ふ事はすぐに私にもわかりました。が、何も才物だからと云つて、その人間に對する好惡は、勿論變る譯もありません。いや、私は何度となく、既に細君の從弟だと云ふ以上、芝居で挨拶を交す位な事は、更に不思議でも何でもないぢやないかと、かう理性に訴へて、出來る丈その男に接近しようとさへ努力して見ました。しかし私がその努力にやつと成功しさうになると、彼は必ず音を立てて紅茶を啜つたり、卷煙草の灰を無造作に卓子の上へ落したり、或は又自分の洒落を自分で聲高に笑つたり、何かしら不快な事をしでかし

て、再私の反感を呼び起してしまふのです。ですから彼が三十分ばかり經つて、會社の宴會とかへ出る爲に、暇を告げて歸つた時には、私は思はず立ち上つて、部屋の中の俗惡な空氣を新にしたい一心から、川に向つた佛蘭西窓を一ぱいに大きく開きました。すると三浦は例の通り、薔薇の花束を持つた勝美夫人の額の下に坐りながら、『ひどく君はあの男が嫌ひぢやないか。』と、たしためるやうな聲で云ふのです。私『どうも蟲が好かないのだから仕方がない。あれが又君の細君の從弟だとは不思議だな。』三浦『不思議――だと云ふと？』私『何。あんまり人間の種類が違ひすぎるからさ。』三浦は暫くの間默つて、もう夕暮の光が漂つてゐる大川の水面をぢつと眺めてゐましたが、やがて『どうだらう。その中に一つ釣にでも出かけて見ては。』と、何の取つきもない事を云ひ出しました。が、私は何よりもあの細君の從弟から、話題の離れるのが嬉しかつたので、『よからう。釣なら僕は外交より自信がある。』と、急に元氣よく答へますと、三浦も始めて微笑しながら、『外交よりか、ぢや僕は――さうさな、先づ愛よりは自信があるかも知れない。』私『すると君の細君以上の獲物がありさうだと云ふ事になるが。』三浦『さうしたら又君に羨んで貰ふから好いぢやないか。』私はかう云ふ三浦の言の底に、何か針の如く私の耳を刺すものがあるのに氣

がつきました。が、夕暗の中に透して見ると、彼は相不變冷な表情を浮べた儘、佛蘭西窓の外の水の光を根氣よく眺めてゐるのです。私『所で釣には何時出かけよう。』三浦『何等でも君の都合の好い時にしてくれ給へ。』私『ぢや僕の方から手紙を出す事にしよう。』そこで私は徐に赤いモロツコ皮の椅子を離れながら、無言の儘、彼と握手を交して、それからこの祕密臭い薄暮の書齋を更にうす暗い外の廊下へ、そつと獨りで退きました。すると思ひがけなくその戸口には、誰やら黑い人影が、まるで中の容子でも偸み聽いてゐたらしく、靜に佇んでゐたのです。しかもその人影は、私の姿が見えるや否や、咄嗟に間近く進み寄つて、『あら、もう御歸りになるのでございますか。』と、艶しい聲をかけるぢやありませんか。私は息苦しい一瞬の後、今日も薔薇を髪にさした勝美夫人を冷に眺めながら、やはり無言の儘會釋をして、匆々俥の待たせてある玄關の方へ急ぎました。この時の私の心もちは、私自身さへ意識出來なかつた程、混亂を極めてゐたでせう。私は唯、私の俥が兩國橋の上を通る時も、絶えず口の中で呟いてゐたのは、「ダリラ」と云ふ名だつた事を記憶してゐるばかりなのです。

「それ以來私は明に三浦の幽鬱な容子が藏してゐる祕密の匂を感じ出しました。勿論その祕密

の匂が、すぐ忌むべき姦通の二字を私の心に烙きつけたのは、御斷りするまでもありますまい。が、もしさうだとすれば、何故又あの理想家の三浦ともあるものが、離婚を斷行しないのでせう。姦通の疑惑は抱いてゐても、その證據がないからでせうか。それとも或は證據があつても、猶離婚を躊躇する程、勝美夫人を愛してゐるからでせうか。私はこんな臆測を代り代り逞くしながら、彼と釣りに行く約束があつた事さへ忘れ果てて、彼是半月ばかりの間といふものは、手紙こそ時には書きましたが、あれ程屢訪問した彼の大川端の邸宅にも、足踏さへしなくなつてしまひました。所がその半月ばかりが過ぎてから、私は又偶然にも或豫想外な事件に出合つたので、とうとう前約を果し旁、彼と差向ひになる機會を利用して、直接彼に私の心勞を打ち明けようと思ひ立つたのです。

「と云ふのは或日の事、私はやはり友人のドクトルと中村座を見物した歸り途に、たしか珍竹林主人とか號してゐた曙新聞でも古顔の記者と一しよになつて、日の暮から降り出した雨の中を、當時柳橋にあつた生稻へ一盞を傾けに行つたのです。所がそこの二階座敷で、江戸の昔を偲ばせるやうな遠三味線の音を聞きながら、暫く淺酌の趣を樂んでゐると、その中に開化の戲作者のや

うな珍竹林主人が、ふと興に乘つて、折々輕妙な洒落を交へながら、あの楢山夫人の醜聞を面白く話して聞かせ始めました。何でも夫人の前身は神戸あたりの洋妾だと云ふ事、一時は三遊亭圓曉を男妾にしてゐたと云ふ事、その頃は夫人の全盛時代で金の指環ばかり六つも嵌めてゐたと云ふ事、それが二三年前から不義理な借金で殆首もまはらないと云ふ事――珍竹林主人はまだこの外にも、いろいろ内幕の不品行を素つぱぬいて聞かせましたが、中でも私の心の上に一番不愉快な影を落したのは、近來はどこかの若い御新造が楢山夫人の腰巾着になつて、歩いてゐると云ふ風評でした。しかもこの若い御新造は、時々女權論者と一しよに、水神あたりへ男連れで泊りこむらしいと云ふぢやありませんか。私はこれを聞いた時には、陽氣なるべき獻酬の間でさへ、もの思はしげな三浦の姿が執念く眼の前へちらついて、義理にも賑な笑ひ聲は立てられなくなつてしまひました。が、幸とドクトルは、早くも私のふさいでゐるのに氣がついたものと見えて、巧に相手を操りながら、何時か話題を楢山夫人とは全く緣のない方面へ持つて行つてくれましたから、私はやつと息をついて、兎も角一座の興を殺がない程度に、應對を續ける事が出來たのです。しかしその晩は私にとつて、どこまでも運惡く出來上つてゐたのでせう。女權論者の噂に氣

を腐らした私が、やがて二人と一しよに席を立つて、生稻の玄關から歸りの俥へ乘らうとしてゐると、急に一臺の相乘俥が幌を雨に光らせながら、勢よくそこへ曳きこみました。しかも私が俥の上へ靴の片足を踏みかけたのと、向ふの俥が桐油を下して、中の一人が沓脫ぎへ勢よく飛んで下りたのとが、殆同時だつたのです。私はその姿を見るが早いか、素早く幌の下へ身を投じて、車夫が梶棒を上げる刹那の間も、異樣な興奮に動かされながら、『あいつだ。』と呟かずにはゐられませんでした。あいつと云ふのは別人でもない。三浦の細君の從弟と稱する、あの色の淺黑い縞の背廣だつたのです。ですから私は雨の脚を俥の幌に彈きながら、燈火の多い廣小路の往來を飛ぶやうに走つて行く間も、あの相乘俥の中に乘つてゐた、もう一人の人物を想像して、何度となく恐しい不安の念に脅されました。あれは一體楢山夫人でしたらうか。或は又束髮に薔薇の花をさした勝美夫人だつたでせうか。私は獨りこのどちらともつかない疑惑に惱まされながら、寧その疑惑の晴れる事を恐れて、倉皇と俥に身を隱した私自身の臆病な心もちが、腹立たしく思はれてなりませんでした。このもう一人の人物が果して三浦の細君だつたか、それとも女權論者だつたかは、今になつても猶私には解く事の出來ない謎なのです。」

本多子爵はどこからか、大きな絹の手巾を出して、つつましく鼻をかみながら、もう暮色を帶び出した陳列室の中を見渡して、靜に又話を續け始めた。

「尤もこの問題はいづれにせよ、兎に角珍竹林主人から聞いた話だけは、三浦の身にとつて三考にも四考にも價する事ですから、私はその翌日すぐに手紙をやつて、保養がてら約束の釣に出たいと思ふ日を知らせました。するとすぐに折り返して、三浦から返事が屆きましたが、見るとその日は丁度十六夜だから、釣よりも月見旁、日の暮から大川へ舟を出さうと云ふのです。勿論私にしても格別釣に執着があつた譯でもありませんから、早速彼の發議に同意して、當日は兼ねての約束通り柳橋の舟宿で落合つてから、まだ月の出ない中に、猪牙舟で大川へ漕ぎ出しました。

「あの頃の大川の夕景色は、たとひ昔の風流には及ばなかつたかも知れませんが、それでも猶、どこか浮世繪じみた美しさが殘つてゐたものです。現にその日も萬八の下を大川筋へ出て見ますと、大きく墨をなすつたやうな兩國橋の欄干が、仲秋のかすかな夕明りを搖かしてゐる川波の空に、一反り反つた一文字を黑々とひき渡して、その上を通る車馬の影が、早くも水靄にぼやけた中には、目まぐるしく行き交ふ提灯ばかりが、もう鬼灯程の小ささに點々と赤く動いてゐました。

三浦『どうだ、この景色は。』私『さうさな、これぱかりはいくら見たいと云つたつて、西洋ぢやとても見られない景色かも知れない。』三浦『すると君は景色なら、少し位舊弊でも差支へないと云ふ譯か。』私『まあ、景色だけは負けて置かう。』三浦『所が僕は又近頃になつて、すつかり開化なるものがいやになつてしまつた。』私『何んでも舊幕の修好使がヴルヴアルを歩いてゐるのを見て、あの口の惡いメリメと云ふやつは、側にゐたデュマか誰かに「おい、誰が一體日本人をあんな途方もなく長い刀に縛りつけたのだらう。」と云つたさうだぜ。君なんぞは氣をつけないと、すぐにメリメの毒舌でこき下される仲間らしいな。』三浦『いや、それよりもこんな話がある。何時か使に來た何如璋と云ふ支那人は、横濱の宿屋へ泊つて日本人の夜着を見た時に、「是古の寢衣なるもの、此邦に夏周の遺制あるなり。」とか何とか、感心したと云ふぢやないか。だから何も舊弊だからつて、一概には莫迦に出來ない。』その中に上げ汐の川面が、急に闇を加へたのに驚いて、ふとあたりを見まはすと、何時の間にか我々を乘せた猪牙舟は、一段と櫓の音を早めながら、今ではもう兩國橋を後にして、夜目にも黒い首尾の松の前へ、さしかからうとしてゐるのです。そこで私は一刻も早く、勝美夫人の問題へ話題を進めようと思ひましたから、早速三浦の言尻をつ

かまへて、『そんなに君が舊弊好きなら、あの開化な細君はどうするのだ。』と、探りの錘を投げこみました。すると三浦は暫くの間、私の問が聞えないやうに、まだ月代もしない御竹倉の空をぢつと眺めてゐましたが、やがてその眼を私の顏に据ゑると、低いながらも力のある聲で、『どうもしない。一週間ばかり前に離緣をした。』と、きつぱりと答へたぢやありませんか。私はこの意外な答に狼狽して、思はず舷をつかみながら、『ぢや君も知つてゐたのか。』と、際どい聲で尋ねました。が、三浦は依然とした靜な調子で、『君こそ萬事を知つてゐたのか。』と念を押すやうに問ひ返すのです。私『萬事かどうかは知らないが、君の細君と楢山夫人との關係だけは聞いてゐた。』三浦『ぢや、僕の妻と妻の從弟との關係は？』私『それも薄々推察してゐた。』三浦『それぢや僕はもう何も云ふ必要はない筈だ。』私『しかし――しかし君は何時からそんな關係に氣がついたのだ？』三浦『妻と妻の從弟とのか？ それは結婚して三月程經つてから――丁度あの妻の肖像畫を、五姓田芳梅畫伯に依賴して描いて貰ふ前の事だつた。』この答が私にとつて、更に又意外だつたのは、大抵御想像がつくでせう。私『どうして君は又、今日までそんな事を默認してゐたのだ？』三浦『默認してゐたのぢやない。僕は肯定してやつてゐたのだ。』私は三度意外な答に驚かされて、暫

くは唯茫然と彼の顔を見つめてゐると、三浦は少しも迫らない容子で、『それは勿論妻と妻の從弟との現在の關係を肯定した譯ぢやない。當時の僕が想像に描いてゐた彼等の關係を肯定してやつたのだ。君は僕が「愛のある結婚」を主張してゐたのを覺えてゐるだらう。あれは僕が僕の利己心を滿足させたい爲の主張ぢやない。僕は愛をすべての上に置いた結果だつたのだ。だから僕は結婚後、僕等の間の愛情が純粹なものでない事を覺つた時、一方僕の輕擧を後悔すると同時に、さう云ふ僕と同棲しなければならない妻も氣の毒に感じたのだ。僕は君も知つてゐる通り、元來體も壯健ぢやない。その上僕は妻を愛さうと思つてゐても、妻の方ではどうしても僕を愛す事が出來ないのだ、いやこれも事によると、抑僕の愛なるものが、相手にそれだけの熱を起させ得ない程、貧弱なものだつたかも知れない。だからもし妻と妻の從弟との間に、僕と妻との間よりもつと純粹な愛情があつたら、僕は潔く幼馴染の彼等の爲に犧牲になつてやる考だつた。さうしなければ愛をすべての上に置く僕の主張が、事實に於て廢つてしまふ。實際あの妻の肖像畫も萬一さうなつた曉に、妻の身代りとして僕の書齋に殘して置く心算だつたのだ。』三浦はかう云ひながら、又眼を向う河岸の空へ送りました。が、空はまるで黒幕でも垂らしたやうに、椎の樹松浦

の屋敷の上へ陰々と蔽ひかかつた儘、月の出らしい雲のけはひは未に少しも見せません。私は巻煙草に火をつけた後で『それから?』と相手を促しました。三浦『所が僕はそれから間もなく、妻の從弟の愛情が不純な事を發見したのだ、露骨に云へばあの男と楢山夫人との間にも、情交のある事を發見したのだ。どうして發見したかと云ふやうな事は、君も格別聞きたくはなからうし、僕も今更話したいとは思はない。が、兎に角或は極めて偶然な機會から、僕自身彼等の密會する所を見たと云ふ事だけ云つて置かう。』私は巻煙草の灰を舷の外に落しながら、あの生稲の雨の夜の記憶を、まざまざと心に描き出しました。が、三浦は澱みなく言を繼いで、『これが僕にとつては、正に第一の打撃だつた。僕は彼等の關係を肯定してやる根據の一半を失つたのだから、勢、前のやうな好意のある眼で、彼等の情事を見る事が出來なくなつてしまつたのだ。これは確、君が朝鮮から歸つて來た頃の事だつたらう。あの頃の僕は、如何にして妻の從弟から妻を引き離さうかと云ふ問題に、毎日頭を惱ましてゐた。あの男の愛に虚僞はあつても、妻のそれは純粋なのに違ひない。――かう信じてゐた僕は、同時に又妻自身の幸福の爲にも、彼等の關係に交渉する必要があると信じてゐたのだ。が、彼等は――少くとも妻は、僕のかう云ふ素振りに感づくと、

僕が今まで彼等の關係を知らずにゐて、その頃やつと氣がついたものだから、嫉妬に驅られ出したとでも解釋してしまつたらしい。從つて僕の妻は、それ以來僕に對して、敵意のある監視を加へ始めた。いや、事によると時々は、君にさへ僕と同樣の警戒を施してゐたかも知れない。』私『さう云へば、何時か君の細君は、書齋で我々が話してゐるのを立ち聽きをしてゐた事があつた。』三浦『さうだらう、ずゐぶんその位な振舞はし兼ねない女だつた。』私たちは暫く口を噤んで、暗い川面を眺めました。この時もう我々の猪牙舟は、元の御廐橋の下をくぐりぬけて、かすかな月脚を夜の水に殘しながら、彼是駒形の並木近くへさしかかつてゐたのです。その中に又三浦が、沈んだ聲で云ひますには、『が、僕はまだ妻の誠實を疑はなかつた。だから僕の心もちが妻に通じない點で、――通じない所か、寧ろ憎惡を買つてゐる點で、それだけ餘計に僕は煩悶した。君を新橋に出迎へて以來、とうとう今日に至るまで、僕は始終この煩悶と闘はなければならなかつたのだ。が、一週間ばかり前に、下女か何かの過失から、妻の手にはひる可き郵便が、僕の書齋へ來てゐるぢやないか。僕はすぐ妻の從弟の事を考へた。さうして――とうとうその手紙を開いて見た。すると、その手紙は思ひもよらない外の男から妻へ宛てた艶書だつたのだ。言ひ換へれば、

あの男に對する妻の愛情も、やはり純粹なものぢやなかつたのだ。勿論この第二の打撃は、第一のそれよりも遙に恐しい力を以て、あらゆる僕の理想を粉碎した。が、それと同時に又、僕の責任が急に輕くなつたやうな、悲しむべき安慰の感情を味つた事も亦事實だつた。』三浦がかう語り終つた時、丁度向う河岸の並倉の上には、もの凄いやうに赤い十六夜の月が、始めて大きく上り始めました。私がさつきあの芳年の浮世繪を見て、洋服を着た菊五郎から三浦の事を思ひ出したのは、殊にその赤い月が、あの芝居の火入りの月に似てゐたからの事だつたのです。あの色の白い、細面の、長い髮をまん中から割つた三浦は、かう云ふ月の出を眺めながら、急に長い息を吐くと、さびしい微笑を帶びた聲で、『君は昔、神風連が命を賭して爭つたのも子供の夢だとけなした事かある。ぢや君の眼から見れば、僕の結婚生活なども――』私『さうだ。やはり子供の夢だつたかも知れない。が、今日我々の目標にしてゐる開化も、百年の後になつて見たら、やはり同じ子供の夢だらうぢやないか。……』

丁度本多子爵がここ迄語り續けた時、我々は何時か側へ來た守衞の口から、閉館の時刻が既に迫つてゐると云ふ事を傳へられた。子爵と私とは徐に立上つて、もう一度周圍の浮世繪と銅版畫

とを見渡してから、そつとこのうす暗い陳列室の外へ出た。まるで我々自身も、あの硝子戸棚から浮び出た過去の幽靈か何かのやうに。

（大正八年一月）

きりしとほろ上人傳

小序

これは予が嘗て三田文學誌上に掲載した「奉教人の死」と同じく、予が所藏の切支丹版「れげんだ・おうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し「奉教人の死」は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほろ上人傳」は古來洽く歐洲天主教國に流布した聖人行状記の一種であるから、予の「れげんだ・おうれあ」の紹介も、彼是相俟つて始めて全豹を彷彿する事が出來るかも知れない。

傳中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が續出するが、予は原文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削をも施さない事にした。大方の諸君子にして、予が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。

一　山ずまひのこと

遠い昔のことでおぢやる。「しりあ」の國の山奥に、「れぷろぼす」と申す山男がおぢやつた。その頃「れぷろぼす」ほどな大男は、御主の日輪の照らさせ給ふ天が下はひろしと云へ、絶えて一人もおりなかつたと申す。まづ身の丈は三丈あまりもおぢやらうか。葡萄蔓かとも見ゆる髮の中には、いたいけな四十雀が何羽とも知れず巣食うて居つた。まいて手足はさながら深山の松檜にまがうて、足音は七つの谷々にも谺するばかりでおぢやる。さればその日の糧を獵らうにも、鹿熊なんどのたぐひをとりひしぐは、指の先の一ひねりぢや。又は折ふし海べに下り立つて、すなどらうと思ふ時も、海松房ほどな髯の垂れた頤をひたと砂につけて、ある程の水を一吸ひ吸へば、鯛も鰹も尾鰭をふるうて、ざはざはと口へ流れこんだ。ぢやによつて沖を通る廻船さへ、時たらぬ潮のさしひきに漂はされて、水夫楫取の慌てふためく事もおぢやつたと申し傳へた。

なれど「れぷろぼす」は、性得心根のやさしいものでおぢやれば、山ずまひの杣獵夫は元より、往來の旅人にも害を加へたと申す事はおりない。反つて杣の伐りあぐんだ樹は推し倒し、獵夫の

追ひ失うた毛物はとつておさへ、旅人の負ひなやんだ荷は肩にかけて、なにかと親切をつくいたれば、遠近の山里でもこの山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。中にもとある一村では、羊飼のわらんべが行き方知れずになつた折から、夜さりそのわらんべの親が家の引き窓を推し開くものがあつたれば、驚きまどうて上を見たに、箕ほどな「れぷろぼす」の掌が、よく眠入つたわらんべをかいのせて、星空の下から悠々と下りて來たこともおぢやると申す。何と山男にも似合ふまじい、殊勝な心映えではおぢやるまいか。

されば山賤たちも「れぷろぼす」に出合へば、餅や酒などをふるまうて、へだてなく語らふことも度々おぢやつた。さるほどにある日のこと、杣の一むれが樹を伐らうずとて、檜山ふかくわけ入つたに、この山男がのさのさと熊笹の奥から現れたれば、もてなし心に落葉を焚いて、徳利の酒を暖めてとらせた。その滴ほどな徳利の酒さへ、「れぷろぼす」は大きに悦んだけしきで、頭の中に巣食うた四十雀にも、杣たちの食み殘いた飯をばらまいてとらせながら、大あぐらをかいて申したは、

「それがしも人間と生まれたれば、あつぱれ功名手がらをも致いて、末は大名ともならうずる。」

と云へば、杣たちも打ち興じて、
「道理かな。おぬしほどの力量があれば、城の二つ三つも攻め落さうは、片手業にも足るまじい。」と云うた。その時「れぷろぼす」が、ちとものを案ずる體で申すやうは、
「なれどこゝに一つ、難儀なことがおぢやる。それがしは日頃山ずまひのみ致いて居れば、どの殿の旗下に立つて、合戰を仕らうやら、とんと分別を致さうやうもござない。就いては當今天下無双の强者と申すは、いづくの國の大將でござらうぞ。誰にもあれそれがしは、その殿の馬前に馳せ參じて、忠節をつくさうずる。」と問うたれば、
「さればその事でおぢやる。まづわれらが量見にては、今天が下に『あんちおきや』の帝ほど、武勇に富んだ大將もおぢやるまい。」と答へた。山男はそれを聞いて、斜ならず悦びながら、
「さらばすぐさま、打ち立たうず。」とて、小山のやうな身を起いたが、ここに不思議がおぢやつたと申すは、頭の中に巢食うた四十雀が、一時にけたたましい羽音を殘いて、空に網を張つた森の梢へ、雛も餘さず飛び立つてしまうた事ぢや。それが斜に枝を延いた檜のうらに上つたれば、とんとその樹は四十雀が實のつたやうぢやとも申さうず。「れぷろぼす」はこの四十雀のふるまひ

を、訝しげな眼で眺めて居つたが、やがて又初一念を思ひ起いた顔色で、足もとにつどうた杣たちにねんごろな別をつげてから、再び森の熊笹を踏み開いて、元來たやうにのしのしと、山奥へ獨り往んでしまうた。

されば「れぷろぼす」が大名にならうず願望がことは、間もなく遠近の山里にも知れ渡つたが、ほど經て又かやうな噂が、風のたよりに傳はつて參つた。と申すは國ざかひの湖で、大ぜいの漁夫たちが泥に吸はれた大船をひきなづんで居つた所に、怪しげな山男がどこからか現れて、その船の帆柱をむずとつかんだと見てあれば、苦もなく岸へひきよせて、一同の驚き呆れるひまに、早くも姿をかくしたと云ふ噂ぢや。ぢやによつて「れぷろぼす」を見知つたほどの山賤たちは、皆この情ぶかい山男が、愈「しりや」の國中から退散したことを悟つたれば、西空に屏風を立てまはした山々の峯を仰ぐ毎に、限りない名殘りが惜しまれて、自らため息がもれたと申す。まいてあの羊飼のわらんべなどは、夕日が山かげに沈まうず時は、必村はづれの一本杉にたかだかとよぢのぼつて、下につどうた羊のむれも忘れたやうに、「れぷろぼす」戀しや、山を越えてどち行つたと、かなしげな聲で呼びつづけた。さてその後「れぷろぼす」が、如何なる仕合せにめぐり合うた

か、右の一條を知らうず方々はまづ次のくだりを讀ませられい。

二　俄大名のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、難なく「あんちおきや」の城裡に參つたが、田舍の山里とはこと變り、この「あんちおきや」の都と申すは、この頃天が下に並びない繁華の土地がらゆゑ、山男が巷へはいるや否や、見物の男女夥しうむらがつて、はてはは通行することも出來まじいと思はれた。されば「れぷろぼす」もとんと行かうず方角を失うて、人波に腰を揉まれながら、とある大名小路の辻に立ちすくんでしまうたに、折よくそこへ來かかつたは、帝の御輦をとりまいた、侍たちの行列ぢや。見物の群集はこれに先を追はれて、山男を一人殘いた儘、見る見る四方へ遠のいてしまうた。ぢやによつて「れぷろぼす」は、大象の足にもまがはうずしたたかな手を大地について、御輦の前に頭を下げながら、

「これは『れぷろぼす』と申す山男でござるが、唯今『あんちおきや』の帝は、天下無双の大將と承り、御奉公申さうずとて、はるばるこれまでまかり上つた。」と申し入れた。これよりさき、

帝の同勢も「れぷろぼす」の姿に膽をけして、先手は既に槍薙刀の鞘をも拂はうずけしきであつたが、この殊勝な言を聞いて、異心もあるまじいものと思ひつらう、とりあへず行列をそこに止めて、供頭の口からその趣をしかじかと帝へ奏聞した。帝はこれを聞し召されて、

「かほどの大男のことなれば、一定武勇も人に超えつらう。召し抱へてとらせい。」と、仰せられたれば、格別の詮議とあつて、すぐさま同勢の内へ加へられた。「れぷろぼす」の悦びは申すまでもあるまじい。ぢやによつて帝の行列の後から、三十人の力士もえ舁くまじい長櫃十棹の宰領を承つて、ほど近い御所の門まで、鼻たかだかと御供仕つた。まことこの時の「れぷろぼす」が、山ほどな長櫃を肩にかけて、行列の人馬を目の下に見下しながら、大手をふつてまかり通つた異形奇體の姿こそ、目ざましいものでおぢやつたらう。

さてこれより「れぷろぼす」は、漆紋の麻裃に朱鞘の長刀を横たへて、朝夕「あんちおきや」の帝の御所を守護する役者の身となつたが、幸こゝに功名手がらを顯さうず時節が到來したと申すは、ほどなく隣國の大軍がこの都を攻めとらうと、一度に押し寄せて參つたことぢや。元來この隣國の大將は、獅子王をも手打ちにすると聞えた、萬夫不當の剛の者でおぢやれば、「あんちおきや」の

帝とても、なほざりの合戰はたるまじい。ぢやによつて今度の先手は、今まゐりながら「れぷろぼす」に仰せつけられ、帝は御自ら本陣に御輦をすゝめて、號令を司られることとなつた。この采配を承つた「れぷろぼす」が、悅び身にあまりて、足の踏みども覺えなんだは、毛頭無理もおぢやるまい。

やがて味方も整へば、帝は「れぷろぼす」をまつさきに、貝金陣太鼓の音も勇しう、國ざかひの野原に繰り出された。かくと見た敵の軍勢は、元より望むところの合戰ぢやによつて、なじかは寸刻もためらはう。野原を蔽うた旗差物が、俄に波立つたと見てあれば、一度にどつと鬨をつくつて、今にも懸け合はさうずけしきに見えた。この時「あんちおきや」の人數の中より、一人悠悠と進み出いたは、別人でもない「れぷろぼす」ぢや。山男がこの日の出で立ちは、水牛の兜に南蠻鐵の鎧を着下いて、刃渡り七尺の大薙刀を柄みじかにおつとつたれば、さながら城の天主に魂が宿つて、大地も狹しと搖ぎ出いた如くでおぢやる。さるほどに「れぷろぼす」は兩軍の唯中に立ちはだかると、その大薙刀をさしかざいて、遙に敵勢を招きながら、雷のやうな聲で呼はつたは、

「遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ。これは「あんちおきや」の帝が陣中に、さるものありと知られたる『れぷろぼす』と申す剛の者ぢや。辱くも今日は先手の大將を承り、こゝに軍を出いたれば、われと思はうずるものどもは、近う寄つて勝負せよやつ。」と申した。その武者ぶりの凄じさは、昔「ぺりして」の豪傑に「ごりあて」と聞えたが、鱗綴の大鎧に銅の矛を提げて、百萬の大軍を叱咤したにも、劣るまじいと見えたれば、さすが隣國の精兵たちも、しばしがほどは鳴を靜めて、出で合うずものもおりなかつた。ぢやによつて敵の大將も、この山男を討たいでは、かなふまじいと思ひつらう。美々しい物の具に三尺の太刀をぬきかざいて、龍馬に泡を食ませながら、これも大音に名乘りをあげて、まつしぐらに「れぷろぼす」へ打つてかゝつた。なれどもこなたはものともせいで、大薙刀をとりのべながら、二太刀三太刀あしらうたが、やがて得物をからりと捨てて、猿臂をのばいたと見るほどに、早くも敵の大將を鞍壺からひきぬいて、目もはるかな大空へ、礫の如く投げ飛ばいた。その敵の大將がきりきりと宙に舞ひながら、味方の陣中へどうと落ちて、亂離骨灰になつたのと、「あんちおきや」の同勢が鯨波の聲を轟かいて、帝の御輦を中にとりこめ、雪崩の如く攻めかゝつたのとが、間に髪をも入れまじい、殆ど同時の働

きぢや。されば隣國の軍勢は、一たまりもなく浮き足立つて、武具馬具のたぐひをなげ捨てながら、四分五裂に落ち失せてしまうた。まことや「あんちおきや」の帝がこの日の大勝利は、味方の手にとつた兜首の數ばかりも、一年の日數よりは多かつたと申すことでおぢやる。

ぢやによつて帝は御悅び斜ならず、目でたく凱歌の裡に軍をめぐらされたが、やがて「れぷろぼす」には大名の位を加へられ、その上諸臣にも一々勝利の宴を賜つて、ねんごろに勳功をねぎらはれた。その勝利の宴を賜つた夜のことと思召されい。當時國々の形儀とあつて、その夜も高名な琵琶法師が、大燭臺の火の下に節面白う絃を調じて、今昔の合戰のありさまを、手にとる如く物語つた。この時「れぷろぼす」は、かねての大願を成就したことでおぢやれば、涎も垂れようずばかり笑み傾いて、餘念もなく珍陀の酒を酌みかはいてあつた所に、ふと醉うた眼にもとまつたは、錦の幔幕を張り渡いた正面の御座にわせられる帝の異な御ふるまひぢや。何故と申せば、檢校のうたふ物語の中に、惡魔と云ふ言がおぢやると思へば、帝はあわたゞしう御手をあげて、必ず十字の印を切らせられた。その御ふるまひが怪しからずものものしげに見えたれば、「れぷろぼす」は同席の侍に、

「何として帝は、あのやうに十字の印を切らせられるぞ。」と、卒爾ながら尋ねて見た。所がその侍の答へたは、

「總じて悪魔と申すものは、天が下の人間をも掌にのせて弄ぶ、大力量のものでおぢやる。ぢやによつて帝も、悪魔の障碍を拂はうずと思召され、再三十字の印を切つて、御身を守らせ給ふのぢや。」と申した。「れぷろぼす」はこれを聞いて、迂論げに又問ひ返したは、

「なれど今『あんちおきや』の帝は、天が下に並びない大剛の大將と承つた。されば悪魔も帝の御身には、一指をだに加へまじい。」と申したが、侍は首をふつて、

「いや、いや、帝も、悪魔ほどの御威勢はおぢやるまい。」と答へた。山男はこの答を聞くや否や、大いに憤つて申したは、

「それがしが帝に隨身し奉つたは、天下無双の強者は帝ぢやと承つた故でおぢやる。しかるにその帝さへ、悪魔には腰を曲げられるとあるなれば、それがしはこれよりまかり出て、悪魔の臣下と相成らうず。」と喚きながら、ただちに珍陀の盃を抛つて、立ち上らうと致いたれば、一座の侍はさらいでも、「れぷろぼす」が今度の功名を妬ましう思うて居つたによつて、

「すは、山男が謀叛するわ。」と異口同音に罵り騒いで、やにはに四方八方から搦めとらうと競ひ立つた。もとより「れぷろぼす」も日頃ならば、さうなくこの侍だちに組みとめられう筈もあるまじい。なれどもその夜は珍陀の醉に前後も不覺の體ぢやによつて、しばしがほどこそ多勢を相手に、組んづほぐれつ、揉み合うても居つたが、やがて足をふみすべらいて、思はずどうとまろんだれば、えたりやおうと侍だちは、いやが上にも折り重つて、怒り狂ふ「れぷろぼす」を高手小手に括り上げた。帝もことの體たらくを始終殘らず御覽ぜられ、

「恩を讐で返すにつくいやつめ。匆々土の牢へ投げ入れい。」と、大いに逆鱗あつたによつて、あはれや「れぷろぼす」はその夜の内に、見るもいぶせい地の底の牢舍へ、禁獄せられる身の上となつた。さてこの「あんちおきや」の牢内に囚はれとなつた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一條を知らうず方々は、まづ次のくだりを讀ませられい。

三　魔往來のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、未だ繩目もゆるされいで、土の牢の暗の底へ、投げ入れられたこ

とでおぢやれば、しばしがほどは赤子のやうに、唯おうおうと聲を上げて、泣き喚くより外はおりなかつた。その時いづくよりとも知らず、緋の袍をまとうた學匠が、忽然と姿を現いて、やさしげに問ひかけたは、

「如何に『れぷろぼす』。おぬしは何として、かやうな所に居るぞ。」とあつたれば、山男は今更ながら、瀧のやうに涙を流いて、

「それがしは、帝に背き奉つて、惡魔に仕へようずと申したれば、かやうに牢舍致されたのでおぢやる。おう、おう、おう。」と歎き立てた。學匠はこれを聞いて、再びやさしげに諄ねたは、

「さらばおぬしは、今もなほ惡魔に仕へようず望がおりやるか。」と申すに、「れぷろぼす」は頭を竪に動かいて、

「今もなほ、仕へようずる。」と答へた。學匠は大いにこの返事を悦んで、土の牢も鳴りどよむばかり、からからと笑ひ興じたが、やがて三度やさしげに申したは、

「おぬしの所望は、近頃殊勝千萬ぢやによつて、これよりただちに牢舍を赦いてとらさうずる。」とあつて、身にまとうた緋の袍を、「れぷろぼす」が上に蔽うたれば、不思議や總身の縛めは、悉く

はらりと切れてしまうた。山男の驚きは申すまでもあるまじい。されば恐る恐る身を起いて、學匠の顏を見上げながら、慇懃に禮を爲いて申したは、

「それがしが縲目を赦いてたまはつた御恩は、生々世々忘却つかまつるまじい。なれどもこの土の牢をば、何として忍び出で申さうずる。」と云うた。學匠はこの時又えせ笑ひをして、

「かうすべいに、なじかは難からう。」と申しも果ず、やにはに緋の袍の袖をひらいて、「れぷろぼす」を小脇に抱いたれば、見る見る足下が暗うなつて、もの狂ほしい一陣の風が吹き起つたと思ふほどに、二人は何時か宙を踏んで、牢舍を後に飄々と「あんちおきや」の都の夜空へ、火花を飛いて舞ひあがつた。まことやその時は學匠の姿も、折から沈まうず月を背負うて、さながら怪しげな大蝙蝠が、黑雲の翼を一文字に飛行する如く見えたと申す。

されば「れぷろぼす」は愈膽を消いて、學匠もろとも中空を射る矢のやうに翔りながら、戰く聲で尋ねたは、

「そもそもごへんは、何人でおぢやらうぞ。ごへんほどな大神通の博士は、世にも又とあるまじいと覺ゆる。」と申したに、學匠は忽ち底氣味惡いほくそ笑みを洩しながら、わざとさりげない聲

で答へたは、

「何を隱さう、われらは、天が下の人間を掌にのせて弄ぶ、大力量の剛の者ぢや。」とあつたによつて、「れぷろぼす」は始めて學匠の本性が、惡魔ぢやと申すことに合點が參つた。さるほどに惡魔はこの問答の間さへ、妖靈星の流れる如く、ひた走りに宙を走つたれば、「あんちおきや」の都の燈火も、今ははるかな闇の底に沈みはてて、やがて足もとに浮んで參つたは、音に聞く「えじつと」の沙漠でおぢやらう。幾百里とも知れまじい砂の原が、有明の月の光の中に、夜目にも白々と見え渡つた。この時學匠は爪長な指をのべて、下界をゆびさしながら申したは、

「かしこの藁家には、さる有驗の隱者が住居致いて居ると聞いた。まづあの屋根の上に下らうずる。」とあつて、「れぷろぼす」を小脇に抱いた儘、とある沙山陰のあばら家の棟へ、ひらひらと空から舞ひ下つた。

　こなたはそのあばら家に行ひすまいて居つた隱者の翁ぢや。折から夜のふけたのも知らず、油火のかすかな光の下で、御經を讀誦し奉つて居つたが、忽ちえならぬ香風が吹き渡つて、雪にも紛はうず櫻の花が紛々と飜り出いたと思へば、いづくよりともなく一人の傾城が、鼈甲の櫛笄を

圓光の如くさしないて、地獄繪を繡うた襠の裳を長々とひきはえながら、天女のやうな媚を凝して、夢かとばかり眼の前へ現れた。翁はさながら「えじつと」の沙漠が、片時の内に室神崎の廓に變つたとも思ひつらう。あまりの不思議さに我を忘れて、しばしがほどは惚々と傾城の姿を見守つて居つたに、相手はやがて花吹雪を身に浴びながら、につこと微笑んで申したは、

「これは『あんちおきや』の都に隱れもない遊びでおぢやる。近ごろ御僧のつれづれを慰めまゐらせうと存じたれば、はるばるこれまでまかり下つた。」とあつた。その聲ざまの美しさは、極樂に棲むとやら承つた伽陵頻伽にも劣るまじい。さればさすがに有驗の隱者もうかとその手に乘らうとしたが、思へばこの眞夜中に幾百里とも知らぬ「あんちおきや」の都から、傾城などの來よう筈もおぢやらぬ。さては又しても惡魔めの惡巧みであらうずと心づいたによつて、ひたと御經に眼を曝しながら、專念に陀羅尼を誦し奉つて居つたに、傾城はかまへてこの隱者の翁を落さうと心にきはめつらう。蘭麝の薰を漂はせた綺羅の袂を弄びながら、嫋々としたさまで、さも恨めしげに歎いたは、

「如何に遊びの身とは申せ、千里の山河も厭はいで、この沙漠までまかり下つたを、さりとは曲

もない御方かな。」と申した。その姿の妙にも美しい事は、散りしく櫻の花の色さへ消えようずると思はれたが、隱者の翁は遍身に汗を流いて・降魔の呪文を讀みかけ讀みかけ、かつふつその惡魔の申す事に耳を借さうず氣色すらおりない。されば傾城もかくてはなるまじいと氣を苛つたか、つと地獄繪の裳を飜して、斜に隱者の膝へとすがつたと思へば、

「何としてさほどつれないぞ。」と、よよとばかりに泣い口說いた。と見るや否や隱者の翁は、蝎に刺されたやうに躍り上つたが、早くも肌身につけた十字架をかざいて、霹靂の如く罵つたは、

「業畜、御主『えす・きりしと』の下部に向つて無禮あるまじいぞ。」と申しも果てず、てうと傾城の面を打つた。打たれた傾城は落花の中に、なよなよと伏しまろんだが、忽ちその姿は見えずなつて、唯一むらの黑雲が湧き起つたと思ふほどに、怪しげな火花の雨が礫の如く亂れ飛んで、

「あら、痛や。又しても十字架に打たれたわ。」と唸く聲が、次第に家の棟にのぼつて消えた。もとより隱者はかうあらうと心に期して居つたによつて、この間も祕密の眞言を絕えず聲高に誦し奉つたに、見る見る黑雲も薄れれば、櫻の花も降らずなつて、あばら家の中には又もとの如く、油火ばかりが殘つたと申す。

なれど隱者は惡魔の障碍が猶もあるべいと思うたれば、夜もすがら御經の力にすがり奉つて、目蓋も合はさいで明いたに、やがてしらしら明けと覺しい頃、誰やら柴の扉をおとづれるものがあつたによつて、十字架を片手に立ち出でて見たれば、これは又何ぞや、藁家の前に蹲つて、恭しげに時儀を致いて居つたは、天から降つたか、地から湧いたか、小山のやうな大男ぢや。それが早くも朱を流いた空を黑々と肩にかぎつて、隱者の前に頭を下げると、恐る恐る申したは、「それがしは『れぷろぼす』と申す『しりや』の國の山男でおぢやる。ちかごろふつと惡魔の下部と相成つて、はるばるこの『えじつと』の沙漠まで參つたれど、惡魔も御主『えす・きりしと』とやらんの御威光には叶ひ難く、それがし一人を殘し置いて、いづくともなく逐天致いた。自體それがしは今天が下に並びない大剛の者を尋ね出いて、その身内に仕へようずる志がおぢやるによつて、何とぞこれより後は不束ながら、御主『えす・きりしと』の下部の數へ御加へ下されい。」と云うた。隱者の翁はこれを聞くと、あばら家の門に佇みながら、俄に眉をひそめて答へたは、「はてさて、せんない仕宜にたられたものかな。總じて惡魔の下部となつたものは、枯木に薔薇の花が咲かうずるまで、御主『えす・きりしと』に知遇し奉る時はござない。」とあつたに、「れぷろ

ぼす」は又ねんごろに頭を下げて、

「たとへ幾千歳を經ようずるとも、それがしは初一念を貫かうずと決定致いた。さればまづ御主『えす・きりしと』の御意に叶ふべい仕業の段々を教へられい。」と申した。所で隱者の翁と山男との間には、かやうな問答がしかつめらしうとり交されたと申す事でおぢやる。

「ごへんは御經の文句を心得られたか。」

「生憎一字半句の心得もござない。」

「ならば斷食は出來申さうず。」

「如何なこと、それがしは聞えた大飯食ひでおぢやる。中々斷食などはなるまじい。」

「難儀かな。夜もすがら眠らいで居る事は如何あらう。」

「如何なこと、それがしは聞えた大寢坊でおぢやる。中々眠らいでは居られまじい。」

それにはさすがの隱者の翁も、ほとほと言のつぎ穗さへおぢやらなんだが、やがて掌をはたと打つて、したり顏に申したは、

「ここを南に去ること一里がほどに、流沙河と申す大河がおぢやる。この河は水嵩も多く、流れ

も矢を射る如くぢやによつて、日頃から人馬の渡りに難儀致すとか承つた。なれどごへんほどの大男には、容易く徒渉りさへならうずる。さればごへんはこれよりこの河の渡し守となつて、往來の諸人を渡させられい。おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう道理ぢや。」とあつたに、大男は大いに勇み立つて、

「如何にも、その流沙河とやらの渡し守になり申さうずる。」と云うた。ぢやによつて隱者の翁も、「れぷろぼす」が殊勝な志をことの外悦んで、

「然らば唯今、御水を授け申さうずる。」とあつて、おのれは水瓶をかい抱きながら、もそもそと藁家の棟へ這ひ上つて、漸く山男の頭の上へその水瓶の水を注ぎ下いた。ここに不思議がおぢやつたと申すは、得度の御儀式が終りも果てず、折からさし上つた日輪の爛々と輝いた眞唯中から、何やら雲氣がたなびいたかと思へば、忽ちそれが數限りもない四十雀の群となつて、空に聳えた「れぷろぼす」が叢ほどな頭の上へ、ばらばらと舞ひ下つたことぢや。この不思議を見た隱者の翁は、思はず御水を授けようず方角さへも忘れはてて、うつとりと朝日を仰いで居つたが、やがて恭しく天上を伏し拜むと、家の棟から「れぷろぼす」をさし招いて、

「勿體なくも御水を頂かれた上からは、向後『れぷろぼす』を改めて、『きりしとほろ』と名のらせられい。思ふに天主もごへんの信心を深う嘉させ給ふと見えたれば、萬一勤行に懈怠あるまじいに於ては、必定遠からず御主『えす・きりしと』の御尊體をも拜み奉らうずる。」と云うた。さて「きりしとほろ」と名を改めた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一條を知らうず方々はまづ次のくだりを讀ませられい。

四　往生のこと

さるほどに「きりしとほろ」は隱者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに參つたれば、まことに濁流滾々として、岸べの靑蘆を戰がせながら、百里の波を飜すありさまは、容易く舟さへ通ふまじい。なれど山男は身の丈凡そ三丈あまりもおぢやるほどに、河の眞唯中を越す時さへ、水は僅に臍のあたりを渦卷きながら流れるばかりぢや。されば「きりしとほろ」はこの河べに、さゝやかながら庵を結んで、時折渡りに難むと見えた旅人の影が眼に觸れれば、すぐさまそのほとりへ歩み寄つて、「これはこの流沙河の渡し守でおぢやる。」と申し入れた。もとより並々の旅人は、山

男の恐しげな姿を見ると、如何なる天魔波旬かと始は膽も消いて逃げのいたが、やがてその心根のやさしさもとくと合點行つて、「然らば御世話に相成らうず。」と、おづおづ「きりしとほろ」の背にのぼるが常ぢや。所で「きりしとほろ」は旅人を肩へゆり上げると、毎時も汀の柳を根こぎにしたしたたかな杖をつき立てながら、逆巻く流れをことともせず、ざんざざんざと水を分けて、難なく向うの岸へ渡いた。しかもあの四十雀は、その間さへ何羽となく、さながら楊花の飛びちるやうに、絶えず「きりしとほろ」の頭をめぐつて、嬉しげに囀り交いたと申す。まことや「きりしとほろ」が信心の辱さには、無心の小鳥も隨喜の思に堪へなんだのでおぢやらうず。

かやう致いて「きりしとほろ」は、雨風も厭はず三年が間、渡し守の役目を勤めて居つたが、渡りを尋ぬる旅人の數は多うても、御主「えす・きりしと」らしい御姿には、絶えて一度も知遇せなんだ。が、その三年目の或夜のこと、折から凄じい嵐があつて、神鳴りさへおどろと鳴り渡つたに、山男は四十雀と庵を守つて、すぎこし方のことどもを夢のやうに思ひめぐらいて居つたれば、忽ち車軸を流す雨を壓して、いたいけな聲が響いたは、

「如何に渡し守はおりやるまいか。その河一つ渡して給はれい。」と、聞え渡つた。されば「きり

しとほろ」は身を起いて、外の闇夜へ搖ぎ出いたに、如何なこと、河のほとりには、年の頃もまだ十には足るまじい、みめ清らかな白衣のわらんべが、空をつんざいて飛ぶ稲妻の中に、頭を低れて唯ひとり、佇んで居つたではおぢやるまいか。山男は稀有の思をないて、千引の巖にも劣るまじい大の體をかゞめながら、慰めるやうに問ひ尋ねたは、

「おぬしは何としてかやうな夜更けにひとり歩くぞ。」と申したに、わらんべは悲しげな瞳をあげて、

「われらが父のもとへ歸らうとて。」と、もの思はしげな聲で返答した。もとより「きりしとほろ」はこの答を聞いても、一向不審は晴れなんだが、何やらその渡りを急ぐ容子があはれにやさしく覺えたによつて、

「然らば念無う渡さうずる。」と、双手にわらんべをかい抱いて、日頃の如く肩へのせると、例の太杖をてうとついて、岸べの青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の中へ、膽太くもざんぶと身を浸いた。が、風は黒雲を卷き落いて、息もつかすまじいと吹きどよもす。雨も川面を射白まいて、底にも徹らうずばかり降り注いだ。時折闇をかい破る稲妻の光に見てあれば、浪は一面に湧

き立ち返つて、宙に舞上る水煙も、さながら無數の天使たちが雪の翼をはためかいて、飛びしきるかとも思ふばかりぢや。さればさすがの「きりしとほろ」も、今宵はほとほと渡りなやんで、太杖にしかとすがりながら、礎の朽ちた塔のやうに、幾度もゆらゆらと立ちすくんだが、雨風よりも更に難儀だつたは、怪からず肩のわらんべが次第に重うなつたことでおぢやる。始はそれもさばかりに、え堪へまじいとは覺えなんだが、やがて河の眞唯中へさしかかつたと思ふほどに、白衣のわらんべが重みは愈增いて、今は恰も大磐石を負ひないてゐるかと疑はれた。所で遂には「きりしとほろ」も、あまりの重さに壓し伏されて、所詮はこの流沙河に命を殞すべいと覺悟したが、ふと耳にはいつて來たは、例の聞き慣れた四十雀の聲ぢや。はてこの闇夜に何として、小鳥が飛ばうぞと訝りながら、頭を擡げて空を見たれば、不思議やわらんべの面をめぐつて、三日月ほどな金光が燦爛と圓く輝いたに、四十雀はみな嵐をものともせず、その金光のほとりに近く、紛々と躍り狂うて居つた。これを見た山男は、小鳥さへかくは雄々しいに、おのれは人間と生まれながら、なじかは三年の勤行を一夜に捨つべいと思ひつらう。あの葡萄蔓にも紛はうず髪をさつさつと空に吹き亂いて、寄せては返す荒波に乳のあたりまで洗はせながら、太杖も折れよとつ

き固めて、必死に目ざす岸へと急いだ。

それが凡そ一時あまり、四苦八苦の内に續いたでおぢやらう。「きりしとほろ」は漸く向うの岸へ、戰ひ疲れた獅子王のけしきで、喘ぎ喘ぎよろめき上ると、柳の太杖を砂にさいて、肩のわらんべを抱き下しながら、吐息をついて申したは、

「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山量り知れまじいぞ。」とあつたに、わらんべはにつこと微笑んで、頭上の金光を嵐の中に一きは燦然ときらめかいながら、山男の顏を仰ぎ見て、さも懷しげに答へたは、

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷うた「えす・きりしと」を負ひないたのぢや。」と、鈴を振るやうな聲で申した。……

その夜この方流沙河のほとりには、あの渡し守の山男がむくつけい姿を見せずなつた。唯後に殘つたは、向うの岸の砂にさいた、したたかな柳の太杖で、これには枯れ枯れな幹のまはりに、

不思議や麗しい紅の薔薇の花が、薫しく咲き誇つて居つたと申す。されば馬太の御經にも記いた如く「心の貧しいものは仕合せぢや。一定天國はその人のものとならうずる。」

（大正八年四月十五日）

蜜柑

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに、吠え立ててゐた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には云ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポッケットへぢつと兩手をつつこんだ儘、そこにはいつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何

か云ひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて來た、と同時に一つづしりと搖れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフォオムの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮を云つてゐる赤帽——さう云ふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心もちになつて、卷煙草に火をつけながら、始めて懶い瞼をあげて、前の席に腰を下してゐた小娘の顏を一瞥した。

それは油氣のない髮をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある皸だらけの兩頰を氣持の惡い程赤く火照らせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黃色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜燒けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて

見た。すると其時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷の惡い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで來た。云ふまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は餘りに平凡な出來事ばかりで持ち切つてゐた。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡廣告――私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたやうな面持ちで、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐられなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舍者の小娘と、さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、――これが象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつて、讀みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を靠せながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを

見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。あの皸だらけの頬は愈赤くなつて、時々鼻洟をすすりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはいつて來る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明い兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも關らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下さうとする、――その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒けの手が硝子戸を擡げようとして惡戰苦鬪する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶したやうなどす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏に當てる暇さへなく、この

煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかかつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狹苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ――その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を擧げるが

早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乘り出してゐた例の娘が、あの霜燒けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに聲を擧げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が燒きつけられた。さうしてそこから、或得體の知れない朗な心もちが湧き上つて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返つて、相不變皸だらけの頰を萌黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。

……………………

私はこの時始めて、云ひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出來たのである。

（大正八年四月）

沼地

或雨の降る日の午後であつた。私は或繪畫展覽會場の一室で、小さな油繪を一枚發見した。發見――と云ふと大袈裟だが、實際さう云つても差支へない程、この畫だけは思ひ切つて採光の惡い片隅に、それも恐しく貧弱な縁へはいつて、忘れられたやうに懸かつてゐたのである。畫は確「沼地」とか云ふので、畫家は知名の人でも何でもなかつた。又畫そのものも、唯濁つた水と、濕つた土と、さうしてその土に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。

その上不思議な事にこの畫家は、蓊鬱たる草木を描きながら、一刷毛も綠の色を使つてゐない。蘆や白楊や無花果を彩るものは、どこを見ても濁つた黄色である。まるで濡れた壁土のやうな、重苦しい黄色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたのであらうか。それとも別に好む所があつて、故意こんな誇張を加へたのであらうか。――私はこの畫の前に立つて、それから受

ける感じを味ふと共に、かう云ふ疑問も亦挾まずにはゐられなかつたのである。

　しかしその畫の中に恐しい力が潜んでゐる事は、見てゐるに從つて分つて來た。殊に前景の土の如きは、そこを踏む時の足の心もちまでもまざまざと感じさせる程、それ程的確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて踝が隱れるやうな、滑な淤泥の心もちである。私はこの小さな油畫の中に、鋭く自然を摑まうとしてゐる、傷しい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた藝術品から受ける樣に、この黃いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸かつてゐる大小さまざまな畫の中で、この一枚に拮抗し得る程力強い畫は、どこにも見出す事が出來なかつたのである。

「大へんに感心してゐますね。」

かう云ふ言と共に肩を叩かれた私は、恰も何かが心から振ひ落されたやうな氣もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

相手は無頓着にかう云ひながら、剃刀を當てたばかりの顋で、沼地の畫をさし示した。流行の

茶の背廣を着た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じてゐる、――新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承々々に返事をした。

「傑作です。」

「傑作――ですか。これは面白い。」

記者は腹を搖つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆云ひ合せたやうにこちらを見た。私は愈不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね、會員の畫ぢやないのです。が、何しろ當人が口癖のやうにここへ出す出すと云つてゐたものですから、遺族が審査員へ頼んで、やつとこの隅へ懸ける事になつたのです。」

「遺族？　ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」

「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から、死んだやうなものでしたが。」

私の好奇心は何時か私の不快な感情より強くなつてゐた。

「どうして？」

「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」
「この畫を描いた時もですか。」
「勿論です。氣違ひででもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと云つて感心してお出でなさる。そこが大に面白いですね。」
記者は又得意さうに、聲を擧げて笑つた。彼は私が私の不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或は一歩進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのかも知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆ど嚴肅にも近い感情が私の全精神に云ひやうのない波動を與へたからである。私は悚然として再びこの沼地の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴアスの中に、恐しい焦燥と不安とに虐まれてゐる傷しい藝術家の姿を見出した。
「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が違つたらしいのですがね。その點だけはまあ買へば買つてやれるのです。」
記者は晴々した顏をして、殆ど嬉しさうに微笑した。これが無名の藝術家が——我々の一人が、

その生命を犠牲にして僅に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は全身に異様な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢で生きてゐる。………

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、昂然としてから繰返した。

（大正八年四月）

龍

一

宇治の大納言隆國「やれ、やれ、晝寢の夢が覺めて見れば、今日は又一段と暑いやうぢや。あの松ケ枝の藤の花さへ、ゆさりとさせる程の風も吹かぬ。何時もは涼しう聞える泉の音も、どうやら油蟬の聲にまぎれて、反つて暑苦しうなつてしまうた。どれ、又童部たちに煽いでも貰はうか。

「何、往來のものどもが集つた？　ではそちらへ參ると致さう。童部たちもその大團扇を忘れずに後からかついで參れ。

「やあ、皆のもの、予が隆國ぢや。大肌ぬぎの無禮は赦してくれい。

「さて今日はその方どもにちと賴みたい事があつて、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰うたのぢや。と申すはこの頃ふとここへ參つて、予も人並に双紙を一つ綴らうと思ひ立つたが、つら

つら獨り考へて見れば、生憎予はこれと云うて、筆にする程の話も知らぬ。さりながらあだ面倒な趣向などを凝らすのも、予のやうな怠けものには、何より億劫千萬ぢや。就いては今日から往來のその方どもに、今は昔の物語を一つづつ聞かせて貰うて、それを双紙に編みなさうと思ふ。さすれば內裡の內外ばかりうろついて居る予などには、思ひもよらぬ逸事奇聞が、舟にも載せ車にも積む程、四方から集つて參るに相違あるまい。何と、皆のもの、迷惑ながらこの所望を叶へてくれる譯には行くまいか。

「何、叶へてくれる？　それは重疊、では早速一同の話を順々にこれで聞くと致さう。

「こりや童部たち、一座へ風が通ふやうに、その大團扇で煽いでくれい。それで少しは涼しくもならうと申すものぢや。鑄物師も陶器造も遠慮は入らぬ。二人ともずつとこの机のほとりへ參れ。鮓賣の女も日が近くば、桶はその緣の隅へ置いたが好いぞ。わ法師も金鼓を外したらどうぢや。そこな侍も山伏も簟を敷いたらうな。

「よいか、支度が整うたら、まづ第一に年かさな陶器造の翁から、何なりとも話してくれい。」

二

翁「これは、これは、御叮嚀な御挨拶で、下賤な私どもの申し上げます話を、一々双紙に書いてやらうと仰有います——そればかりでも、私の身にとりまして、どの位恐多いかわかりませんが、御辭退申しましては反つて御意に逆ふ道理でございますから、御免を蒙つて、一通り多愛もない昔話を申し上げると致しませう。どうか御退屈でも暫くの間、御耳を御借し下さいまし。

「私どものまだ年若な時分、奈良に藏人得業惠印と申しまして、途方もなく鼻の大きい法師が一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思ふ位、年が年中恐しく、まつ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに渾名をつけまして、鼻藏——と申しますのは、元來大鼻の藏人得業と呼ばれたのでございますが、それではちと長すぎると申しますので、やがて誰云ふとなく鼻藏人と申し囃しました。が、暫く致しますと、それでもまだ長いと申しますので、さてこそ鼻藏々々と、謠はれるやうになつたのでございます。現に私も一兩度、その頃奈良の興福寺の寺內で見かけた事がございますが、いかさま鼻藏とでも譏られさうな、世にも見

事な赤鼻の天狗鼻でございました。その鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師が、或夜の事、弟子もつれずに唯一人そつと猿澤の池のほとりへ參りまして、あの采女柳の前の堤へ、『三月三日この池より龍昇らんずるなり』と筆太に書いた建札を、高々と一本打ちました。けれども惠印は實の所、猿澤の池に龍などがほんたうに住んでゐたかどうか、心得てゐた譯ではございません。ましてその龍が三月三日に天上すると申す事は、全く口から出まかせの法螺なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確だつたでございませう。ではどうしてそんな入らざる眞似を致したかと申しますと、惠印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の鼻を笑ひものにするのが不平なので、今度こそこの鼻藏人がうまく一番かついだ擧句、さんざん笑ひ返してやらうと、かう云ふ魂膽で悪戯にとりかかつたのでございます。御前などが御聞きになりましたら、嘸笑止な事と思召しませうが、何分今は昔の御話で、その頃はかやうな悪戯を致しますものが、兎角どこにもあり勝ちでございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如來樣を拜みに參ります婆さんで、これが珠數をかけた手に竹杖をせつせとつき立てながら、まだ靄のかかつてゐる池のほ

とりへ來かかりますと、昨日までなかつた建札が、采女柳の下に立つて居ります。はて法會の建札にしては妙な所に立つてゐるなと不審には思つたのでございますが、何分文字が讀めませんので、その儘通りすぎようと致しました時、折よく向うから偏衫を着た法師が一人、通りかかつたものでございますから、賴んで讀んで貰ひますと、何しろ『三月三日この池より龍昇らんずるなり』で、――誰でもこれには驚いたでございませう。其婆さんも呆氣にとられて、曲つた腰をのしながら、『此池に龍などが居りませうかいな』と、とぼんと法師の顏を見上げますと、法師は反つて落ち着き拂つて、『昔、唐の或學者が眉の上に瘤が出來て、痒うてたまらなんだ事があるが、或日一天俄に搔き曇つて、雷雨車軸を流すが如く降り注いだと見てあれば、忽ちその瘤がふつつと裂けて、中から一匹の黑龍が雲を捲いて一文字に昇天したと云ふ話もござる。瘤の中にさへ龍が居たなら、ましてこれ程の池の底には、何十匹となく蛟龍毒蛇が蟠つて居ようも知れぬ道理ぢや。』と、說法したさうでございます。何しろ出家に妄語はないと日頃から思ひこんだ婆さんの事でございますから、これを聞いて肝を消しますまい事か、『成程さう承りますれば、どうやらあの邊の水の色が怪しいやうに見えますわいな。』で、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を獨

り後に殘して、喘ぎ喘ぎ念佛を申しながら、竹杖をつく間もまだるこしさうに急いで逃げてしまひました。後で人目がございませんでしたら、腹を抱へたかつたのは此法師で――これはさうでございませう。實はあの發頭人の得業惠印、諢名は鼻藏が、もう昨夜建てた高札にひつかかつた鳥がありさうだ位な、甚怪しからん量見で、容子を見ながら、池のほとりを、歩いて居つたのでございますから。が、婆さんの行つた後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴の下人に荷を負はせた蟲の垂衣の女が一人、市女笠の下から建札を讀んで居るのでございます。そこで惠印は大事をとつて、一生懸命笑を嚙み殺しながら、自分も建札の前に立つて一應讀むやうなふりをすると、あの大鼻の赤鼻をさも不思議さうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺の方へ引返して參りました。

「すると興福寺の南大門の前で、思ひがけなく顏を合せましたのは、同じ坊に住んで居つた惠門と申す法師でございます。それが惠印に出合ひますと、ふだんから片意地なげじげじ眉をちよいとひそめて、『御坊には珍しい早起きでござるな。これは天氣が變るかも知れませぬぞ。』と申しますから、こちらは得たり賢しと鼻を一ぱいににやつきながら、『如何にも天氣位は變るかも知れま

せぬて。聞けばあの猿澤の池から三月三日には、龍が天上するとか申すではござらぬか。』と、したり顔に答へました。これを聞いた惠門は疑はしさうに、ぢろりと惠印の顏を睨めましたが、すぐに喉を鳴らしながらせせら笑つて、『御坊は善い夢を見られたな。いやさ、龍の天上するなどと申す夢は吉兆ぢやとか聞いた事がござる。』と、鉢の開いた頭を聳かせた儘、行きすぎようと致しましたが、惠印がまるで獨り言のやうに、『はてさて、緣無き衆生は度し難しぢや』と、呟いた聲でも聞えたのでございませう。麻緒の足駄の齒を扭つて、憎々しげにふり返りますと、まるで法論でもしかけさうな勢で、『それとも何か龍が天上すると申す、しかとして證據がござるかな』と問ひ詰るのでございます。そこで惠印はわざと悠々と、もう朝日の光がさし始めた池の方を指さしまして、『愚僧の申す事が疑はしければ、あの釆女柳の前にある高札を讀まれたがよろしうござらう。』と、見下すやうに答へました。これにはさすがに片意地な惠門も、少しは鋒を挫かれたのか、眩しさうな瞬きを一つすると、『ははあ、そのやうな高札が建ちましたか。』と氣のない聲で云ひ捨てながら、又てくてくと歩き出しましたが、今度は鉢の開いた頭を傾けて、何やら考へて行くらしいのでございます。その後姿を見送つた鼻藏人の可笑しさは、大抵御推察が參りませう。

恵印はどうやら赤鼻の奧がむづ痒いやうな心もちがして、しかつめらしく南大門の石段を上つて行く中にも、思はず吹き出さずには居られませんでした。

「その朝でさへ『三月三日この池より龍昇らんずるなり』の建札は、これ程の利き目がございましたから、まして一日二日と經つて見ますと、奈良の町中どこへ行つても、この猿澤の池の龍の噂が出ない所はございません。元より中には『あの建札も誰かの惡戲であらう』など申すものもございましたが、折から京では神泉苑の龍が天上致したなどと申す評判もございましたので、さう云ふものさへ内心では半信半疑と申しませうか、事によるとそんな大變があるかも知れない位な氣にはなつて居つたのでございます。するとここに又思ひもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日の御社に仕へて居ります或禰宜の一人娘で、とつて九つになりますのが、その後十日と經たない中に、或夜母の膝を枕にしてうとうと致して居りますと、天から一匹の黑龍が雲のやうに降つて來て、『わしは愈三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算だから、どうか安心してゐてくれい』と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれかうかうと母親に話しましたので、さては猿澤の池の龍が夢枕に立つた

のだと、忽ち又それが町中の大評判になつたではございませんか。かうなると話にも尾鰭がついて、やれあすこの稚兒にも龍が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも龍が現れて託宣をしたのと、まるでその猿澤の池の龍が今にもあの水の上へ、首でも出しさうな騒ぎでございます。いや、首までは出しも致しますまいが、その中に龍の正體を、目のあたりにしかと見とどけたと申す男さへ出て參りました。これは毎朝川魚を市へ賣りに出ます老爺で、その日もまだうす暗いのに猿澤の池へかかりますと、あの釆女柳の枝垂れたあたり、建札のある堤の下に漫々と湛へた夜明け前の水が、そこだけほんのりとうす明く見えたさうでございます。何分にも龍の噂がやかましい時分でございますから、『さては龍神の御出ましか』と、嬉しいともつかず、恐しいともつかず、唯ぶるぶる胴震ひをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足にそつと忍び寄ると、釆女柳につかまつて、透かすやうに、池を窺ひました。するとそのほの明い水の底に、黒金の鎖を巻いたやうな何とも知れない怪しい物が、ぢつと蟠つて居りましたが、忽ち人音に驚いたのか、ずるりとそのとぐろをほどきますと、見る見る池の面に水脈が立つて、怪しい物の姿はどこともなく知れず消え失せてしまつたさうでございます。が、これを見ました老爺は、やがて總身に汗をか

いて、荷を下した所へ來て見ますと、何時の間にか鯉鮒合せて二十尾もゐた商賣物がなくなつてゐたさうでございますから、『大方劫を經た獺にでも欺されたのであらう』などと哂ふものもございました。けれども中には『龍王が鎭護遊ばすあの池に獺の棲まう筈もないから、それはきつと龍王が魚鱗の命を御憫みになつて、御自分のいらつしやる池の中へ御召し寄せなすつたのに相違ない。』と申すものも、思ひの外多かつたやうでございます。

「こちらは鼻藏の惠印法師で、『三月三日この池より龍昇らんずるなり』の建札が大評判になるのにつけ、内々あの大鼻をうごめかしては、にやにや笑つて居りましたが、やがてその三月三日も四五日の中に迫つて參りますと、驚いた事には攝津の國櫻井にゐる叔母の尼が、是非その龍の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばると上つて參つたではございませんか。これには惠印も當惑して、嚇すやら、賺すやら、いろいろ手を盡して櫻井へ歸つて貰はうと致しましたが、叔母は『わしもこの年ぢやで、龍王の御姿をたつた一目拜みさへすれば、もう往生しても本望ぢや。』と、剛情にも腰を据ゑて、甥の申す事などには耳を借さうとも致しません。と申してあの建札は自分が惡戲に建てたのだとも、今更白状する譯には參りませんから、惠印もとうとう我を折

つて、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかりでなく、當日は一しよに龍神の天上する所を見に行くと云ふ約束までもさせられました。さてかうなつて考へますと、叔母の尼さへ龍の事を聞き傳へたのでございますから、大和の國内は申すまでもなく、攝津の國、和泉の國、河内の國を始めとして、事によると播磨の國、山城の國、近江の國、丹波の國のあたりまでも、もう此噂が一圓にひろまつてゐるのでございませう。つまり奈良の老若をかつがうと思つてした悪戯が、思ひもよらず四方の國々で何萬人とも知れない人間を瞞す事になつてしまつたのでございます。惠印はさう思ひますと、可笑しいよりは何となく空恐しい氣が先に立つて、朝夕叔母の尼の案内がてら、つれ立つて奈良の寺々を見物しに歩いて居ります間も、とんと檢非違使の眼を偸んで、身を隱してゐる罪人のやうな後めたい思ひがして居りました。が、時々往來のものの話などで、あの建札へこの頃は香花が手向けてあると云ふ噂を聞く事でもございますと、やはり氣味の悪い一方では、一かど大手柄でも建てたやうな嬉しい氣が致すのでございます。

「其内に追ひ追ひ日數が經つて、とうとう龍の天上する三月三日になつてしまひました。そこで惠印は約束の手前、今更外に致し方もございませんから、澁々叔母の尼の伴をして、猿澤の池が

一日に見えるあの興福寺の南大門の石段の上へ參りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡つて、門の風鐸を鳴らす程の風さへ吹く氣色はございませんでしたが、それでも今日と云ふ今日を待ち兼ねてゐた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、攝津、播磨、山城、近江、丹波の國々からも押し寄せて參つたのでございませう。石段の上に立つて眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それが又末はほのぼのと霞をかけた二條の大路のはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子の波をざわめかせて居るのでございます。と思ふとそのところどころには、青絲毛だの、赤絲毛だの、或は又栴檀庇だのの數寄を凝らした牛車が、のつしりとあたりの人波を抑へて、屋形に打つた金銀の金具を折からうららかな春の日ざしに、眩ゆくきらめかせて居りました。その外、日傘をかざすもの、平張を空に張り渡すもの、或は又仰々しく桟敷を路に連ねるもの――まるで目の下の池のまはりは時ならない加茂の祭でも渡りさうな景色でございます。これを見た惠印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これ程の大騒ぎが始まらうとは夢にも思はずに居りましたから、さも呆れ返つたやうに叔母の尼の方をふり向きますと、『いやはや、飛んでもない人出でござるな』と情けない聲で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元

氣も出ないと見えて、その儘南大門の柱の根がたへ意氣地なく蹲つてしまひました。

「けれども元より叔母の尼には、惠印のそんな腹の底が呑みこめる譯もございませんから、こちらは頭巾もずり落ちる程一生懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程龍神の御棲まひになる池の景色は格別だの、これ程の人出がした上からは、きつと龍神も御姿を御現はしなさるだらうのと、何かと惠印をつかまへては話しかけるのでございます。そこでこちらも柱の根がたに坐つてばかりは居られませんので、嫌々腰を擡げて見ますと、ここにも揉烏帽子や侍烏帽子が人山を築いて居りましたが、その中に交つてあの惠門法師も、相不變鉢の開いた頭を一きは高く聳やかせながら、鵜の目もふらず池の方を眺めて居るではございませんか。惠印は急に今までの情けない氣もちも忘れてしまつて、唯この男さへかついでやつたと云ふ可笑しさに獨り擽られながら、『御坊』と一つ聲をかけて、其から『御坊も龍の天上を御覽かな』とからかふやうに申しましたが、惠門は横柄にふりかへると、思ひの外眞面目な顏で、『さやうでござる。御同樣大分待ち遠い思ひをしますな』と、例のげじげじ眉も動かさずに答へるのでございます。これはちと藥が利きすぎた――と思ふと、浮いた聲も自然に出なくなつてしまひましたから、惠印は又元の通

り世にも心細さうな顏をして、ぼんやり人の海の向うにある猿澤の池を見下しました。が、池はもう溫んだらしい底光りのする水の面に、堤をめぐつた櫻や柳を鮮にぢつと映した儘、何時になつても龍などを天上させる氣色はございません。殊にそのまはり何里四方が、隙き間もなく見物の人數で埋まつてでもゐるせゐか、今日は池の廣さが日頃より一層狹く見えるやうで、第一ここに龍が居ると云ふそれが抑も途方もない噓のやうな氣が致すのでございます。

「が、一時々々と時の移つて行くのも知らないやうに、見物は皆片唾を飲んで、氣長に龍の天上を待ちかまへて居るのでございませう。門の下の人の海は益〻廣がつて行くばかりで、暫くする内には牛車の數も、所によつては車の軸が互に押し合ひへし合ふ程、多くなつて參りました。それを見た惠印の情けなさは、大概前からの行きがかりでも、御推察が參るでございませう。が、ここに妙な事が起つたと申しますのは、どう云ふものか、惠印の心にもほんたうに龍が昇りさうな——それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなささうな氣がし出した事でございます。惠印は元よりあの高札を打つた當人でございますから、そんな莫迦げた氣のすることはありさうもないものでございますが、目の下で寄せつ返しつしてゐる烏帽子の波を見て居りますと、どうも

そんな大變が起りさうな氣が致してなりません。これは見物の人數の心もちが何時となく鼻藏にも乘り移つたのでございませうか。それともあの建札を建てたばかりに、こんな騷ぎが始まつたと思ふと、何となく氣が咎めるので、知らず知らずほんたうに龍が昇つてくれれば好いと念じ出したのでございませうか。その邊の事情は兎も角も、あの高札の文句を書いたものは自分だと重重承知しながら、それでも惠印は次第々々に情けない氣もちが薄くなつて、自分も叔母の尼と同じやうに飽かず池の面を眺め始めました。又成程さう云ふ氣が起りでも致しませんでしたら、昇る氣づかひのない龍を待つて、如何に不承々々とは申すものの、南大門の下に小一日も立つて居る譯には參りますまい。

「けれども猿澤の池は前の通り、漣も立てずに春の日ざしを照り返して居るばかりでございます。空もやはりほがらかに晴れ渡つて、拳程の雲の影さへ漂つて居る容子はございません。が、見物は相不變、日傘の陰にも、平張の下にも、或は又桟敷の欄干の後にも、簇々と重なり重なつて、朝から午へ、午から夕へ日影が移るのも忘れたやうに、龍王が姿を現すのを今か今かと待つて居りました。

「すると惠印がそこへ來てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のやうな一すぢの雲が中空にたなびいたと思ひますと、見る間にそれが大きくなつて、今までのどかに晴れてゐた空が、俄にうす暗く變りました。その途端に一陣の風がさつと、猿澤の池に落ちて、鏡のやうに見えた水の面に無數の波を描きましたが、さすがに覺悟はしてゐながら慌てまどつた見物が、あれよあれよと申す間もなく、天を傾けてまつ白にどつと雨が降り出したではございませんか。のみならず神鳴も急に凄じく鳴りはためいて、絶えず稻妻が梭のやうに飛びちがふのでございます。それが一度鍵の手に群る雲を引つ裂いて、餘る勢に池の水を柱の如く捲き起したやうでございましたが、惠印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を閃かせて一文字に空へ昇つて行く十丈あまりの黑龍が、朦朧として映りました。が、それは瞬く暇で、後は唯風雨の中に、池をめぐつた櫻の花がまつ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でございます――度を失つた見物が右往左往に逃げ惑つて、池にも劣らない人波を稻妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申し上るまでもございますまい。

「さてその内に豪雨もやんで、青空が雲間に見え出しますと、惠印は鼻の大きいのも忘れたやう

な顔色で、きよろきよろあたりを見廻しました。一體今見た龍の姿は眼のせゐではなかつたらうか――さう思ふと、自分が高札を打つた當人だけに、どうも龍の天上するなどと申す事は、なささうな氣も致して參ります。と申して、見た事は確に見たのでございますから、考へれば考へる程益不審でたまりません。そこで側の柱の下に死んだやうになつて坐つてゐた叔母の尼を抱き起しますと、妙にてれた容子も隱しきれないで、『龍を御覽じられたかな』と臆病らしく尋ねました。すると叔母も大息をついて、暫くは口もきけないのか、唯何度となく恐ろしさうに頷くばかりでございましたが、やがてまた震へ聲で、『見たともの、見たともの、金色の爪ばかり閃かいた、一面にまつ黒な龍神ぢやろが』と答へるのでございます。して見ますと龍を見たのは、何も鼻藏人の得業惠印の眼のせゐばかりではなかつたのでございませう。いや、後で世間の評判を聞きますと、その日そこに居合せた老若男女は、大抵皆雲の中に黑龍の天へ昇る姿を見たと申す事でございました。

「その後惠印は何かの拍子に、實はあの建札は自分の悪戲だつたと申す事を白狀してしまひましたが、惠門を始め仲間の法師は一人もその白狀をほんたうとは思はなかつたさうでございます。

これで一體あの建札の悪戯は圖星に中つたのでございませうか。それとも的を外れたのでございませうか。鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師に尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ございますまい………」

三

宇治大納言隆國「成程之は面妖な話ぢや。昔はあの猿澤池にも、龍が棲んで居つたと見えるな。何、昔もゐたかどうか分らぬ。いや、昔は棲んで居つたに相違あるまい。昔は天が下の人間も皆心から水底には龍が住むと思うて居つた。さすれば龍もおのづから天地の間に飛行して、神の如く折々は不思議な姿を現した筈ぢや。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行脚の法師の番ぢやな。

「何、その方の物語は、池の尾の禪智内供とか申す鼻の長い法師の事ぢや？　これは又鼻藏の後だけに、一段と面白からう。では早速話してくれい。――」

（大正六年四月）

疑惑

今ではもう十年あまり以前になるが、或年の春私は實踐倫理學の講義を依頼されて、その間彼是一週間ばかり、岐阜縣下の大垣町へ滯在する事になつた。元來地方有志なるものの難有迷惑な厚遇に辟易してゐた私は、私を請待してくれた或教育家の團體へ豫め斷りの手紙を出して、送迎とか宴會とか或は又名所の案内とか、その外いろいろ講演に附隨する一切の無用な暇つぶしを拒絕したい旨希望して置いた。すると幸私の變人だと云ふ風評は夙にこの地方にも傳へられてゐたものと見えて、やがて私が向ふへ行くと、その團體の會長たる大垣町長の斡旋によつて、萬事がこの我儘な希望通り取計らはれたばかりでなく、宿も特に普通の旅館を避けて、町內の素封家N氏の別莊とかになつてゐる閑靜な住居を周旋された。私がこれから話さうと思ふのは、その滯在中その別莊で偶然私が耳にした或悲慘な出來事の顚末である。

その住居のある所は、巨鹿城に近い廓町の最も俗塵に遠い一區劃だつた。殊に私の起臥してゐる

た書院造りの八疊は、日當りこそ惡い憾はあつたが、障子襖も程よく寂びのついた、如何にも落着きのある座敷だつた。私の世話を焼いてくれる別莊番の夫婦者は、格別用のない限り、何時も勝手に下つてゐたから、このうす暗い八疊の間は大抵森閑として人氣がなかつた。それは御影の手水鉢の上に枝を延ばしてゐる木蓮が、時々白い花を落すのでさへ、明に聞き取れるやうな靜かさだつた。毎日午前だけ講演に行つた私は、午後と夜とをこの座敷で甚泰平に暮す事が出來た。が、同時に又、參考書と着換へとを入れた鞄の外に何一つない私自身を、春寒く思ふ事も度々あつた。

尤も午後は時折來る訪問客に氣が紛れて、さほど寂しいとは思はなかつた。が、やがて竹の筒を臺にした古風なランプに火が燈ると、人間らしい氣息の通ふ世界は、忽其かすかな光に照される私の周圍だけに縮まつてしまつた。しかも私にはその周圍さへ、決して賴もしい氣は起させなかつた。私の後にある床の間には、花も活けてない靑銅の瓶が一つ、威かつくどつしりと据ゑてあつた。さうしてその上には怪しげな楊柳觀音の軸が、煤けた錦襴の表装の中に朦朧と墨色を辨じてゐた。私は折々書見の眼をあげて、この古ぼけた佛畫をふり返ると、必焚きもしない線

香がどこかで匂つてゐるやうな心もちがした。それほど座敷の中には寺らしい閑寂の氣が罩つてゐた。だから私はよく早寝をした。が、床にはいつても容易に眠くはならなかつた。雨戸の外では夜鳥の聲が、遠近を定めず私を驚かした。その聲はこの住居の上にある天主閣を心に描かせた。晝見ると何時も天主閣は、蓊鬱とした松の間に三層の白壁を疊みながら、その反り返つた家根の空へ無數の鴉をばら撒いてゐる。――私は何時かうとうとと淺い眠に沈みながら、それでもまだ腹の底には水のやうな春寒が漂つてゐるのを意識した。

すると或夜の事――それは豫定の講演日數が將に終らうとしてゐる頃であつた。私は何時もの通りランプの前にあぐらをかいて、漫然と書見に耽つてゐると、突然次の間との境の襖が無氣味な程靜に明いた。その明いたのに氣がついた時、無意識にあの別莊番を豫期してゐた私は、折よく先刻書いて置いた端書の投函を頼まうと思つて、何氣なく其方を一瞥した。するとその襖側のうす暗がりには、私の全く見知らない四十恰好の男が一人、端然として坐つてゐた。實を云へばその瞬間、私は驚愕――と云ふよりも寧ろ迷信的な恐怖に近い一種の感情に脅かされた。又實際その男は、それだけのショックに價すべく、ぼんやりしたランプの光を浴びて、妙に幽靈じみた

姿を具へてゐた。が、彼は私と顔を合はすと、昔風に兩肱を高く張つて恭しく頭を下げながら、思つたよりも若い聲で、殆機械的にこんな挨拶の言を述べた。

「夜中、殊に御忙しい所を御邪魔に上りまして、何とも申し譯の致しやうはございませんが、ちと折入つて先生に御願ひ申したい儀がございまして、失禮をも顧ず、參上致したやうな次第でございます。」

漸く最初のショックから恢復した私は、その男がかう辯じ立ててゐる間に、始めて落着いて相手を觀察した。彼は額の廣い、頰のこけた、年にも似合はず眼に働きのある、品の好い半白の人物だつた。それが紋附でこそなかつたが、見苦しからぬ羽織袴で、しかも膝のあたりにはちやんと扇面を控へてゐた。唯、咄嗟の際にも私の神經を刺戟したのは、彼の左の手の指が一本缺けてゐる事だつた。私はふとそれに氣がつくと、我知らず眼をその手から外らさないではゐられなかつた。

「何か御用ですか。」

私は讀みかけた書物を閉ぢながら、無愛想にかう問ひかけた。云ふまでもなく私には、彼の

唐突な訪問が意外であると共に腹立しかつた。と同時に又別莊番が一言もこの客來を取次がたいのも不審だつた。しかしその男は私の冷淡な言葉にもめげないで、もう一度額を疊につけると、相不變朗讀でもしさうな調子で、

「申し遲れましたが、私は中村玄道と申しますもので、やはり毎日先生の御講演を伺ひに出て居りますが、勿論多數の中でございますから、御見覺えもございますまい。どうかこれを御縁にして、今後は又何分ともよろしく御指導の程を御願ひ致します。」

私はここに至つて、漸くこの男の來意が呑みこめたやうな心もちがした。が、夜中書見の清興を破られた事は、依然として不快に違ひなかつた。

「すると――何か私の講演に質疑でもあると仰有るのですか。」

かう尋ねた私は内心ひそかに、「質疑なら明日講演場で伺ひませう。」と云ふ體の善い撃退の文句を用意してゐた。しかし相手はやはり顏の筋肉一つ動かさないで、ぢつと袴の膝の上に視線を落しながら、

「いえ、質疑ではございません。ございませんが、實は私一身のふり方に就きまして、善惡と

も先生の御意見を承りたいのでございます。と申しますのは、唯今からざつと二十年ばかり以前、私は或思ひもよらない出來事に出合ひまして、その結果とんと私にも私自身がわからなくなつてしまひました。就きましては、先生のやうな倫理學界の大家の御說を伺ひましたら、自然分別もつかうと存じまして、今晚はわざわざ推參致したのでございます。如何でございませう。御退屈でも私の身の上話を一通り御聽き取り下さる譯には參りますまいか。」

私は答に躊躇した。成程專門の上から云へば倫理學者には相違ないが、さうかと云つて又私は、その專門の知識を運轉させてすぐに當面の實際問題への靈活な解決を與へ得る程、融通の利く頭腦の持ち主だとは遺憾ながら已惚れる事が出來なかつた。すると彼は私の逡巡に早くも氣がついたと見えて、今まで袴の膝の上に伏せてゐた視線をあげると、半ば歎願するやうに、怯づ怯づ私の顏色を窺ひながら、前より稍自然な聲で、慇懃にかう言葉を繼いだ。

「いえ、それも勿論強ひて先生から、是非の御判斷を伺はなくてはならないと申す譯ではございません。唯、私がこの年になりますまで、始終頭を悩まさずにはゐられなかつた問題でございますから、せめてその間の苦しみだけでも先生のやうな方の御耳に入れて、多少にもせよ私自身の

心やりに致したいと思ふのでございます。」

　かう云はれて見ると私は、義理にもこの見知らない男の話を聞かないと云ふ譯には行かなかつた。が、同時に又不吉な豫感と茫漠とした一種の責任感とが、重苦しく私の心の上にのしかかつて來るやうな心もちもした。私はそれらの不安な感じを拂ひ除けたい一心から、わざと氣輕らしい態度を裝つて、うすぼんやりしたランプの向うに近々と相手を招じながら、

「では兎に角御話だけ伺ひませう。尤もそれを伺つたからと云つて、格別御參考になるやうな意見などは申し上げられるかどうかわかりませんが。」

「いえ、唯、御聞きになつてさへ下されば、それでもう私には本望すぎる位でございます。」

　中村玄道と名のつた人物は、指の一本足りない手に疊の上の扇子をとり上げると、時々そつと眼をあげて私よりも寧床の間の楊柳觀音を偸み見ながら、やはり抑揚に乏しい陰氣な調子で、とぎれ勝ちにかう話し始めた。

丁度明治二十四年の事でございます。御承知の通り二十四年と申しますと、あの濃尾の大地震がございました年で、あれ以來この大垣もがらりと容子が違つてしまひましたが、その頃町には小學校が丁度二つございまして、一つは藩侯の御建てになつたもの、一つは町方の建てたものと、から分れて居つたものでございます。私はその藩侯の御建てになつたＫ小學校へ奉職して居りましたが、二三年前に縣の師範學校を首席で卒業致しましたのと、その後又引き續いて校長などの信用も相當にございましたのとで、年輩にしては高級な十五圓と云ふ月俸を頂戴致して居りました。唯今でこそ十五圓の月給取は露命も繋げない位でございませうが、何分二十年も以前の事で、十分とは參りませんまでも、暮しに不自由はございませんでしたから、同僚の中でも私などは、どちらかと申すと羨望の的になつた程でございました。

家族は天にも地にも妻一人で、それもまだ結婚してから、漸く二年ばかりしか經たない頃でございました。妻は校長の遠縁のもので、幼い時に兩親に別れてから私の所へ片づくまで、ずつと校長夫婦が娘のやうに面倒を見てくれた女でございます。名は小夜と申しまして、私の口から申し上げますのも、異なものでございますが、至つて素直な、はにかみ易い――その代り又無口過

ぎて、どこか影の薄いやうな、寂しい生れつきでございました。が、私には似たもの夫婦で、たとひこれと申す程の花々しい樂しさはございませんでも、まづ安らかなその日その日を、送る事が出來たのでございます。

するとあの大地震で、――忘れも致しません十月の二十八日、彼是午前七時頃でございませうか。私が井戸側で楊枝を使つてゐると、妻は臺所で釜の飯を移してゐる。――その上へ家がつぶれました。それがほんの一二分の間の事で、まるで大風のやうな凄まじい地鳴りが襲ひかかつたと思ひますと、忽めきめきと家が傾いで、後は唯瓦の飛ぶのが見えたばかりでございます。私はあつと云ふ暇もなく、やにはに落ち來た庇に敷かれて、暫くは無我無中の儘、どこからともなく寄せて來る大震動の波に搖られて居りましたが、やつとその庇の下から土煙の中へ這ひ出して見ますと、目の前にあるのは私の家の屋根で、しかも瓦の間に草の生えたのが、そつくり地の上へひしやげて居りました。

その時の私の心もちは、驚いたと申しませうか。慌てたと申しませうか。まるで放心したのも同前で、べつたり其處へ腰を拔いたなり、丁度嵐の海のやうに右にも左にも屋根を落した家々の

上へ眼をやつて、地鳴りの音、梁の落ちる音、樹木の折れる音、壁の崩れる音、それから幾千人の人々が逃げ惑ふのでございませう、聲とも音ともつかない響が騒然と煮えくり返るのをぼんやり聞いて居りました。が、それはほんの刹那の間で、やがて向うの庇の下に動いてゐるものを見つけますと、私は急に飛び上つて、凶い夢からでも覺めたやうに意味のない大聲を擧げながら、いきなり其處へ駈けつけました。庇の下には妻の小夜が、下半身を梁に壓されながら、悶え苦しんで居つたのでございます。

私は妻の手を執つて引張りました。妻の肩を押して起さうとしました。が、壓しにかかつた梁は、虫の這ひ出す程も動きません。私はうろたへながら、庇の板を一枚々々むしり取りました。取りながら、何度も妻に向つて「しつかりしろ。」と喚きました。妻を？　いや或は私自身を勵ましてゐたのかも存じません。小夜は「苦しい。」と申しました。「どうかして下さいまし。」とも申しました。が、私に勵まされるまでもなく、別人のやうに血相を變へて、必死に梁を擡げようと致して居りましたから、私はその時妻の兩手が、爪も見えない程血にまみれて、震へながら梁をさぐつて居つたのが、今でもまざまざと苦しい記憶に殘つてゐるのでございます。

それが長い長い間の事でございました。――その内にふと氣がつきますと、どこからか濛々とした黒煙が一なだれに屋根を渡つて、むつと私の顔へ吹きつけました。と思ふと、その煙の向うにけたたましく何か爆ぜる音がして、金粉のやうな火粉がばらばらと疎らに空へ舞ひ上りました。私は氣の違つたやうに妻へ獅嚙みつきました。さうしてもう一度無二無三に、妻の體を梁の下から引きずり出さうと致しました。が、やはり妻の下半身は一寸も動かす事は出來ません。私は又吹きつけて來る煙を浴びて、庇に片膝つきながら、嚙みつくやうに妻へ申しました。何を？と御尋ねになるかも存じません、いや、必御尋ねになりませう。しかし私も何を申したか、とんと覺えてゐないのでございます。唯私はその時妻が、血にまみれた手で私の腕をつかみながら、「あなた。」と一言申したのを覺えて居ります。私は妻の顔を見つめました。あらゆる表情を失つた、眼ばかり徒に大きく見開いてゐる、氣味の惡い顔でございます。すると今度は煙ばかりか、火の粉を煽つた一陣の火氣が、眼も眩む程私を襲つて來ました。私はもう駄目だと思ひました。妻は生きながら火に燒かれて、死ぬのだと思ひました。生きながら？　私は血だらけな妻の手を握つた儘、又何か喚きました。と、妻も又繰返して、「あなた。」と一言申しました。私はその時そ

の「あなた。」と云ふ言葉の中に、無數の意味、無數の感情を感じたのでございます。生きながら？生きながら？　私は三度何か叫びました。それは「死ね。」と云つたやうにも覺えて居ります。「己も死ね。」と云つたやうにも覺えて居ります。が、何と云つたかわからない内に、私は手當り次第、落ちてゐる瓦を取り上げて、續けさまに妻の頭へ打ち下しました。

　それから後の事は、先生の御察しにまかせる外はございません。私は獨り生き殘りました。殆町中を燒きつくした火と煙とに追はれながら、小山のやうに路を塞いだ家々の屋根の間をくぐつて、漸く危い一命を拾つたのでございます。幸か、それとも又不幸か、私には何にもわかりませんでした。唯その夜、まだ燃えてゐる火事の光を暗い空に望みながら、同僚の一人二人と一しよに、やはり一ひしぎにつぶされた學校の外の假小屋で、炊き出しの握り飯を手にとつた時とめどなく涙が流れた事は、未だにどうしても忘れられません。

　中村玄道は暫く言葉を切つて、臆病らしい眼を疊へ落した。突然こんな話を聞かされた私も、

愈廣い座敷の春寒が襟元まで押寄せたやうな心もちがして、「成程」と云ふ元氣さへ起らなかつた。

部屋の中には、唯、ランプの油を吸ひ上げる音がした。それから机の上に載せた私の懐中時計が、細かく時を刻む音がした。と思ふと又その中で、床の間の楊柳觀音が身動きをしたかと思ふ程、かすかな吐息をつく音がした。

私は怯えた眼を擧げて、悄然と坐つてゐる相手の姿を見守つた。吐息をしたのは彼だらうか。それとも私自身だらうか。――が、その疑問が解けない内に、中村玄道はやはり低い聲で、徐に話を續け出した。

申すまでもなく私は、妻の最期を悲しみました。そればかりか、時としては、校長始め同僚から、親切な同情の言葉を受けて、人前も恥ぢず涙さへ流した事がございました。が、私があの地震の中で、妻を殺したと云ふ事だけは、妙に口へ出して云ふ事が出來なかつたのでございます。

「生きながら火に燒かれるよりはと思つて、私が手にかけて殺して來ました。」――これだけの事

を口外したからと云つて、何も私が監獄へ送られる次第でもございますまい。いや、寧ろその爲に世間は一層私に同情してくれたのに相違ございません。それがどう云ふものか、云はうとすると忽ち喉元にこびりついて、一言も舌が動かなくなつてしまふのでございます。

當時の私はその原因が、全く私の臆病に根ざしてゐるのだと思ひました。が、實は單に臆病と云ふよりも、もつと深い所に潜んでゐる原因があつたのでございます。しかしその原因は、私に再婚の話が起つて、愈もう一度新生涯へはいらうと云ふ間際までは、私自身にもわかりませんでした。さうしてそれがわかつた時、私はもう二度と人並の生活を送る資格のない、憐むべき精神上の敗殘者になるより外はなかつたのでございます。

再婚の話を私に持ち出したのは、小夜の親許になつてゐた校長で、これが純粋に私の爲を計つた結果だと申す事は私にもよく呑み込めました。又實際その頃はもうあの大地震があつてから、彼是一年あまり經つた時分で、校長が此の問題を切り出した以前にも、内々同じやうな相談を持ちかけて私の口裏を引いて見るものが一度ならずあつたのでございます。所が校長の話を聞いて見ますと、意外な事にはその縁談の相手と云ふのが、唯今先生のいらつしやる、このN家の二番

娘で、當時私が學校以外にも、時々出稽古の面倒を見てやつた尋常四年生の長男の姉だつたらうではございませんか。勿論私は一應辭退しました。第一教員の私と資産家のN家とでは格段に身分も違ひますし、家庭教師と云ふ關係上、結婚までには何か曰くがあつたらうなどと、痛くない腹を探られるのも面白くないと思つたからでございます。同時に又私の進まなかつた理由の後には、去る者は日に疎しで、以前程悲しい記憶はなかつたまでも、私自身打ち殺した小夜の面影が、箒星の尾のやうにぼんやり纏はつてゐたのに相違ございません。

が、校長は十分私の心もちを汲んでくれた上で、私位の年輩の者が今後獨身生活を續けるのは困難だと云ふ事、しかも今度の縁談は先方から達つての所望だと云ふ事、校長自身が進んで媒酌の勞を執る以上、惡評などが立つ謂はれのないと云ふ事、その外日頃私の希望してゐる東京遊學の如きも、結婚した曉には大いに便宜があるだらうと云ふ事――さう事をいろいろ並べ立てて、根氣よく私を說きました。かう云はれて見ますと、私も無下には斷つてしまふ譯には參りません。そこへ相手の娘と申しますのは、評判の美人でございましたし、その上御恥しい次第ではございますが、N家の資産にも目がくれましたので、校長に勸められるのも度重なつて參りま

すと、何時か「熟考して見ませう。」が「いづれ年でも變りましたら。」などと、だんだん軟化致し始めました。さうしてその年の變つた明治二十六年の初夏には、愈秋になつたら式を擧げると云ふ運びさへついてしまつたのでございます。

するとその話がきまつた頃から、妙に私は氣が鬱して、自分ながら不思議に思ふ程、何をするにも昔のやうな元氣がなくなつてしまひました。たとへば學校へ參りましても、教員室の机に倚り懸りながら、ぼんやり何かに思ひ耽つて、授業の開始を知らせる板木の音さへ、聞き落してしまふやうな事が度々あるのでございます。その癖何が氣になるのかと申しますと、それは私にもはつきりとは見極めをつける事が出來ません。唯、頭の中の齒車がどこかしつくり合はないやうな――しかもそのしつくり合はない向うには、私の自覺を超越した祕密が蟠つてゐるやうな、氣味の悪い心もちがするのでございます。

それがざつと二月ばかり續いてからの事でございましたらう。丁度暑中休暇になつた當座で、或夕方私が散步旁、本願寺別院の裏手にある本屋の店先を覗いて見ますと、その頃評判の高かつた風俗畫報と申す雜誌が五六冊、夜窓鬼談や月耕漫畫などと一しよに、石版刷の表紙を並べて

居りました。そこで店先に佇みながら、何氣なくその風俗畫報を一冊手にとつて見ますと、表紙に家が倒れたり火事が始つたりしてゐる畫があつて、そこへ二行に「明治廿四年十一月三十日發行、十月廿八日震災記聞」と大きく刷つてあるのでございます。それを見た時、私は急に胸がはずみ出しました。私の耳もとでは誰かが嬉しさうに嘲笑ひながら、「それだ。それだ。」と囁くやうな心もちさへ致します。私はまだ火をともさない店先の薄明りで、慌しく表紙をはぐつて見ました。するとまつ先に一家の老若が、落ちて來た梁に打ちひしがれて慘死を遂げる畫が出て居ります。それから土地が二つに裂けて、足を過つた女子供を呑んでゐる畫が出て居ります。それから――一々數へ立てるまでもございませんが、その時その風俗畫報は、二年以前の大地震の光景を再び私の眼の前へ展開してくれたのでございます。長良川鐵橋陷落の圖、尾張紡績會社破壞の圖、第三師團兵士屍體發掘の圖、愛知病院負傷者救護の圖――さう云ふ凄慘な畫は次から次と、あの呪はしい當時の記憶の中へ私を引きこんで參りました。私は眼がうるみました。體も震へ始めました。苦痛とも歡喜ともつかない感情は、用捨なく私の精神を蕩漾させてしまひます。さうして最後の一枚の畫が私の眼の前に開かれた時――私は今でもその時の驚愕がありあり心に殘つ

て居ります。それは落ち來た梁に腰を打たれて、一人の女が無慘にも悶え苦しんでゐる晝でございました。その梁の横はつた向うには、黑煙が濛々と卷き上つて、朱を撥いた火の粉さへ亂れ飛んでゐるではございませんか。これが私の妻でなくて誰でせう。妻の最期でなくて何でせう。私は危く風俗畫報を手から落さうと致しました。危く聲を擧げて叫ばうと致しました。しかもその途端に一層私を怖えさせたのは、突然あたりが赤々と明くなつて、火事を想はせるやうな煙の匂がぷんと鼻を打つた事でございます。私は强ひて心を押し鎭めながら、風俗畫報を下へ置いて、きよろきよろ店先を見廻しました。店先では丁度小僧が吊ランプへ火をとぼして、夕暗の流れてゐる往來へ、まだ煙の立つ燐寸殼を捨ててゐる所だつたのでございます。

それ以來、私は、前よりも更に幽鬱な人間になつてしまひました。今まで私を脅したのは唯何とも知れない不安な心もちでございましたが、その後は或疑惑が私の頭の中に蟠つて、日夜を問はず私を責め虐むのでございます。と申しますのは、あの大地震の時私が妻を殺したのは、果して已むを得なかつたのだらうか。——もう一層露骨に申しますと、私は妻を殺したのは、始から殺したい心があつて殺したのではなかつたらうか。大地震は唯私の爲に機會を與へたので

はなかつたらうか、――から云ふ疑惑でございました。私は勿論この疑惑の前に、何度思ひ切つて「否、否。」と答へた事だかわかりません。が、本屋の店先で私の耳に「それだ。それだ。」と囁いた何物かは、その度に又嘲笑つて、「では何故お前は妻を殺した事を口外する事が出來なかつたのだ。」と、問ひ詰るのでございます。私はその事實に思ひ當ると、必ぎくりと致しました。ああ、何故私は妻を殺したなら殺したと云ひ放てなかつたのでございませう。何故今日までひた隱しに、それ程の恐しい經驗を隱して居つたのでございませう。

しかもその際私の記憶へ鮮に生き返つて來たものは、當時の私が妻の小夜を内心憎んでゐたと云ふ、忌はしい事實でございます。これは恥を御話しなければ、ちと御會得が參らないかも存じませんが、妻は不幸にも肉體的に缺陷のある女でございました。(以下八十二行省略)……そこで私もその時までは、覺束ないながら私の道德感情が兎も角も勝利を博したものと信じて居つたのでございます。が、あの大地震のやうな凶變が起つて、一切の社會的束縛が地上から姿を隱した時、どうしてそれと共に私の道德感情も龜裂を生じなかつたと申せませう。どうして私の利己心も火の手を揚げなかつたと申せませう。私は是に立ち至つてやはり妻を殺したのは、殺す爲

に殺したのではなからうかと云ふ、疑惑を認めずには居られませんでした。私が愈幽鬱になつたのは、寧自然の數とでも申すべきものだつたのでございます。

しかしまだ私には、「あの場合妻を殺さなかつたにしても、妻は必火事の爲に燒け死んだのに相違ない。さうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪惡だとは云はれない筈だ。」と云ふ一條の血路がございました。所が或日、もう季節が眞夏から殘暑へ振り變つて、學校が始まつて居た頃でございますが、私ども教員が一同教員室の卓子を圍んで、番茶を飲みながら、他愛もない雜談を交して居りますと、どう云ふ時の拍子だつたか、話題が又あの二年以前の大地震に落ちた事がございます。私はその時も獨り口を噤んだぎりで、同僚の話を聞くともなく聞き流して居りましたが、本願寺の別院の屋根が落ちた話、船町の堤防が崩れた話、俵町の往來の土が裂けた話――とそれからそれへ話がはずみましたが、やがて一人の教員が申しますには、中町とかの備後屋と云ふ酒屋の女房は、一旦梁の下敷になつて、身動きも碌に出來なかつたのが、その内に火事が始つて、梁も幸燒け折れたものだから、やつと命だけは拾つたと、から云ふのでございます。

私はそれを聞いた時に、俄に目の前が暗くなつて、その儘暫くは呼吸さへも止るやうな心地が

致しました。又實際その間は、失心したも同樣な姿だつたのでございませう。漸く我に返つて見ますと、同僚は急に私の顏色が變つて、椅子ごと倒れさうになつたのに驚きながら、皆私のまはりへ集つて、水を飮ませるやら薬をくれるやら、大騷ぎを致して居りました。が、私はその同僚に禮を云ふ餘裕もない程、頭の中はあの恐ろしい疑惑の塊で一ぱいになつてゐたのでございます。私はやはり妻を殺す爲に殺したのではなかつたらうか。たとひ梁に壓されてゐても、萬一命が助かるのを恐れて、打ち殺したのではなかつたらうか。もしあの儘殺さないで置いたなら今の備後屋の女房の話のやうに、私の妻もどんな機會で九死に一生を得たかも知れない。それを私は情無く、瓦の一撃で殺してしまつた――さう思つた時の私の苦しさは、ひとへに先生の御推察を仰ぐ外はございません。私はその苦しみの中で、せめてはN家との縁談を斷つてでも、幾分一身を潔くしようと決心したのでございます。

所が愈その運びをつけると云ふ段になりますと、折角の私の決心は未練にも又鈍り出しました。何しろ近々結婚式を擧げようと云ふ間際になつて、突然破談にしたいと申すのでございますから、あの大地震の時に私が妻を殺害した顚末は元より、これまでの私の苦しい心中も一切打ち

明けなければなりますまい。それが小心な私には、いざと云ふ場合に立ち至ると、如何に自ら鞭撻しても、斷行する勇氣が出なかつたのでございます。私は何度となく腑甲斐ない私自身を責めました。が、徒に責めるばかりで、何一つ然るべき處置も取らない内に、殘暑は又朝寒に移り變つて、とうとう所謂華燭の典を擧げる日も、目前に迫つたではございませんか。

私はもうその頃には、何誰とも滅多に口を利かない程、沈み切つた人間になつて居りました。結婚を延期したらと注意した同僚も、一人や二人ではございません。醫者に見て貰つたらと云ふ忠告も、三度まで校長から受けました。が、當時の私にはさう云ふ親切な言葉の手前、外見だけでも健康を顧慮しようと云ふ氣力さへ既になかつたのでございます。と同時に又その連中の心配を利用して、病氣を口實に結婚を延期するのも、今となつては意氣地のない姑息手段としか思はれませんでした。しかも一方ではＮ家の主人などが、私の氣鬱の原因を獨身生活の影響だとでも感違ひをしたのでございませう。一日も早く結婚しろと頻に主張しますので、日こそ違ひますが二年前にあの大地震のあつた十月、愈私はＮ家の本邸で結婚式を擧げる事になりました。連日の心勞に憔悴し切つた私が、花婿らしい紋服を着用して、いかめしく金屛風を立てめぐらした廣

間へ案内された時、どれ程私は今日の私を恥しく思つたでございませう。私はまるで人目を偸んで、大罪惡を働かうとしてゐる惡漢のやうな氣が致しました。いや、やうな氣ではございません。實際私は殺人の罪惡をぬり隱して、N家の娘と資産とを一時盜まうと企ててゐる人非人なのでございます。私は顏が熱くなつて參りました。胸が苦しくなつて參りました。出來るならこの場で、私が妻を殺した一條を逐一白狀してしまひたい。――そんな氣がまるで嵐のやうに、烈しく私の頭の中を駈けめぐり始めました。するとその時、私の着座してゐる前の疊へ、夢のやうに白羽二重の足袋が現れました。續いて仄かな波の空に松と鶴とが霞んでゐる裾模樣が見えました。それから錦襴の帶、はこせこの銀鎖、白襟と順を追つて、鼈甲の櫛笄が重さうに光つてゐる高島田が眼にはいつた時、私は殆息がつまる程、絕體絕命な恐怖に壓倒されて、思はず兩手を疊へつくと、「私は人殺しです。極重惡の罪人です」と、必死な聲を擧げてしまひました。……

中村玄道はかう語り終ると、暫くぢつと私の顏を見つめてゐたが、やがて口もとに無理な微笑

を浮べながら、

「その以後の事は申し上げるまでもございますまい。が、唯一つ御耳に入れて置きたいのは、當日限り私は狂人と云ふ名前を負はされて、憐むべき餘生を送らなければならなくなつた事でございます。果して私が狂人かどうか、そのやうな事は一切先生の御判斷に御任かせ致しませう。しかしたとひ狂人でございましても、私を狂人に致したものは、やはり我々人間の心の底に潛んでゐる怪物のせゐではございますまいか。その怪物が居ります限り、今日私を狂人と嘲笑つてゐる連中でさへ、明日は又私と同樣な狂人にならないものでもございません。――とまあ私は考へて居るのでございますが、如何なものでございませう。」

ランプは相不變私とこの無氣味な客との間に、春寒い焔を動かしてゐた。私は楊柳觀音を後にした儘、相手の指の一本ないのさへ問ひ質して見る氣力もなく、默然と坐つてゐるより外はなかつた。

（大正八年六月）

路上

一

午砲を打つと同時に、殆ど人影の見えなくなつた大學の圖書館は、三十分經つか經たない内に、もうどこの机を見ても、荒方は閲覽人で埋まつてしまつた。

机に向つてゐるのは大抵大學生で、中には年輩の袴羽織や背廣も、二三人は交つてゐたらしい。それが廣い空間を規則正しく塞いだ向うには、壁に嵌めこんだ時計の下に、うす暗い書庫の入口が見えた。さうしてその入口の兩側には、見上げるやうな大書棚が、何段となく古ぼけた背皮を並べて、まるで學問の守備でもしてゐる砦のやうな感を與へてゐた。

が、それだけの人間が控へてゐるのにも關らず、圖書館の中はひつそりしてゐた。と云ふよりも寧ろそれだけの人間がゐて、始めて感じられるやうな一種の沈默が支配してゐた。書物の頁を飜す音、ペンを紙に走らせる音、それから稀に咳をする音――それらの音さへこの沈默に壓迫

されて、空氣の波動がまだ天井まで傳はらない内に、その儘途中で消えてしまふやうな心もちがした。

俊助はかう云ふ圖書館の窓際の席に腰を下して、さつきから細かい活字の上に丹念な眼を曝してゐた。彼は色の淺黑い、體格のがつしりした青年だつた。が、彼が文科の學生だと云ふ事は、制服の襟にあるLの字で、問ふまでもなく明かだつた。

彼の頭の上には高い窓があつて、その窓の外には茂つた椎の葉が、僅に空の色を透かせた。空は絶えず雲の翳に遮られて、春先の麗らかな日の光も、滅多にさしては來なかつた。さしても亦大抵は、風に戰いでゐる椎の葉が、朦朧たる影を書物の上へ落すか落さない内に消えてしまつた。その書物の上には、色鉛筆の赤い線が、何本も行の下に引いてあつた。さうしてそれが時の移ると共に、次第に頁から頁へ移つて行つた。……

十二時半、一時、一時二十分――書庫の上の時計の針は、休みなく確に動いて行つた。すると彼是二時かとも思ふ時分、圖書館の扉口に近い、目錄の函の並んでゐる所へ、小倉の袴に黑木綿の紋附をひつかけた、背の低い角帽が一人、無精らしく懷手をしながら、ふらりと外からはいつ

て來た。これはその懐からだらしなくはみ出したノオト・ブックの署名によると、やはり文科の學生で、大井篤夫と云ふ男らしかつた。

彼は其處に佇んだ儘、暫くは唯あたりの机を睨めつけたやうに物色してゐたが、やがて向うの窓を洩れる大幅な薄日の光の中に、餘念なく書物をはぐつてゐる俊助の姿が目にはいると、早速その椅子の後へ歩み寄つて、「おい」と小さな聲をかけた。俊助は驚いたやうに顔を擧げて、相手の方を振返つたが、忽ち淺黒い頬に微笑を浮べて「やあ」と簡單な挨拶をした。と、大井も角帽をかぶつたなり、ちよいと顋でこの挨拶に答へながら、妙に脂下つた、傲岸な調子で、

「今朝郁文堂で野村さんに會つたら、君に言傳てを頼まれた。別に差支へがなかつたら、三時迄でに『鉢の木』の二階へ來てくれと云ふんだが。」

二

「さうか。そりや難有う。」

俊助はかう云ひながら、小さな金時計を出して見た。すると大井は内懐から手を出して剃痕の

青い顋を撫で廻しながら、ぢろりとその時計を見て、
「すばらしい物を持つてゐるな。おまけに女持ちらしいぢやないか。」
「これか。こりや母の形見だ。」
俊助はちよいと顔をしかめながら、無造作に時計をポッケットへ返すと、徐に逞しい體を起して、机の上にちらかつてゐた色鉛筆やナイフを片づけ出した。その間に大井は俊助の讀みかけた書物を取上げて、好い加減に所々開けて見ながら、
「ふん Marius the Epicurean か。」と、冷笑するやうな聲を出したが、やがて生欠伸を一つ嚙み殺すと、
「俊助ズイ・エピキユリアンの近況はどうだい。」
「いや、一向振はなくつて困つてゐる。」
「さう謙遜するなよ。女持ちの金時計をぶら下げてゐるだけでも、僕より遙に振つてゐるからな。」
大井は書物を抛り出して、又兩手を懷へ突こみながら、貧乏揺りをし始めたが、その内に俊助

が外套へ手を通し出すと、急に思ひ出したやうな調子で、

「おい、君は『城』同人の音樂會の切符を賣りつけられたか。」と、眞顔になつて問ひかけた。『城』と言ふのは、四五人の文科の學生が「藝術の爲の藝術」を標榜して、此頃發行し始めた同人雜誌の名前である。その連中の主催する音樂會が近々築地の精養軒で開かれると云ふ事は、法文科の掲示場に貼つてある廣告で、俊助も兼ね兼ね承知してゐた。

「いや、仕合せとまだ賣りつけられない。」

俊助は正直にかう答へながら、書物を外套の腋の下へ挾むと、時代のついた角帽をかぶつて、大井と一しよに席を離れた。と、大井も歩きながら、狡猾さうに眼を働かせて、

「さうか、僕はもう君なんぞはとうに賣りつけられたと思つてゐた。ぢやこの際是非一枚買つてやつてくれ。僕は勿論『城』同人ぢやないんだが、あすこの藤澤に賣りつけ方を委託されて、實は大いに困却してゐるんだ。」

不意打を食つた俊助は、買ふとか買はないとか答へる前に、苦笑しずにはゐられなかつた。が、大井は黑木綿の紋附の袂から、『城』同人の印のある、洒落れた切符を二枚出すと、それをまるで花

札のやうに持つて見せて、

「一等が三圓で、二等が二圓だ。おい、どつちにする？　一等か。二等か。」

「どつちも眞平だ。」

「いかん。いかん。金時計の手前に對しても、一枚だけは買ふ義務がある。」

二人はこんな押問答を繰返しながら、閲覽人で埋まつてゐる机の間を通りぬけて、とうとう吹き曝しの玄關へ出た。すると丁度其處へ、眞赤な土耳其帽をかぶつた、痩せぎすな大學生が一人、金釦の制服に短い外套を引つかけて、勢ひよく外からはいつて來た。それが出合頭に大井と顏を合せると、女のやうな優しい聲で、しかも亦不自然な位慇懃に、

「今日は。大井さん。」と、聲をかけた。

三

「やあ、失敬。」

大井は下駄箱の前に立止ると、相不變闊太い聲を出した。が、その間も俊助に逃げられまいと

思つたのか、剃痕の青い顋で横柄に土耳其帽をしやくつて見せて、
「君はまだこの先生を知らなかつたかな。佛文の藤澤慧君。『城』同人の大將株で、この間ボオドレエル詩抄と云ふ飜譯を出した人だ。――こつちは英文の安田俊助君。」と、手もなく二人を紹介してしまつた。
　そこで俊助も已むを得ず、曖昧な微笑を浮べながら、角帽を脱いで默禮した。が、藤澤は、俊助の世慣れない態度とは打つて變つた、如何にも如才ない調子で、
「御噂は豫々大井さんから、何かと承はつて居りました。やはり御創作をなさいますさうで。その内に面白い物が出來ましたら、『城』の方へ頂きますから、どうか何時でも御遠慮なく。」
　俊助は又微笑した儘、「いや」とか「いいえ」とか好い加減な返事をするより外はなかつた。すると今まで皮肉な眼で二人を見比べてゐた大井が、例の切符を土耳其帽に見せると、
「今、大いに『城』同人へ御忠勤を抽んでてゐる所なんだ。」と、自慢がましい吹聽をした。
「あゝ、さう。」
　藤澤は氣味の悪い程愛嬌のある眼で、ちよいと俊助と切符とを見比べたが、すぐその眼を大井

へ返して、

「ぢや一等の切符を一枚差上げてくれ給へ。――失禮ですけれども、切符の御心配はいりませんから、聽きにいらしつて下さいませんか。」

俊助は當惑さうな顏をして、何度も平に辭退しようとした。が、藤澤はやはり愛想よく笑ひながら、「御迷惑でもどうか」を繰返して、容易に出した切符を引込めなかつた。のみならず、その笑の後からは、萬一斷られた場合には感じさうな不快さへ露骨に透かせて見せた。

「ぢや頂戴して置きます。」

俊助はとうとう我を折つて、澁々その切符を受取りながら、素つ氣ない聲で禮を云つた。

「どうぞ。當夜は清水昌一さんの獨唱もある筈になつてゐますから、是非大井さんとでもいらしつて下さい。――君は清水さんを知つてゐたかしら。」

藤澤はそれでも滿足さうに華奢な兩手を揉み合せて、優しくかう大井へ問ひかけると、何故かさつきから妙な顏をして、二人の問答を聞いてゐた大井は、さも冗談ぢやないと云ふやうに、鼻から大きく息を拔いて、又元の懷手に返りながら、

「勿論知らん。音樂家と犬とは昔から僕にや禁物だ。」

「さう、さう、君は犬が大嫌ひだつたつけ。ゲエテも犬が嫌ひだつたと言ふから、天才は皆さうなのかも知れない。」

土耳其帽は俊助の賛成を求める心算か、わざとらしく聲高に笑つて見せた。が、俊助は下を向いた儘、まるでその癇高い笑ひ聲が聞えないやうな風をしてゐたが、やがてあの時代のついた角帽の庇へ手をかけると、二人の顔を等分に眺めながら、

「ぢや僕は失敬しよう。いづれ又。」と、取つてつけたやうな挨拶をして、匆々石段を下りて行つた。

四

二人に別れた俊助はふと、現在の下宿へ引き移つた事がまだ大學の事務所まで屆けてなかつたのを思ひ出した。そこで又さつきの金時計を出して見ると、約束の三時までには彼是三十分足らずも時間があつた。彼はちよいと事務所へ寄る事にして、兩手を外套の隱しへ突つこみながら、

法文科大學の古い赤煉瓦の建物の方へ、ゆつくりした歩調で歩き出した。
と、突然頭の上で、ごろごろと春の雷が鳴つた。仰向いて見ると、空は何時の間にか灰汁桶を掻きまぜたやうな色になつて、其處から濕つぽい南風が、幅の廣い砂利道へ生暖く吹き下して來た。俊助は「雨かな」と呟きながら、それでも一向急ぐ氣色はなく、書物を腋の下に挾んだ儘、悠長な歩みを續けて行つた。

が、さう呟くか呟かない内に、もう一度かすかに雷が鳴つて、ぽつりと冷たい滴が頰に觸れた。續いて又一つ、今度は觸るまでもなく、際どく角帽の庇を掠めて、絲よりも細い光を落した。と思ふと追々に赤煉瓦の色が寒くなつて、正門の前から續いてゐる銀杏の並木の下まで來ると、もう高い並木の梢が一面に煙つて見える程、しとしとと雨が降り出した。

その雨の中を歩いて行く俊助の心は沈んでゐた。彼は藤澤の聲を思ひ出した。大井の顏も思ひ出した。それから又彼等が代表する世間なるものも思ひ出した。彼の眼に映じた一般世間は、實行に終始するのが特色だつた。或は實行するのに先立つて、信じてかゝるのが特色だつた。が、彼は持つて生れた性格と今日まで受けた教育とに煩はされて、とうの昔に大切な、信ずると云ふ

機能を失つてゐた。まして實行する勇氣は、容易に湧いては來なかつた。從つて彼は世間に伍して、目まぐるしい生活の渦の中へ、思ひ切つて飛びこむ事が出來なかつた。袖手をして傍觀す——それ以上に出る事が出來なかつた。だから彼はその限りで、廣い世間から切り離された孤獨を味ふべく餘儀なくされた。彼が大井と交際してゐながら、しかも猶俊助ズイ・エピキユリアンなどと嘲られるのはこの爲だつた。まして土耳其帽の藤澤などは……

彼の考が此處まで漂流して來た時、俊助は何氣なく頭を擡げた。擡げると彼の眼の前には、第八番教室の古色蒼然たる玄關が、霧の如く降る雨の中に、漆喰の剝げた壁を濡らしてゐた。さうしてその玄關の石段の上には、思ひもよらない若い女がたつた一人佇んでゐた。

雨脚の強弱は兎も角も、女は雨止みを待つものの如く、靜に薄暗い空を仰いでゐた。額にはつれかゝつた髮の下には、潤ひのある大きな黑瞳が、ぢつと遠い所を眺めてゐるやうに見えた。それは白い——と云ふよりも寧ろ蒼白い顏の色に、ふさはしい二重瞼だつた。着物は——黑い絽の地へ水仙めいた花を疎に繡ひ取つた肩懸けが、なだらかな肩から胸へかけて無造作に垂れてゐるより外に、何も俊助の眼には映らなかつた。

女は俊助が頭を擡げたのと前後して、遠い空から彼の上へうつとりとその黒瞳勝ちな目を移した。それが彼の眼と出合つた時、女の視線は暫くの間、止まるとも動くともつかず漂つてゐた。彼はその刹那、女の長い睫毛の後に、彼の經驗を超越した、得體の知れない一種の感情が搖曳してゐるやうな心もちがした。が、さう思ふ暇もなく、女は又眼を擧げて、向うの講堂の屋根に降る雨の脚を眺め出した。俊助は外套の肩を聳やかせて、まるで女の存在を眼中に置かない人のやうに、冷然とその前を通り過ぎた。三度頭の上の雲を震はせた初雷の響を耳にしながら。

五

雨に濡れた俊助が『鉢の木』の二階へ來て見ると、野村はもう珈琲茶碗を前に置いて、窓の外の往來へ退屈さうな視線を落してゐた。俊助は外套と角帽とを給仕の手に渡すが早いか、勢よく野村の卓子の前へ行つて、「待たせたか」と云ひながら、どつかり曲木の椅子へ腰を下した。

「うん、待たない事もない。」

殆ど鈍重な感じを起させる程、丸々と肥滿した野村は、その太い指の先でちよいと大島の襟を

直しながら、細い鐵緣の眼鏡越しにのんびりと俊助の顏を見た。

「何にする？　珈琲か。紅茶か。」

「何でも好い。——今、雷が鳴つたらう。」

「うん、鳴つたやうな氣もしない事はない。」

「相不變君はのんきだな。又認識の根據は何處にあるかとか何とか云ふ問題を、御苦勞樣にも考へてゐたんだらう。」

俊助は金口の煙草に火をつけると、氣輕さうにかう云つて、卓子の上に置いてある黃水仙の鉢へ眼をやつた。するとその拍子に、さつき大學の中で見かけた女の眼が、何故か一瞬間生々と彼の記憶に浮んで來た。

「まさか——僕は犬と遊んでゐたんだ。」

野村は子供のやうに微笑しながら、心もち椅子をずらせて、足下に寢ころんでゐた黑犬を、卓子掛の陰からひつぱり出した。犬は毛の長い耳を振つて、大きな欠伸を一つすると、その儘又ごろりと橫になつて、仔細らしく俊助の靴の匂を嗅ぎ出した。俊助は金口の煙を鼻へ拔きながら、

氣がなささうに犬の頭を撫でてやつた。

「この間、栗原の家にゐたやつを貰つて來たんだ。」

野村は給仕の持つて來た珈琲を俊助の方へ押しやりながら、又肥つた指の先を着物の襟へちよいとやつて、

「あすこぢやこの頃、家中がトルストイにかぶれてゐるもんだから、こいつにも御大層なピエルと云ふ名前がついてゐる。僕はこいつより、アンドレエと云ふ犬の方が欲しかつたんだが、僕自身ピエルだから、何でもピエルの方をつれて行けと云ふんで、とうとうこいつを拝領させられてしまつたんだ。」

と、俊助は珈琲茶碗を脣へ當てながら、人の惡い微笑を浮べて、調戯ふやうに野村を一瞥した。

「まあピエルで滿足しとくさ。その代りピエルなら、追つては目出度くナタシアとも結婚出來ようと云ふもんだ。」

野村もこれには狼狽したものと見えて、暫くは顔を所斑に赤くしたが、それでも聲だけはゆつくりした調子で、

「僕はピエルぢやない。と云つて勿論アンドレエでもないが――」

「ないが、兎に角初子女史のナタシアたる事は認めるだらう。」

「さうさな、まあ御轉婆な點だけは幾分認めない事もないが――」

「序に全部認めちまふさ。――さう云へばこの頃初子女史は、『戰爭と平和』に匹敵するやうな長篇小說を書いてゐるさうぢやないか。どうだ、もう追つけ完成しさうかね。」

俊助は漸く鋒芒をさめながら、短くなつた金口を灰皿の中へ抛りこんで、稍皮肉にから尋ねた。

六

「實はその長篇小說の事で、今日は君に來て貰つたんだが。」

野村は鐵緣の眼鏡を外すと、刻銘に手巾で玉の曇りを拭ひながら、

「初子さんは何でも、新しい『女の一生』を書く心算なんださうだ。まあ Une Vie à la Tolstoi と云ふ所なんだらう。そこでその女主人公と云ふのが、いろいろ數奇な運命に弄ばれた結果だね。

「――」

「それから？」

俊助は鼻を黄水仙の鉢へ持つて行きながら、格別氣乘りもしてゐなささうな聲でかう云つた。が、野村は細い眼鏡の蔓を耳の後へからみつけると、相不變落着き拂つた調子で、

「最後にどこかの癲狂院で、絶命する事になるんださうだ。就いてはその癲狂院の生活を描寫したいんだが、生憎初子さんはまださう云ふ所へ行つて見た事がない。だからこの際誰かの紹介を貰つて、どこでも好いから癲狂院を見物したいと云つてゐるんだ。――」

俊助は又金口に火を付けながら、半ば皮肉な表情を浮べた眼で、もう一度「それから？」と云ふ相圖をした。

「そこで君から一つ、新田さんへ紹介してやつて貰ひたいんだが――新田さんと云ふんだらう、あの物質主義者の醫學士は？」

「さうだ――ぢや兎も角も手紙をやつて、向うの都合を問ひ合せて見よう。多分差支へはなからうと思ふんだが。」

「さうか。さうして貰へれば、僕の方は非常に難有いんだ。初子さんも勿論大喜びだらう。」

野村は滿足さうに眼を細くして、續けさまに二三度大島の襟を直しながら、

「この頃はまるでその『女の一生』で夢中になつてゐるんだから。一しよにゐる親類の娘なんぞをつかまへても、始終その話ばかりしてゐるらしい。」

俊助は默つて、埃及の煙を吐き出しながら、窓の外の往來へ眼を落した。まだ霧雨の降つてゐる往來には、細い銀杏の並木が僅に芽を伸ばして、龜の甲羅に似た蝙蝠傘が幾つもその下を動いて行く。それが又何故か彼の記憶に、刹那の間さつき遇つた女の眼を思ひ出させた。……

「君は『城』同人の音樂會へは行かないのか。」

暫く沈默が續いた後で、野村はふと思出したやうにかう尋ねた。と同時に俊助は、彼の心が何分かの間、殆ど白紙の如く空しかつたのに氣がついた。彼はちよいと顏をしかめて、冷くなつた珈琲を飲み干すと、すぐに以前のやうな元氣を恢復して、

「僕は行かうと思つてゐる。君は？」

「僕は今朝郁文堂で大井君に言傳てを頼んだら何でも貰つてくれと云ふので、とうとう一等の切

符を四枚押つけられてしまつた。」
「四枚とは又ひどく奮發したものぢやないか。」
「何、どうせ三枚は栗原で買つて貰ふんだから。――こら、ピエル。」
今まで俊助の足下に寢ころんでゐた黑犬は、この時急に身を起すと、階段の上り口を睨みながら、凄じい聲で唸り出した。犬の氣色に驚いた野村と俊助とは、黄水仙の鉢を隔てて向ひ合ひながら、一度にその方へ振り返つた。すると丁度其處にはあの土耳其帽の藤澤が、黑いソフトをかぶつた大學生と一しよに、雨に濡れた外套を給仕の手に渡してゐる所だつた。

七

一週間の後、俊助は築地の精養軒で催される『城』同人の音樂會へ行つた。音樂會は準備が整はないとか云ふ事で、やがて定刻の午後六時が迫つて來ても、容易に開かれる氣色はなかつた。會場の次の間には、もう聽衆が大勢つめかけて、電燈の光も曇る程盛に煙草の煙を立ち昇らせてゐた。中には大學の西洋人の教師も、一人二人は來てゐるらしかつた。俊助は、大きな護謨の樹の

鉢植が据ゑてある部屋の隅に佇みながら、別に開會を待ち兼ねるでもなく、ぼんやり周圍の話し聲に屈托のない耳を傾けてゐた。

するとどこからか大井篤夫が、今日は珍しく制服を着て、相不變傲然と彼の側へ歩いて來た。二人はちよいと點頭を交換した。

「野村はまだ來てゐないか。」

俊助がかう尋ねると、大井は胸の上に兩手を組んで、反身にあたりを見廻しながら、

「まだ來ないやうだ。――來なくつて仕合せさ。僕は藤澤にひつぱられて來たもんだから、もう彼是一時間ばかり待たされてゐる。」

俊助は嘲るやうに微笑した。

「君がたまに制服なんぞ着て來りや、どうせ碌な事はありやしない。」

「これか。これは藤澤の制服なんだ。彼曰、是非僕の制服を借りてくれ給へ、さうすると僕はそれを口實に、親爺のタキシイドを借りるから。――そこでやむを得ず、僕がこれを着て、擲きたくもない音樂會なんぞへ出たんだ。」

大井はあたり構はずこんな事を饒舌りながら、もう一度ぐるり部屋の中を見渡して、それから、彼處にゐるのは誰、此處にゐるのは誰と、世間に名の知られた作家や畫家を一々俊助に教へてくれた。のみならず序を以て、さう云ふ名士たちの醜聞を面白さうに話してくれた。

「あの紋服と來た日にや、或辯護士の細君をひつかけて、そのいきさつを書いた小說を御亭主の辯護士に獻じる程、すばらしい度胸のある人間なんだ。その隣のボヘミアン・ネクタイも、これ又詩よりも女中に手をつけるのが、本職でね。」

俊助はこんな醜い內幕に興味を持つべく、餘りに所謂ニル・アドミラリな人間だつた。ましてその時はそれらの藝術家の外聞も顧慮してやりたい氣もちがあつた。そこで彼は大井が一息ついたのを機會にして、切符と引換へに受取つたプログラムを擴げながら、話題を今夜演奏される音樂の方面へ持つて行つた。が、大井はこの方面には全然無感覺に出來上つてゐると見えて、鉢植の護謨の葉を遠慮なく爪でむしりながら、

「兎に角その淸水昌一とか云ふ男は、藤澤なんぞの話によると、獨唱家と云ふよりや寧立派な色魔だね。」と、又話を社會生活の暗黑面へ戾してしまつた。

が、幸、その時開會を知らせるベルが鳴つて、會場との境の扉が漸く兩方へ開かれた。さうして待ちくたびれた聽衆が、まるで潮の引くやうに、ぞろぞろその扉口へ流れ始めた。俊助も大井と一しよにこの流れに誘はれて、次第に會場の方へ押されて行つたが、何氣なく途中で後を振返ると、思はず知らず心の中で「あつ」と云ふ驚きの聲を洩らした。

八

俊助は會場の椅子に着いた後でさへ、まだ全くさつきの驚きから恢復してゐない事を意識した。彼の心は何時になく、不思議な動搖を感じてゐた。それは歡喜とも苦痛とも辨別し難い性質のものだつた。彼はこの心の動搖に身を任せたいと云ふ欲望もあつた。で同時に又さうしてはならないと云ふ氣も働いてゐた。そこで彼は少くとも現在以上の動搖を心に齎さない方便として、成る可く眼を演壇から離さないやうな工夫をした。

金屛風を立て廻した演壇へは、まづフロツクを着た中年の紳士が現れて、額に垂れかかる髮をかき上げながら、撫でるやうに柔しくシユウマンを唱つた。それは Ich kann's nicht fassen,

nicht glauben で始まるシヤミツソオの歌だつた。俊助はその舌たるい唄ひぶりの中から、何か恐るべく不健全な香氣が、發散して來るのを感ぜずにはゐられなかつた。さうしてこの香氣が彼の騷ぐ心を一層苛立てて行くやうな氣がしてならなかつた。だから漸く獨唱が終つて、けたたましい拍手の音が起つた時、彼は僅にほつとした眼を擧げて、まるで救ひを求めるやうに隣席の大井を振返つた。すると大井はプログラムを丸く卷いて、それを望遠鏡のやうに眼へ當てながら、演壇の上に頭を下げてゐるシユウマンの獨唱家を覗いてゐたが、

「成程、清水と云ふ男は、立派に色魔たるべき人相を具へてゐるな。」と、呟くやうな聲で云つた。

俊助は初めてその中年の紳士が清水昌一と云ふ男だつたのに氣がついた。そこで又演壇の方へ眼を返すと、今度は其處へ裾模樣の令孃が、盛な喝采に迎へられながら、ヴアイオリンを抱いてしづしづと登つて來る所だつた。令孃は殆ど人形のやうに可愛かつたが、遺憾ながらヴアイオリンは唯間違はずに一通り彈いて行くと云ふだけのものだつた。けれども俊助は幸と、清水昌一のシユウマン程惡甘い刺戟に脅かされないで、兎も角も快よくチヤイコウスキイの神祕な世界に安住出來るのを喜んだ。が、大井はやはり退屈らしく、後頭部を椅子の背に凭せて、時々無遠慮に

鼻を鳴らしてゐたが、やがて急に思ひついたといふ調子で、

「おい、野村君が來てゐるのを知つてゐるか。」

「知つてゐる。」

俊助は小聲でかう答へながら、それでも猶眼は金屏風の前の令嬢から外へ動かさなかつた。と、大井は相手の答が物足らなかつたものと見えて、妙に惡意のある微笑を漂はせながら、

「おまけにすばらしい美人を二人連れて來てゐる。」と、念を押すやうにつけ加へた。が、俊助は何とも答へなかつた。さうして今までよりは一層熱心に演壇の上から流れて來るヴアイオリンの靜な音色に耳を傾けてゐるらしかつた。……

それからピアノの獨奏と四部合唱とが終つて、三十分の休憩時間になつた時、俊助は大井に頓着なく、逞い體を椅子から起して、あの護謨の樹の鉢植のある會場の次の間へ、野村の連中を探しに行つた。しかし後に殘つた大井の方は、まだ傲然と腕組みをした儘、唯ぐつたりと頭を前へ落して、演奏が止んだのも知らないのか、如何にも快よささうに、かすかな寢息を洩らしてゐた。

九

次の間へ來て見ると、果して野村が栗原の娘と並んで、大きな煖爐の前へ佇んでゐた。血色の鮮かな、眼にも眉にも活々した力の溢れてゐる、年よりは小柄な初子は、俊助の姿を見るが早いか、遠くから靨を寄せて、氣輕くちよいと腰をかゞめた。と、野村も廣い金釦の胸を俊助の方へ向けながら、度の強い近眼鏡の後に例の如く人の好ささうな微笑を漲らせて、鷹揚に「やあ」と頷いて見せた。俊助は煖爐の上の鏡を背負つて、印度更紗の帶をしめた初子と大きな體を制服に包んだ野村とが、向ひ合つて立つてゐるのを眺めた時、刹那の間彼等の幸福が妬しいやうな心もちさへした。

「今夜はすつかり遲くなつてしまつた。何しろ僕等の方は御化粧に手間が取れるものだから。」

俊助と二言三言雜談を交換した後で、野村は大理石のマントル・ピイスへ手をかけながら、冗談のやうな調子でかう云つた。

「あら、何時私たちが御手間を取らせて？　野村さんこそ御出でになるのが遲かつたぢやない

の？」

初子はわざと濃い眉をひそめて、媚びるやうに野村の顏を見上げたが、すぐに又その視線を俊助の方へ投げ返すと、

「先日は私妙な事を御願ひして――御迷惑ぢやございませんでしたの？」

「いや、どうしまして。」

俊助はちよいと初子に會釋しながら、後はやはり野村だけへ話しかけるやうな態度で、

「昨日新田から返事が來たが、月水金の內でさへあれば、何時でも喜んで御案內するといふんだ。だからその內で都合の好い日に參觀して來給へ。」

「さうか、そりや難有う。――で、初子さんは何時行つて見ます？」

「何時でも。どうせ私用のない體なんですもの。野村さんの御都合で極めて頂けば好いわ。」

「僕が極めるつて――ぢや僕も隨行を仰せつかるんですか。そいつは少し――」

野村は五分刈の頭へ大きな手をやつて、辟易したらしい氣色を見せた。と、初子は眼で笑ひながら、聲だけは拗ねた調子で、

「だつて私その新田さんつて方にも、御眼にかかつた事がないんでせう。ですもの、私たちだけぢや行かれはしないわ。」
「何、安田の名刺を貰つて行けば、向うでちやんと案内してくれますよ。」
二人がこんな押問答を交換してゐると、突然、其處へ、曉星學校の制服を着た十ばかりの少年が、人ごみの中をくゞり拔けるやうにして、勢ひよく姿を現した。さうしてそれが俊助の顏を見ると、いきなり直立不動の姿勢をとつて、愛嬌のある擧手の禮をして見せた。こちらの三人は思はず笑ひ出した。中でも一番大きな聲を出して笑つたのは、野村だつた。
「やあ、今夜は民雄さんも來てゐたのか。」
俊助は兩手で少年の肩を抑へながら、調戯ふやうにその顏を覗きこんだ。
「ああ、皆で自動車へ乘つて來たの。安田さんは？」
「僕は電車で來た。」
「けちだなあ、電車だなんて。歸りに自動車へ乘せて上げようか。」
「ああ、乘せてくれ給へ。」

この間も俊助は少年の顔を眺めながら、しかも誰かが民雄の後を追つて、彼等の近くへ歩み寄つたのを感ぜずにはゐられなかつた。

十

俊助は眼を擧げた。と、果して初子の隣に同年輩の若い女が、紺地に藍の竪縞の着物の胸を蘆手模樣の帶に抑へて、品よくすらりと佇んでゐた。彼女は初子より大柄だつた。と同時に眼鼻立ちは、愛くるしかる可き二重瞼までが、遙に初子より寂しかつた。しかもその二重瞼の下にある眼は、殆ど憂鬱とも形容したい、潤んだ光さへ湛へてゐた。さつき會場へはいらうとする間際に、偶然後へ振り返つた、俊助の心を躍らせたものは、實にこのもの思はしげな、水々しい瞳の光だつた。彼はその瞳の持ち主と咫尺の間に向ひ合つた今、再び最前の心の動搖を感じない譯には行かなかつた。

「辰子さん。あなたまだ安田さんを御存知なかつたわね。――辰子さんと申しますの。京都の女學校を卒業なすつた方。この頃やつと東京詞が話せるやうになりました。」

初子は物慣れた口ぶりで、彼女を俊助に紹介した。辰子は蒼白い頰の底にかすかな血の色を動かして、淑かに束髪の頭を下げた。俊助も民雄の肩から手を離して、叮嚀に初對面の會釋をした。幸、彼の淺黑い頰が何時になく火照つてゐるのには、誰も氣づかずにゐたらしかつた。

すると野村も横合ひから、今夜は特に愉快さうな口を出して、

「辰子さんは初子さんの從妹でね、今度繪の學校へはいるものだから、それでこつちへ出て來る事になつたんだ。所が每日初子さんが例の小說の話ばかり聞かせるので、餘程體にこたへるのだらう。どうもこの頃はちと健康が思はしくない。」

「まあ、ひどい。」

初子と辰子とは同時にかう云つた。が、辰子の聲は、初子のそれに氣押されて、殆ど聞えない程低い聲だつた。けれども俊助は、この始めて聞いた辰子の聲の中に、優しい心を裏切るものが潛んでゐるやうな心もちがした。それが彼には心強い氣を起させた。

「畫と云ふと――やはり洋畫を御やりになるのですか。」

相手の聲に勇氣を得た俊助は、まだ初子と野村とが笑ひ合つてゐる內に、かう辰子へ問ひかけ

た。辰子はちよいと眼を帶止めの翡翠へ落して、
「は。」と、思つたよりもはつきりした返事をした。
「畫は却々うまい。僕に初子さんの小説と對峙するに足る位だ。――だから、辰子さん。僕が好い事を教へて上げませう。これから初子さんが小説の話をしたら、あなたも盛に畫の話をするんです。さうでもしなくつちや、體がたまりません。」
俊助は唯微笑で野村に答へながら、もう一度辰子に聲をかけて見た。
「御體は實際御惡いんですか。」
「ええ、心臟が少し――大した事はございませんけれど。」
するとさつきから退屈さうな顏をして、一同の顏を眺めてゐた民雄が、下からぐいぐい俊助の手をひつぱつて、
「辰子さんはね、あすこの梯子段を上つても、息が切れるんだとさ。僕は二段づつ一遍にとひ上る事が出來るんだぜ。」
俊助は辰子と顏を見合せて、漸く心置きのない微笑を交換した。

十一

辰子は蒼白い頬に片靨を寄せた儘、靜に民雄から初子へ眼を移して、
「民雄さんはそりや御強いの。さつきもあの梯子段の手すりへ跨つて、辷り下りようとなさるんでせう。私吃驚して、墜ちて死んだらどうなさるのつて云つたら――ねえ、民雄さん。あなたあの時、僕はまだ死んだ事がないから、どうするかわからないつて仰有つたわね。私可笑しくつて――」
「成程ね、こりや却々哲學的だ。」
野村は又誰よりも大きな聲で笑ひ出した。
「まあ、生意氣つたらないのね。――だから姉さんが何時でも云ふんだわ、民雄さんは莫迦だつて。」
部屋の中の火氣に蒸されて、一層血色の鮮になつた初子が、ちよつと睨める眞似をしながら、から弟を窘めると、民雄はまだ俊助の手をつかまへた儘、

「ううん。僕は莫迦ぢやないよ。」

「ぢや利巧か？」

今度は俊助まで口を出した。

「ううん、利巧でもない。」

「ぢや何だい。」

民雄はかう云つた野村の顔を見上げながら、殆ど滑稽に近い眞面目さを眉目の間に閃かせて、

「中位。」と道破した。

四人は聲を合せて失笑した。

「中位は好かつた。大人もさう思つてさへゐれば、一生幸福に暮せるのに相違ない。こりや初子さんなんぞは殊に拳々服膺すべき事かも知れませんぜ。辰子さんの方は大丈夫だが――」

その笑ひ聲が靜まつた時、野村は廣い胸の上に腕を組んで、二人の若い女を見比べた。

「何とでも仰有い。今夜は野村さん私ばかりいぢめるわね。」

「ぢや僕はどうだ。」

俊助は冗談のやうに野村の矢面に立つた。

「君もいかん。君も中位を以て自任出來ない男だ。――いや、君ばかりぢやない。近代の人間と云ふやつは、皆中位で滿足出來ない連中だ。そこで勢ひ、主我的になる。主我的になると云ふ事は、他人ばかり不幸にすると云ふ事ぢやない。自分までも不幸にすると云ふ事だ。だから用心しなくつちやいけない。」

「ぢや君は中位派か。」

「勿論さ。さもなけりや、とてもこんな泰然としちやゐられはしない。」

俊助は憫むやうな眼つきをして、ちらりと野村の顏を見た。

「だがね、主我的になると云ふ事は、自分ばかり不幸にする事ぢやない。他人までも不幸にする事だ。だらう。さうするといくら中位派でも、世の中の人間が主我的だつたら、やつぱり不安だらうぢやないか。だから君のやうに泰然としてゐられる爲には、中位派たる以上に、主我的でない世の中を――でなくとも、先づ主我的でない君の周圍を信用しなけりやならないと云ふ事になる。」

「そりやまあ信用してゐるさ。が、君は信用した上でも——待つた。一體君は全然人間を當てにしてゐないのか。」

俊助はやはり薄笑ひをした儘、してゐるとも、してゐないとも答へなかつた。初子と辰子との眼がもの珍らしさうに、彼の上へ注がれてゐるのを意識しながら。

十二

音樂會が終つた後で、俊助はとうとう大井と藤澤とに引きとめられて、『城』同人の茶話會に出席しなければならなくなつた。彼は勿論進まなかつた。が、藤澤以外の同人には、多少の好奇心もない事はなかつた。しかも切符を貰つてゐる義理合ひ上、無下に斷つてしまふのも氣の毒だと云ふ遠慮があつた。そこで彼はやむを得ず、大井と藤澤との後について、さつきの次の間の隣にある、小さな部屋へ通つたのだつた。

通つて見ると部屋の中には、もう四五人の大學生が、フロックの清水昌一と一しよに、小さな卓子を圍んでゐた。藤澤はその連中を一々俊助に紹介した。その中では近藤と云ふ獨逸文科の學

生と、花房と云ふ佛蘭西文科の學生とが、特に俊助の注意を惹いた人物だつた。近藤は大井よりも更に背の低い、大きな鼻眼鏡をかけた青年で、『城』同人の中では第一の繪畫通と云ふ評判を荷つてゐた。これは何時か『帝國文學』へ、堂々たる文展の批評を書いたので、自然名前だけは俊助の記憶にも殘つてゐるのだつた。もう一人の花房は、一週間以前『鉢の木』へ藤澤と一しよに來た黒のソフトで、英佛獨伊の四箇國語の外にも、希臘語や羅甸語の心得があると云ふ、非凡な語學通で通つてゐた。さうしてこれ亦 Hanabusa と署名のある英佛獨伊希臘羅甸の書物が、時々本郷通の古本屋に並んでゐるので、とうから名前だけは俊助も承知してゐる青年だつた。この二人に比べると、外の『城』同人は存外特色に乏しかつた。が、身綺麗な服裝の胸へ小さな赤薔薇の造花をつけてゐる事は、いづれも軌を一にしてゐるらしかつた。俊助は近藤の隣へ腰を下しながら、かう云ふハイカラな連中に交つてゐる大井篤夫の野蠻な姿を、滑稽に感ぜずにはゐられなかつた。

「御蔭樣で、今夜は盛會でした。」

タキシイドを着た藤澤は、女のやうな柔しい聲で、まづ獨唱家の淸水に挨拶した。

「いや、どうもこの頃は咽喉を痛めてゐるもんですから――それより『城』の賣行きはどうです？」

もう牧支償ふ位には行くでせう。」

「いえ、其處まで行つてくれれば本望なんですが――どうせ我々の書く物なんぞが、賣れる筈に、ありやしません。何しろ人道主義と自然主義と以外に、藝術はないやうに思つてゐる世間なんですから。」

「さうですかね。だが何時までも、それぢやすまないでせう。その內に君の『ボオドレエル詩抄』が、羽根の生えたやうに賣れる時が來るかも知れない。」

淸水は見え透いた御世辭を云ひながら、給仕の廻して來た紅茶を受けとると、隣に坐つてゐた花房の方を向いて、

「この間の君の小說は、大へん面白く拜見しましたよ。あれは何から材料を取つたですか。」

「あれですか。あれはゲスタ・ロマノルムです。」

「はあ、ゲスタ・ロマノルムですか。」

淸水がけげんな顔をしながら、かう好い加減な返事をすると、さつきから鉈豆の煙管で刻み臭い刻みを吹かせてゐた大井が、卓子の上へ頰杖をついて、

「何だい、そのゲスタ・ロマノルムつてやつは？」と、無遠慮な問を拋りつけた。

十三

「中世の傳說を集めた本でしてね。十四五世紀の間に出來たものなんですが、何文原文がひどい羅甸なんで――」

「君にも讀めないかい。」

「まあ、どうにかですね。參考にする飜譯もいろいろありますから。――何でもチヨオサアやシエクスピイアも、あれから材料を採つたんださうです。ですからゲスタ・ロマノルムだつて、中中莫迦には出來ませんよ。」

「ぢや君は少くとも材料だけは、チヨオサアやシエクスピイアと肩を並べてゐると云ふ次第だね。」

俊助はかう云ふ問答を聞きながら、妙な事を一つ發見した。それは花房の聲や態度が、不思議な位藤澤に酷似してゐると云ふ事だつた。もし離魂病と云ふものがあるとしたならば、花房は正

に藤澤の離魂體とも見るべき人間だつた。が、どちらが正體でどちらが影法師だか、その邊の際どい消息になると、まだ俊助にははつきりと見定めをつける事がむづかしかつた。だから彼は、花房の饒舌つてゐる間も、時々胸の赤薔薇を氣にしてゐる藤澤を偸み見ずにはゐられなかつた。

　すると今度はその藤澤が、縁に繡のある手巾で紅茶を飲んだ口もとを拭ひながら、又隣の獨唱家の方を向いて、

「この四月には『城』も特別號を出しますから、その前後には近藤さんを一つ煩はせて、展覽會を開かうと思つてゐます。」

「それも妙案ですな。が、展覽會と云ふと、何ですか、やはり諸君の作品だけを――」

「ええ、近藤さんの木版畫と、花房さんや私の油繪と――それから西洋の畫の寫眞版とを陳列しようかと思つてゐるんです。唯、さうなると、警視廳が又裸體畫は撤回しろなぞとやかましい事を云ひさうでしてね。」

「僕の木版畫は大丈夫だが、君や花房君の油繪は危險だぜ。殊に君の『Utamaroの黄昏』に至つちや――あなたはあれを御覽になつた事がありますか。」

から云つて、鼻眼鏡の近藤はマドロス・パイプの煙を吐きながら、流し眼にぢろりと俊助の方を見た。と、俊助がまだ答へない内に、卓子の向うから藤澤が口を挾んで、

「そりや君、まだ御覧にならないのですよ。いづれその内に、御眼にかけようとは思つてゐるんですが――安田さんは繪本歌枕と云ふものを御覧になつた事がありますか。ありません？　私の『Utamaroの黄昏』は、あの中の一枚を裝飾的に描いたものなんです。行き方は――と、近藤さん、あれは何と云つたら好いんでせう。モオリス・ドニでもなし、さうかと云つて――」

近藤は鼻眼鏡の後の眼を閉ぢて暫く考に耽つてゐたが、やがて重々しい口を開かうとすると、又大井が横合ひから、鉈豆の煙管を啣へた儘で、

「つまり君、春畫みたいなものなんだらう。」と、亂暴な註釋を施してしまつた。

所が藤澤は存外不快にも思はなかつたと見えて、例の如く無氣味な程柔しい微笑を漂はせながら、

「ええ、さう云へば一番早いかも知れませんね。」と、恬然として大井に贊成した。

十四

「成程、そりや面白さうだ。——所でどうでせう、春畫などと云ふ物は、やつぱり西洋の方が發達してゐるんですか。」

　清水がかう尋ねたのを潮に、近藤は悠然とマドロス・パイプの灰をはたきながら、大學の素讀でもしさうな聲で、徐に西洋の恁うした畫の講釋をし始めた。

「一概に春畫と云ひますが、まあざつと三種類に區別するのが至當なので、第一は××××を描いたもの、第二はその前後だけを描いたもの、第三は單に××××を描いたもの——」

　俊助は勿論かう云ふ話題に、一種の義憤を發する程、道德家でないには相違なかつた。けれども彼には近藤の美的僞善とも稱すべきものが——自家の卑猥な興味の上へ藝術的と云ふ金箔を塗りつけるのが、不愉快だつたのも亦事實だつた。だから近藤が得意になつて、さも藝術の極致が、恁うした畫にあるやうな、如何はしい口吻を弄し出すと、俊助は義理にも、金口の煙に隱れて、顏をしかめない譯には行かなかつた。が、近藤はそんな事には更に氣がつかなかつたものと見え

て、上は古代希臘の陶畫から下は近代佛蘭西の石版畫まで、ありとあらゆる斯うした畫の形式を一々詳しく說明してから、

「そこで面白い事にはですね、あの眞面目さうなレムブラントやデュラアまでが、斯ういふ畫を描いてゐるんです。しかもレムブラントのやつなんぞは、やつぱり例のレムブラント光線が、ぱつと一箇所に落ちてゐるんだから、振つてゐるぢやありませんか。つまりああ云ふ天才でも、やつぱりこの方面へ手を出す位な俗氣は十分あつたんで——まあ、その點は我々と似たり寄つたりだつたんでせう。」

俊助は愈聞き苦しくなつた。すると今まで卓子の上へ頰杖をついて、半ば眼をつぶつてゐた大井が、にやりと莫迦にしたやうな微笑を洩すと、欠伸を噛み殺したやうな聲を出して、

「おい、君、序にレムブラントもデュラアも、我々同樣屁を垂れたと云ふ考證を發表して見ちやどうだ。」

近藤は大きな鼻眼鏡の後から、險しい視線を大井へ飛ばせたが、大井は一向平氣な顏で、鉈豆の煙管をすぱすぱやりながら、

「或は百尺竿頭一歩を進めて、同じく屁を垂れるから、君も彼等と甲乙のない天才だと號するのも洒落れてゐるぜ。」

「大井君、よし給へよ。」

「大井さん。もう好いぢやありませんか。」

見兼ねたと云ふ容子で、花房と藤澤とが、同時に柔しい聲を出した。と、大井は狡猾さうな眼で、まつ靑になつた近藤の顏をぢろぢろ覗きこみながら、

「こりや失敬したね。僕は何も君を怒らす心算で云つたんぢやないんだが――いや、ない所か、君の知識の該博なのには、夙に敬服に堪へない位なんだ。だからまあ、怒らないでくれ給へ。」

近藤は執念深く口を噤んで、卓子の上の紅茶茶碗へぢつと眼を据ゑてゐたが、大井がかう云ふと同時に、突然椅子から立ち上つて、呆氣に取られてゐる連中を後に、さつさと部屋を出て行つてしまつた。一座は互に顏を見合せた儘、暫くの間は氣まづい沈默を守つてゐなければならなかつた。が、やがて俊助は空嘯いてゐる大井の方へ、ちよいと顋で相圖をすると、微笑を含んだ靜な聲で、

「僕は御先へ御免を蒙るから。――」

これが當夜、彼の口を洩れた、最初のさうして又最後の言葉だつたのである。

十五

するとその後又一週間と經たない内に、俊助は上野行の電車の中で、偶然辰子と顏を合せた。それは春先の東京に珍しくない、埃風の吹く午後だつた。俊助は大學から銀座の八咫屋へ額緣の註文に廻つた歸りで、尾張町の角から電車へ乘ると、ぎつしり兩側の席を埋めた乘客の中に、辰子の寂しい顏が見えた。彼が電車の入口に立つた時、彼女はやはり黑い絹の肩懸をかけて、膝の上にひろげた婦人雜誌へ、つゝましい眼を落してゐるらしかつた。が、その内にふと眼を擧げて、近くの吊皮にぶら下つてゐる彼の姿を眺めると、忽ち片靨を頰に浮べて、坐つた儘、叮嚀に默禮の頭を下げた。俊助は會釋を返すより先に、こみ合つた乘客を押し分けて、辰子の前の吊皮へ手をかけたがら、

「先夜は――」と、平凡に挨拶した。

「私こそ――」

それぎり二人は口を噤んだ。電車の窓から外を見ると、時々風がなぐれる度に、往來が一面に灰色になる。と思ふと又、銀座通りの町並が、その灰色の中から浮き上つて、崩れるやうに後へ流れて行く。俊助はさう云ふ背景の前に、端然と坐つてゐる辰子の姿を、暫くの間見下してゐたが、やがてその沈默がそろそろ苦痛になり出したので、今度はなる可く氣輕な調子で、

「今日は？――御歸りですか。」と、出直して見た。

「ちよいと兄の所まで――國許の兄が出て參りましたから。」

「學校は？　御休みですか。」

「まだ始りませんの。來月の五日からですつて。」

俊助は次第に二人の間の他人行儀が、氷のやうに溶けて來るのを感じた。と、廣告屋の眞紅の旗が、喇叭や太鼓の音を風に飛ばせながら、瞬く間電車の窓を塞いだ。辰子は僅に肩を落して、そつと窓の外をふり返つた。その時彼女の小さな耳朶が、斜にさして來る日の光を受けて、仄かに赤く透いて見えた。俊助はそれを美しいと思つた。

「先達は、あれからすぐに御歸りになつて。」

辰子は俊助の顏へ瞳を返すと、人懷しい聲でかう云つた。

「ええ、一時間ばかりゐて歸りました。」

「御宅はやはり本郷？」

「さうです。森川町。」

俊助は制服の隱しをさぐつて、名刺を辰子の手へ渡した。渡す時向うの手を見ると、青玉を入れた金の指環が、細つそりとその小指を繞つてゐた。俊助はそれも亦美しいと思つた。

「大學の正門前の横町です。その内に遊びにいらつしやい。」

「難有う。いづれ初子さんとでも。」

辰子は名刺を帶の間へ挾んで、殆ど聞えないやうな返事をした。

二人は又口を噤んで、電車の音とも風の音ともつかない町の音に耳を傾けた。が、俊助はこの二度目の沈默を、前のやうに息苦しくは感じなかつた。寧ろ彼はその沈默の中に、或安らかな幸福の存在さへも明かに意識してゐたのだつた。

十六

俊助の下宿は本郷森川町でも、比較的閑靜な一區劃にあつた。それも京橋邊の酒屋の隱居所を、或傳手から二階だけ貸して貰つたので、疊建具も世間並の下宿に比べると、遙に小綺麗に出來上つてゐた。彼はその部屋へ大きな西洋机や安樂椅子の類を持ちこんで、見た眼には多少狹苦しいが、兎に角居心は惡くない程度の西洋風な書齋を拵へ上げた。が、書齋を飾るべき色彩と云つては、唯書棚を埋めてゐる洋書の行列があるばかりで、壁に懸つてゐる額の中にも、大抵はありふれた西洋名畫の寫眞版がはいつてゐるのに過ぎなかつた。これに常々不服だつた彼は、その代りによく草花の鉢を買つて來ては、部屋の中央に据ゑてある寄せ木の卓子の上へ置いた。現に今日も、この卓子の上には、籐の籠へ入れた櫻草の鉢が、何本も細い莖を抽いた先へ、簇々とうす赤い花を攅めてゐる。……

須田町の乘換で辰子と分れた俊助は、一時間の後この下宿の二階で、窓際の西洋机の前へ据ゑた輪轉椅子に腰を下しながら、漫然と金口の煙草を啣へてゐた。彼の前には讀みかけた書物が、

象牙の紙切小刀を挾んだ儘、さつきからちやんと開いてあつた。が、今の彼には、その頁に詰まつてゐる思想を咀嚼するだけの根氣がなかつた。彼の頭の中には辰子の姿が、煙草の煙のもつれるやうに、何時までも美しく這ひ纏つてゐた。彼にはその頭の中の幻が、最前電車の中で味つた幸福の名殘りの如く見えた。と同時に又來るべき、更に大きな幸福の前觸れの如くも見えるのだつた。

すると机の上の灰皿に、二三本吸ひさしの金口がたまつた時、まづ大儀さうに梯子段を登る音がして、それから誰か唐紙の向うへ立止つたけはひがすると、

「おい、ゐるか。」と、聞き慣れた太い聲がした。

「はいり給へ。」

俊助がかう答へる間も待たないで、からりと其處の唐紙が開くと、櫻草の鉢を置いた寄せ木の卓子の向うには、もう肥つた野村の姿が、肩を搖つてのそのそはいつて來た。

「靜だな。玄關で何度御免と言つても、女中一人出て來ない。仕方がないからとうとう、默つて上つて來てしまつた。」

始めてこの下宿へ來た野村は、萬遍なく部屋の中を見廻してから、俊助の指ざす安樂椅子へ、どつかり大きな尻を据ゑた。

「大方女中が又使ひにでも行つてゐたんだらう。主人の隱居は聾だから、中々御免位ぢや通じやしない。――君は學校の歸りか。」

俊助は卓子の上へ西洋の茶道具を持ち出しながら、ちよいと野村の制服姿へ眼をやつた。

「いや、今日はこれから國へ歸つて來ようと思つて――明後日が丁度親父の三回忌に當るものだから。」

「そりや大變だな。君の國ぢや歸るだけでも一仕事だ。」

「何、その方は慣れてゐるから平氣だが、兎角田舍の年忌とか何とか云ふやつは――」

野村は前以て辟易を披露する如く、近眼鏡の後の眉をひそめて見せたが、すぐに又氣を變へて、

「所で僕は君に一つ、賴みたい事があつて寄つたのだが――」

十七

「何だい、改まつて。」

俊助は紅茶茶碗を野村の前へ置くと、自分も卓子の前の椅子へ座を占めて、不思議さうに相手の顔へ眼を注いだ。

「改まりなんぞしやしないさ。」

野村は反つて恐縮らしく、五分刈の頭を撫で廻したが、

「實は例の癲狂院行きの一件なんだが――どうだらう。君が僕の代りに初子さんを連れて行つて、見せてやつてくれないか。僕は今日行くと、何だ彼だで一週間ばかりは、とても歸られさうもないんだから。」

「そりや困るよ。一週間位かかつたつて、歸つてから、君が連れて行きや好いぢやないか。」

「所が初子さんは、一日も早く見たいと云つてゐるんだ。」

野村は實際困つたやうな顔をして、暫くは壁に懸つてゐる寫眞版へ、順々に眼をくばつてゐたが、やがてその眼がレオナルドのレダまで行くと、

「おや、あれは君、辰子さんに似てゐるぢやないか。」と、意外な方面へ談柄を落した。

「さうかね。僕はさうとも思はないが。」

俊助はかう答へながら、明かに嘘をついてゐると云ふ自覺があつた。それは勿論彼にとつて、面白くない自覺には相違なかつた。が、同時に又、小さな冒險をしてゐるやうな愉快が潜んでゐたのも事實だつた。

「似てゐる。似てゐる。もう少し辰子さんが肥つてゐりや、あれにそつくりだ。」

野村は近眼鏡の下から暫くレダを仰いでゐた後で、今度はその眼を櫻草の鉢へやると、腹の底から大きな息をついて、

「どうだ。年來の好誼に免じて、一つ案内役を引き受けてくれないか。僕はもう君が行つてくれるものと思つて、その旨を初子さんまで手紙で通知してしまつたんだが。」

俊助の舌の先には、「そりや君の勝手ぢやないか」と云ふ言葉があつた。が、その言葉がまだ口の外へ出ない内に、彼の頭の中へは刹那の間、伏目になつた辰子の姿が鮮かに浮び上つて來た。と、殆どそれが相手に通じたかの如く、野村は安樂椅子の肘を叩きながら、

「初子さん一人なら、そりや君の辟易するのも無理はないが、辰子さんも多分——いや、きつと

一しよに行くつて云つてゐたから、その邊の心配は入らないんだがね。」

俊助は紅茶茶碗を掌に載せた儘、暫くの間考へた。行く行かないの問題を考へるのか、一度斷つた依賴を又引受ける爲に、然るべき口實を考へるのか――それも彼には判然しないやうな心もちがした。

「そりや行つても好いが。」

彼は現金すぎる彼自身を恥ぢながら、かう云つた後で、追ひかけるやうに言葉を添へずにはゐられなかつた。

「さうすりや、久しぶりで新田にも會へるから。」

「やれ、やれ、これでやつと安心した。」

野村はさもほつとしたらしく、胸の鈕を二つ三つ外すと、始めて紅茶茶碗を口へつけた。

十八

「日はア。」

俊助の眼はまだ野村よりも、掌の紅茶茶碗へ止まり易かつた。

「來週の水曜日――午後からと云ふ事になつてゐるんだが、君の都合が惡るけりや、月曜か金曜に繰變へても好い。」

「何、水曜なら、丁度僕の方も講義のない日だ。それで――と、栗原さんへは僕の方から出かけて行くのか。」

野村は相手の眉の間にある、思ひ切りの惡い表情を見落さなかつた。

「いや、向うから此處へ來て貰はう。第一その方が道順だから。」

俊助は默つて頷いた儘、暫く閑却されてゐた埃及煙草へ火をつけた。それから始めてのびのびと椅子の背に頭を靠せながら、

「君はもう卒業論文へとりかかつたのか。」と、全く別な方面へ話題を開拓した。

「本だけはぼつぼつ讀んでゐるが――何時になつたら考へが纏るか、自分でもちよいと見當がつかない。殊にこの頃のやうに俗用多端ぢや――」

かう云ひかけた野村の眼には、又冷評されはしないかと云ふ懸念があつた。が、俊助は案外眞

面目な調子で、
「多端――と云ふと?」と問ひ返した。
「君にはまだ話さなかつたかな。僕の母が今は國にゐるが、僕でも大學を卒業したら、こちらへ出て來て、一しよにならうと云ふんでね。それにや國の田地や何かも整理しなけりやならないから、今度はまあ親父の年忌を兼ねて、その面倒も見に行く心算なんだ。どうもかう云ふ問題になると、中々哲學史の一冊も讀むやうな、簡單な譯にや行かないんだから困る。」
「そりやさうだらう。殊に君のやうな性格の人間にや――」
俊助は同じ東京の高等學校で机を並べてゐた關係から、何かにつけて野村一家の立ち入つた家庭の事情などを、聞かせられる機會が多かつた。野村家と云へば四國の南部では、有名な舊家の一つだと云ふ事、彼の父が政黨に關係して以來、多少は家産が傾いたが、それでも猶近郷では屈指の分限者に相違ないと云ふ事、初子の父の栗原は彼の母の異腹の弟で、政治家として今日の位置に漕つけるまでには、一方ならず野村の父の世話になつてゐると云ふ事、その父の歿後何處から妾腹の子と名乘る女が出て來て、一時は面倒な訴訟沙汰にさへなつた事があると云ふ事――

さう云ふいろいろな消息に通じてゐる俊助は、今又野村の歸郷を必要としてゐる背後にも、どれ程複雜な問題が蟠まつてゐるか、略想像出來るやうな心もちがした。

「まづ當分はシュライエルマツヘル所の騒ぎぢやなささうだ。」

「シュライエルマツヘル？」

「僕の卒業論文さ。」

野村は氣のなささうな聲を出すと、ぐつたり五分刈の頭を下げて、自分の手足を眺めてゐたが、やがて元氣を恢復したらしく、胸の金鈕をかけ直して、

「もうそろそろ出かけなくつちや。――ぢや癲狂院行きの一件は、何分よろしく取計らつてくれ給へ。」

十九

野村が止めるのも聞かず、俊助は鳥打帽にインバネスをひつかけて、彼と一しよに森川町の下宿を出た。幸とうに風が落ちて、往來には春寒い日の暮が、うす明くアスファルトの上を流れて

ゐた。

二人は電車で中央停車場へ行つた。野村の下げてゐた鞄を赤帽に渡して、もう電燈のともつてゐる二等待合室へ行つて見ると、壁の上の時計の針が、まだ發車の時刻には大分遠い所を指してゐた。俊助は立つた儘、ちよいと顋をその針の方へしやくつて見せた。

「どうだ、晩飯を食つて行つては。」

「さうさな。それも惡くはない。」

野村は制服の隱しから時計を出して、壁の上のと見比べてゐたが、

「ぢや君は向うで待つてゐてくれ給へ。僕は先へ切符を買つて來るから。」

俊助は獨りで待合室の側の食堂へ行つた。食堂は殆ど滿員だつた。それでも彼が入口に立つて、逡巡の視線を漂はせてゐると、氣の利いた給仕が一人、すぐに手近の卓子に空席があるのを教へてくれた。が、その卓子には、既に實業家らしい夫婦づれが、向ひ合つてフオクを動かしてゐた。彼は西洋風に遠慮したいと思つたが、外に腰を下す所がないので、やむを得ず其處へ連らせて貰ふ事にした。尤も相手の夫婦づれは、格別迷惑らしい容子もなく、一輪插しの櫻を隔てなが

ら、大阪辯で頻に饒舌つてゐた。

給仕が註文を聞いて行くと、間もなく野村が夕刊を二三枚つかんで、忙しさうにはいつて來た。彼は俊助に聲をかけられて、やつと相手の居場所に氣がつくと、之は隣席の夫婦づれにも頓着なく、無造作に椅子をひき寄せて、

「今、切符を買つてゐたら、大井君によく似た人を見かけたが、まさか先生ぢやあるまいな。」

「大井だつて、停車場へ來ないとは限らないさ。」

「いや、何でも女づれらしかつたから。」

其處へスウプが來た。二人はそれぎり大井を閑却して、嵐山の櫻はまだ早からうの、瀬戸内の汽船は面白からうのと、春めいた旅の話へ乘り換へてしまつた。するとその内に、野村が皿の變るのを待ちながら、急に思ひ出したと云ふ調子で、

「今初子さんの所へ例の件を電話でさう云つて置いた。」

「ぢや今日は誰も送りに來ないか。」

「來るものか。何故？」

何故と尋かれると、俊助も返事に窮するより外はなかつた。

「栗原へは今朝手紙を出すまで、國へ歸るとも何とも云つちやなかつたんだから――その手紙も電話で聞くと、もう少しさつき屆いたばかりださうだ。」

野村はまるで送りに來ない初子の爲に、辯解の勞を執るやうな口調だつた。

「さうか。道理で今日辰子さんに遇つたが何ともさう云ふ話は聞かなかつた。」

「辰子さんに遇つた？　何時？」

「午すぎに電車の中で。」

俊助はかう答へながら、さつき下宿で辰子の話が出たにも關らず、何故今までこんな事を默つてゐたのだらうと考へた。が、それは彼自身にも偶然か故意か、判斷がつけられなかつた。

二十

プラツトフオオムの上には例の如く、見送りの人影が群つてゐた。さうしてそれが絶えず蠢いてゐる上に、電燈のともつた列車の窓が、一つづつ明く切り拔かれてゐた。野村もその窓から首

を出して、外に立つてゐる俊助と、二言三言落着かない言葉を交換した。彼等は二人とも、周圍の群衆の氣もちに影響されて、發車が待遠いやうな、待遠くないやうな、一種の慌しさを感じずにゐられなかつた。殊に俊助は話が途切れると、殆ど敵意があるやうな眼で、左右の人影を眺めながら、もどかしさうに下駄の底を鳴らしてゐた。

その内にやつと發車の電鈴が響いた。

「ぢや行つて來給へ。」

俊助は鳥打帽の庇へ手をかけた。

「失敬、例の一件は何分よろしく願ひます。」と、野村は何時になく、改まつた口調で挨拶した。

汽車はすぐに動き出した。俊助は何時までもプラットフオオムに立つて、次第に遠ざかつて行く野村を見送る程、感傷癖に囚はれてはゐなかつた。だから彼はもう一度鳥打帽の庇へ手をかけると、未練なくあたりの人影に交つて、入口の石段の方へ歩き出した。

が、その時、ふと彼の前を通りすぎる汽車の窓が眼にはいると、思ひがけず其處には大井篤夫が、マントの肘を窓枠に靠せながら、手巾を振つてゐるのが見えた。俊助は思はず足を止めた。

と同時にさつき大井を見かけたと云ふ野村の言葉を思ひ出した。けれども大井は俊助の姿に氣がつかなかつたものと見えて、見る見る汽車の窓と共に遠くなりながらも、頻に手巾を振り續けてゐた。俊助は狐につままれたやうな氣がして、茫然とその後を見送るより外はなかつた。

が、この衝動から恢復した時、俊助の心は何よりも、その手巾の閃きに應ずべき相手を物色するのに忙しかつた。彼はインバネスの肩を聳かせて、前後左右に雪崩れ出した見送り人の中へ視線を飛ばせた。勿論彼の頭の中には、女づれのやうだつたと云ふ野村の言葉が殘つてゐた。しかしそれらしい女の姿を、いくら探しても見當らなかつた。と云ふよりもそれらしい女が、何時も人影の間にうろうろしてゐた。さうしてその代りどれが本當の相手だか、更に判別がつかなかつた。彼はとうとう物色を斷念しなければならなかつた。

中央停車場の外へ出て、丸の内の大きな星月夜を仰いだ時も、俊助はまださつきの不思議な心もちから、全く自由にはなつてゐなかつた。彼には大井がその汽車へ乘り合せてゐたと云ふ事より、汽車の窓で手巾を振つてゐたと云ふ事が、滑稽な位矛盾な感を與へるものだつた。あの無頼な人間を以て自他共に許してゐる大井篤夫が、どうしてあんな芝居じみた眞似をしてゐたのだら

う。或は人が惡いのは附燒刃で、實は存外正直な感傷主義者が正體かも知れない。――俊助はいろいろな臆測の間に迷ひながら、新開地のやうな廣い道路を、濠側まで行つて電車に乘つた。

所が翌日大學へ行くと、彼は純文科に共通な哲學概論の教室で、昨夜七時の急行へ乘つた筈の大井と、又思ひがけなく顏を合せた。

二十一

その日俊助は、何時よりも稍出席が遲れたので、講壇をめぐつた聽講席の中でも、一番後の机に坐らなければならなかつた。所が其處へ坐つて見ると、なぞへに向うへ低くなつた二三列前の机に、見慣れた黑木綿の紋附が、澄まして頰杖をついてゐた。俊助はおやと思つた。それから昨夜中央停車場で見かけたのは、大井篤夫ぢやなかつたのかしらと思つた。が、すぐに又、いや、やはり大井に違ひなかつたと思ひ返した。さうしたら、彼が手巾を振つてゐるのを見た時よりも、一層狐につままれたやうな心もちになつた。

その内に大井は何かの拍子に、ぐるりとこちらへ振返つた。顏を見ると、例の如く傲岸不遜な

表情があつた。俊助は當然なるべきこの表情を妙にもの珍しく感じながら、「やあ」と云ふ挨拶を眼で送つた。と、大井も黑木綿の紋附の肩越に、顎でちよいと會釋をしたが、それなり又向うを向いて、隣にゐた制服の學生と、何か話をし始めたらしかつた。俊助は急に昨夜の一件を確めたい氣が強くなつて來た。が、その爲にわざわざ席を離れるのは、面倒でもあるし、莫迦々々しくもあつた。そこで萬年筆へインクを吸はせながら、聊か腰を擡げ兼ねてゐると、哲學概論を擔當してゐる、有名なL教授が、黑い鞄を小脇に抱へて、のそのそ外からはいつて來てしまつた。

L教授は哲學者と云ふよりも、寧ろ實業家らしい風采を備へてゐた。それがその日のやうに、流行の茶の背廣を一着して、金の指環をはめた手を動かしながら、鞄の中の草稿を取り出したりなどしてゐると、殊に講壇よりは事務机の後に立たせて見たいやうな心もちがした。が、講義は教授の風采とは沒交渉に、其面倒なカント哲學の範疇の議論から始められた。俊助は專門の英文學の講義よりも、反つて哲學や美學の講義に忠實な學生だつたから、ざつと二時間ばかりの間、熱心に萬年筆を動かして、手際よくノオトを取つて行つた。それでも合ひ間毎に顏を擧げて、これは頰杖をついた儘、滅多にペンを使はないらしい大井の後姿を眺めると、時々昨夜以來の不思

議な氣分が、カントと彼との間へ靄のやうに流れこんで來るのを感ぜずにはゐられなかつた。

だからやがて講義がすんで、机を埋めてゐた學生たちがぞろぞろ講堂の外へ流れ出すと、彼は入口の石段の上に足を止めて、後から來る大井と一しよになつた。大井は相不變ノオト・ブックのはみ出した懷へ、無精らしく兩手を突込んでゐたが、俊助の顏を見るなりにやにや笑ひ出して、

「どうした。この間の晩の美人たちは健在か。」と、逆に冷評を浴びせかけた。

二人のまはりには大勢の學生たちが、狹い入口から兩側の石段へ、しつきりなく溢れ出してゐた。俊助は苦笑を漏した儘、大井の言葉には答へないで、ずんずんその石段の一つを下りて行つた。そうして其處に芽を吹いてゐる欅の並木の下へ出ると、始めて大井の方を振り返つて、

「君は氣がつかなかつたか、昨夜東京驛で遇つたのを。」と、探りの一句を投げこんで見た。

二十二

「へえゝ、東京驛で？」

大井は狼狽したと云ふよりも、寧ろ決斷に迷つたやうな眼つきをして、狡猾さうにちらりと俊

助の顏を窺つた。が、その眼が俊助の冷やかな視線に刎返されると、彼は急に惡びれない態度で、
「さうか。僕はちつとも氣がつかなかつた。」と白狀した。
「しかも美人が見送りに來てゐたぢやないか。」
勢に乘つた俊助は、もう一度際どい鎌をかけた。けれども大井は存外平然と、薄笑を脣に浮べながら、
「美人か――ありや僕の――まあ好いや。」と、思はせぶりな返事に韜晦してしまつた。
「一體どこへ行つたんだ？」
「ありや僕の――」に辟易した俊助は、今度は全く技巧を捨てて、正面から大井を追窮した。
「國府津まで。」
「それから？」
「それからすぐに引返した。」
「どうして？」
「どうしてつたつて、――いづれ然るべき事情があつてさ。」

この時丁子の花の匂が、甘たるく二人の鼻を打つた。二人とも殆ど同時に顏を擧げて見ると、何時かもうディッキンソンの銅像の前にさしかかる所だつた。丁子は銅像をめぐつた芝生の上に、麗らかな日の光を浴びて、簇々とうす紫の花を綴つてゐた。

「だからさ、その然るべき事情とは抑も何だと尋いてゐるんだ。」

と、大井は愉快さうに、大きな聲で笑ひ出した。

「つまらん事を心配する男だな。然るべき事情と云つたら、要するに然るべき事情ぢやないか。」

が、俊助も二度目には、容易に目つぶしを食はされなかつた。

「いくら然るべき事情があつたつて、ちよいと國府津まで行くだけたら、何も手巾まで振らなくつたつて好ささうなもんぢやないか。」

するとさすがに大井の顏にも、瞬く間周章したらしい氣色が漲つた。けれども口調だけは相不變傲然と、

「これ又別に然るべき事情があつて振つたのさ。」

俊助は相手のたじろいだ虛につけ入つて、更に調戲ふやうな惡問ひの歩を進めようとした。が、

大井は早くも形勢の非になつたのを覺つたと見えて、正門の前から續いてゐる銀杏の並木の下へ出ると、

「君はどこへ行く？　歸るか。ぢや失敬。僕は圖書館へ寄つて行くから。」と、巧に俊助を抛り出して、さつさと向うへ行つてしまつた。

俊助はその後を見送りながら、思はず苦笑を洩したが、この上追つかけて行つてまでも、泥を吐かせようと云ふ興味もないので、正門を出るとまつすぐに電車通りを隔ててゐる郁文堂の店へ行つた。所が其處へ足を入れると、うす暗い店の奥に立つて、古本を探してゐた男が一人、靜に彼の方へ向き直つて、

「安田さん。暫く。」と、優しい聲をかけた。

二十三

殆ど常に夕暮の樣な店の奥の乏しい光も、まつ赤な土耳其帽を頂いた藤澤を見分けるには十分だつた。俊助は答禮の帽を脱ぎながら、埃臭い周圍の古本と相手のけばけばしい服裝との間に、

不思議な對照を感ぜずにはゐられなかつた。

藤澤は大英百科全書の棚に華奢な片手をかけながら、艶かしいとも形容すべき微笑を顏中に漂はせて、

「大井さんには毎日御會ひですか。」

「えゝ、今も一しよに講義を聽いて來た處です。」

「僕はあの晩以來、一度も御眼にかゝらないんですが――」

俊助は近藤と大井との間の確執が、同じく『城』同人と云ふ關係上、藤澤もその渦中へ捲きこんだのだらうと想像した。が、藤澤はさう思はれる事を避けたいのか、愈優しい聲を出して、

「僕の方からは二三度下宿へ行つたんですけれど、生憎何時も留守ばかりで――何しろ大井さんはあの通り、評判のドン・ジュアンですから、その方で暇がないのかも知れませんがね。」

大學へはいつて以來、初めて大井を知つた俊助は、今日まであの黑木綿の紋附にそんな脂粉の氣が纏綿してゐようとは、夢にも思ひがけなかつた。そこで思はず驚いた聲を出しながら、

「へええ、あれで道樂者ですか。」

「さあ、道樂者かどうですか――兎に角女はよく征服する人ですよ。さう云ふ點にかけちや高等學校時代から、ずつと我々の先輩でした。」

その瞬間俊助の頭の中には、昨夜汽車の窓で手巾を振つて居た大井の姿が、ありありと浮び上つて來た。と同時にやはり藤澤が、何か大井に含む所があつて、好い加減に中傷の毒舌を弄してゐるのではないかとも思つた。が、次の瞬間に藤澤はちよいと首を曲げて、媚びるやうな微笑を送りながら、

「何でも最近はどこかのレストランの給仕と大へん仲が好くなつてゐるさうです。御同樣羨望に堪へない次第ですがね。」

俊助は藤澤がかう云ふ話を、寧ろ大井の名譽の爲に辯じてゐるのだと云ふ事に氣がついた。それと共に、頭の中の大井の姿は、愈その振つてゐる手巾から、濃厚に若い女性の匂を放散せずにはすまさなかつた。

「そりや盛ですね。」

「盛ですとも。ですから僕になんぞ會つてゐる暇がないのも、重々無理はないんです。おまけに

僕の行く用向きと云ふのが、あの精養軒の音樂會の切符の御金を貰ひに行くんですからね。」

藤澤はかう云ひながら、手近の帳場机にある紙表紙の古本をとり上げたが、所々好い加減に頁を繰ると、すぐに俊助の方へ表紙を見せて、

「これも花房さんが賣つたんですね。」

俊助は自然微笑が脣に上つて來るのを意識した。

「梵字の本ですね。」

「ええ、マハアバラタか何からしいですよ。」

二十四

「安田さん、御客樣でございますよ。」

かう云ふ女中の聲が聞えた時、もう制服に着換へてゐた俊助は、よしとか何とか曖昧な返事をして置いて、それからわざと元氣よく、梯子段を踏み鳴しながら、階下へ行つた。行つて見ると、玄關の格子の中には、眞中から髮を割つて、柄の長い紫のパラソルを持つた初子が、何時もより

は一層潑剌と外光に背いて佇んでゐた。俊助は閾の上に立つた儘、眩しいやうな感じに脅かされて、

「あなた御一人？」と尋ねて見た。

「いいえ、辰子さんも。」

初子は身を斜にして、透すやうに格子の外を見た。格子の外には、一間に足らない御影の敷石があつて、その又敷石のすぐ外には、好い加減古びたくぐり門があつた。初子の視線を追つた俊助は、そのくぐり門の戸を開け放した向うに、見覚えのある紺と藍との竪縞の着物が、日の光を袂に揺りながら、立つてゐるのを發見した。

「ちよいと上つて、御茶でも飲んで行きませんか。」

「難有うございますけれど——」

初子は嫣然と笑ひながら、もう一度眼を格子の外へやつた。

「さうですか。ぢやすぐに御伴しませう。」

「始終御迷惑ばかりかけますのね。」

「何、どうせ今日は遊んでゐる體なんです。」

俊助は手ばしこく編上の紐をからげると外套を腕にかけた儘、無造作に角帽を片手に摑んで、初子の後からくぐり門の戸をくぐつた。

初子のと同じ紫のパラソルを持つて、外に待つてゐた辰子は、俊助の姿を見ると、しなやかな手を膝に揃へて、叮嚀に默禮の頭を下げた。俊助は殆ど冷淡に會釋を返した。返しながら、その冷淡なのが或は辰子に不快な印象を與へはしないだらうかと氣づかつた。と同時に又初子の眼には、それでもまだ彼の心中を裏切るべき優しさがありはしまいかとも思つた。が、初子は二人の應對には頓着なく、斜に紫のパラソルを開きながら、

「電車は？　正門前から御乘りになつて。」

「えゝ、あちらの方が近いでせう。」

三人は狹い往來を歩き出した。

「辰子さんはね、どうしても今日はいらつしやらないつて仰有つたのよ。」

俊助は「さうですか？」と云ふ眼をして、隣に歩いてゐる辰子を見た。辰子の顏には、薄く白粉

を刷いた上に、紫のパラソルの反映がほんのりと影を落してゐた。
「だつて、私、氣の違つてゐる人なんぞの所へ行くのは、氣味が悪いんですもの。」
「私は平氣。」
初子はくるりとパラソルを廻しながら、
「時々氣違ひになつて見たいと思ふ事もあるわ。」
「まあ、いやな方ね。どうして？」
「さうしたら、かうやつて生きてゐるより、もつといろいろ變つた事がありさうな氣がするの。
あなたさう思はなくつて？」
「私？　私は變つた事なんぞなくつたつて好いわ。もうこれで澤山。」

二十五

新田はまづ三人の客を病院の應接室へ案内した。其處はこの種の建物には珍しく、窓掛、絨氈、ピアノ、油繪などで、甚しい不調和もなく裝飾されてゐた。しかもそのピアノの上には、季節に

はまだ早すぎる薔薇の花が、無造作に手頃な青銅の壺へ插してあつた。新田は三人に椅子を薦めると、俊助の問に應じて、これは病院の溫室で咲かせた薔薇だと返答した。

それから新田は、初子と辰子との方へ向いて、豫め俊助が依賴して置いた通り、精神病學に關する一般的智識とでも云ふべきものを、齒切れの好い口調で說明した。彼は俊助の先輩として、同じ高等學校にゐた時分から、畠違ひの文學に興味を持つてゐる男だつた。だからその說明の中にも、種々の精神病者の實例として、ニイチエ、モオパツサン、ボオドレエルなどと云ふ名前が、一再ならず引き出されて來た。

初子は熱心にその說明を聞いてゐた。辰子も――これは始終伏眼がちだつたが、やはり相當な興味だけは感じてゐるらしく思はれた。俊助は心の底の方で、二人の注意を惹きつけてゐる說明者の新田が羨しかつた。が、二人に對する新田の態度は殆ど事務的とも形容すべき、甚だ冷靜なものだつた。同時に又縞の背廣に地味な襟飾をした彼の服裝も、世紀末の藝術家の名前を列擧するのが、不思議な程、素朴に出來上つてゐた。

「何だか私、御話を伺つてゐる内に、自分も氣が違つてゐるやうな氣がして參りました。」

說明が一段落ついた所で、初子はことさらに眞面目な顏をしながら、ため息をつくやうにかう云つた。

「いや、實際嚴密な意味では、普通正氣で通つてゐる人間と精神病患者との境界線が、存外はつきりしてゐないのです。況んやかの天才と稱する連中になると、まづ精神病者との間に、全然差別がないと云つても差支へありません。その差別のない點を指摘したのが、御承知の通りロムブロゾオの功績です。」

「僕は差別のある點も指摘して貰ひたかつた。」

から俊助が横合から、冗談のやうに異議を申し立てると、新田は冷かな眼をこちらへ向けて、

「あれば勿論指摘したらう。が、なかつたのだから、やむを得ない。」

「しかし天才は天才だが、氣違ひはやはり氣違ひだらう。」

「さう云ふ差別なら、誇大妄想狂と被害妄想狂との間にもある。」

「それとこれと一しよにするのは亂暴だよ。」

「いや、一しよにすべきものだ。成程天才は有爲だらう。狂人は有爲ぢやないに違ひない。

が、その差別は人間が彼等の所行に與へた價値の差別だ。自然に存してゐる差別ぢやない。」

新田の持論を知つてゐる俊助は、二人の女と微笑を交換して、それぎり口を噤んでしまつた。

と、新田もさすがに本氣すぎた彼自身を嘲る如く、薄笑の脣を歪めて見せたが、すぐに眞面目な表情に返ると、三人の顔を見渡して、

「ぢや一通り、御案内しませう。」と、氣輕く椅子から立ち上つた。

二十六

三人が初めて案内された病室には、束髮に結つた令孃が、熱心にオルガンを彈いてゐた。オルガンの前には鐵格子の窓があつて、その窓から洩れて來る光が、冷やかに令孃の細面を照らしてゐた。俊助はこの病室の戸口に立つて、窓の外を塞いでゐる白椿の花を眺めた時、何となく西洋の尼寺へでも行つたやうな心もちがした。

「これは長野の或資產家の御孃さんですが、何でも緣談が調はなかつたので、發狂したのだとか云ふ事です。」

「御可哀さうね。」

辰子は細い聲で、囁くやうにかう云つた。が、初子は同情と云ふよりも、寧ろ好奇心に滿ちた眼を輝かせて、ぢつと令孃の横顏を見つめてゐた。

「オルガンだけを忘れないと見えるね。」

「オルガンばかりぢやない。この患者は畫も描く。裁縫もする。字なんぞは殊に巧だ。」

新田は俊助にかう云つてから、三人を戸口に殘して置いて、靜にオルガンの側へ歩み寄つた。が、令孃はまるでそれに氣がつかないかの如く、依然として鍵盤に指を走らせ續けてゐた。

「今日は。御氣分は如何です?」

新田は二三度繰返して問ひかけたが、令孃はやはり窓の外の白椿と向ひ合つた儘、振返る氣色さへ見せなかつた。のみならず、新田が輕く肩へ手をかけると、恐ろしい勢ひでふり拂ひながら、それでも指だけは間違ひなく、この病室の空氣にふさはしい、陰鬱な曲を彈きやめなかつた。三人は一種の無氣味さを感じて無言の儘、部屋を外へ退いた。

「今日は御機嫌が惡いやうです。あれでも氣が向くと、思ひの外愛嬌のある女なんですが。」

新田は令嬢の病室の戸をしめると、多少失望したらしい聲を出したが、今度はそのすぐ前の部屋の戸を開けて、

「御覽なさい。」と、三人の客を麾いた。

はいつて見ると、其處は湯殿のやうに床を叩きにした部屋だつた。その部屋のまん中には、壺を埋けたやうな穴が三つあつて、その又穴の上には、水道栓が蛇口を三つ揃へてゐた。しかもその穴の一つには、坊主頭の若い男が、カアキイ色の袋から首だけ出して、棒を立てたやうに入れてあつた。

「これは患者の頭を冷す所ですがね、唯ぢやあばれる惧があるので、ああ云ふ風に袋へ入れて置くんです。」

成程その男のはいつてゐる穴では蛇口の水が細い瀧になつて、絶えず坊主頭の上へ流れ落ちてゐた。が、その男の青ざめた顏には、唯空間を見つめてゐる、どんよりした眼があるだけで、何の表情も浮んではゐなかつた。俊助は無氣味を通り越して、不快な心もちに脅かされ出した。

「これは殘酷だ。監獄の役人と癲狂院の醫者とにや、なるもんぢやない。」

「君のやうな理想家が、昔は人體解剖を人道に悖ると云つて攻撃したんだ。」
「あれで苦しくは無いんでせうか。」
「無論、苦しいも苦しくないもないんです。」
初子は眉一つ動かさずに、冷然と穴の中の男を見下してゐた。辰子は――ふと氣がついた俊助が初子から眼を轉じた時、もうその部屋の中には何時の間にか、辰子の姿が見えなくなつてゐた。

二十七

俊助は不快になつてゐた矢先だから、初子と新田とを後に殘して、うす暗い廊下へ退却した。と、其處には辰子が、途方に暮れたやうに、白い壁を背負つて佇んでゐた。
「どうしたのです。氣味が悪いんですか。」
辰子は水々しい眼を擧げて、訴へるやうに俊助の顏を見た。
「いゝえ、可哀さうなの。」
俊助は思はず微笑した。

「僕は不愉快です。」

「可哀さうだとは御思ひにならなくつて？」

「可哀さうかどうかわからないが――兎に角あゝ云ふ人間が、あゝしてゐるのを見たくないんです。」

「あの人の事は御考へにならないの。」

「それよりも先に、自分の事を考へるんです。」

辰子の青白い頬には、あるかない微笑の影がさした。

「薄情な方ね。」

「薄情かも知れません。その代りに自分に關係してゐる事なら――」

「御親切？」

其處へ新田と初子とが出て來た。

「今度は――と、あちらの病室へ行つて見ますか。」

新田は辰子や俊助の存在を全く忘れてしまつたやうに、さつさと二人の前を通り越して、遠い

廊下のつき當りにある戸口の方へ歩き出した。が、初子は辰子の顏を見ると、心もち濃い眉をひそめて、

「どうしたの。顏の色が好くなくつてよ。」

「さう。少し頭痛がするの。」

辰子は低い聲でかう答へながら、ちよいと掌を額に當てたが、すぐに何時ものはつきりした聲で、

「行きませう。何でもないわ。」

三人は皆別々の事を考へながら、前後してうす暗い廊下を歩き出した。

やがて廊下のつき當りまで來ると、新田はその部屋の戸を開けて、後の三人を振返りながら、「御覽なさい」と云ふ手眞似をした。此處は柔道の道場を思はせる、廣い疊敷の病室だつた。さうしてその疊の上には、ざつと二十人近い女の患者が、一樣に鼠の棒縞の着物を着て雜然と群羊の如く動いてゐた。俊助は高い天窓の光の下に、これらの狂人の一團を見渡した時、又さつきの不快な感じが、力強く蘇生つて來るのを意識した。

「皆仲好くしてゐるわね。」

初子は家畜を見るやうな眼つきをしながら、隣に立つてゐる辰子に囁いた。が、辰子は靜に頷いただけで、口へ出しては、何とも答へなかつた。

「どうです。中へはいつて見ますか。」

新田は嘲るやうな微笑を浮べて、三人の顏を見廻した。

「僕は眞つ平だ。」

「私も、もう澤山。」

辰子はかう云つて、今更のやうにかすかな吐息を洩らした。

「あなたは？」

初子は生々した血の氣を頰に漲らせて、媚びるやうにぢつと新田の顏を見た。

「私は見せて頂きますわ。」

二十八

俊助と辰子とは、さつきの應接室へ引き返した。引き返して見ると、以前はささなかつた日の

光が、斜に窓硝子を射透して、ピアノの脚に落ちてゐた。それからその日の光に蒸されたせゐか、壺にさした薔薇の花も、前よりは一層重苦しく、甘い匂ひを放つてゐた。最後にあの令嬢の彈くオルガンが、まるでこの癲狂院の建物のつく吐息のやうに、時々廊下の向うから聞えて來た。

「あの御孃さんは、まだ彈いていらつしやるのね。」

辰子はピアノの前に立つた儘、うつとりと眼を遠い所へ漂はせた。俊助は煙草へ火をつけながら、ピアノと向ひ合つた長椅子へ、ぐつたりと疲れた腰を下して、

「失戀した位で、氣が違ふものかな。」と、獨り語のやうに呟いた。と、辰子は靜に眼を俊助の顏へ移して、

「違はないと御思ひになつて？」

「さあ――僕は違ひさうもありませんね。それよりあなたはどうです。」

「私？　私はどうするでせう。」

辰子は誰に尋ねるともなくかう云つたが、急に蒼白い頰に血の色がさすと、眼を白足袋の上に落して、

「わからないわ。」と小さな聲を出した。

俊助は金口を啣へた儘、暫くは唯默然と辰子の姿を眺めてゐたが、やがてわざと輕い調子で、

「御安心なさい。あんたなんぞは失戀するやうな事はないから。その代り――」

辰子は又靜に眼を擧げて俊助の眉の間を見た。

「その代り？」

「失戀させるかも知れません。」

俊助は冗談のやうに云つた言葉が、案外眞面目な調子を帶びてゐたのに氣がついた。と同時に眞面目なだけ、それだけ厭味なのを恥しく思つた。

「そんな事を。」

辰子はすぐに眼を伏せたが、やがて俊助の方へ後を向けると、そつとピアノの蓋を開けて、まるで二人をとりまいた、薔薇の匂ひのする沈默を追ひ拂はうとするやうに、二つ三つ鍵盤を打つた。それは打つ指に力がないのか、いづれも音とは思はれない程、かすかな音を響かせたのに過ぎなかつた。が、俊助はその音を聞くと共に、日頃彼の輕蔑する感傷主義が、彼自身をもすん

での事に捕へやうとしてゐたのを意識した。この意識は勿論彼にとつて、危險の意識には相違なかつた。けれども彼の心には、その危險を免れたと云ふ、滿足らしいものは更になかつた。

暫くして、初子が新田と一しよに、應接室へ姿を現した時、俊助は何時もより快活に、

「どうでした。初子さん。モデルになるやうな患者が見つかりましたか。」と聲をかけた。

「えゝ、御蔭樣で。」

初子は新田と俊助とに、等分の愛嬌をふり撒きながら、

「ほんたうに私爲になりましたわ。辰子さんもいらつしやれば好いのに。そりや可哀さうな人がゐてよ。何時でも御腹に子供がゐると思つてゐるんですつて。たつた一人、隅の方へ坐つて、子守唄ばかり歌つてゐるの。」

二十九

初子が辰子と話してゐる間に、新田はちよいと俊助の肩を叩くと、

「おい、君に一つ見せてやる物がある。」と云つて、それから女たちの方へ向きながら、

「あなた方は此處で、暫く御休みになつて下さい。今、御茶でも差上げますから。」

俊助は新田の云ふ通り、おとなしくその後について、明るい應接室からうす暗い廊下へ出ると、今度はさつきと反對の方向にある、廣い疊敷の病室へつれて行かれた。すると此處にも向うと同じやうに、鼠の棒縞を着た男の患者が、二十人近くもごろごろしてゐた。しかもそのまん中には、髪をまん中から分けた若い男が、口を開いて、涎を垂らして、兩手を翼のやうに動かしながら、怪しげな踊を踊つてゐた。新田は俊助をひつぱつて、遠慮なくその連中の間へはいつて行つたが、やがて膝を抱いて坐つてゐた、一人の老人をつかまへると、

「どうだね。何か變つた事はないかい。」と、尤らしく問ひかけた。

「ございますよ。何でも今月の末までには、又磐梯山が破裂するさうで、――昨晩もその御相談に、神々が上野へ御集りになつたやうでございました。」

老人は目脂だらけの眼を見張つて、囁くやうにかう云つた。が、新田はその答には頓着する氣色もなく、俊助の方を振返つて、

「どうだ。」と、嘲るやうな聲を出した。

俊助は微笑を洩したばかりで、何ともその「どうだ」には答へなかつた。と、新田は又一人、これはニツケルの眼鏡をかけた、癇の强さうな男の前へ行つて、

「愈講和條約の調印もすんだやうだね。君もこれからは暇になるだらう。」

が、その男は陰鬱な眼を擧げて、ぢろりと新田の顏を見ながら、

「とても暇にはなりませんよ。クレマンソオはどうしても、僕の辭職を聽許してくれませんからね。」

新田は俊助と顏を見合せたが、其處に漂つてゐる微笑を認めると、又默然と病室の隅へ歩を移して、さつきからぢつと二人を見つめてゐた、品の好い半白の男に聲をかけた。

「どうした。まだ細君は歸つて來ないかね。」

「それがですよ。妻の方ぢや歸りたがつてゐるんですが、――」

その患者はかう云ひかけて、急に疑はしさうな眼を俊助へ向けると、氣味の惡い程眞劍な調子になつて、

「先生、あなたは大變な人を伴れて御出でなすつた。こりやあの評判の女たらしですぜ。私の妻

をひつかけた――」

「さうか。ぢや早速僕から、警察へ引き渡してやらう。」

新田は無造作に調子を合はすと、三度俊助の方へ振り返つて、

「君、この連中が死んだ後で、腦髓を出して見るとね、うす赤い皺の重なり合つた上に、まるで卵の白味のやうな物が、ほんの指先程、かかつてゐるんだよ。」

「さうかね。」

俊助は依然として微笑をやめなかつた。

「つまり磐梯山の爆發も、クレマンソオへ出した辭職屆も、女たらしの大學生も、皆その白味のやうな物から出て來るんだ、我々の思想や感情だつて――まあ、他は推して知るべしだね。」

新田は前後左右に蠢いてゐる鼠の棒縞を見廻しながら、誰にと云ふ事もなく、喧嘩を吹きかけるやうな手眞似をした。

三十

初子と辰子とを載せた上野行の電車は、半面に春の夕日を帶びて、靜に停留場から動き出した。俊助はちよいと角帽をとつて、窓の内の吊皮にすがつてゐる二人の女に會釋をした。女は二人とも微笑してゐた。が、殊に辰子の眼は、微笑の中にも憂鬱な光を湛へて、ぢつと彼の顏に注がれてゐるやうな心もちがした。彼の心には刹那の間、あの古ぼけた教室の玄關に、雨止みを待つてゐた彼女の姿が、稻妻のやうに閃いた。と思ふと、電車はもう速力を早めて、窓の内の二人の姿も、見る見る彼の眼界を離れてしまつた。

その後を見送つた俊助は、まだ一種の興奮が心に燃えてゐるのを意識してゐた。彼はこの儘、本郷行の電車へ乘つて、索漠たる下宿の二階へ歸つて行くのに忍びなかつた。そこで彼は夕日の中を、本郷とは全く反對な方向へ、好い加減にぶらぶら歩き出した。賑かな往來は日暮が近づくのに從つて、一層人通りが多かつた。のみならず、飾窓の中にも、アスファルトの上にも、或は又並木の梢にも、至る所に春めいた空氣が動いてゐた。それは現在の彼の氣もちを直下に放出したやうな外界だつた。だから町を歩いて行く彼の心には、夕日の光を受けながら、しかも夕日の色に染まつてゐない、頭の上の空のやうな、微妙な喜びが流れてゐた。……………

その空が全く暗くなつた頃、彼はその通りの或珈琲店で、食後の林檎を剝いてゐた。彼の前には硝子の一輪插しに、百合の造花が插してあつた。彼の後では自働ピアノが、しつきりなくカルメンを鳴らしてゐた。彼の左右には幾組もの客が、白い大理石の卓子を圍みながら、綺麗に化粧した給仕女と盛に饒舌つたり笑つたりしてゐた。彼はかう云ふ周圍に身を置きながら、癲狂院の應接室を領してゐた、懶い午後の沈默を思つた。室咲きの薔薇、窓からさす日の光、かすかなピアノの響、伏目になつた辰子の姿――ポオト・ワインに暖められた心には、さう云ふ快い所が、代る代る浮んだり消えたりした。が、やがて給仕女が一人、紅茶を持つて來たのに氣がついて、何氣なく眼を林檎から離すと、丁度入口の硝子戶が開いた所で、しかもその入口には、黑いマントを着た大井篤夫が、燈火の多い外の夜から、のつそりはいつて來る所だつた。

「おい。」

俊助は思はず聲をかけた。と、大井は驚いた視線を擧げて、煙草の煙の立ちこめてゐる珈琲店の中を見廻したが、すぐに俊助の顏を見つけると、

「やあ、妙な所へ來てゐるな。」と云ひながら、彼の卓子の向うへ步み寄つて、マントも脫がずに

腰を下した。

「君こそ妙な所が御馴染ぢやないか。」

俊助はかう冷評しながら、大井に愛想を賣つてゐる給仕女を一瞥した。

「僕はボヘミヤンだ。君のやうなエピキユリアンぢやない。到る處の珈琲店、酒場、乃至は下つて繩暖簾の類まで、悉く僕の御馴染なんだ。」

大井はもう何處かで一杯やつて來たと見えて、まつ赤に顏を火照らせながら、こんな下らない氣焰を擧げた。

三十一

「但し御馴染だつて、借のある所にや近づかないがね。」

大井は急に調子を下げて、嘲笑ふやうな表情をしたが、やがて帳場机の方へ半身を扭ぢ向けると、

「おい、ウイスキイを一杯。」と、横柄な聲で命令した。

「ぢや、至る所、近づけなかないか。」

「莫迦にするな。かう見えたつて——少くとも、この家へは來てゐるぢやないか。」

この時給仕女の中でも、一番背の低い、一番子供らしいのがウイスキイのコップを西洋盆へ載せて、大事さうに二人の所へ持つて來た。それは括り頤の、眼の大きい、白粉の下に琥珀色の皮膚が透いて見える、健康さうな娘だつた。俊助はその給仕女がそつと大井の顔へ親みのある眼なざしを送りながら、盛りこぼれさうなウイスキイのコップを卓子の上へ移した時、二三日前に郁文堂であの土耳其帽の藤澤が話して聞かせた、最近の大井の情事なるものを思ひ出さずにはゐられなかつた。と、果して大井も臆面なく、その給仕女の方へまつ赤になつた顔を向けると、

「そんなにすますなよ。僕が來て嬉しかつたら、遠慮なく嬉しさうな顔をするが好いぜ。こりや僕の親友でね、安田と云ふ貴族なんだ。尤も貴族と云つたつて、爵位なんぞがある譯ぢやない。唯僕よりや少し金があるだけの違ひなんだ。——僕の未來の細君、お藤さん。此處の家ぢや、まづ第一の美人だね。もし今度又君が來たら、この人にや特別に澤山ティップを置いて行つてくれ。」

俊助は煙草に火をつけながら、微笑するより外はなかつた。が、娘はこの種類の女には珍しい、

純粹な羞恥の血を頬に上らせながら、まるで弟にでも對するやうに、ちよいと大井を睨めると、その儘派手な銘仙の袂を飜して、匆々帳場机の方へ逃げて行つてしまつた。大井はその後姿を目送しながら、わざとらしく大きな聲で笑ひ出したが、すぐに卓子の上のウイスキイをぐいとやつて、

「どうだ。美人だらう。」と、冗談のやうに俊助の賛同を求めた。

「うん、素直さうな好い女だ。」

「いかん、いかん。僕の云つてゐるのは、お藤の――お藤さんの肉體的の美しさの事だ。素直さうななんぞと云ふ、精神的の美しさぢやない。そんな物は大井篤夫にとつて、あつてもなくつても同じ事だ。」

俊助は相手にならないで、埃及の煙ばかり鼻から出してゐた。すると大井は卓子越しに手をのばして、俊助の鼈甲の卷煙草入から金口を一本拔きとりながら、

「君のやうな都會人は、あゝ云ふ種類の美に盲目だからいかん。」と、妙な所へ攻撃の火の手を上げ始めた。

「そりや君程烱眼ぢやないが。」

「冗談ぢやないぜ。君程烱眼ぢやないなんぞとは、僕の方で云ひたい位だ。藤澤のやつは、僕の事を、何ぞと云ふとドン・ジユアン呼ばはりをするが、近來は君の方へすつかり御株を取られた形があらあね。どうした。何時かの兩美人は?」

俊助は何を措いても、この場合この話題が避けたかつた。そこで彼は大井の言葉がまるで耳へはいらないやうに、又談柄をお藤さんなる給仕女の方へ持つて行つた。

三十二

「幾つだ、あのお藤さんと云ふのは?」

「行年十八、寅の八白だ。」

大井は又新に註文したウイスキイをひつかけながら、高々と椅子の上へあぐらをかいて、

「年まはりから云や、あんまり素直でもなささうだが、――まあ、そんな事はどうでも好い。素直だらうが、素直でなからうが、どうせ女の事だから、退屈な人間にや相違なからう。」

「ひどく女を輕蔑するな。」
「ぢや君は尊敬してゐるか。」
俊助は今度も微笑の中に、韜晦するより外はなかつた。と、大井は三杯目のウイスキイを前に置いて、金口の煙を相手へ吹きかけながら、
「女なんてものは退屈だぜ。上は自動車へ乘つてゐるのから下は十二階下に巣を食つてゐるのまで、突つくるめて見た所が、まあ精々十種類位しかないんだからな。嘘だと思つたら、二年でも三年でも、滅茶々々に道樂をして見るが好い。すぐに女の種類が盡きて、面白くも何ともなくなつちまふから。」
「ぢや君も面白くない方か。」
「面白くない方か？　冗談だらう。――いや、皮肉なら皮肉でも好い。面白くないと云つてゐる僕が、やつぱりかうやつて女ばかり追つかけてゐる。それが君にや莫迦げて見えるんだらう。だがね、面白くないと云ふのも本當なんだ。同時に又面白いと云ふのも本當なんだ。」
大井は四杯目のウイスキイを命じた頃から、次第に平常の傲岸な態度がなくなつて、醉を帶び

た眼の中にも、涙ぐんでゐるやうな光が加はつて來た。勿論俊助はかう云ふ相手の變化を、好奇心に富んだ眼で眺めてゐた。が、大井は俊助の思はくなぞには更に頓着しない容子で、五杯六杯と續けさまにウイスキイを煽りながら、益熱心な調子になつて、

「面白いと云ふのはね、女でも追つかけてゐなけりや、それこそつまらなくつてたまらないからなんだ。が、追つかけて見た所で、これ又面白くも何ともありやしない。ぢやどうすれば好いんだと君は云ふだらう。ぢやどうすれば好いんだと――それがわかつてゐる位なら、僕もこんなに寂しい思ひなんぞしなくつてもすむ。僕は始終僕自身にさう云つてゐるんだ。ぢやどうすれば好いんだと。」

俊助は少し持て餘しながら、冗談のやうに相手を和げにかゝつた。

「惚れられるさ。さうすりや、少しは面白いだらう。」

が、大井は反つて眞面目な表情を眼にも眉にも動かしながら、大理石の卓子を拳骨で一つどんと叩くと、

「所がだ。惚れられるまでは、まだ退屈でも我慢がなるが、惚れられたとなつたら、もう萬事休

すだ。征服の興味はなくなつてしまふ。好奇心もそれ以上は働きやうがない。後に殘るのは唯、恐るべき退屈中の退屈だけだ。しかも女と云ふやつは、或程度まで關係が進歩すると、必ず男に惚れてしまふんだから始末が惡い。」

　俊助は思はず大井の熱心さに釣りこまれた。

「ぢやどうすれば好いんだ？」

「だからさ。だからどうすれば好いんだと僕も云つてゐたんだ。」

　大井はかう云ひながら、殺氣立つた眉をひそめて、七八杯目のウイスキイをまづさうにぐいと飲み干した。

三十三

　俊助は暫く口を噤んで、大井の指にある金口がぶるぶる震へるのを眺めてゐた。と、大井はその金口を灰皿の中へ抛りこんで、いきなり卓子越しに俊助の手をつかまへると、

「おい。」と、切迫した聲を出した。

俊助は返事をする代りに、驚いた眼を擧げて、ちよいと大井の顏を見た。

「おい、君はまだ覺えてゐるだらう、僕があの七時の急行の窓で、女の見送り人に手巾を振つてゐた事があるのを。」

「勿論覺えてゐる。」

「ぢや聞いてくれ。僕はあの女とこの間まで同棲してゐたんだ。」

俊助は好奇心が動くと共に、もう好い加減にアルコオル性の感傷主義は御免を蒙りたいと云ふ氣にもなつた。のみならず、周圍の卓子を圍んでゐる連中が、さつきからこちらへ注散らしい視線を送つてゐるのも不快だつた。そこで彼は大井の言葉には曖昧な返事を與へながら、帳場の側に立つてゐるお藤に、「來い」と云ふ相圖をして見せた。が、お藤が其處を離れない内に、最初彼の食事の給仕をした女が、急いで卓子の前へやつて來た。

「勘定をしてくれ。この方の分も一しよだ。」

すると大井は俊助の手を離して、やはり眼に涙を湛へた儘、しげしげと彼の顏を眺めたが、

「おい、おい、勘定を拂つてくれなんて何時云つた？　僕は唯、聞いてくれと云つたんだぜ。聞

いてくれりや好し、聞いてくれなけりや――さうだ。聞いてくれなけりや、さつさと歸つたら好いぢやないか。」

俊助は勘定をすませると、新に火をつけた煙草を啣へながら、劬るやうな微笑を大井に見せて、

「聞くよ。聞くが、ね、我々のやうに長く坐りこんぢや、此處の家も迷惑だらう。だから一まづ外へ出た上で、聞く事にしようぢやないか。」

大井はやつと納得した。が、卓子を離れるとなると、彼は口が達者なのとは反對に、頗る足元が蹣跚としてゐた。

「好いか。おい。危いぜ。」

「冗談云つちやいけない。高がウイスキイの十杯や十五杯――」

俊助は大井の手をとらないばかりにして、入口の硝子戸の方へ歩き出した。と、其處にはもうお藤が、大きく硝子戸を開けながら、心配さうな眼を見張つて、二人の出て來るのを待ち受けてゐた。彼女は其處の天井から下つてゐる支那燈籠の光を浴びて、最前よりは更に子供らしく、それだけ俊助には更に美しく見えた。が、大井はまるでお藤の存在には氣がつかなかつたものと見

えて、逞い俊助の手に背中を抱へられながら、口一つ利かずにその前を通りすぎた。

「難有うございます。」

大井の後から外へ出た俊助には、かう云ふお藤の言葉の中に、彼の大井に對する厚情を感謝してゐるやうな響が感じられた。彼はお藤の方を振り返つて、その感謝に答ふべき微笑を送る事を吝まなかつた。お藤は彼等が往來へ出てしまつてからも、暫くは明い硝子戸の前に佇みながら、白い前掛の胸へ兩手を合せて、次第に遠くなつて行く二人の後姿を、懷しさうにぢつと見守つてゐた。

三十四

大井は角帽の庇の下に、鈴懸の並木を照らしてゐる街燈の光を受けるが早いか、俊助の腕へすがるやうにして、

「ぢや聞いてくれ。迷惑だらうが、聞いてくれ。」と、執念くさつきの話を續け出した。

俊助も今度は約束した手前、一時を糊塗する譯にも行かなかつた。

「あの女は看護婦でね、僕が去年の春扁桃腺を煩つた時に――まあ、そんな事はどうでも好い、兎に角僕とあの女とは、去年の春以來の關係なんだ。それが君、どうして別れるやうになつたと思ふ？　單にあの女が僕に惚れたからなんだ。と云ふよりや偶然の機會で、惚れてゐると云ふ事を僕に見せてしまつたからなんだ。」

俊助は絶えず大井の足元を顧慮しながら、街燈の下を通りすぎる毎に、長くなつたり短くなつたりする彼等の影を、アスファルトの上に踏んで行つた。さうしてややもすると散漫になり勝ちな注意を、相手の話へ集中させるのに忙しかつた。

「と云つたつて、何も大したいきさつがあつた譯でも何でもない。唯、あいつが僕の所へ來た手紙の事で、嫉妬を燒いただけの事なんだ。が、その時僕はあの女の腹の底まで見えたやうな氣がして、一度に嫌氣がさしてしまつたぢやないか。するとあいつは嫉妬を燒いたと云ふ、その事だけが惡いんだと思つたもんだから、――いや、これも餘談だつた。僕が君に話したいのは、その僕の所へ來た手紙と云ふやつなんだがね。」

大井はかう云つて、酒臭い息を吐きながら、俊助の顔を覗くやうにした。

「その手紙の差出人は、女名前ぢやあつたけれど、實は僕自身なんだ。驚くだらう。僕だつて、自分で驚いてゐるんだから、君が驚くのはちつとも不思議はない。ぢや何故僕はそんな手紙を書いたんだ？　あの女が嫉妬を燒くかどうか、それが知りたかつたからさ。」

さすがにこの時は俊助も、何か得體の知れない物にぶつかつたやうな心もちがした。

「妙な男だな。」

「妙だらう。あいつが僕に惚れてゐる事がわかりや、あいつが嫌になると云ふ事は、僕は百も承知してゐるんだ。さうしてあいつが嫌になつた曉にや、餘計世の中が退屈になると云ふ事も知つてゐるんだ。しかも僕は、その時に、九分九厘まではあの女が嫉妬を燒く事を知つてゐたんだぜ。それでゐて、手紙を書いたんだ。書かなけりやゐられなかつたんだ。」

「妙な男だな。」

俊助は目まぐるしい人通りの中に、足元の怪しい大井をかばひながら、もう一度から繰返した。

「だから僕の場合はかうなんだ。——女が嫌になりたい爲に女に惚れる。より退屈になりたい爲に退屈な事をする。その癖僕は心の底で、ちつとも女が嫌になりたくはないんだ。ちつとも退屈

でゐたくはないんだ。だから君、悲惨ぢやないか。悲惨だらう。この上仕方のない事はないだらう。」

大井は愈酔が發したと見えて、聲さへ感動に堪へない如く涙ぐむやうになつて來た。

三十五

その内に二人は、本郷行の電車へ乘るべき、或賑な四つ辻へ來た。其處には無數の燈火が暗い空を炙つた下に、電車、自動車、人力車の流れが、絶えず四方から押し寄せてゐた。俊助は生醉の大井を連れてこの四つ辻を向うへ突切るには、さう云ふ周圍の雜沓と、險呑な相手の足元とへ、同時に氣を配らなければならなかつた。

所がやつと向うへ辿りつくと、大井は俊助の心配には頓着なく、すぐにその通りにあるビヤホオルの看板を見つけて、

「おい、君、もう一杯此處でやつて行かう。」と、海老茶色をした入口の垂幕を、無造作に開いてはいらうとした。

「よせよ。その位御機嫌なら、もう大抵澤山ぢやないか。」

「まあ、そんな事を云はずにつき合つてくれ。今度は僕が奢るから。」

俊助はこの上大井の酒の相手になつて、彼の特色ある戀愛談を傾聽するには、餘りにポオト・ワインの醉が醒めすぎてゐた。そこで今まで抑へてゐたマントの背中を離しながら、

「ぢや、君一人で飮んで行くさ。僕はいくら奢られても眞平だ。」

「さうか。ぢや仕方がない。僕はまだ君に聞いて貰ひたい事が殘つてゐるんだが――」

大井は海老茶色の幕へ手をかけた儘、ふらつく足を踏みしめて、暫く沈吟してゐたが、やがて俊助の鼻の先へ酒臭い顏を持つて來ると、

「君は僕がどうしてあの晩、國府津なんぞへ行つたんだか知らないだらう。ありやね、嫌になつた女に別れる爲の方便なんだ。」

俊助は外套の隱しへ兩手を入れて、呆れた顏をしながら、大井と眼を見合せた。

「へええ、どうして？」

「どうしてつたつて、――まづ僕が是非とも國へ歸らなければならないやうな理由を書き下して

さ。それから女と泣き別れの愁歎場がよろしくあつて、とどあの晩汽車の窓で手巾を振ると云ふのが大詰だつたんだ。何しろ役者が役者だから、あいつは今でも僕が國に歸つてゐると思つてゐるんだらう。時々國の僕へ宛てたあいつの手紙が、こつちの下宿へ轉送されて來るからね。」

大井はから云つて、自ら嘲るやうに微笑しながら、大きな掌を俊助の肩へかけて、

「僕だつてそんな化の皮が、永久に剝げないとは思つてゐない。が、剝げるまでは、その化の皮を大事にかぶつてゐたいんだ。この心もちは君に通じないだらうな。通じなけりや――まあ、それまでだが、つまり僕は嫌になつた女に別れるんでも、出來るだけ向うを苦しめたくないんだ。出來るだけ――いくら嘘をついてもだね。と云つて、何もその場合まで好い子になりたいと云ふんぢやない。向うの爲に、女の爲に、さうしてやるべき一種の義務が存在するやうな氣がするんだ。君は矛盾だと思ふだらう。矛盾も亦甚しいと思ふだらう。だらうが、僕はさう云ふ人間なんだ。それだけはどうか呑み込んで置いてくれ。――ぢや失敬しよう。わが親愛なる安田俊助。」

大井は妙な手つきをして、俊助の肩を叩いたと思ふと、その手に海老茶色の垂幕を擧げて、よろよろビヤホオルの中へはいつてしまつた。

「妙な男だな。」

俊助は輕蔑とも同情とも判然しない一種の感情に動かされながら三度かう呟いて、クラブ洗粉の廣告電燈が目まぐるしく明滅する下を、靜に赤い停留場の柱の方へ歩き出した。

三十六

下宿へ歸つて來た俊助は、制服を和服に着換ると、まづ青い蓋をかけた卓上電燈の光の下で、留守中に屆いてゐた郵便へ眼を通した。その一つは野村の手紙で、もう一つは帶封に乞高評の判がある『城』の今月號だつた。

俊助は野村の手紙を披いた時、その半切を埋めてゐるものは、多分父親の三回忌に關係した家事上の紛紜か何かだらうと云ふ、朧げな豫期を持つてゐた。所がいくら讀んで行つても、さう云ふ實際方面の消息は殆ど一句も見當らなかつた。その代り郷土の自然だの生活だのの叙述が、到る所に美しい詠歎的な文字を並べてゐた。磯山の若葉の上には、もう夏らしい海雲が簇々と空に去來してゐると云ふ事、その雲の下に干してある珊瑚採取の細絲の網が、眩く日に光つてゐる

と云ふ事、自分も何時か叔父の持ち船にでも乘せて貰つて、深海の底から珊瑚の枝を曳き上げたいと思つてゐると云ふ事——すべてが哲學者と云ふよりは、寧ろ詩人にふさはしい熱情の表現とも云はるべき性質のものだつた。

俊助にはこの絢爛たる文句の中に、現在の野村の心もちが髣髴出來るやうに感ぜられた。それは初子に對する純粹な愛が遍照してゐる心もちだつた。其處には優しい喜びがあつた。或はかすかな吐息があつた。或は又やゝもすれば流れようとする涙があつた。だからその心もちを通過する限り、野村の眼に映じた自然や生活は、いづれも彼自身の愛の圓光に、虹の如き光彩を與へられてゐた。若葉も、海も、珊瑚採取も、悉くの意味においては、地上の實在を超越した一種の天啓に外ならなかつた。從つて彼の長い手紙も、その素朴な愛の幸福に同情出來るもののみが、始めて意味を解すべき默示錄のやうなものだつた。

俊助は微笑と共に、野村の手紙を卷きをさめて、今度は『城』の封を切つた。表紙にはビアズリイのタンホイゼルの畫が刷つてあつて、その上に l'art pour l'art と、細い朱文字で入れた銘があつた。目次を見ると、藤澤の「鳶色の薔薇」と云ふ抒情詩的の戲曲を筆頭に、近藤のロップス論

とか、花房のアナクレオンの飜譯とか、いろいろな表題が行列してゐた。俊助は甚同情のない眼で、暫くそれらの表題を見廻してゐたが、やがて「倦怠」――大井篤夫と云ふ一行の文字にぶつかると、急にさつきの大井の姿が鮮かに記憶に浮んで來たので、早速その小説が載つてゐる卷末の頁をはぐつて見た。と、それは三人稱でこそ書いてはあるが、實は今夜聞いた大井の告白を、その儘活字にしたやうな小説だつた。

俊助は僅十分ばかりの間に、造作なく「倦怠」を讀み終ると又野村の手紙をひろげて見て、その達筆な行の上へ今更のやうに怪訝の眼を落した。この手紙の中に磅礴してゐる野村の愛と、あの小説の中にぶちまけてある大井の愛と――一人の初子に天國を見てゐる野村と、多くの女に地獄を見てゐる大井と――それらの間にある大きな懸隔は、一體どこから生じたのだらう。いや、それよりも二人の愛は、どちらが本當の愛なのだらう。野村の愛が幻か。大井の愛が利己心か。それとも兩方がそれぞれの意味で、やはり僞のない愛だらうか。さうして彼自身の辰子に對する愛は？

俊助は青い蓋をかけた卓上電燈の光の下に、野村の手紙と大井の小説とを並べた儘、暫くは兩

腕を胸に組んで、ぢつと西洋机の前へ坐つてゐた。

（以上を以て「路上」の前篇を終るものとす。後篇は他日を期する事とすべし。）

（大正八年七月）

じゆりあの・吉助

じゆりあの・吉助は、肥前國彼杵郡浦上村の産であつた。早く父母に別れたので、幼少の時から、土地の乙名三郎治と云ふものの下男になつた。が、性來愚鈍な彼は、始終朋輩の弄り物にされて、牛馬同樣な賤役に服さなければならなかつた。

その吉助が十八九の時、三郎治の一人娘の兼と云ふ女に懸想をした。兼は勿論この下男の戀慕の心などは顧みなかつた。のみならず人の惡い朋輩は、早くもそれに氣がつくと、愈彼を嘲弄した。吉助は愚物ながら、悶々の情に堪へなかつたものと見えて、或夜私に住み慣れた三郎治の家を出奔した。

それから三年の間、吉助の消息は杳として誰も知るものがなかつた。

が、その後彼は乞食のやうな姿になつて、再び浦上村へ歸つて來た。さうして元の通り三郎治

に召使はれる事になつた。爾來彼は朋輩の輕蔑も意としないで、唯まめまめしく仕へてゐた。殊に娘の兼に對しては、飼犬よりも更に忠實だつた。娘はこの時既に婿を迎へて、誰も羨むやうな夫婦仲であつた。

かうして一二年の歳月は、何事もなく過ぎて行つた。が、その間に朋輩は吉助の擧動に何となく不審な所のあるのを嗅ぎつけた。そこで彼等は好奇心に驅られて、注意深く彼を監視し始めた。すると果して吉助は、朝夕一度づつ、額に十字を劃して、祈禱を捧げる事を發見した。彼等はすぐにその旨を三郎治に訴へた。三郎治も後難を恐れたと見えて、卽座に彼を浦上村の代官所へ引渡した。

彼は捕手の役人に圍まれて、長崎の牢屋へ送られる時も、更に惡びれる氣色を示さなかつた。いや、傳說によれば、愚物の吉助の顏が、その時はまるで天上の光に遍照されたかと思ふ程、不思議な威嚴に滿ちてゐたと云ふ事であつた。

二

奉行の前に引き出された吉助は、素直に切支丹宗門を奉ずるものだと白状した。それから彼と奉行との間には、かう云ふ問答が交換された。

奉行「その方どもの宗門神は何と申すぞ。」

吉助「べれんの國の御若君、えす・きりすと様、並に隣國の御息女、さんた・まりや様でござる。」

奉行「そのものどもは如何なる姿を致して居るぞ。」

吉助「われら夢に見奉るえす・きりすと様は、紫の大振袖を召させ給うた、美しい若衆の御姿でござる。まつたさんた・まりや姫は、金糸銀糸の繡をされた、襠の御姿と拜み申す。」

奉行「そのものどもが宗門神となつたは、如何なる謂れがあるぞ。」

吉助「えす・きりすと様、さんた・まりや姫に戀をなされ、焦れ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦しみに惱むものを、救うてとらせうと思召し、宗門神となられたげでござる。」

奉行「その方は何處の何ものより、さやうな敎を傳授されたぞ。」

吉助「われら三年の間、諸處を經めぐつた事がござる。その折さる海邊にて、見知らぬ紅毛人

より傳授を受け申した。」

奉行「傳授するには、如何なる儀式を行うたぞ。」

吉助「御水を頂戴致いてから、じゆりあのと申す名を賜つてござる。」

奉行「してその紅毛人は、その後何處へ赴いたぞ。」

吉助「されば稀有な事でござる。折から荒れ狂うた浪を踏んで、いづ方へか姿を隱し申した。」

奉行「この期に及んで、空事を申したら、その分にはさし置くまいぞ。」

吉助「何で僞などを申上げうず。皆紛れない眞實でござる。」

奉行は吉助の申し條を不思議に思つた。それは今まで調べられた、どの切支丹門徒の申し條とも、全く變つたものであつた。が、奉行が何度吟味を重ねても、頑として吉助は、彼の述べた所を飜さなかつた。

三

じゆりあの・吉助は、遂に天下の大法通り、磔刑に處せられる事になつた。

　その日彼は町中を引き廻された上、さんと・もんたにの下の刑場で、無殘にも磔に懸けられた。磔柱は周圍の竹矢來の上に、一際高く十字を描いてゐた。彼は天を仰ぎながら、何度も高々と祈禱を唱へて、恐れげもなく非人の槍を受けた。その祈禱の聲と共に、彼の頭上の天には、一團の油雲が湧き出でて、程なく凄じい大雷雨が、沛然として刑場へ降り注いだ。再び天が晴れた時、磔柱の上のじゆりあの・吉助は、既に息が絕えてゐた。が、竹矢來の外にゐた人々は、今でも彼の祈禱の聲が、空中に漂つてゐるやうな心もちがした。

　それは「べれんの國の若君樣、今は何處にましますか、御襃め讚へ給へ」と云ふ、簡古素朴な祈禱だつた。

　彼の死骸を磔柱から下した時、非人は皆それが美妙な香を放つてゐるのに驚いた。見ると、吉助の口の中からは、一本の白い百合の花が、不思議にも水々しく咲き出てゐた。

　これが長崎著聞集、公教遺事、瓊浦把燭談等に散見する、じゆりあの・吉助の一生である。さうして又日本の殉教者中、最も私の愛してゐる、神聖な愚人の一生である。

（大正八年八月）

魔術

或時雨の降る晩のことです。私を乘せた人力車は、何度も大森界隈の險しい坂を上つたり下りたりして、やつと竹藪に圍まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剝げかゝつた、狹苦しい玄關には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀨戶物の標札がかゝつてゐます。

マテイラム・ミスラ君と云へば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の獨立を計つてゐるカルカツタ生れの愛國者で、同時に又ハツサン・カンといふ名高い婆羅門の祕法を學んだ、年の若い魔術の大家なのです。私は丁度一月ばかり以前から、或友人の紹介でミスラ君と交際してゐましたが、政治經濟の問題などはいろいろ議論したことがあつても、肝腎の魔術を使ふ時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使つて見せてくれるやうに、手紙で賴んで置いてから、當時ミスラ君の住んでゐた、

寂しい大森の町はづれまで、人力車を急がせて來たのです。

私は雨に濡れながら、覺束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にある呼鈴の釦を押しました。すると間もなく戸が開いて、玄關へ顏を出したのは、ミスラ君の世話をしてゐる、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出でですか。」

「いらつしやいます。先程からあなた樣を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんは愛想よくから言ひながら、すぐその玄關のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晩は、雨の降るのによく御出でした。」

色のまつ黑な、眼の大きい、柔な口髭のあるミスラ君は、テエブルの上にある石油ランプの心を撚りながら、元氣よく私に挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さへ拜見出來れば、雨位は何ともありません。」

私は椅子に腰をかけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰氣な部屋の中を見廻しま

した。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテエブルが一つ、壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ――外には唯我々の腰をかける、椅子が並んでゐるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁へ赤く花模様を織り出した、派手なテエブル掛でさへ、今にもずたずたに裂けるかと思ふほど、絲目が露になつてゐました。

私たちは挨拶をすませてから、暫くは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いてゐましたが、やがて又あの召使ひの御婆さんが、紅茶の道具を持つてはひつて來ると、ミスラ君は葉卷の箱の蓋を開けて、

「どうです。一本。」と勸めてくれました。

「難有う。」

私は遠慮なく葉卷を一本取つて、燐寸の火をうつしながら、

「確かあなたの御使ひになる精靈は、ヂンとかいふ名前でしたね。するとこれから私が拜見する魔術と言ふのも、そのヂンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉卷へ火をつけると、にやにや笑ひながら、匂の好い煙を吐いて、

「ヂンなどといふ精靈があると思つたのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話の時代のこととでも言ひませうか。私がハツサン・カンから學んだ魔術は、あなたでも使はうと思へば使へますよ。高が進歩した催眠術に過ぎないのですから。——御覧なさい。この手を唯、かうしさへすれば好いのです。」

ミスラ君は手を擧げて、二三度私の眼の前へ三角形のやうなものを描きましたが、やがてその手をテエブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模樣の花をつまみ上げました。私はびつくりして、思はず椅子をずりよせながら、よくよくその花を眺めましたが、確にそれは今の今まで、テエブル掛の中にあつた花模樣の一つに違ひありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持つて來ると、丁度麝香か何かのやうに重苦しい匂さへするのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆の聲を洩しますと、ミスラ君はやはり微笑した儘、又無造作にその花をテエブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模樣になつて、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなつてしまふのです。

「どうです。譯はないでせう。今度は、このランプを御覽なさい。」

ミスラ君はかう言ひながら、ちよいとテエブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子にどういふ譯か、ランプはまるで獨樂のやうに、ぐるぐる廻り始めました。それもちやんと一所に止つた儘、ホヤを心棒のやうにして、勢よく廻り始めたのです。初の内は私も膽をつぶして、萬一火事にでもなつては大變だと、何度もひやひやしましたが、ミスラ君は靜に紅茶を飮みながら、一向騷ぐ容子もありません。そこで私もしまひには、すつかり度胸が据つてしまつて、だんだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めてゐました。

又實際ランプの蓋が風を起して廻る中に、黄いろい焔がたつた一つ、瞬きもせずにともつてゐるのは、何とも言へず美しい、不思議な見物だつたのです。が、その内にランプの廻るのが、愈速になつて行つて、とうとう廻つてゐるとは見えない程、澄み渡つたと思ひますと、何時の間にか、前のやうにホヤ一つ歪んだ氣色もなく、テエブルの上に据つてゐました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供瞞しですよ。それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覽に入れませう。」

ミスラ君は後を振返つて、壁側の書棚を眺めましたが、やがてその方へ手をさし伸ばして、招くやうに指を動かすと、今度は書棚に並んでゐた書物が一冊づつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで來ました。その又飛び方が兩方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交ふ蝙蝠のやうに、ひらひらと宙へ舞上るのです。私は葉卷を口へ啣へた儘、呆氣にとられて見てゐましたが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び廻つて、一々行儀よくテエブルの上へピラミッド形に積み上りました。しかも殘らずこちらへ移つてしまつたと思ふと、すぐに最初來たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還つて行くぢやありませんか。

が、中でも一番面白かつたのは、うすい假綴ぢの書物が一冊、やはり翼のやうに表紙を開いて、ふはりと空へ上りましたが、暫くテエブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落しに私の膝へさつと下りて來たことです。どうしたのかと思つて手にとつて見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覺えがある、佛蘭西の新しい小說でした。

「永々御本を難有う。」

ミスラ君はまだ微笑を含んだ聲で、かう私に禮を言ひました。勿論その時はもう多くの書物が、

みんなテエブルの上から書棚の中へ舞ひ戻つてしまつてゐたのです。私は夢からさめたやうな心もちで、暫時は挨拶さへ出來ませんでしたが、その内にさつきミスラ君の言つた、「私の魔術などといふものは、あなたでも使はうと思へば使へるのです。」といふ言葉を思ひ出しましたから、

「いや、兼ね兼ね評判はうかがつてゐましたが、あなたの御使ひなさる魔術が、これ程不思議なものだらうとは、實際、思ひもよりませんでした。ところで私のやうな人間にも、使つて使へないことのないと言ふのは、御冗談ではないのですか。」

「使へますとも。誰にでも造作なく使へます。唯――」と言ひかけてミスラ君はぢつと私の顔を眺めながら、いつになく眞面目な口調になつて、

「唯、慾のある人間には使へません。ハツサン・カンの魔術を習はうと思つたら、まづ慾を捨てることです。あなたにはそれが出來ますか。」

「出來るつもりです。」

私はかう答へましたが、何となく不安な氣もしたので、すぐに又後から言葉を添へました。

「魔術さへ教へて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑はしさうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無躾だとでも思つたのでせう。やがて大様に頷きながら、

「では教へて上げませう。が、いくら造作なく使へると言つても、習ふのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御泊りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教へて貰ふ嬉しさに、何度もミスラ君へ御禮を言ひました。が、ミスラ君はそんなことに頓着する氣色もなく、静に椅子から立上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寝床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親切さうなミスラ君の顔を思はずぢつと見上げました。

× × × × ×

私がミスラ君に魔術を教はつてから、一月ばかりたつた後のことです。これもやはりざあざあ

雨の降る晩でしたが、私は銀座の或倶樂部の一室で、五六人の友人と、暖爐の前へ陣取りながら、氣輕な雜談に耽つてゐました。

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨脚も、しつきりなく往來する自働車や馬車の屋根を濡らすせゐか、あの、大森の竹藪にしぶくやうな、ものさびしい音は聞えません。勿論窓の内の陽氣なことも、明い電燈の光と言ひ、大きなモロツコ皮の椅子と言ひ、或は又滑かに光つてゐる寄木細工の床と言ひ、見るから精靈でも出て來さうな、ミスラ君の部屋などとは、まるで比べものにはならないのです。

私たちは葉卷の煙の中に、暫くは獵の話だの競馬の話だのをしてゐましたが、その内に一人の友人が、吸ひさしの葉卷を暖爐の中に抛りこんで、私の方へ振り向きながら、

「君は近頃魔術を使ふといふ評判だが、どうだい。今夜は一つ僕たちの前で使つて見せてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭を靠せた儘、さも魔術の名人らしく、横柄にかう答へました。

「ぢや、何でも君に一任するから、世間の手品師などには出來さうもない、不思議な術を使つて見せてくれ給へ。」

友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すやうに私の方を眺めました。そこで私は徐に立ち上つて、

「よく見てゐてくれ給へよ。僕の使ふ魔術には、種も仕掛もないのだから。」

私はかう言ひながら、兩手のカフスをまくり上げて、暖爐の中に燃え盛つてゐる石炭を、無造作に掌の上へすくひ上げました。私を圍んでゐた友人たちは、これだけでも、もう荒膽を挫がれたのでせう。皆顔を見合せながらうつかり側へ寄つて火傷でもしては大變だと、氣味惡るさうにしりごみさへし始めるのです。

そこで私の方は愈落着き拂つて、その掌の上の石炭の火を、暫く一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢よく寄木細工の床へ撒き散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を壓して、もう一つ變つた雨の音が俄に床の上から起つたのは。と言ふのはまつ赤な石炭の火が、私の掌を離れると同時に、無數の美しい金貨になつて、雨のやうに床の上へこぼれ飛んだ

からなのです。
友人たちは皆夢でも見てゐるやうに、茫然と喝采するのさへも忘れてゐました。
「まづちよいとこんなものさ」
私は得意の微笑を浮べながら、靜に又元の椅子に腰を下しました。
「こりや皆ほんたうの金貨かい。」
呆氣にとられてゐた友人の一人が、漸くかう私に尋ねたのは、それから五分ばかりたつた後のことです。
「ほんたうの金貨さ。嘘だと思つたら、手にとつて見給へ。」
「まさか火傷をするやうなことはあるまいね。」
友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとつて見ましたが、
「成程こりやほんたうの金貨だ。おい、給仕、箒と塵取りとを持つて來て、これを皆掃き集めてくれ。」
給仕はすぐに言ひつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、堆く側のテエブルへ盛り上げ

ました。友人たちは皆そのテエブルのまはりを圍みながら、

「ざつと二十萬圓位はありさうだね。」

「いや、もつとありさうだ。華奢なテエブルだつた日には、つぶれてしまふ位あるぢやないか。」

「何しろ大した魔術を習つたものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これぢや一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないやうな金滿家になつてしまふだらう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子によりかゝつた儘、悠然と葉卷の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術といふやつは、一旦慾心を起したら、二度と使ふことが出來ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまつた上は、すぐに又元の暖爐の中へ抛りこんでしまはうと思つてゐる。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言ひ合せたやうに、反對し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまふのは、もつたいない話だと言ふのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖爐に抛りこむと、剛情に友人たちと爭ひました。すると、その友人た

ちの中でも、一番狡猾だといふ評判のあるのが、鼻の先で、せゝら笑ひながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言ふ。僕たちは又したくないと言ふ。それぢやいつまでたつた所で、議論が干ないのは當り前だらう。そこで僕が思ふには、この金貨を元手にして、君が僕たちと骨牌をするのだ。さうしてもし君が勝つたなら、石炭にするとも何にするとも、自由に君が始末するが好い。が、もし僕たちが勝つたなら、金貨の儘僕たちへ渡し給へ。さうすれば御互の申し分も立つて、至極滿足だらうぢやないか。」

それでも私はまだ首を振つて、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。所がその友人は、愈嘲るやうな笑を浮べながら、私とテエブルの上の金貨とを狡るさうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちと骨牌をしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思ふからだらう。それなら魔術を使ふために、慾心を捨てたとか何とかいふ、折角の君の決心も怪しくなつて來る譯ぢやないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのぢやない。」

「それなら骨牌をやり給へな。」

何度もかういふ押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手に、どうしても骨牌を闘はせなければならない羽目に立ち至りました。勿論友人たちは皆大喜びで、すぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅にある骨牌机を圍みながら、まだためらひ勝ちな私を早く早くと急き立てるのです。

ですから私も仕方がなく、暫くの間は友人たちを相手に、嫌々骨牌をしてゐました。が、どういふものか、その夜に限つて、ふだんは格別骨牌上手でもない私が、嘘のやうにどんどん勝つのです。すると又妙なもので、始は氣のりもしなかつたのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌を引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を殘らず捲き上げるつもりで、わざわざ骨牌を始めたのですから、かうなると皆あせりにあせつて、殆血相さへ變るかと思ふほど、夢中になつて勝負を争ひ出しました。が、いくら友人たちが躍起となつても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまひには、あの金貨と略同じほどの金高だけ、私の方が勝つてしまつたぢやありませんか。

するとさつきの人の悪い友人が、まるで、氣違ひのやうな勢で、私の前に、札をつきつけながら、
「さあ、引き給へ。僕は僕の財産をすつかり賭ける。地面も、家作も、馬も、自働車も、一つ殘らず賭けてしまふ。その代り君はあの金貨の外に、今まで君が勝つた金を悉く賭けるのだ。さあ、引き給へ。」

私はこの刹那に慾が出ました。テエブルの上に積んである、山のやうな金貨ばかりか、折角私が勝つた金さへ、今度運惡く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまはなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさへすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出來るのです。こんな時に使はなければどこに魔術などを教はつた、苦心の甲斐があるのでせう。さう思ふと私は矢も楯もたまらなくなつて、そつと魔術を使ひながら、決闘でもするやうな勢で、

「よろしい。まづ君から引き給へ。」

「九。」

「王様。」

私は勝ち誇つた聲を擧げながら、まつ蒼になつた相手の眼の前へ、引き當てた札を出して見せ

ました。すると不思議にもその骨牌の王様が、まるで魂がはひつたやうに、冠をかぶつた頭を擡げて、ひよいと札の外へ體を出すと、行儀よく劍を持つた儘、にやりと氣味の惡い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客樣ハ御歸リニナルサウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覺えのある聲で言ふのです。と思ふと、どういふ譯か、窓の外に降る雨脚までが、急に又あの大森の竹藪にしぶくやうな、寂しいざんざ降りの音を立て始めました。

　ふと氣がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌の王樣のやうな微笑を浮べてゐるミスラ君と、向ひ合つて坐つてゐたのです。私が指の間に挾んだ葉卷の灰さへ、やはり落ちずにたまつてゐる所を見ても、私が一月ばかりたつたと思つたのは、ほんの二三分の間に見た、夢だつたのに違ひありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハツサン・カンの魔術の秘法を習ふ資格のない人間だといふことは、私自身にもミスラ君にも、明かになつてしまつたのです。私は恥しさうに頭を下げた儘、暫くは口もきけませんでした。

「私の魔術を使はうと思つたら、まづ慾を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出來てゐないのです。」

ミスラ君は氣の毒さうな眼つきをしながら、緣へ赤く花模樣を織り出したテエブル掛の上に肘をついて、靜にかう私をたしなめました。

（大正八年十一月十日）

葱

おれは締切日を明日に控へた今夜、一氣呵成にこの小說を書かうと思ふ。いや、書かうと思ふのではない。書かなければならなくなつてしまつたのである。では何を書くかと云ふと、――それは次の本文を讀んで頂くより外に仕方はない。

神田神保町邊の或カツフエに、お君さんと云ふ女給仕がゐる。年は十五とか十六とか云ふが、見た所はもつと大人らしい。何しろ色が白くつて、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いてゐても、兎に角一通りの美人である。それが髮をまん中から割つて、忘れな草の簪をさして、白いエプロンをかけて、自働ピアノの前に立つてゐる所は、とんと竹久夢二君の畫中の人物が拔け出したやうだ。――とか何とか云ふ理由から、このカツフエの定連の間には、夙に通俗小說と云ふ

渾名が出來てゐるらしい。尤も渾名にはまだまだいろいろある。粹の花が花だから、わすれな草の活動寫眞に出る亞米利加の女優に似てゐるから、ミス・メリイ・ピツクフオオド。このカツフエに缺くべからざるものだから、角砂糖。ETC. ETC.

この店にはお君さんの外にも、もう一人年上の女給仕がある。これはお松さんと云つて、器量は到底お君さんの敵ではない。まづ白麵麭と黑麵麭程の相違がある。だから一つカツフエに勤めてゐても、お君さんとお松さんとでは、祝儀の收入が非常に違ふ。お松さんは勿論、この收入の差に平かなるを得ない。その不平が高じた所から、邪推もこの頃廻すやうになつてゐる。

或夏の午後、お松さんの持ち場の卓子にゐた外國語學校の生徒らしいのが、卷煙草を一本啣へながら、燐寸の火をその先へ移さうとした。所が生憎その隣の卓子では、煽風機が勢よく廻つてゐるものだから、燐寸の火は其處まで屆かない内に、何時も風に消されてしまふ。そこでその卓子の側を通りかかつたお君さんは、暫くの間風をふせぐ爲に、客と煽風機との間へ足を止めた。その暇に卷煙草へ火を移した學生が、日に燒けた頰へ微笑を浮べながら、「難有う」と云つた所を見ると、お君さんのこの親切が先方にも通じたのは勿論である。すると帳場の前へ立つてゐたお

松さんが、丁度其處へ持つて行く筈の、アイスクリイムの皿を取り上げると、お君さんの顏をじろりと見て、「あなた持つていらつしやいよ。」と、嬌嗔を發したらしい聲を出した。——

こんな葛藤が一週間に何度もある。從つてお君さんは、滅多にお松さんとは口をきかない。何時も自働ピアノの前に立つては、場所がらだけに多い學生の客に、無言の愛嬌を賣つてゐる。或は業腹らしいお松さんに無言ののろけを買はせてゐる。

が、お君さんとお松さんとの仲が惡いのは、何もお松さんが嫉妬をするせゐばかりではない。お君さんも內心、お松さんの趣味の低いのを輕蔑してゐる。あれは全く尋常小學を出てから、浪花節を聽いたり、蜜豆を食べたり、男を追つかけたりばかりしてゐた、そのせゐに違ひない。かうお君さんは確信してゐる。ではそのお君さんの趣味と云ふのが、どんな種類のものかと思つたら、暫くこの賑かなカツフェを去つて、近所の露路の奧にある、或女髮結の二階を覗いて見るが好い。何故と云へばお君さんは、その女髮結の二階に間借をして、カツフェへ勤めてゐる間の外は、始終其處に起臥してゐるからである。

二階は天井の低い六疊で、西日のさす窓から外を見ても、瓦屋根の外は何も見えない。その窓

際の壁へよせて、更紗の布をかけた机がある。尤もこれは便宜上、假に机と呼んで置くが、實は古色を帶びた茶ぶ臺に過ぎない。その茶ぶ――机の上には、これも餘り新しくない西洋綴の書物が並んでゐる。「不如歸」「藤村詩集」「松井須磨子の一生」「新朝顏日記」「カルメン」「高い山から谷底見れば」――あとは婦人雜誌が七八冊あるばかりで、殘念ながらおれの小說集などは、唯の一冊も見當らない。それからその机の側にある、とうにニスの剝げた茶簞笥の上には、頸の細い硝子の花立てがあつて、花びらの一つとれた造花の百合が、手際よくその中にさしてある。察する所この百合は、花びらさへまだ無事でゐたら、今でもあのカツフエの卓子に飾られてゐたのに相違あるまい。最後にその茶簞笥の上の壁には、いづれも雜誌の口繪らしいのが、ピンで三四枚とめてある。一番まん中なのは、鏑木清方君の元祿女で、その下に小さくなつてゐるのは、ラフアエルのマドンナか何からしい。と思ふとその元祿女の上には、北村四海君の彫刻の女が御隣に控へたベエトオフエンへ滴る如き秋波を送つてゐる。但しこのベエトオフエンは、唯お君さんがベエトオフエンだと思つてゐるだけで、實は亞米利加の大統領ウツドロオ・ウイルソンなのだから、北村四海君に對しても、何とも御氣の毒の至に堪へない。――

から云へばお君さんの趣味生活が、如何に藝術的色彩に富んでゐるか、問はずして既に明かであらうと思ふ。又實際お君さんは 毎晩遲くカツフエから歸つて來ると、必このベエトオフエンalias ウイルソンの肖像の下に、「不如歸」を讀んだり、造花の百合を眺めたりしながら、新派悲劇の活動寫眞の月夜の場面よりもサンテイマンタアルな、藝術的感激に耽るのである。

櫻頃の或夜、お君さんはひとり机に向つて、殆一番鷄が啼く頃まで、桃色をしたレタア・ペエパアにせつせとペンを走らせ續けた。が、その書き上げた手紙の一枚が、机の下に落ちてゐた事は、朝になつてカツフエへ出て行つた後も、遂にお君さんには氣がつかなかつたらしい。すると窓から流れこんだ春風が、その一枚のレタア・ペエパアを飜して、鬱金木綿の蔽ひをかけた鏡が二つ並んでゐる梯子段の下まで吹き落してしまつた。下にゐる女髪結は、頻々としてお君さんの手に落ちる艶書のある事を心得てゐる。だからこの桃色をした紙も、恐らくはその一枚だらうと思つて、好奇心からわざわざ眼を通して見た。すると意外にもこれは、お君さんの手蹟らしい。ではお君さんが誰かの艶書に返事を認めたのかと思ふと、「武男さんに御別れなすつた時の事を考へると、私は涙で胸が張り裂けるやうでございます」と書いてある。果然お君さんは殆徹夜を

して、浪子夫人に與ふべき慰問の手紙を作つたのであつた。——

おれはこの挿話を書きながら、お君さんのサンテイマンタリスムに微笑を禁じ得ないのは事實である。が、おれの微笑の中には、寸毫も惡意は含まれてゐない。お君さんのゐる二階には、造花の百合や、「藤村詩集」や、ラファエルのマドンナの寫眞の外にも、自炊生活に必要な、臺所道具が並んでゐる。その臺所道具の象徴する、世智辛い東京の實生活は、何度今日までにお君さんへ迫害を加へたか知れなかつた。が、落莫たる人生も、涙の靄を透して見る時は、美しい世界を展開する。お君さんはその實生活の迫害を逃れる爲に、この藝術的感激の涙の中へ身を隱した。其處には一月六圓の間代もなければ、一升七十錢の米代もない。カルメンは電燈代の心配もなく、氣樂にカスタネツトを鳴らしてゐる。浪子夫人も苦勞はするが、藥代の工面が出來ない次第ではない。一言にして云へばこの涙は、人間苦の黄昏のおぼろめく中に、人間愛の燈火をつつましやかにともしてくれる。あゝ、東京の町の音も全く何處かへ消えてしまふ眞夜中、涙に濡れた眼を擧げながら、うす暗い十燭の電燈の下に、たつた一人逗子の海風とコルドヴアの夾竹桃とを夢みてゐる、お君さんの姿を想像——畜生、惡意がない所か、うつかりしてゐるとおれまでも、サン

テイマンタアルになり兼ねないぞ。元來世間の批評家には情味がないと云はれてゐる、頗る理智的なおれなのだが。

そのお君さんが或冬の夜、遲くなつてカツフエから歸つて來ると、始は例の如く机に向つて、「松井須磨子の一生」か何か讀んでゐたが、まだ一頁と行かない内に、どう云ふ譯かその書物に忽ち愛想をつかした如く、邪慳に疊の上へ抛り出してしまつた。と思ふと今度は横坐りに坐つた儘、机の上に頰杖をついて、壁の上のウイル——ベエトオフエンの肖像を冷淡にぼんやり眺め出した。これは勿論唯事ではない。お君さんはあのカツフエを解傭される事になつたのであらうか。さもなければお松さんのいぢめ方が一層惡辣になつたのであらうか。或は又さもなければ齲齒でも痛み出して來たのであらうか。いや、お君さんの心を支配してゐるのは、さう云ふ俗臭を帶びた事件ではない。お君さんは浪子夫人の如く、或は又松井須磨子の如く、戀愛に苦しんでゐるのである。ではお君さんは誰に心を寄せてゐるかと云ふと——幸お君さんは壁の上のベエトオフエンを眺めた儘、暫くは身動きもしさうはないから、その間におれは大急ぎで、ちよいとこの光榮ある戀愛の相手を紹介しよう。

お君さんの相手は田中君と云つて、無名の――まあ藝術家である。何故かと云ふと田中君は、詩も作る、ヴアイオリンも彈く、油繪の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出來ると云ふ才人だから、どれが本職でどれが道樂だか、鑑定の出來るものは一人もゐない。從つて又人物も、顏は役者の如くのつぺりしてゐて、髮は油繪の具の如くてらてらしてゐて、聲はヴアイオリンの如く優しくつて、言葉は詩の如く氣が利いてゐて、女を口說く事は歌骨牌をとる如く敏捷で、金を借り倒す事は薩摩琵琶をうたふ如く勇壯活潑を極めてゐる。それが黑い鍔廣の帽子をかぶつて、安物らしい獵服を着用して、葡萄色のボヘミアン・ネクタイを結んで――と云へば大抵わかりさうなものだ。思ふにこの田中君の如きは既に一種のタイプなのだから、神田本鄕邊のバアやカツフエ、靑年會館や音樂學校の音樂會(但し一番の安い切符の席に限るが)兜屋や三會堂の展覽會などへ行くと、必二三人はこの連中が、傲然と俗衆を睥睨してゐる。だからこの上明瞭な田中君の肖像が欲しければ、さう云ふ場所へ行つて見るが好い。おれが書くのはもう眞平御免だ。第一おれが田中君の紹介の勞を執つてゐる間に、お君さんは何時か立上つて、障子を開けた窓の外の寒い月夜を眺めてゐるのだから。

瓦屋根の上の月の光は、頸の細い硝子の花立てにさした造花の百合を照らしてゐる。壁に貼つたラファエルの小さなマドンナを照らしてゐる。さうして又お君さんの上を向いた鼻を照らしてゐる。が、お君さんの涼しい眼には、月の光も映つてゐない。霜の下りたらしい瓦屋根も、存在しないのと同じ事である。田中君は今夜カツフエから、お君さんを此處まで送つて來た。さうして明日の晩は二人で、樂しく暮さうと云ふ約束までした。明日は丁度一月に一度あるお君さんの休日だから、午後六時に小川町の電車停留場で落合つて、それから芝浦にかゝつてゐる伊太利人のサアカスを見に行かうと云ふのである。お君さんは今日までに、未嘗男と二人で遊びに出かけた覺えなどはない。だから明日の晩田中君と、世間の戀人同士のやうに、つれ立つて夜の曲馬を見に行く事を考へると、今更のやうに心臟の鼓動が高くなつて來る。お君さんにとつて田中君は、寶窟の扉を開くべき秘密の呪文を心得てゐるアリ・ババと更に違ひはない。その呪文が唱へられた時、如何なる未知の歡樂境がお君さんの前に出現するか。——さつきから月を眺めて月を眺めないお君さんが、風に煽られた海の如く、或は又將に走らんとする乘合自動車のモオタアの如く、轟く胸の中に描いてゐるのは、實にこの來るべき不可思議の世界の幻であつた。其處には

薔薇の花の咲き亂れた路に、養殖眞珠の指環だの翡翠まがひの帶止めだのが、數限りもなく散亂してゐる。夜鶯の優しい聲も、既に三越の旗の上から、蜜を滴すやうに聞え始めた。橄欖の花の匂ひの中に大理石を疊んだ宮殿では、今やミスタア・ダグラス・フェアバンクスと森律子孃との舞踏が、愈佳境に入らうとしてゐるらしい。……

が、おれはお君さんの名譽の爲につけ加へる。その時お君さんの描いた幻の中には、時々暗い雲の影が、一切の幸福を脅すやうに、底氣味惡く去來してゐた。成程お君さんは田中君を戀してゐるのに違ひない。しかしその田中君は、實はお君さんの藝術的感激が圓光を頂かせた田中君である。詩も作る、ヴァイオリンも彈く、油繪の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出來るサア・ランスロットである、だからお君さんの中にある處女の新鮮な直觀性は、どうかするとこのランスロットの頗怪しげな正體を感ずる事がないでもない。暗い不安の雲の影は、かう云ふ時にお君さんの幻の中を通りすぎる。が、遺憾ながらその雲の影は、現れるが早いか消えてしまふ。お君さんはいくら大人じみてゐても、十六とか十七とか云ふ少女である。しかも藝術的感激に充ち滿ちてゐる少女である。着物を雨で濡らす心配があるか、ライン河の入日の畫端

書に感歎の聲を洩らす時の外は、滅多に雲の影などへ心を止めないのも不思議ではない。況や今は薔薇の花の咲き亂れてゐる路に、養殖眞珠の指環だの翡翠まがひの帶止めだのが——以下は前に書いた通りだから、其處を讀み返して頂きたい。

お君さんは長い間、シヤヴアンヌの聖・ジユヌヴイエヴの如く、月の光に照らされた瓦屋根を眺めて立つてゐたが、やがて嚏を一つすると、窓の障子をばたりとしめて、又元の机の際へ横坐りに坐つてしまつた。それから翌日の午後六時までお君さんが何をしてゐたか、その間の詳しい消息は、殘念ながらおれも知つてゐない。何故作者たるおれが知つてゐないかと云ふと——正直に云つてしまへ。おれは今夜中にこの小說を書き上げなければならないからである。

翌日の午後六時、お君さんは怪しげな紫紺の御召のコオトの上にクリイム色の肩掛をして、何時もよりはそはそはと、もう夕暗に包まれた小川町の電車停留場へ行つた。行くと旣に田中君は、例の如く鍔廣の黑い帽子を目深くかぶつて、洋銀の握りのついた細い杖をかいこみながら、縞の荒い半オオヴアの襟を立てて、赤い電燈のともつた下に、ちやんと佇んで待つてゐる。色の白い顏が何時もより一層又磨きがかかつて、かすかに香水の匂までさせてゐる容子では、今夜は格別

身じまひに注意を拂つてゐるらしい。

「御待たせして？」

お君さんは田中君の顏を見上げると、息のはずんでゐるやうな聲を出した。

「なあに。」

田中君は大樣な返事をしながら、何とも判然しない微笑を含んだ眼で、ぢつとお君さんの顏を眺めた。それから急に身ぶるひを一つして、

「歩から、少し。」

とつけ加へた。いや、つけ加へたばかりではない。田中君はもうその時には、アアク燈に照らされた人通りの多い往來を、須田町の方へ向つて歩き出した。サアカスがあるのは芝浦である。歩くにしても此處からは、神田橋の方へ向つて行かなければならない。お君さんはまだ立止つた儘、埃風に飜るクリイム色の肩掛へ手をやつて、

「そつち？」

と不思議さうに聲をかけた。が、田中君は肩越しに、

「あゝ。」

と輕く答へたぎり、依然として須田町の方へ歩いて行く。そこでお君さんも外に仕方がないから、すぐに田中君へ追ひつくと、葉を振つた柳の並樹の下を一しよにいそいそと歩き出した。すると又田中君は、あの何とも判然しない微笑を眼の中に漂はせて、お君さんの横顔を窺ひながら、

「お君さんには御氣の毒だけれどもね、芝浦のサアカスは、もう昨夜でおしまひなんださうだ。だから今夜は僕の知つてゐる家へ行つて、一しよに御飯でも食べようぢやないか。」

「さう、私どつちでも好いわ。」

お君さんは田中君の手が、そつと自分の手を捕へたのを感じながら、希望と恐怖とにふるへてゐる、かすかな聲でかう云つた。と同時に又お君さんの眼にはまるで「不如歸」を讀んだ時のやうな、感動の涙が浮んで來た。この感動の涙を透して見た、小川町、淡路町、須田町の往來が、如何に美しかつたかは問ふを待たない。歳暮大賣出しの樂隊の音、目まぐるしい仁丹の廣告電燈、クリスマスを祝ふ杉の葉の飾、蜘蛛手に張つた萬國國旗、飾窓の中のサンタ・クロス、露店に並んだ畫端書や日暦――すべてのものがお君さんの眼には、壯大な戀愛の歡喜をうたひながら、世

界のはてまでも燦びやかに續いてゐるかと思はれる。今夜に限つて天上の星の光も冷たくない。時々吹きつける埃風も、コオトの裾を巻くかと思ふと、忽ち春が返つたやうな暖い空氣に變つてしまふ。幸福、幸福、幸福……

その内にふとお君さんが氣がつくと、二人は何時か横町を曲つたと見えて、路幅の狹い町を歩いてゐる。さうしてその町の右側に、一軒の小さな八百屋があつて、明く瓦斯の燃えた下に、大根、人參、漬け菜、葱、小蕪、慈姑、牛蒡、八つ頭、小松菜、獨活、蓮根、里芋、林檎、蜜柑の類が堆く店に積み上げてある。その八百屋の前を通つた時、お君さんの視線は何かの拍子に、葱の山の中に立つてゐる、竹に燭奴を挾んだ札の上へ落ちた。札には墨黑々と下手な字で、「一束四錢」と書いてある。あらゆる物價が暴騰した今日、一束四錢と云ふ葱は滅多にない。この至廉な札を眺めると共に、今まで戀愛と藝術とに醉つてゐた、お君さんの幸福な心の中には、其處に潛んでゐた實生活が、突如としてその惰眠から覺めた。間髮を入れずとは正にこの謂である。薔薇と指環と夜鶯と三越の旗とは、刹那に眼底を拂つて消えてしまつた。その代り間代、米代、電燈代、炭代、肴代、醬油代、新聞代、化粧代、電車賃――その外ありとあらゆる生活費が、過去

の苦しい經驗と一しよに、恰も火取蟲の火に集る如く、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群つて來る。お君さんは思はずその八百屋の前へ足を止めた。それから呆氣にとられてゐる田中君を一人後に殘して、鮮な瓦斯の光を浴びた青物の中へ足を入れた。しかも遂にはその華奢な指を伸べて、一束四錢の札が立つてゐる葱の山を指さすと、「さすらひ」の歌でもうたふやうな聲で、

「あれを二束下さいな。」

と云つた。

埃風の吹く往來には、黑い鍔廣の帽子をかぶつて、縞の荒い半オオヴァの襟を立てた田中君が、洋銀の握りのある細い杖をかいこみながら、孤影悄然として立つてゐる。田中君の想像には、さつきからこの町のはづれにある、格子戸造の家が浮んでゐた。軒に松の家と云ふ電燈の出た、沓脱ぎの石が濡れてゐる、安普請らしい二階家である、が、かうした往來に立つてゐると、その小ぢんまりした二階家の影が、妙にだんだん薄くなつてしまふ。さうしてその後には徐に一束四錢の札を打つた葱の山が浮んで來る。と思ふと忽ち想像が破れて、一陣の埃風が過ぎると共に、實生活の如く辛辣な、眼に滲む如き葱の匂が實際田中君の鼻を打つた。

「御待ち遠さま。」

憐むべき田中君は、世にも情無い眼つきをして、まるで別人でも見るやうに、じろじろお君さんの顔を眺めた。髪を綺麗にまん中から割つて、忘れな草の簪をさした、鼻の少し上を向いてゐるお君さんは、クリイム色の肩掛をちよいと顋でおさへた儘、片手に二束八錢の葱を下げて立つてゐる。あの涼しい眼の中に嬉しさうな微笑を躍らせながら。

とうとうどうにか書き上げたぞ。もう夜が明けるのも間はあるまい。外では寒さうな雞の聲がしてゐるが、折角これを書き上げても、いやに氣のふさぐのはどうしたものだ。お君さんはその晩何事もなく、又あの女髮結の二階へ歸つて來たが、カツフエの女給仕をやめない限り、その後も田中君と二人で遊びに出る事がないとは云へまい。その時の事を考へると、――いや、その時は又その時の事だ。おれが今いくら心配した所で、どうにもなる譯のものではない。まあこの儘でペンを擱かう。左樣なら。お君さん。では今夜もあの晩のやうに、此處からいそいそ出て行つ

て、勇(いさ)ましく――批評家(ひひやうか)に退治(たいち)されて來給(きたま)へ。

（大正八年十二月十一日）

鼠小僧次郎吉

一

或初秋の日暮であつた。

汐留の船宿、伊豆屋の表二階には、遊び人らしい二人の男が、さつきから差し向ひで、頻に獻酬を重ねてゐた。

一人は色の淺黑い、小肥りに肥つた男で、形の如く結城の單衣物に、八反の平ぐけを締めたのが、上に羽織つた古渡り唐棧の半天と一しよに、その苦みばしつた男ぶりを、一層いなせに見せてゐる趣があつた。もう一人は色の白い、どちらかと云へば小柄な男だが、手首まで彫つてある割靑が目立つせゐか、糊の落ちた小辨慶の單衣物に算盤珠の三尺をぐるぐる巻きつけたのも、意氣と云ふよりは寧ろ凄味のある、自墮落な心もちしか起させなかつた。のみならずこの男は、役者が二三枚落ちると見えて、相手の男を呼びかける時にも、始終親分と云ふ名を用ひてゐた。が、

年輩は彼是同じ位らしく、それだけ又世間の親分子分よりも、打ち融けた交情が通つてゐる事は、互に差しつ抑へつする盃の間にも明らかだつた。

初秋の日暮とは云ひながら、向うに見える唐津様の海鼠壁には、まだ赤々と入日がさして、その日を浴びた一株の柳が、こんもりと葉かげを蒸してゐるのも、去つて間がない殘暑の思ひ出を新しくするのに十分だつた。だからこの船宿の表二階にも、葭戸こそもう唐紙に變つてゐたが、江戸に未練の殘つてゐる夏は、手すりに下つてゐる伊豫簾や、何時からか床に掛け殘された墨繪の瀧の掛物や、或は又二人の間に並べてある膳の水貝や洗ひなどに、まざまざと盡きない名殘りを示してゐた。實際往來を一つ隔てゝゐる堀割の明るい水の上から、時たま此處に流れて來るそよ風も、微醺を帶びた二人の男には、刷毛先を少し左へ曲げた水髮の鬢を吹かれる度に、涼しいとは感じられるにした所が、毛頭秋らしいうそ寒さを覺えさせるやうな事はないのである。殊に色の白い男の方になると、こればかりは冷たさうな掛守りの銀鎖もちらつく程、思入れ小辨慶の胸をひろげてゐた。

二人は女中まで遠ざけて、暫くは何やら密談に耽つてゐたが、やがてそれも一段落ついたと見

えて、色の淺黑い、小肥りに肥つた男は、無造作に猪口を相手に返すと、膝の下の煙草入をとり上げながら、

「と云ふ譯での、おれもやつと三年ぶりに、又江戸へ歸つて來たのよ。」

「道理でちつと御歸りが、遲すぎると思つてゐやしたよ。だがまあ、かうして歸つて來ておくんなさりや、子分子方のものばかりぢや無え、江戸つ子一統が喜びやすぜ。」

「さう云つてくれるのは、手前だけよ。」

「へへ、仰有つたものだぜ。」

色の白い、小柄な男は、わざと相手を睨めると、人が悪るさうににやりと笑つて、

「小花姐さんにも聞いて御覽なせえまし。」

「そりや無え。」

親分と呼ばれた男は、如心形の煙管を啣へた儘、僅に苦笑の色を漂はせたが、すぐに又眞面目な調子になつて、

「だがの、おれが三年見無え間に、江戸もめつきり變つたやうだ。」

「いや、變つたの、變ら無えの。岡場所なんぞの寂れ方と來ちや、まるで嘘のやうでごぜえますぜ。」

「かうなると、年よりの云ひぐさぢや無えが、やつぱり昔が戀しいの。」

「變ら無えのは私ばかりさ。へへ、何時になつてもひつてんだ。」

小辨慶の浴衣を着た男は、受けた盃をぐいとやると、その手ですぐに口の端の滴を拂つて、自ら嘲るやうに眉を動かしたが、

「今から見りや、三年前は、まるでこの世の極樂さね。ねえ、親分、お前さんが江戸を御賣んなすつた時分にや、盜つ人にせえあの鼠小僧のやうな、石川五右衛門とは行かねえまでも、ちつとは睨みの利いた野郎があつたものぢやごぜえませんか。」

「飛んだ事を云ふぜ。何處の國におれと盜つ人とを一つ扱ひにする奴があるものだ。」

唐桟の半天をひつかけた男は、煙草の煙にむせながら、思はず又苦笑を洩らしたが、鐵火な相手はそんな事に頓着する氣色もなく、手酌でもう一杯ひつかけると、

「そいつがこの頃は御覧なせえ。けちな稼ぎをする奴は、箒で掃く程ゐやすけれど、あの位な大

泥坊は、つひぞ聞か無えぢやござえませんか。」
「聞か無えだつて、好いぢや無えか。國に盗賊、家に鼠だ。大泥坊なんぞはゐ無え方が好い。」
「そりや居無え方が好い、居無え方が好いにや違えござえませんがね。」
色の白い、小柄な男は、劄青のある臂を延べて、親分へ猪口を差しながら、
「あの時分の事を考へると、へヘ、妙なもので盗つ人せえ、懐しくなつて來やすのさ。先刻御承知にや違え無えが、あの鼠小僧と云ふ野郎は、心意氣が第一嬉しいや。ねえ、親分」
「嘘は無え。盗つ人の尻押しにや、こりや博奕打が持つて來いだ。」
「へヘ、こいつは一番おそれべか。」
と云つて、ちよいと小辨慶の肩を落したが、こちらは忽ち又元氣な聲になつて、
「私だつて何も盗つ人の肩を持つにや當ら無えけれど、あいつは懐の暖え大名屋敷へ忍びこんぢや、御手許金と云ふやつを掻攫つて、その日に追はれる貧乏人へ惠んでやるのだと云ひやすぜ。成程善惡にや二つは無えが、どうせ盗みをするからにや、惡黨冥利にこの位な陰徳は積んで置き度えとね、まあ、私なんぞは思つてゐやすのさ。」

「さうか。さう聞きや無理は無えの。いや、鼠小僧と云ふ野郎も、改代町の裸松が贔屓になつてくれようとは、夢にも思つちや居無えだらう。思へば冥加な盗つ人だ。」

色の浅黒い、小肥りに肥つた男は、相手に猪口を返しながら、思ひの外しんみりとかう云つたが、やがて何か思ひついたらしく、大様に膝を進めると、急に晴々した微笑を浮べて、

「ぢや聞きねえ。おれもその鼠小僧ぢや、とんだ御茶番を見た事があつての、今でも思ひ出すたんびに、腹の皮がよれてなら無えのよ。」

親分と呼ばれた男は、かう云ふ前置きを聞かせてから、又悠々と煙管を啣へて、夕日の中に消えて行く煙草の煙の輪と一しよに、次のやうな話をし始めた。

二

丁度今から三年前、おれが盆茣蓙の上の達て引きから、江戸を賣つた時の事だ。

東海道にやちつと差しがあつて、路は悪いが甲州街道を身延まで出にやなら無えから、忘れもし無え、極月の十一日、四谷の荒木町を振り出しに、とうとう旅鴉に身をやつしたが、なりは手

前も知つてた通り、結城紬の二枚重ねに一本獨鈷の博多の帶、道中差をぶつこんでの、革色の半合羽に菅笠をかぶつてゐたと思ひねえ。元より振分けの行李の外にや、道づれも無え獨り旅だ。脚絆草鞋の足拵へは、見てくればかり輕さうだが、當分は御膝許の日の目せえ、拜まれ無え事を考へりや、實は氣も滅入つての、古風ぢやあるが一足毎に、後髮を引かれるやうな心もちよ。

その日が又意地惡く、底冷えのする雪曇りでの、まして甲州街道は、何處の山だか知ら無えが、一面の雲のかかつたやつが、枯つ葉一つがさつか無え桑畑の上に屛風を立てよ、その桑の枝を摑んだ鶸も、寒さに咽喉を痛めたのか、聲も立て無えやうな凍て方だ。おまけに時々身を切るやうな、小佛颪のからつ風がやけにざつと吹きまくつて、横なぐれに合羽を煽りやがる。かうなつちやいくら威張つても、旅慣れ無え江戸つ子は形無しよ。おれは菅笠の緣に手をかけちや、今朝四谷から新宿と踏み出して來た江戸の方を、何度振り返つて見たか知れやし無え。

するとおれの旅慣れ無えのが、通りがかりの人目にも、氣の毒たらしかつたのに違え無え。府中の宿をはづれると、堅氣らしい若え男が、後からおれに追ひついて、口まめに話しかけやがる。見りや紺の合羽に菅笠は、こりや御定りの旅仕度だが、色の褪めた唐棧の風呂敷包を頸へかけの、

洗ひざらした木綿縞に剝げつちよろけの小倉の帶、右の小鬢に禿があつて、顋の惡くしやくれたのせえ、よしんば風にや吹かれ無えでも、懷の寒むさうな御人體だ。だがの、見かけよりや人は好いと見えて、親切さうに道中の名所古蹟なんぞを敎へてくれる。こつちは元より相手欲しやだ。

「御前さんは何處まで行きなさる。」

「私は甲府まで參りやす。旦那は又どちらへ。」

「私は何、身延詣りさ。」

「時に旦那は江戸でござりやせう。江戸はどの邊へ御住ひなせえます。」

「茅場町の植木店さ。お前さんも江戸かい。」

「へえ、私は深川の六間堀で、これでも越後屋重吉と云ふ小間物渡世でござりやす。」

とまあ、云つた調子での。同じ江戸懷しい話をしながら、互に好い道づれを見つけた氣でよ、一しよに路を急いで行くと、追つけ日野宿へかからうと云ふ時分に、ちらちら白い物が降り出しやがつた。獨り旅であつて見ねえ。時刻も彼是七つ下りぢやあるし、この雪空を見上げちや、川千鳥の聲も身に滲みるやうで、今夜はどうでも日野泊りと、出かけ無けりやなら無え所だが、い

くら懐は寒むさうでも、其處は越後屋重吉と云ふ道づれのある御かげ様だ。
「旦那え、この雪ぢや明日の路は、とても捗が參りやせんから、今日の中に八王子までのして置かうぢやござりやせんか。」
と云はれて見りや、その氣になつての、雪の中を八王子まで、辿りついたと思ひねえ。もう空はまつ暗で、とうに白くなつた兩側の屋根が、夜目にも跡の見える街道へ、押つかぶさるやうに重なり合つた、——その下に所々、掛行燈が赤く火を入れて、歸り遲れた馬の鈴が、だんだん近くなつて來るなんぞは、手もなく浮世畫の雪景色よ。するとその越後屋重吉と云ふ野郎が、先に立つて雪を踏みながら、
「旦那え、今夜はどうか御一しよに願ひたうござりやす。」
と何度もうるさく賴みやがるから、おれも異存がある譯ぢやなし、
「そりやさう願へれば、私も寂しくなくつて好い。だが私は生憎と、始めて來た八王子だ。何處も旅籠を知らねえが。」
「何に、あすこの山甚と云ふのが、私の定宿でござりやす。」

と云つておれをつれこんだのは、やつぱり掛行燈のともつてゐる、新見世だとか云ふ旅籠屋だがの、入口の土間を廣くとつて、その奥はすぐに臺所へ續くやうな構へだつたらしい。おれたち二人が中へ這入ると、帳場の前の獅嚙火鉢へ嚙りついてゐた番頭が、まだ「御濯ぎを」とも云は無え内に、意地のきたねえやうだけれど、飯の匂と汁の匂とが、湯氣や火つ氣と一つになつて、むんと鼻へ來やがつた。それから早速草鞋を脱ぎの、行燈を下げた婢と一しよに、二階座敷へせり上つたが、まづ一風呂暖まつて、何はともあれ寒さ凌ぎと、熱燗で二三杯きめ出すと、その越後屋重吉と云ふ野郎が、始末に了へ無え機嫌上戸での、唯でせえ口のまめなやつが、大方饒舌る事ぢや無え。

「旦那え、この酒なら御口に合ひやせう。これから甲州路へかかつて御覧なさいやし。とてもかう云ふ酒は飲めませんや。へへ、古い洒落だが與右衛門の女房で、私ばかりかさねがさね――」

などと云つてゐる内は、まだ好かつたが、銚子が二三本も並ぶやうになると、目尻を下げて、鼻の脂を光らせて、しやくんだ顋を乙に振つて、

「酒に恨が數々ござるつてね、私なんぞも旦那の前だが、茶屋酒のちいつとまはり過ぎたのが、

飛んだ身の仇になりやした。あ、あだな潮來で迷はせるつ。」

とふるへ聲で唄ひ始めやがる。おれは實に持て餘しての、何でもこいつは寐かすより外に仕方が無えと思つたから、潮さきを見て飯にすると、

「さあ、明日が早えから、寐なせえ。寐なせえ。」

とせき立てての、まだ德利に未練のあるやつを、やつと横にならせたが、御方便なものぢや無えか、あれ程はしやいでゐた野郎が、枕へ頭をつけたとなると、酒臭え欠伸を一つして、

「あゝあつ、あだな潮來で迷はせるつ。」

ともう一度、氣味の悪い聲を出しやがつたが、それつきり後は鼾になつて、いくら鼠が騷がうが、寐返り一つ打ちやがら無え。

が、こつちや災難だ。何を云ふにも江戸を立つて、今夜が始めての泊りぢやあるし、その鼾が耳へついて、あたりが靜になりやなる程、反つて妙に寐つかれ無え。外はまだ雪が止ま無えと見えて、時々雨戸へさらさらと吹つかける音もするやうだ。隣に寐てゐる極道人は、夢の中でも鼻唄を唄つてゐるかも知ら無えが、江戸にやおれがゐ無えばかりに、一人や二人は夜の目も寐無え

で、案じてゐてくれるものがあるだらうと、――これさ、のろけぢや無えと云ふ事に、――つまら無え事を考へると、猶の事おれは眼が冴えての、早く夜明けになりや好いと、そればつかり思つてゐた。

そんなこんなで九つも聞きの、八つを打つたのも知つてゐたが、その内に眠む氣がさしたと見えて、何時かうとうとしたやうだつた。が、やがてふと眼がさめると、鼠が燈心でも引きやがつたか、枕もとの行燈が消えてゐる。その上隣に寐てゐる野郎が、さつきまでは鼾をかいてゐた癖に、今はまるで死んだやうに寐息一つさせやがら無え。はてな、何だか可笑しな容子だぞと、かう思ふか思は無え内に、今度はおれの夜具の中へ、人間の手が這入つて來やがつた。それもがたがたふるへながら、胴卷の結び目を探しやがるのよ。成程。人は見かけにやよら無えものだ。あのでれ助が胡麻の蠅とは、こいつはちいつと出來すぎたわい。――と思つたら、すんでの事に、おれは吹き出す所だつたが、その胡麻の蠅と今が今まで、一しよに酒を飲んでゐたと思や、忌々しくもなつて來ての、あの野郎の手が胴卷の結び目をほどきにかかりやがると、いきなり逆にひつ摑めえて、捻り上げたと思ひねえ。胡麻の蠅の奴め、驚きやがるめえ事か、慌てて振り放さう

とする所を、夜具を頭から押つかぶせての、まんまとおれがその上へ馬乘りになつてしまつたのよ。するとあの意氣地なしめ、無理無體に夜具の下から、面だけ外へ出したと思ふと、「ひ、ひ、人殺し」と、烏骨鷄が時でもつくりやしめえし、奇體な聲を立てやがつた。手前が盜みをして置きながら、手前で人を呼びや世話は無え、唐變木とは始から知つちやゐるが、さりとは男らしくも無え野郎だと、おれは急に腹が立つたから、其處にあつた枕をひつ掴んで、ぽかぽかその面をぶちのめしたぢや無えか。

さあ、その騷ぎが聞えての、隣近所の客も眼をさましや、宿の亭主や奉公人も、何事が起つたと云ふ顏色で、手燭の火を先立ちに、どかどか二階へ上つて來やがつた。來て見りやおれの股ぐらから、あの野郎がもう片息になつて、面妖な面を出してゐやがる始末よ。こりや誰が見ても大笑ひだ。

「おい、御亭主、飛んだ蚤にたかられての、人騷がせをして濟まなかつた。外の客人にやお前から、よく詫びを云つておくんなせえ。」

それつきりよ。もう後は譯を話すも話さ無えも無え。奉公人がすぐにあの野郎を、ぐるぐる卷

にふん縛つて、まるで生捕りました河童のやうに、寄つてたかつて二階から、引きずり下してしまやがつた。

さてその後で山甚の亭主が、おれの前へ手をついての、

「いや、どうも以ての外の御災難で、さぞまあ、御驚きでございましたらう。が、御路用その外別に御紛失物もなかつたのは、せめてもの御仕合せでございます。追つてはあの野郎も夜の明け次第、早速役所へ引渡す事に致しますから、どうか手前どもの届きません所は、幾重にも御勘辨下さいますやうに。」

と何度も頭を下げるから、

「何、胡麻の蠅とも知ら無えで、道づれになつたのが私の落度だ。それを何も御前さんが、おやまんなさる事は無えのさ。こりやほんの僅ばかりだが、世話になつた若え衆たちに、喫え蕎麥の一杯も振舞つてやつておくんなせえ。」

と祝儀をやつて返したが、つくづく一人になつて考へりや、宿場女郎にでも振られやしめえし、何時までも床に倚つかかつて、腕組みをしてゐるのも智慧が無え。と云つてこれから寐られやせ

ず、何かと云ふ中にや六つだらうから、こりや一そ今の内に、ちつとは路が暗くつても、早立ちをするのが上分別だと、かう思案がきまつたから、早速身仕度にとりかかりの、勘定は帳場で拂つて行かうと、外の客の邪魔にならねえやうに、そつと梯子口まで來て見ると、下ぢやまだ奉公人たちが、皆起きてゐると見えて、何やら話し聲も聞えてゐる。するとその中にどう云ふ譯か、度々さつき手前の話した、鼠小僧と云ふ名が出るぢや無えか。おれは妙だと思つての、兩掛の行李を下げた儘、梯子口から下を覗いて見ると、廣い土間のまん中にや、あの越後屋重吉と云ふ木念人が、繩尻は柱に括られながら、大あぐらをかいてゐやがる。そのまはりにや又若え者が、番頭も一しよに三人ばかり。八間の明りに照らされながら、腕まくりをしてゐるぢや無えか。中でもその番頭が、片手に算盤をひつ摑みの、藥罐頭から湯氣を立てて、忌々しさうに何か云ふのを聞きや、

「ほんによ、こんな胡麻の蠅も、今に劫羅を經て見さつし、鼠小僧なんぞはそこのけの大泥坊になるかも知れ無え。ほんによ、さうなつた日にやこいつの御蔭で、街道筋の旅籠屋が、みんな暖簾に瑕がつくわな。その事を思や今の内に、ぶつ殺した方が人助けよ。」

と云ふ側から、ぢぢむさく髭の伸びた馬子半天が、じろじろ胡麻の蠅の面を覗きこんで、

「番頭どんともあらうものが、いやはや又當て事も無え事を云つたものだ。何でこんな間抜野郎に、鼠小僧の役が勤るべい。大方胡麻の蠅も氣が強えと云つたら、面を見たばかりでも知れべいわさ。」

「違え無え。高々鼬小僧位な所だらう。」

こりや火吹竹を得物にした、宿の若え者が云つた事だ。

「ほんによ。さう云やこの野猿坊は、人の胴巻もまだ盗ま無え内に、うぬが褌を先へ盗まれさうな面だ。」

「下手な道中稼ぎなんぞするよりや、棒つ切の先へ黐をつけの、子供と一しよに賽錢箱のびた錢でもくすねてゐりや好い。」

「何、それよりや案山子代りに、おらが後の粟畑へ、突つ立つてゐるが好かんべい。」

から皆がなぶり物にすると、あの越後屋重吉め、ちつとの間は口惜しさうに眼ばかりぱちつかせてゐやがつたが、やがて宿の若え者が、火吹竹を頤の下へやつて、ぐいと面を擡げさせると、

急に巻き舌になりやがつて、

「やい、やい、やい、こいつらは飛んだ奴ぢやねえかえ。誰だと思つて囈言をつきやがる。かう見えても、この御兄さんはな、日本中を股にかけた、ちつとは面の賣れてゐる胡麻の蠅だ。不面目にも程があらあ。うぬが土百姓の分在で、利いた風な御託を並べやがる。」

これにや皆驚いたのに違え無え。實は梯子を下りかけたおれも、あんまりあの野郎の權幕が御大さうなものだから、又中段に足を止めて、もう少し下の成行きを眺めてゐる氣になつたのよ。まして人の好ささうな番頭なんぞは、算盤まで持ち出したのも忘れたやうに、呆れてあの野郎を見つめやがつた。が、氣が強えのは馬子半天での、こいつだけはまだ髭を撫でながら、何處を風が吹くと云ふ面で、

「何が胡麻の蠅がえらかんべい。三年前の大夕立に雷獸様を手捕りにした、横山宿の勘太とはおらが事だ。おらが身もんでえを一つすりや、うぬがやうな胡麻の蠅は、踏み殺されると云ふ事を知ん無えか。」

と嵩にかかつて嚇したが、胡麻の蠅の奴はせせら笑つて、

「へん、こけが六十六部に立山の話でも聞きやしめえし、頭からおどかしを食つてたまるものかえ。これやい、眠む氣ざましにや勿體無えが、おれの素性を洗つてやるから、耳の穴を搔つぽじつて聞きやがれ。」

と聲色にしちや詰呂の惡い、啖呵を切り出した所は豪勢だがの、面を見りや寒いと見えて、水つ洟が鼻の下に光つてゐる。おまけにおれのなぐつた所が、小鬢の禿から顋へかけて、まるで面が歪んだやうに、脹れ上つてゐようと云ふものだ。が、それでも田舎者にや、あの野郎のぽんぽん云ふ事が、ちつとは效き目があつたのだらう。あいつが乙に反り身になつて、餓鬼の時から惡事を覺えた行き立てを饒舌つてゐる内にや、雷獸を手捕りにしたとか云ふ、髭のぢぢむせえ馬子半天も、追々あの胡麻の蠅を胴突かなくなつて來たぢや無えか。それを見るとあの野郎め、愈しやくんだ顋を振りの、三人の奴らをねめまはして、

「へん、このごつぽう人めら、手前たちを怖はがるやうな、よいよいだとでも思やがつたか。いんにやさ。唯の胡麻の蠅だと思ふと、相手が違ふぞ。手前たちも覺えてゐるだらうが、去年の秋の嵐の晩に、この宿の庄屋へ忍びこみの、有り金を殘らず搔つ攫つたのは、誰でも無えこのおれ

だ。」

「うぬが、あの庄屋様へ、――」

かう云つたのは、番頭ばかりぢや無え。火吹竹を持つた若え者も、さすがに肝をつぶしたと見えて、思はず大きな聲を出しながら、二足三足後へ下りやがつた。

「さうよ。そんな仕事に驚くやうぢや、手前たちはまだ甘えものだ。かう、よく聞けよ。ついこの中も小佛峠で、金飛脚が二人殺されたのは、誰の仕業だと思やがる。」

あの野郎は水つ洟をすゝりこんぢや、やれ府中で土藏を破つたの、やれ日野宿でつけ火をしたの、やれ厚木街道の山の中で巡禮の女をなぐさんだの、だんだん途方も無え惡事を饒舌り立てたが、妙な事にやそれにつれて、番頭始め二人の野郎が、何時の間にかあの木念人へ慇懃になつて來やがつた。中でも圖體の大きな馬子半天が、莫迦力のありさうな腕を組んで、まじまじあの野郎の面を眺めながら、

「お前さんと云ふ人は、何たる又惡黨だんべい。」

と唸るやうな聲を出した時にや、おれは可笑しさがこみ上げての、あぶなく吹き出す所だつた。

ましてあの胡麻の蠅が、もう醉もさめたのだらう、如何にも寒さうな顏色で、齒の根も合は無え程ふるへながら、口先ばかりや勢よく、

「何と、ちつとは性根がついたか。だがおれの官祿は、まだまだそんな事ぢや無え。今度江戸をずらかつたのは、臍繰金が欲しいばかりに二人と無え御袋を、おれの手にかけて絞め殺した、その化の皮が剝げたからよ」

と大きな見得を切つた時にや、三人ともあつと息を引いての、千兩役者でも出て來はしめえし、小鬢から脹れ上つたあいつの面を、難有さうに見つめやがつた。おれはあんまり莫迦らしいから、もう見てゐるがものは無えと思つて、二三段梯子を下りかけたが、その途端に番頭の藥罐頭め、何と思やがつたか横手を打つて、

「や、讀めたぞ。讀めたぞ。あの鼠小僧と云ふのは、さてはおぬしの渾名だな。」

と頓狂な聲を出しやがつたから、おれはふと又氣が變つて、あいつが何とぬかしやがるか、それが聞きたさにもう一度、うすつ暗え梯子の中段へ足を止めたと思ひねえ。するとあの胡麻の蠅め、じろりと番頭を睨みながら、

「圖星を指されちや仕方が無え。如何にも江戸で噂の高え、鼠小僧とはおれの事だ。」

と横柄にせせら笑やがつた。が、さう云ふか云は無え内に、胴震ひを一つしたと思ふと、二つ三つ續けさまに色氣の無え嚔をしやがつたから、折角の睨みも臺無しよ。それでも三人の野郎たちは、勝角力の名乘りでも聞きやしめえし、あの重吉の間拔野郎を煽ぎ立て無えばかりにして、

「おらもさうだらうと思つてゐた。三年前の大夕立に雷獸様を手捕りにした、横山宿の勘太と云つちや、泣く兒も默るおらだんべい。それをおらの前へ出て、びくともする容子が見え無えだ。」

「違え無え。さう云やどこか眼の中に、すすどい所があるやうだ。」

「ほんによ、だからおれは始めから、何でもこの人は一つぱしの大泥坊になると云つてゐたわな。ほんによ。今夜は弘法にも筆の誤り、上手の手からも水が漏るす。漏つたが、これが漏ら無えで見ねえ。二階中の客は裸にされるぜ。」

と繩こそ解かうとはし無えけれど、口々にちやほやしやがるのよ。すると又あの胡麻の蠅め、大方威張る事ぢや無え。

「かう、番頭さん、鼠小僧の御宿をしたのは、御前の家の旦那が運が好いのだ。さう云ふおれの

口を干しちや、旅籠屋冥利が盡きるだらうぜ。桝で好いから五合ばかり、酒をつけてくんねえな。」

かう云ふ野郎も圖々しいが、それを又正直に聞いてやる番頭も間抜けぢや無えか。おれは八間の明りの下で、藥罐頭の番頭が、あの飲んだくれの胡麻の蠅に、桝の酒を飲ませてゐるのを見たら、何もこの山甚の奉公人ばかりとは限ら無え、世間の奴等の莫迦々々しさが、可笑しくつて、可笑しくつて、こてえられ無かつた。何故と云ひねえ。同じ惡黨とは云ひながら、押込みよりや搔拂ひ、火つけよりや巾着切が、まだしも罪は輕いぢや無えか。それなら世間もそのやうに、大盜つ人よりや、小盜つ人に憐みをかけてくれさうなものだ。所が人はさうぢや無え。三下野郎にやむごくつても、金箔つきの惡黨にや向うから頭を下げやがる。鼠小僧と云や酒も飲ますが、唯の胡麻の蠅と云や張り倒すのだ。思やおれも盜つ人だつたら、小盜つ人にやなりたく無え。——とまあ、おれは考へたが、さて何時までも便々と、こんな茶番も見ちやゐられ無えから、わざと音をさせて梯子を下りの、上り口へ荷物を抛り出して、

「おい、番頭さん、私は早立ちと出かけるから、ちよいと勘定をしておくんなせえ。」

と聲をかけると、いや、番頭の藥罐頭め、てれまい事か、慌てて桝を馬子半天に渡しながら、何度も小鬢へ手をやつて、

「これは又御早い御立ちで——えゝ、何とぞ御腹立ちになりやせんやうに——又先程は、えゝ、手前どもにもわざわざ御心づけを頂きまして——尤も好い鹽梅に雪も晴れたやうでげすが——」

などと譯のわからねえ事を並べやがるから、おれは可笑しさも可笑しくなつて、

「今下りしなに小耳に挾んだが、この胡麻の蠅は、評判の鼠小僧とか云ふ野郎ださうだの。」

「へい、さやうださうで、——おい、早く御草鞋を持つて來さつし。御笠に御合羽は此處にありと——どうも大した盜つ人ださうでげすな。——へい、唯今御勘定を致しやす。」

番頭のやつはてれ隱しに、若え者を叱りながら、そこそこ帳場の格子の中へ這入ると、仔細らしく啣へ筆で算盤をぱちぱちやり出しやがつた。おれはその間に草鞋をはいて、さて一服吸ひつけたが、見りやあの胡麻の蠅は、もう御神酒がまはつたと見えて、小鬢の禿まで赤くしながら、さすがにちつとは恥しいのか、なるべくおれの方を見無えやうに、側眼ばかり使つてゐやがる。その見すぼらしい容子を見ると、おれは今更のやうにあの野郎が可哀さうにもなつて來たから、

「おい、越後屋さん。いやさ、重吉さん。つまら無え冗談は云は無えものだ。御前が鼠小僧だなどと云ふと、人の好い田舎者は本當にするぜ。それぢや割が悪からうが。」

と親切づくに云つてやりや、あの阿呆の合天井め、まだ芝居がし足り無えのか、

「何だと。おれが鼠小僧ぢや無え？　飛んだ御前は物知りだの。かう、旦那々々と立ててゐりや――」

「これさ。そんな啖呵が切りたけりや、此處にゐる馬子や若え衆が、丁度御前にや好い相手だ。だがそれもさつきからぢや、もう大抵切り飽きたらう。第一御前が紛れも無え日本一の大泥坊なら、何もすき好んでべらべらと、爲にもなら無え舊惡を並べ立てる筈が無えわな。これさ、まあ默つて聞きねえと云ふ事に。そりや御前が何でも彼でも、鼠小僧だと剛情を張りや、役人始め眞實御前が鼠小僧だと思ふかも知れ無え。が、その時にや輕くて獄門、重くて磔は逃れ無えぜ。それでも御前は鼠小僧か、――と云はれたら、どうする氣だ。」

とかう一本突つこむと、あの意氣地なしめ、見る見る内に脣の色まで變へやがつて、

「へい、何とも申し譯はござりやせん。實は鼠小僧でも何でも無え、唯の胡麻の蠅でござりや

す。」

「さうだらう。さうなくつちや、なら無え筈だ。だが火つけや押込みまでさんざんしたと云ふからにや、御前も好い惡黨だ。どうせ笠の臺は飛ぶだらうぜ。」

と框で煙管をはたきながら、大眞面目におれがひやかすと、あいつは醉もさめたと見えて、又水つ洟をすゝりこみの、泣かねえばかりの聲を出して、

「何、あれもみんな嘘でござりやす。私は旦那に申し上げた通り、越後屋重吉と云ふ小間物渡世で、年にきつと一二度はこの街道を上下しやすから、善かれ惡しかれいろいろな噂を知つて居りやすので、つい口から出まかせに、何でも彼でもぽんぽんと――」

「おい、おい、お前は今胡麻の蠅だと云つたぢや無えか。胡麻の蠅が小間物を賣るとは、御入國以來聞か無え事だの。」

「いえ、人樣の物に手をかけたのは、今夜がまだ始めてでござりやす。この秋女房に逃げられやして、それから引き續き不手まはりな事ばかり多うござりやしたから、貧すりや鈍すると申す通り、ふとした一時の出來心から、飛んだ失禮な眞似を致しやした。」

おれはいくらとんちきでも、兎に角胡麻の蠅だとは思つてゐたから、かう云ふ話を聞かされた時にや、煙管へ煙草をつめかけた儘、呆れて物も云へなかつた。が、おれは呆れただけだつたが、馬子半天と若え者とは、腹を立てたの立てねえのぢやねえ。おれが止めようと思ふ内に、いきなりあの野郎を引きずり倒しの、

「うぬ、よくも人を莫迦にしやがつたな。」

「その頬桁を張りのめしてくれべい。」

と喚き立てる聲の下から、火吹竹が飛ぶ、桝が降るよ。可哀さうに越後屋重吉は、あんなに横つ面を脹らした上へ、頭まで瘤だらけになりやがつた。……

三

「話と云ふのはこれつきりよ。」

色の浅黒い、小肥りに肥つた男は、かう一部始終を語り終ると、今まで閑却されてゐた、膳の上の猪口を取り上げた。

向うに見える唐津樣の海鼠壁には、何時か入日の光がささなくなつて、堀割に臨んだ一株の葉柳にも、そろそろ暮色が濃くなつて來た。と思ふと三縁山增上寺の鐘の音が、靜に潮の匂のする欄外の空氣を搖りながら、今更のやうに曆の秋を二人の客の胸にしみ渡らせた。風に動いてゐる伊豫簾、御濱御殿の森の鴉の聲、それから二人の間にある盃洗の水の冷たい光――女中の運ぶ燭臺の火が、赤く火先を靡かせながら、梯子段の下から現はれるのも、もう程がないのに相違あるまい。

小辨慶の單衣を着た男は、相手が猪口をとり上げたのを見ると、早速德利の尻をおさへながら、

「いや、はや、飛んでも無えたはけがあるものだ。日本の盜人の守り本尊、私の贔屓の鼠小僧を何だと思つてゐやがる。親分なら知ら無え事、私だつたらその野郎をきつと張り倒してゐやしたぜ。」

「何もそれ程に業を煮やす事は無え。あんな間拔な野郎でも、鼠小僧と名乘つたばかりに、大きな面が出來た事を思や、鼠小僧もさぞ本望だらう。」

「だつとつて御前さん、そんな駈け出しの胡麻の蠅に鼠小僧の名をかたられちや――」

剳青のある、小柄な男は、まだ云ひ争ひたい氣色を見せたが、色の淺黑い、唐棧の半天を羽織つた男は、悠々と微笑を含みながら、

「はて、このおれが云ふのだから、本望に違え無えぢや無えか。手前にやまだ明さなかつたが、三年前に鼠小僧と江戸で噂が高かつたのは――」

と云ふと、猪口を控へた儘、鋭くあたりへ眼をくばつて、

「この和泉屋の次郎吉の事だ。」

（大正八年十二月）

舞踏會

一

明治十九年十一月三日の夜であつた。當時十七歳だつた――家の令孃明子は、頭の禿げた父親と一しよに、今夜の舞踏會が催さるべき鹿鳴館の階段を上つて行つた。明い瓦斯の光に照らされた、幅の廣い階段の兩側には、殆人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造つてゐた。菊は一番奥のがうす紅、中程のが濃い黄色、一番前のがまつ白な花びらを流蘇の如く亂してゐるのであつた。さうしてその菊の籬の盡きるあたり、階段の上の舞踏室からは、もう陽氣な管絃樂の音が、抑へ難い幸福の吐息のやうに、休みなく溢れて來るのであつた。

明子は夙に佛蘭西語と舞踏との教育を受けてゐた。が、正式の舞踏會に臨むのは、今夜がまだ生まれて始めてであつた。だから彼女は馬車の中でも、折々話しかける父親に、上の空の返事ばかり與へてゐた。それ程彼女の胸の中には、愉快なる不安とでも形容すべき、一種の落着かない

心もちが根を張つてゐたのであつた。彼女は馬車が鹿鳴館の前に止るまで、何度いら立たしい眼を擧げて、窓の外に流れて行く東京の町の乏しい燈火を、見つめた事だか知れなかつた。

が、鹿鳴館の中へはひると、間もなく彼女はその不安を忘れるやうな事件に遭遇した。と云ふは階段の丁度中程まで來かかつた時、二人は一足先に上つて行く支那の大官に追ひついた。すると大官は肥滿した體を開いて、二人を先へ通らせながら、呆れたやうな視線を明子へ投げた。初初しい薔薇色の舞踏服、品好く頸へかけた水色のリボン、それから濃い髮に匂つてゐるたつた一輪の薔薇の花――實際その夜の明子の姿は、この長い辮髮を垂れた支那の大官の眼を驚かすべく、開化の日本の少女の美を遺憾なく具へてゐたのであつた。と思ふと又階段を急ぎ足に下りて來た、若い燕尾服の日本人も、途中で二人にすれ違ひながら、反射的にちよいと振り返つて、やはり呆れたやうな一瞥を明子の後姿に浴せかけた。それから何故か思ひついたやうに、白い襟飾へ手をやつて見て、又菊の中を忙しく玄關の方へ下りて行つた。

二人が階段を上り切ると、二階の舞踏室の入口には、半白の頬鬚を蓄へた主人役の伯爵が、胸間に幾つかの勳章を帶びて、路易十五世式の裝ひを凝らした年上の伯爵夫人と一しよに、大様に

客を迎へてゐた。明子はこの伯爵でさへ、彼女の姿を見た時には、その老獪らしい顏の何處かに、一瞬間無邪氣な驚嘆の色が去來したのを見のがさなかつた。人の好い明子の父親は、嬉しさうな微笑を浮べながら、伯爵とその夫人とへ手短に娘を紹介した。彼女は羞恥と得意とを交る交る味つた。が、その暇にも權高な伯爵夫人の顏だちに、一點下品な氣があるのを感づくだけの餘裕があつた。

舞踏室の中にも至る所に、菊の花が美しく咲き亂れてゐた。さうして又至る所に、相手を待つてゐる婦人たちのレエスや花や象牙の扇が、爽かな香水の匂の中に、音のない波の如く動いてゐた。明子はすぐに父親と分れて、その綺羅びやかな婦人たちの或一團と一しよになつた。それは皆同じやうな水色や薔薇色の舞踏服を着た、同年輩らしい少女であつた。彼等は彼女を迎へると、小鳥のやうにさざめき立つて、口々に今夜の彼女の姿が美しい事を褒め立てたりした。

が、彼女がその仲間へはひるや否や、見知らない佛蘭西の海軍將校が、何處からか靜に歩み寄つた。さうして兩腕を垂れた儘、叮嚀に日本風の會釋をした。明子はかすかながら血の色が、頰に上つて來るのを意識した。しかしその會釋が何を意味するかは、問ふまでもなく明かだつた。

だから彼女は手にしてゐた扇を預つて貰ふべく、隣に立つてゐる水色の舞踏服の令嬢をふり返つた。と同時に意外にも、その佛蘭西の海軍將校は、ちらりと頰に微笑の影を浮べながら、異樣なアクサンを帶びた日本語で、はつきりと彼女にかう云つた。

「一しよに踊つては下さいませんか。」

間もなく明子は、その佛蘭西の海軍將校と、「美しく青きダニウブ」のヴアルスを踊つてゐた。相手の將校は、頰の日に燒けた、眼鼻立ちの鮮な、濃い口髭のある男であつた。彼女はその相手の軍服の左の肩に、長い手袋を嵌めた手を預くべく、餘りに背が低かつた。が、場馴れてゐる海軍將校は、巧に彼女をあしらつて、輕々と群集の中を舞ひ歩いた。さうして時々彼女の耳に、愛想の好い佛蘭西語の御世辭さへも囁いた。

彼女はその優しい言葉に、恥しさうな微笑を酬いながら、時々彼等が踊つてゐる舞踏室の周圍へ眼を投げた。皇室の御紋章を染め拔いた紫縮緬の幔幕や、爪を張つた蒼龍が身をうねらせてゐる支那の國旗の下には、花瓶々々の菊の花が、或は輕快な銀色を、或は陰鬱な金色を、人波の間

にちらつかせてゐた。しかもその人波は、三鞭酒のやうに湧き立つて來る、花々しい獨逸管絃樂の旋律の風に煽られて、暫くも目まぐるしい動搖を止めなかつた。明子はやはり踊つてゐる友達の一人と眼を合はすと、互に愉快さうな頷きを忙しい中に送り合つた。が、その瞬間には、もう違つた踊り手が、まるで大きな蛾が狂ふやうに、何處からか其處へ現れてゐた。

しかし明子はその間にも、相手の佛蘭西の海軍將校の眼が、彼女の一擧一動に注意してゐるのを知つてゐた。それは全くこの日本に慣れない外國人が、如何に彼女の快活な舞踏ぶりに、興味があつたかを語るものであつた。こんな美しい令孃も、やはり紙と竹との家の中に、人形の如く住んでゐるのであらうか。さうして細い金屬の箸で、青い花の描いてある手のひら程の茶碗から、米粒を挾んで食べてゐるのであらうか。――彼の眼の中にはかう云ふ疑問が、何度も人懷しい微笑と共に往來するやうであつた。明子にはそれが可笑しくもあれば、同時に又誇らしくもあつた。だから彼女の華奢な薔薇色の踊り靴は、物珍しさうな相手の視線が折々足もとへ落ちる度に、一層身輕く滑な床の上を辷つて行くのであつた。

が、やがて相手の將校は、この兒猫のやうな令孃の疲れたらしいのに氣がついたと見えて、劬

るやうに顔を覗きこみながら、

「もつと續けて踊りませうか。」

「ノン・メルシイ。」

明子は息をはずませながら、今度ははつきりとかう答へた。

するとその佛蘭西の海軍將校は、まだヴアルスの歩みを續けながら、前後左右に動いてゐるレエスや花の波を縫つて、壁側の花瓶の菊の方へ、悠々と彼女を連れて行つた。さうして最後の一廻轉の後、其處にあつた椅子の上へ、鮮に彼女を掛けさせると、自分は一旦軍服の胸を張つて、それから又前のやうに恭しく日本風の會釋をした。

その後又ポルカやマズユルカを踊つてから、明子はこの佛蘭西の海軍將校と腕を組んで、白と黄とうす紅と三重の菊の籬の間を、階下の廣い部屋へ下りて行つた。

此處には燕尾服や白い肩がしつきりなく去來する中に、銀や硝子の食器類に蔽はれた幾つかの食卓が、或は肉と松露との山を盛り上げたり、或はサンドウイツチとアイスクリイムとの塔を聳

てたり、或は又柘榴と無花果との三角塔を築いたりしてゐた。殊に菊の花が埋め殘した、部屋の一方の壁上には、巧な人工の葡萄蔓が青々とからみついてゐる、美しい金色の格子があつた。さうしてその葡萄の葉の間には、蜂の巣のやうな葡萄の房が、累々と紫に下つてゐた。明子はその金色の格子の前に、頭の禿げた彼女の父親が、同年輩の紳士と並んで、葉卷を啣へてゐるのに遇つた。父親は明子の姿を見ると、滿足さうにちよいと頷いたが、それぎり連れの方を向いて、又葉卷を燻らせ始めた。

佛蘭西の海軍將校は、明子と食卓の一つへ行つて、一しよにアイスクリイムの匙を取つた。彼女はその間も相手の眼が、折々彼女の手や髮や水色のリボンを掛けた頸へ注がれてゐるのに氣がついた。それは勿論彼女にとつて、不快な事でも何でもなかつた。が、或刹那には女らしい疑ひも閃かずにはゐられなかつた。そこで黑い天鵞絨の胸に赤い椿の花をつけた、獨逸人らしい若い女が二人の傍を通つた時、彼女はこの疑ひを仄めかせる爲に、かう云ふ感歎の言葉を發明した。

「西洋の女の方はほんたうに御美しうございますこと。」

海軍將校はこの言葉を聞くと、思ひの外眞面目に首を振つた。

「日本の女の方も美しいです。殊にあなたなぞは――」
「そんな事はございませんわ。」
「いえ、御世辭ではありません。その儘すぐに巴里の舞踏會へも出られます。さうしたら皆が驚くでせう。ワツトオの畫の中の御姫樣のやうですから。」

明子はワツトオを知らなかつた。だから海軍將校の言葉が呼び起した、美しい過去の幻も――仄暗い森の噴水と凋れて行く薔薇との幻も、一瞬の後には名殘りなく消え失せてしまはなければならなかつた。が、人一倍感じの鋭い彼女は、アイスクリイムの匙を動かしながら、僅にもう一つ殘つてゐる話題に縋る事を忘れなかつた。

「私も巴里の舞踏會へ參つて見たうございますわ。」
「いえ、巴里の舞踏會も全くこれと同じ事です。」

海軍將校はかう云ひながら、二人の食卓を繞つてゐる人波と菊の花とを見廻したが、忽ち皮肉な微笑の波が瞳の底に動いたと思ふと、アイスクリイムの匙を止めて、

「巴里ばかりではありません。舞踏會は何處でも同じ事です。」と半ば獨り語のやうにつけ加へた。

一時間の後、明子と佛蘭西の海軍將校とは、やはり腕を組んだ儘、大勢の日本人や外國人と一しよに、舞踏室の外にある星月夜の露臺に佇んでゐた。

欄干一つ隔てた露臺の向うには、廣い庭園を埋めた針葉樹が、ひつそりと枝を交し合つて、その梢に點々と鬼灯提燈の火を透かしてゐた。しかも冷かな空氣の底には、下の庭園から上つて來る苔の匂や落葉の匂が、かすかに寂しい秋の呼吸を漂はせてゐるやうであつた。が、すぐ後の舞踏室では、やはりレエスや花の波が、十六菊を染め拔いた紫縮緬の幕の下に、休みない動搖を續けてゐた。さうして又調子の高い管絃樂のつむじ風が、相不變その人間の海の上へ、用捨もなく鞭を加へてゐた。

勿論この露臺の上からも、絶えず賑な話し聲や笑ひ聲が夜氣を搖つてゐた。まして暗い針葉樹の空に美しい花火が揚る時には、殆人どよめきにも近い音が、一同の口から洩れた事もあつた。その中に交つて立つてゐた明子も、其處にゐた懇意の令孃たちとは、さつきから氣輕な雜談を交換してゐた。が、やがて氣がついて見ると、あの佛蘭西の海軍將校は、明子に腕を借した儘、庭

園の上の星月夜へ默然と眼を注いでゐた。彼女にはそれが何となく、鄕愁でも感じてゐるやうに見えた。そこで明子は彼の顏をそつと下から覗きこんで、

「御國の事を思つていらつしやるのでせう。」と半ば甘えるやうに尋ねて見た。

すると海軍將校は相不變微笑を含んだ眼で、靜に明子の方へ振り返つた。さうして「ノン」と答へる代りに、子供のやうに首を振つて見せた。

「でも何か考へていらつしやるやうでございますわ。」

「何だか當てて御覽なさい。」

その時露臺に集つてゐた人々の間には、又一しきり風のやうなざわめく音が起り出した。明子と海軍將校とは云ひ合せたやうに話をやめて、庭園の針葉樹を壓してゐる夜空の方へ眼をやつた。其處には丁度赤と靑との花火が、蜘蛛手に闇を彈きながら、將に消えようとする所であつた。明子には何故かその花火が、殆悲しい氣を起させる程それ程美しく思はれた。

「私は花火の事を考へてゐたのです。我々の生のやうな花火の事を。」

暫くして佛蘭西の海軍將校は、優しく明子の顏を見下しながら、敎へるやうな調子でかう云つ

た。

二

大正七年の秋であつた。當年の明子は鎌倉の別莊へ赴く途中、一面識のある青年の小說家と、偶然汽車の中で一しよになつた。青年はその時編棚の上に、鎌倉の知人へ贈るべき菊の花束を載せて置いた。すると當年の明子――今のH老夫人は、菊の花を見る度に思ひ出す話があると云つて、詳しく彼に鹿鳴館の舞踏會の思ひ出を話して聞かせた。青年はこの人自身の口からかう云ふ思出を聞く事に、多大の興味を感ぜずにはゐられなかつた。

その話が終つた時、青年はH老夫人に何氣なくかう云ふ質問をした。

「奥様はその佛蘭西の海軍將校の名を御存知ではございませんか。」

するとH老夫人は思ひがけない返事をした。

「存じて居りますとも。Julien Viaud と仰有る方でございました。」

「では Loti だつたのでございますね。あの『お菊夫人』を書いたピエル・ロティだつたのでござ

いますね。

青年は愉快な興奮を感じた。が、H老夫人は不思議さうに青年の顔を見ながら何度もかう呟く ばかりであつた。

「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジユリアン・ヴイオと仰有る方でございますよ。」

（大正八年十二月）

600

昭和十年二月一日印刷
昭和十年二月五日發行

芥川龍之介全集第二卷

著作者　芥川龍之介

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所　精興社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店

電話九段(33)一八七・一八八番
　　　　　　一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

（大森製本）